
スーパーロボット大戦OG 2 ~パラレル~

ジーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパーロボット大戦OG2 ～パラレル～

【Nコード】

N10080

【作者名】

ジーク

【あらすじ】

秘密結社「デイバイン・クルセイダーズ」通称DCとの「DC戦争」、エアロゲイターとの戦争、通称「L5戦役」を終え、地球の人々はひと時の平和に甘んじていた。

ルシアはヒューストン基地で行われている外宇宙探査船開発計画「プロジェクトTD」に参加していた。主に探査船の護衛を目的に、アイビス、スレイラと訓練に明け暮れていた。

それから半年・・・DCの再起、インスペスターの進行、アインストの出現により、

再び、地球圏は戦乱の渦に巻き込まれる。

本編に入る前に（前書き）

今回は、スーパーロボット大戦OG2 ～パラレル～
にアクセスいただきありがとうございます。

ジ・インスペクターが放送されたので、これからOG2を投稿して
いこうと思います。

前回と同じ要領で掲載していきますが、OG2は自分も思い入れが
あるので、表現を少し強化してみました。

まず、初めに今回のオリジナルキャラクターと初期搭乗機の紹介を
掲載します。

本編に入る前に

キャラクター

ルシア・ゾルダーク（20）男

デイバイン・クルセイダース総帥、ビアン・ゾルダークの養子。

階級は、元DC特務大尉、現地球連邦軍中尉であるが、あまり目上の人間として扱われたくないなので階級が下の者でも普通に接して欲しいと思っている。

正体は、バルマーの地球環境適応試験のために地球へ送り込まれた異星人であるが、父や仲間のために地球人として戦い、L5戦役を勝ち抜いた。

現在はプロジェクトTDのナンバー00として、アイビス達の護衛役として、日々努力をしている。

パイロット能力（あくまで想像です。ご了承ください。）

能力

格闘 172 射撃 168

技量 163 防御 147

回避 256 命中 254

地形適性

空 S 陸 A 海 B 宇 S

エアスポーナス

最終ダメージ +15%

最終回避率 +30%

所持技能

念動力Lv1〜9

天才

見切り

アタッカー

インファイトLV1～9

ガンファイトLV1～9

精神コマンド

直感(25)

努力(15)

集中(15)

加速(5)

熱血(40)

覚醒(60)

ツインコマンド

同調(10)

初期搭乗メカ

ゲシュペンスト・タイプS・マッフ

カーウアイ・ラウ大佐が使っていた機体をプロジェクトTDの技術により強化されたパーソナルルーパー。カラーリングは黒のままになっている。

エアロゲイターに回収されたものだが、エアロゲイターの物質がわずかに使われているだけで、ほぼ当時のままの機体になっている。プロジェクトTDで開発されたブースト・ドライブを搭載した折りたたみ式のテストラ・ドライブ内臓リフターを装備したことにより、空中戦闘が可能になった。タイプSとしては機動力が大幅に上がり、ブースト・ドライブを装備した初のパーソナルルーパーになった。その代わり、スプリット・ミサイルがオミットされている。

武装は、バーストレールガンの威力、M950マシンガン
の連射性能、オクスタン・ランチャーのビーム兵器との互換性を参考
に開発された「ハンドレールガン」を装備している。
威力は低いものの、「ビーム兵器の「ビームスプレーガン」
が取り付けられている。

武装

ビームスプレーガン

5連ミサイルランチャー

プラズマカッター

ハンドレールガン

カスタムボーナス

運動性 + 10%

装甲 + 10%

本編に入る前に（後書き）

これから本編がスタートします。

前回から閲覧してくれている方、これから閲覧してくれる方双方とも、よろしくお願ひします。

第1話 タイプS、飛翔

ヒュー斯顿基地 格納庫

ルシア「よし、取り付け作業完了だ。」

スレイ「新しく造ったPT用の換装パーツはこれか？」

ルシア「ああ、テスラ・ドライブを搭載したリフターユニットだ。これでタイプSも飛行が可能になる。バイン・ランゼンに搭載されていたブースト・ドライブも取り付けてある。」

ツグミ「けど、理論上は可能だけど・・・PTにブースト・ドライブはまだ早すぎるんじゃないかしら？」

ルシア「タイプSなら多少の無茶は利く。それに、カリオンに追いつくにはブースト・ドライブが必要だからな。」

ツグミ「確かにそうだけど・・・」

ルシア「ところで・・・アイビスは？」

スレイ「シミュレーターで訓練中だ。全く、まだブースト・ドライブをものに出来ないのかあいつは・・・」

ルシア「そういう言い方はよせ。まだカリオンにも乗ってないんだ、それにシミュレーターでもものに出てても実機でどうなるかわからないんだぞ？」

スレイ「それはわかっている。無様な結果は出さん。」

ルシア「それならいいんだが……」

スタッフ「ルシア中尉、模擬戦闘訓練のパイロットが揃いました。」

ルシア「機体の準備まで後どれくらいかかる？」

スタッフ「後20分位だと思います。」

ルシア「ちょうどいい、リフターユニットのテストを兼ねてすぐに出よう。」

ルシアはゲシュペンスト・タイプS・マッフに乗り込むため、走って行った。

ツグミ「はりきってるわね、彼。」

スレイ「教導隊時代の上官、カーウアイ・ラウ大佐の機体だったらしいからな。思い入れがあるのだろう。」

ツグミ「確かエルピスに搬入されていたってルシアから聞いてるけど。」

スレイ（そこがおかしい……何故行方不明になったはずのタイプSがエルピスに運び出されたんだ……？）

ツグミ「模擬戦が始まるわ、モニタールームに行きましょう。」

ヒューストン基地 模擬戦区域

ルシア「TC-O S 起動確認、ハーモニクスアジャスター、セットアップ。タイプS 起動！」

タイプS が起動し、リフターユニットを展開する。

ルシア「飛行開始！」

テスラ・ドライブを吹かし、タイプS が飛行する。

ツグミ「とりあえず、飛行完了ね。」

スレイ「ここまでならどんなPTでも可能だ。問題は・・・ブースト・ドライブだ。」

そこに訓練を終えたアイビスがモニタールームに入った。

アイビス「模擬戦闘始まっちゃった？」

スレイ「遅いぞ、アイビス！」

アイビス「ご、ごめん・・・」

ツグミ「まだ模擬戦闘は始まってないわ。今、ブースト・ドライブの作動実験を行うところよ。」

ルシア「いよいよか・・・行くぞ！ブースト・ドライブ、ゴー！！！」

タイプSはブースト・ドライブを作動させ、基地の周りを一周する。
ルシア「く・・・やっぱりGがきついな・・・けど、実験成功だ。
これで、タイプSはPT初のブースト・ドライブ搭載機だ。」

ツグミ「さすがね。」

スレイ「伊達にL5戦役は生き残ってないか。」

アイビス「やっぱりすごいや・・・ルシア・・・」

基地司令「ルシア中尉、模擬戦の準備が完了した。指定ポイントへ
向かえ。」

ルシア「了解！」

タイプSが指定ポイントに着くと、量産型ヒュッケバインMk-?
が5機発進した。

ルシア「あれが次期主力機の量産型ヒュッケバインMk-?か・・・」

連邦兵「各機、模擬戦の相手はゲシユペンスト・タイプSだ。旧式
だからといって油断するな。」

連邦兵「了解！」

ルシア「その通り・・・だが、タイプSもまだまだ現役で戦えるこ
とを教えてやる！」

タイプSは新武装『ハンドレールガン』を装備する。

スレイ「何だあの武器は・・・？」

ツグミ「あれはルシアが開発したタイプSの武装よ。バーストレールガン、M950マシンガン、オクスタン・ランチャーの長所を兼ね合わせた万能武器よ。」

アイビス「そんなにすごいんですか？」

ツグミ「攻撃力、連射性能、ビーム兵器との互換性を全て実現しているけど・・・扱えるのは彼以外ないでしょうね。」

連邦兵「全機、攻撃開始！」

量産型ヒュツケバインMk-?が3機、レクタングル・ランチャーで牽制し、残り2機がタイプSに接近する。

ルシア「テスラ・ドライブで飛行可能・・・そしてあの汎用性・・・次期主力機にはなかなかだ。しかし・・・」

タイプSが格闘攻撃態勢に入る。

ルシア「接近戦でタイプSに勝てると思うな！」

量産型ヒュツケバインMk-?がロシュセイバーで斬りかかるが、タイプSが量産型ヒュツケバインMk-?の腕を掴み、背負い投げの要領で地上に叩き落とし、接近したもう一機をそのまま回し蹴りを叩き込み、行動不能にさせる。

アイビス「す、すごい・・・！」

ツグミ「ヒュツケバインを2機同時に行動不能にさせるなんて・・・あんな無茶が出来るのはルシア位しかないわね。」

連邦兵「ヒュツケバインが2機同時に・・・！」

連邦兵「距離を取って攻撃するぞ！」

ルシア「無駄だ！ハンドレールガン、ファイア！」

タイプSは量産型ヒュツケバインMk-?のフォトンライフルを回避しつつ、ハンドレールガンで頭部に被弾させる。

連邦兵「隙が出来たな、くらえ！」

量産型ヒュツケバインMk-?がレクタングル・ランチャーを放ち、タイプSに直撃する。

ルシア「くっ・・・！さすが、切り返しが早い・・・だが！」

タイプSがブースト・ドライブで量産型ヒュツケバインMk-?に急接近する。

ルシア「そのデカイ砲塔が命取りだ！」

タイプSはプラズマカッターで頭部を斬った。
しかし、模擬戦闘用に出力を最弱にしているため損傷はほとんどない。

ルシア「出力が模擬戦用でなかったら、今頃終わっていたな。」

連邦兵「くそ……！旧式に負けるなんて……」

フィリオ「模擬戦終了、お疲れ様。」

ルシア「ああ。タイプS、帰還する。」

タイプSは格納庫に戻る。

ヒューстон基地 オフィス

ルシア「何だつて！？本当なのか!?!」

フィリオ「ああ、教導隊の選考試験が行われる第4試験場がテロリストに占拠されたらしい。」

ツグミ「そこにはATXチームが向かって……ラングレーに救援を要請しているみたいなんです。」

ルシア「ここからじゃ遠すぎる……！ブースト・ドライブなら何とか……」

フィリオ「救援に行くつもりなのかい？駄目だよ。」

ルシア「何故だ！キョウスケ達が苦戦するほどの相手だぞ!」

フィリオ「ここでブースト・ドライブを公にするわけにはいかない。それに、君には万が一のことを考えてここに残っていないと駄目だ。」

ツグミ「ルシア、ナンバー00の責務……もちろん理解しているわね？」

ルシア「……ナンバー00の責務は……01からのメンバーを護衛すること……」

フィリオ「それは、どんなことにも代えがたい責務だ。それを侵させるわけにはいかない。プロジェクトTDの責任者として……」

ルシア「わかっているが……くそ！」

ルシアは苛立ちから壁に拳を叩く。

フィリオ「……君にとって大切な仲間だったんだろうけど……今はプロジェクトTDに専念してくれ。ホントは僕だって行かせてあげたいさ……」

ルシア「……いや、大丈夫だ。あいつらならきつと勝つ。この目で……この身で感じたからな……あいつらの強さと信念を……」

ツグミ「余程彼らを信用しているのね？」

ルシア「あいつらの戦い方にはド肝を突かれたからな。型破りの象徴みたいな奴らだよ。」

フィリオ「そこに関しては、君も十分型破りだと思うけど？」

ルシア「あいつらと一緒にしないでくれ・・・俺はまだ型にハマってる方さ。」

オフィスにアイビスが入ってくる。

アイビス「あの・・・ルシア、いますか？」

ルシア「どうした？」

アイビス「シミュレーターとの対戦相手になってもらいたいんだけど・・・いいかな？」

ルシア「スレイは？」

アイビス「頼んだんだけど・・・引き受けてくれなくて・・・」

ルシア「・・・まったく。フィリオ、お前とスレイの性格真逆だよな？」

フィリオ「仕方ないよ・・・あの子、プライドが高いから・・・」

ルシア「仕方がないな・・・わかった、そういう約束だったもんな。いくらでも付き合ってやるってな。」

アイビス「ありがとう・・・」

ルシア「フィリオ、報告書は後で提出する。」

フィリオ「わかったよ。頑張つて、アイビス。」

アイビス「は、はい……」

ルシアとアイビスはシミュレータールームに向かう。

アイビス「ねえ……前から聞いてみたかったんだけど……」

ルシア「何だ？」

アイビス「何でプロジェクトTDに参加する気になったの？」

ルシア「お前と同じだよ。俺も外宇宙に出たかった、それだけだ。」

アイビス「本当にそれだけ？」

ルシア「え……あ、まあ……」

突然ルシアは顔を赤くした。

アイビス「どうしたの？」

ルシア「い、いやなんでもない！」

アイビス「？」

ルシア「そ、そんなことはいいから……早くシミュレーター
ムまで行くぞ。」

アイビス「・・・変なロシア。」

ロシア（・・・こんな時エクセレンがいたら・・・いや、変な方向に拗れるからやめておこう・・・）

第1話 完

第1話 タイプS、飛翔 (後書き)

中断メッセージ風後書き

ルシア「ふう〜、これで今回の訓練も終了。休憩するぞ。」

ツグミ「お疲れ様、カタクラ印のチーズケーキをどうぞ。」

アイビス「やっぱり訓練の後はデザートが一番！そうでしょルシア？」

ルシア「ま、まあ気持ちはわかるが・・・食べ過ぎるなよ？」

スレイ「大丈夫だ、アイビスの場合は食べた物は全て汗で流れおちるからな。体に貯まることはまずない。」

アイビス「それどういう意味よスレイ!？」

スレイ「コクピットで無駄な動きをすれば、無駄なエネルギー消費もある。だから太らないということだ。」

アイビス「そっちだって食べた物全部胸に行くくせに!」

スレイ「フン、胸に行って何が悪い?」

アイビス「う・・・どや顔された・・・」

ツグミ「ちょっと、男性の前ではしたないわよ二人共。」

ルシア「……………俺はスレンダーが好みなんだけどな……………」

アイビス「え？」

スレイ「は？」

ツグミ「何か言った？」

ルシア「い、いや何でも！と、とりあえず、今回はここまでだ！
次回、スーパーロボット大戦OG2 へパラレル
『星への翼』に、スロットル・アープ！！」

ツグミ「そんな掛け声あったかしら？」

アイビス「……………」

スレイ「今回だけは同情してあげるよ、アイビス。」

第2話 星への翼

地球連邦軍ヒュー斯顿基地 オフィス

フィリオとルシアはイスルギ重工 現社長「ミツコ・イスルギ」と通信を行っていた。

ミツコ「・・・プロジェクトは順調に進行しているようですね。」

フィリオ「はい。本日1500、このヒュー斯顿基地にてシリーズ77・コード プロト、『カリオン』のテストを行います。」

ミツコ「うふふ、結果が楽しみですこと。特にカリオンの武装が、どれだけの力を発揮するか、出来ればこの目で確かめたいところですね。」

ルシア（兵器としての利益しか求めてない奴が何を・・・）

ミツコ「あ、記録映像を送って下さいましてね。画質はSSSモード、音質はRSSモードで。後々、商品化するつもりです。」

フィリオ「・・・シリーズ77に武器はどうしても必要な物なのですか？」

ミツコ「もちろん。あなたもミッドグリッド大統領の東京宣言をお聞きになったでしょう？あれで異星人の存在と、彼らによる地球侵攻の危機が政府公認のものとなりました。今や外宇宙は敵だらけ。小学生でも知っている常識ですわ。」

ルシア「……………」

ミツコ「もっとも、DCのメンバーだったあなたや後ろの方も以前からご承知のはずでしょうけど。」

ルシア「……………言ってくれな。」

フィリオ「しかし、『プロジェクトTD』の本来の目的は……………」

ミツコ「あら……………7年前、太陽外宙域で異星人と交戦した探査艦ヒリュウのことをお忘れ？まさか、大事な妹さん達を敵でいっぱいの外宇宙へ丸腰で送り出すおつもり？」

ルシア「そのための護衛役……………ナンバー00だ。」

ミツコ「あら頼もしいこと……………けど、たった一人でどうなるとも限りませんわよ？ジガンスクードみたいに……………」

ルシア「……………」

フィリオ「……………」

ミツコ「あなたはピアン博士の考えに賛同したからこそ、彼の下でリオンの開発に加わったのでしょうか？」

フィリオ「それは……………そうですが、プロジェクトTDの技術を軍事に転用するのは……………」

ミツコ「あら、その護衛役には転用してもよろしいので？」

ルシア「それは仕方がない事だろ。」

ミツコ「ホント、相変わらず頭の固い人ですこと。」

ルシア（こいつ・・・人をおちよくって楽しんでやがるな・・・！）

ミツコ「いい機会ですから、はっきり申し上げましょう。私の仲介がなければ、DCが壊滅した時点でプロジェクトは解散・・・それどころか、あなた達は反逆者として拘留されるところでしたのよ？」

フィリオ「我々の研究を連邦軍で続けられるようにして下さい。これに対しては感謝しています。しかし・・・」

ミツコ「いいこと？今のあなたは実質上のスポンサーは連邦軍でなく、イスルギ重工なのです。私は、社の利益にならない物へお金を出すつもりなどありません。我が社の製品が連邦軍次期主力機の座を得るには、プロジェクトTDの成果が必要・・・」

ですから、新たなリオンの礎となる プロトの完成を心待ちにしておりますわよ。」

フィリオ「はい・・・」

ミツコ「それでは、ごきげんよう。」

ミツコは通信を切った。

フィリオ（と、そして。シリーズ77の軍事運用は避けられぬことなのか・・・僕は・・・）

ルシア（まったく・・・ああいう尻尾の掴めない性格は相変わらずかよ・・・しかも、前より磨きが掛かっている・・・）

そこにプロジェクトチーフのツグミが入室してくる。

ツグミ「少佐、中尉、テストの準備が完了しました。」

フィリオ「ありがとう、タカクラチーフ。パイロットの様子は？」

ツグミ「2名共スタンバイしています。ただ、アイビスの心拍に多少の乱れを計測していますが。」

フィリオ「彼女のことだ、武者震いだと思うよ。」

ツグミ「だといいいのですが・・・」

フィリオ「不安かい？」

ツグミ「・・・はい。ツイン・テスラ・ドライブの実験機であるカリオンを彼女の技量で扱えるかどうか・・・少佐、システムチーフの権限で、今回のテストはスレイのみで行うことを提案します。」

ルシア「おいタカクラチーフ・・・!」

フィリオ「・・・君の意見はもっともかもしれない。だが、テストは予定通り2機で行うよ。」

ツグミ「少佐は何故そこまで彼女を・・・アイビス・ダグラスを買うのです？確かに、メンバーの欠員によりテストパイロットは今や

3名だけになってしまいましたか・・・」

フィリオ「そこまでにしよう、チーフ。そろそろ予定の時刻だ。」

ツグミ「でも・・・」

フィリオ「君もいつか知るよ。彼女の持っている確かな力を・・・そして、それこそが僕達・・・いや人類にとって最も必要とすべきものであることをね。」

ツグミ「フィリオ・・・」

ルシア「それじゃ、俺はタイプのSの準備に掛かる。撮影も任せてくれ。」

フィリオ「分かったよ、万が一の事態が起きた場合は・・・」

ルシア「分かっている、全力を尽くす。それじゃ・・・」

ルシアはオフィスを出て、格納庫に向かった。

フィリオ「僕達も行こう。残された時間はわずかなんだ・・・」

ツグミ「ええ・・・」

ヒュー斯顿基地 訓練場

スタッフ「ターゲットのバルドング、配置につきました。」

ツグミ「カリオン、スタンバイOK。」

ルシア「周辺警戒問題なし。」

フィリオ「よし・・・カリオン01、04、STOL発進。」

格納庫からカリオンが2機発進した。

ツグミ「ツイン・テスラ・ドライブ、各アビオニクス、オールグリ
ーン。」

スタッフ「04、01に遅れています。」

ルシア「やっぱりまだ使いこなせるわけないか・・・」

フィリオ「アイビス、加速だ。フォーメーション23について。」

アイビス「りよ、了解！」

アイビスのカリオンが加速し、フォーメーションについた。

ツグミ「フォーメーション23、確認。が、04の機体制御に若干
のブレがあります。」

フィリオ「アイビス、少し緊張しているようだね。」

アイビス「そんなことは・・・！」

フィリオ「肩の力を抜いてごらん。大好きなチーズケーキを目の前
にした時のように。」

ルシア「どんな緊張の解き方だよそれ……」

アイビス「はい……」

「
フィリオ「ほら、リラックスして。いつもの君なら出来るはずだよ。」

アイビス「ありがとうございます、フィリオ……少佐。」

ルシア（意外に効果があったな……）

スレイ「……」

ツグミ「……スレイ、アイビスを誘導してあげて。」

スレイ「了解した。……04、こちらの指示に従え。」

アイビス「りよ、了解……!」

ツグミ「機体、安定しました。続いて、武装テストを行います。01、ターゲットへアプローチ。」

スレイ「了解。スレイ・プレステイ、行きます。」

フィリオ「落ち着いてな、スレイ。」

スレイ「……余計な心配は無用です。」

ルシア（相変わらずドライな奴だな……）

スレイ「こちらスレイ・プレステイ、攻撃を開始する！」

スレイの緋色のカリオンがブレイク・フィールドを展開し、バンドルグに突っ込む。

スレイ「ワンアプローチ……一撃で落とす！」

カリオンはソニックカッターでバンドルグを一撃で落とした。

スタッフ「01、ターゲットを撃破。」

フィリオ「ワンアプローチでか……」

ルシア「ナンバー01のポジションは伊達じゃないな、フィリオ？」

フィリオ「ああ。我が妹ながら、よくやってくれているよ。」

ツグミ「続いて04、ターゲットへアプローチ。」

アイビス「……………」

ツグミ「アイビス！」

アイビス「りよ、了解！アイビス・ダグラス、行きます！」

アイビスの銀色のカリオンがブレイク・フィールドを展開し、バルドングに突っ込む。

アイビス「やってみせる！スレイには負けられない……！あたし

だつて！」

バルドングに直撃はしたが、破壊までに至らなかった。

アイビス「くっ！ しまった！」

スタッフ「04、ターゲットの破壊失敗。」

ルシア「惜しかったな……」

フィリオ「カリオンの出力に問題が？」

スタッフ「いえ、重力加速は十分な数値を計測しています。原因はパイロットの操縦ミスです。」

フィリオ「……そうか。」

ツグミ（予想通りの結果ね……）

アイビス「すみません！再アプローチに入ります！」

フィリオ「その必要はないよ、アイビス。テストに関しては十分な結果が出た。」

アイビス「でも……！」

ルシア「アイビス、あまり気張り過ぎると危ないぞ。」

フィリオ「そうだよ。今の君の最優先事項は、一刻も早くカリオンに慣れることだ。」

ツグミ「少佐、時間の無駄です。次のテストに進みましょう。」

アイビス「時間の無駄・・・!?!」

スレイ「チーフの言うとおりで。お前が成功するのを待っているほど我々は暇ではない。」

アイビス「くっ・・・!」

ルシア「おいスレイ、それは言いすぎじゃないのか?」

スレイ「護衛役は口を割らないでもらおうか?」

ルシア「何だと!?!」

フィリオ「二人共、そこまでだよ。」

ルシア「まったく・・・」

スタッフ「ターゲット、回収します。」

残ったバルドングは自動操縦で基地の格納庫に戻り、アイビスとスレイのカリオンが隊列を組み直した。

そこに、基地の警報が鳴りだす。

フィリオ「警報!? 何があった!?!」

ツグミ「タワーより伝達! 所属不明機が当基地に接近! 現在、迎撃

部隊と交戦中！．．．いえ、突破されたようです！」

フィリオ「！！！」

ルシア「周辺にリオンが巡回してるんだぞ！それを突破するなんて．．．！」

そこに、ガーリオンがラストバタリオン仕様を含め5機、リオンが7機現れた。

フィリオ「ガーリオン．．．！」

ルシア「しかもラストバタリオン仕様のカスタム機付きか．．．！」

アーチボルト「ふふふ．．．。連邦のパイロットはリオンの扱いにまだ不慣れなようですね、おかげで、思ったより簡単に侵入できましたよ。」

ツグミ「短時間で基地の守備隊と防衛網を突破してくるなんて．．．

」

スレイ「敵はかなりの手慣れらしいな。」

アイビス「．．．．．！！！」

ルシア「．．．ついにこの時がきたか．．．予想より早すぎたかな．．．」

アートボルト「ほう、あれがプロジェクトDの実験機ですか．．．ん？ゲシュペンストもいますね．．．それも、テストラ・ドライブが

搭載されているようですね・・・」

所属不明兵「アーチボルト・グリムズ少佐、あの機体はどうするのですか？」

アーチボルト「ああ、無視して下さい。僕達の獲物じゃありませんから。ゲシュペンストは・・・破壊しても構いませんので。」

所属不明兵「はっ!」

アーチボルト（バン大佐への手土産にはうってつけなんですが、ねえ。）

基地司令「フィリオ少佐、パーソナルルーパー部隊が出撃するまでの時間をカリオンで稼げ!」

フィリオ「待つて下さい、司令。あれは実験機で、パイロットにも実戦経験はありません。」

ルシア「それに、そのための護衛役です!俺だけでも十分時間稼ぎは・・・」

基地司令「だが、カリオンには実弾が装填されているのだろう!それに一機だけでどうにもならん!今すぐ敵を迎撃できるのはゲシュペンストを含め、あの3機しかない! やらせろ!」

フィリオ「しかし・・・!」

スレイ「こちら01、これより敵機を迎撃する。」

フィリオ「スレイ！」

スレイ「機体は完璧だ。後はパイロットの腕を見せれば、プロジェクトの有意が実証できる。アイビス、お前は下がれ。」

アイビス「で、でも……」

スレイ「足手まといだと言っている……！」

ルシア「スレイじゃないが……ここは下がった方がいい。無駄に命を散らすな。」

ツグミ「2人の言うとおりよ。アイビス、下がりなさい。」

アイビス「……あたしだってやれる……やってみせるよ……！」

ツグミ「アイビス！」

フィリオ「……わかったよ、アイビス。でも、二人とも無理はしないでくれ。」

ルシア「おいフィリオ！」

スレイ「了解。」

アイビス（やってみせる……。あたしは、こんなところで終われないんだ……！星の海を往く日まであたしは……！）

ルシア「まったく……仕事を増やしてくれる……！」

アーチボルト「おや？離脱せずにこちらとやりあつ気ですか。」

所属不明兵「情報では、非武装の実験機だと・・・。」

アーチボルト「やれやれ、どうやら『ローズ』に一杯食わされたようです。仕方ありません。コーツ隊は実験機の相手を・・・。」

所属不明兵「はっ!」

アーチボルト「ああ、そうそう。くれぐれも功を焦つてあの2機を攻撃しては駄目ですよ。スポンサーを怒らせると僕達の活動に支障が出ますからね。ゲシユペンストは構いませんよ、そろそろ旧時代の遺物には消えてもらいましょう。」

所属不明兵「了解!」

アーチボルト「ところで、僕達の獲物は見つかりましたか?」

所属不明兵「はっ、熱源反応を確認。機数、4、出撃準備中のようです。」

アーチボルト「結構。じゃあ、僕達はもう少し様子を見としましょう。」

リオン部隊がカリオンに攻撃を仕掛ける。

スレイ「兄様のカリオンにこの私の力があれば!」

アイビス「撃つんだ・・・撃たなきゃ自分がやられる・・・!」

スレイ「ドライブ・・・シュート！」

スレイのカリオンはG・ドライバーを放ち、リオンを撃墜する。

アイビス「こ・・・この・・・！」

アイビスのカリオンはミサイルを撃つが、全てリオンに回避された。所属不明兵「何だ？この実験機だけ狙いがブレているぞ？」

所属不明兵「まだ慣れていないのだろう。先にゲシュペンストを片づけるぞ！」

ルシア「こちらに来たか・・・懸命な判断だ。」

リオン部隊がタイプSにレールガン、マシンキャノンで攻撃を仕掛けた。

レールガンは避けたが、マシンキャノンは何発か当たってしまった。

ルシア「その程度でタイプSが怯むと思うな！」

アーチボルト「ほう・・・タイプSですか、何故行方不明になった機体が・・・ん？この声・・・聞き覚えが・・・」

ルシア「リフターの追加武装を食らえ！ミサイル発射！」

タイプSの5連ミサイルランチャーでリオンを数機撃破した。

所属不明兵「タイプS・・・!?PTX-002が何故こんなところにいる!?」

リオンが1機後退しようとした。

ルシア「逃がさん!ビームスプレーガン、ファイア!」

タイプSはハンドレールガンに内蔵されたビームスプレーガンでリオンを大破させた。

所属不明兵「お、おのれ・・・旧式が・・・!」

アーチボルト「あ、あの動きは・・・!タイプSへの攻撃を中止してください!」

所属不明兵「はっ!?なぜです!」

アーチボルト「タイプSのパイロットに何かあったら・・・クライアントに何をされるかわかりません!」

ルシア「ん?急に攻撃をやめた・・・?」

アーチボルト(危ないところでしたね・・・まさか、彼がプロジェクトTDに参加していたとは・・・)『ローズ』も事前に連絡を入れてもらえばこの様なことには・・・)

フィリオ「・・・おかしい。」

ツグミ「え?」

フィリオ「ガーリオン隊はまともな動きを見せていない。まるで何かを待っているかのようだ。」

ツグミ「言われてみれば……」

フィリオ（もしや、敵の狙いは？）

オペレーター「司令、第3小隊の発進準備が整いました！」

基地司令「よし、出撃させる！」

基地の格納庫から量産型ヒュッケバインMk-?が4機出撃した。

アーチボルト「現れましたね。では、第3段階に移行……中のパイロットはどうなっても構いませんから。」

待機していたガーリオン隊が量産型ヒュッケバインMk-?に猛スピードで突撃する。

そこにあるはずもないブースト・ドライブで

スレイ「何だ！？あのガーリオンのスピードは！？」

ツグミ「ブースト・ドライブ！？」

フィリオ「馬鹿な、あのシステムは……！」

連邦兵「な、何だ、こいつら！？」

ガーリオンがヒュッケバインMk-?のハッチを引っぺがし、中の

パイロットを引きづり出した。

連邦兵「ハ、ハッチが！ うわああっ！」

アイビス「あいつら、何をやっているんだ!？」

ルシア「まさか、あいつらの目的は・・・!？」

所属不明兵「少佐、機体の奪取に成功しました。」

アーチボルト「上出来です。後詰めは僕達に任せて、直ちに離脱を。」

所属不明兵「はっ!」

ガリオンは量産型ヒュッケバインMk-?を抱え、ブースト・ドライブで離脱した。

基地司令「ヒュッケバインが奪取されただ!?!すぐに追撃しろ!」

オペレーター「だ、駄目です!あのスピードでは追いつけません!」

基地司令「ば、馬鹿な!」

フィリオ「何てことだ・・・」

ツグミ「少佐、これは一体・・・!?何故、あのガリオンがブースト・ドライブを!？」

ルシア「フィリオ、言いたくはないが・・・バイン・ランゼンのデータが漏れたんじゃないのか？」

フィリオ（まさか・・・イスルギに提出したデータが外部に・・・）

アーチボルト「では、もうしばらく付き合ってもらいましょうか。獲物を逃がす時間を稼ぐためにね。」

後続のリオン部隊が出現してきた。

ルシア「くそ・・・！二人を護りながら敵の相手は流石にきつすぎる・・・！」

オペレーター「司令！友軍機が基地内に突入してきます！」

基地司令「！」

そこに、アルトアイゼン、ヴァイスリッター、ヒュツケバインMk - ?、見たこともない特機タイプが戦闘区域内に入ってきた。

キョウスケ「ちっ、やられたな。量産型ヒュツケバインMk - ?は持って行かれた後か。」

エクセレン「悪い方の読みは抜群に当たるのよねえ。」

ブリット「あいつら、よくも・・・！」

キョウスケ「熱くなるな、ブリット。実験機だけでも守り抜くぞ。」

ブリット「ええ、わかっています！」

ツグミ「アルトアイゼンにヴァイスリッター、量産試作型のヒュッケバインMk-?・・・」

スレイ「彼らがあのだATXチームか・・・!」

ラミア（コードのない機体・・・あれが実験機か?）

フィリオ（何だ、あの機体は・・・?パーソナルルーパーやアイマードモジュールじゃない。強いて言えば、ヴァルシオーネやダブルGに似ているが・・・）

ルシア「アルト、ヴァイスにヒュッケバイン・・・!キョウスケ、エクセレンにブリット!」

キョウスケ「ん?あの機体・・・」

エクセレン「それにあの声は・・・!」

ブリット「まさかルシアか!?」

ルシア「やっぱりそうか!よかった、無事だったか・・・」

エクセレン「無事ってどゆこと?」

キョウスケ「第4試験場の話だろ。」

ブリット「それにその機体・・・まさかタイプS!?!」

エクセレン「ええっ!?!タイプSってあの時・・・!」

ルシア「ああ、けど大佐はこうして俺のためにタイプSを用意してくれていたんだ。」

ラミア（PTX-002、ゲシユペンスト・タイプS・・・テスラ・ドライブを搭載したカスタム機か・・・まだ現役として運用しているとは・・・）

ルシア「積もる話は後だ、敵を迎撃するぞ！」

エクセレン「んふふ、相変わらずルシア君は真面目ちゃんねえ。」

ラミア（それに、ルシア・ゾルダーク・・・ベーオウルフと同じで、この世界では違うのだな・・・）

アーチボルト「おやおや、噂に名高いATXチームのご登場ですか。よろしい、彼らへの攻撃を許可します。前々から手合わせ願いたいと思っていましたからね。」

フィリオ「スレイ、アイビス、後は彼らに任せて、一時離脱するんだ。」

スレイ「その必要はありません。私はまだやれます！」

アイビス「あたしだって！」

フィリオ「これはプロジェクト責任者としての命令だ。拒否は許さない。それに、素人の君達では彼らの足手まといになるだけだ。」

スレイ「兄様・・・！」

アイビス「フィリオ……」

フィリオ「離脱するんだ。」

スレイ「……了解です……」

スレイ、アイビスのカリオンは基地の格納庫に帰還した。

ラミア（後退したか。よほど大事な機体らしいな。それに、あの加速……高性能のテスラ・ドライブを搭載していると見た。）

ルシア「フィリオ、俺はいいよな？」

フィリオ「わかってる。けど、機体が小破している……あまり無茶は駄目だよ。君も大切なプロジェクトDのメンバーなんだから。」

ルシア「わかってるよ。」

キョウスケ「アサルト1より各機へ。敵機を掃討するぞ。」

ラミア「了解。」

エクセレン「はいはい、一列に並んでねえ〜！」

ヴァスリッターはオクスタン・ランチャーEモードでリオン4機を牽制し、4機が並んだところを撃ち抜き同時に撃墜した。

キョウスケ「全弾持っていけっ！！！」

アルトアイゼンのスクエア・クレイモアでリオンを数機撃墜

キョウスケ「取りこぼしがあったか、ブリット！」

ブリット「了解！キャクラム・シューター、GO！」

ヒュッケバインMk-?のキャクラム・シューターで取りこぼしの
リオンを撃墜

ラミア「幻影の槍よ、行け！」

アンジユルグのシャドーランサーで、アーチボルトの取り巻きのリ
オンを数機撃墜

ルシア「残りは任せてくれ！プラズマ・カッター、切り裂けっ！！」

タイプのプラズマカッターで残りを撃墜し、アーチボルトのガ
リオンが残るのみとなった。

アーチボルト「そろそろ頃合いですね。月並みな台詞ですが・・・
また会いましょう、ATXチーム。」

アーチボルトはヒューストン基地から撤退した。

ラミア「隊長。敵機の反応、見えちゃったりしたりしてます。」

キョウスケ「こちらでも確認した。・・・基地司令とコンタクト
を取る。」

ラミア「合点承知でございます。」

ルシア「おい、その喋り方何だ？」

ラミア「お気に触りましたら申し訳ござらんです。」

ルシア「……一体何なんだ？」

エクセレン「気にしないで、この子こっぴつ喋り方なんだから。」

ルシア「どうにかならないのか？」

ラミア（好きでこっぴつ喋っているわけではないが……もう少し何とかならないものか）

エクセレン「うーん、別にカワイイからいいんだけど……緊張感つてものが、ねえ？」

ブリット「少尉、人のこと言えないでしょ。」

エクセレン「む？ブリット君。今のでランキングポイントが1000下がったわよ？」

ブリット「そ、そんなに！？って、何のランキングなんですか！」

ラミア（緊張感がないのはどちらだ。こいつらがあの舞台の中核になるとは思えんな）

キョウスケ「……基地司令との交渉が済んだ。弾薬の補給と帰りの足を用意してくれるらしい。」

エクセレン「わお！ついでにお風呂も用意してくんないかしら？」
キョウスケ「近くに湖がある。そこで済ませる。……全機、格納区画へ向かうぞ。」

ヒューストン基地 格納庫

タイプSを格納し、ルシアは機体から降りた。

ルシア「ふう……何とかだったか。」

スレイ「アイビス……さっきの無様なフライトは何だ！」

アイビス「……………」

ルシア「……………またあの二人か……………」

スレイ「わかっているのか！成果を見せなければ、我々のプロジェクトは即刻解散だ！お前のミス一つで全てが終わるのだぞ！」

アイビス「わかっている……………だから……………だから……………！」

スレイ「意気込みを見せるのなら、結果を出してもらいたいな。それが出来ない者にシリーズ77のシートに座る資格はない……………！」

アイビス「く……………」

ルシア「おいスレイ、そういう言い方はよせ！」

スレイ「私は間違った事は言っていないはずだが？」

ルシア「う……………」

ツグミ「酷なようだけど、スレイの言っている事は事実よ。アイビス……認識してね。私達はぎりぎりの所にいるのよ。」

アイビス「そんなこと……あたしだってわかっているさ……………」

アイビスは走り去って行ってしまった。

スレイ「フン……逃げたか。まるで尻尾を丸めた負け犬だな。」

ツグミ「彼女の熱意は認めるけどね……………」

スレイ「だが、今のままでは無理だ。怪我をする前にプロジェクトを脱退させた方がいい。」

ツグミ「そうね……その方があの子のためかも知れない。叶わない夢ならば、見ない方が幸せだから……………」

スレイ「構わんさ。カリオンはともかく、プロトのテストパイロットは私一人で充分だ。」

ルシア「だが、人の夢を奪うような権利は俺達にないはずだ。勝手に

に脱退なんて、それこそアイビスが傷ついてしまう。」

スレイ「今の私達の状況がわからんお前じゃないだろうに……何故そうまでアイビスに拘る？」

ルシア「べ、別に拘ってなんか……」

そこに、エクセレン達が格納庫に入ってきた。

エクセレン「わお！あれがさっきの実験機ちゃんね。名前は……マリオンだっけ？なんか不吉よね。」

ブリット「カリオンです。そんなこと言っていると、ラドム博士に吊るされますよ。」

エクセレン「いやん、ブリット君……そっち系？クスハちゃんは割とノーマルだと思うけど？」

ブリット「な、ななな……！」

エクセレン「あらら、お約束の反応ねえ。もう少しバリエーションを増やさないな。」

ラミア（……よくも続くな、こんな話が）

スレイ「……………タカクラチーフ、後は任せる。」

ツグミ「あ、スレイ……」

スレイはその場を離れ、格納庫から出て行った。

エクセレン「あの子がマ……じゃなかった、ミリオンのパイロット?」

ルシア「カリオンな、絶対わざとだろそれ?」

ツグミ「おっしゃった通り、彼女がテストパイロットです。」

エクセレン「何だかご機嫌斜めだったみたいね。」

ツグミ「申し訳ありません、エクセレン・ブラウニング少尉。初の
実戦で疲れているようで……」

エクセレン「しょうがないんじゃない?誰だって初めての時は緊張
するもの」

ルシア「……本当は、そうじゃないんだけどな……」

エクセレン「あ、ブリット君。初めてって言っても、そっち方面の
話じゃ……」

ブリット「少尉はどうだったんです?」

エクセレン「え?……うん、若かったわねえ。それはそれは甘
美かつ、めくるめく禁断の……ってブリット君!振り返しリア
クションを覚えるなんて……ランキングポイント、50ポイント
アップよ。」

ブリット「どこぞの組織じゃあるまいし。それに、さっき1000
も減ったからあまり嬉しくないですよ。」

ラミア「あの、エクセ姉様・・・話が進みませんでございませぬが。」

ツグミ「ま、ますのです?」

ルシア「この人が、さっきの変な喋り方をするパイロット。」

エクセレン「そうよん。どう?ラミアちゃんの機体。」

ルシア「アンジュルグって言ったな?見た目のインパクト、ヴァルシオンやヴァルシオーネに通じるものがあるな。」

エクセレン「あららん、もつとあるでしょ?」

ルシア「もつと?何だ?」

エクセレン「・・・究極のボケ殺しね・・・」

ツグミ「は、はあ。申し遅れました。私はプロジェクトTDのメンバー、ツグミ・タカクラと申します。」

ラミア「プロジェクトTD?」

ツグミ「ええ、シリーズ77・・・恒星間航行機の開発計画です。」

ブリット「恒星間航行ってことは、外宇宙へ行くんですか?」

ツグミ「はい。ですので、その試作機であるカリオンは本来は戦闘機でなく、外宇宙探査船に分類されるべきものであり・・・そのパ

イロツトもアストロノーツとしての訓練も積んでいるんです。」

ブリット「あんな小さな機体で外宇宙へ行こうだなんて……随分と思いついた計画ですね。」

ツグミ「最終的には探査用と居住用のモジュールと、護衛機ドッキング用モジュールを付ける予定なのですが、それでも最小クラスの恒星間航行機であることには違いはありません。」

ラミア「何のためにそんな物を？」

ツグミ「人類が本格的に外宇宙へ進出するためです。でも、こんなご時世ですからカリオンにはやむなく武装を……」

エクセレン「そうねえ。ミッドクリッド大統領さんが、異星人の存在を演説で正式で認めちゃったわけだし。で、その護衛機つてもしかしてルシア君が？」

ルシア「ああ、恒星間航行機の護衛を主にプロジェクトDで訓練を行っている。ヒリュウの例もあるし、護衛機の搭載もやむなしにだ。」

ツグミ「ですが、本来シリーズ77は平和利用のために開発された機体なんです。」

基地司令の元にいたキョウスケが格納庫に入ってきた。

キョウスケ「……ここにいたか。輸送機の準備が整った。シロガネと合流するぞ。」

ブリット「わかりました。」

ツグミ「あの・・・キョウスケ・ナンブ中尉。助けていただき、本当にありがとうございました。」

ルシア「俺一機では、到底護り切れなかった。礼を言う。」

キョウスケ「礼には及ばん。そのためにここへ来た。・・・ヒュツケバインは間に合わなかったがな。」

エクセレン「まさにバニシング・トルーパー。量産型になってもそうなのね。」

ブリット「ふ、不吉なこと言わないでください。自分の機体はその試作型なんですよ。」

エクセレン「ん、いつか消えちゃうかも。」

ブリット「か、勘弁してください・・・ホントに。」

キョウスケ「・・・では、俺達はこれで」

エクセレン「縁があったらまた会いましょう、ツグミちゃん、ルシア君。」

ツグミ「はい。皆さん、どうかお気をつけて・・・」

ルシア「今度は戦場以外で会おうな！」

キョウスケ達はヒュー斯顿基地が用意した輸送機で、シロガネへ帰還した。

ヒュー斯顿基地 オフィス

ツグミ「少佐、本日のテストと交戦時のデータをお持ちしました。」

フィリオ「ありがとう、チーフ。まずは君の目から見た感想を聞きたいな。」

ツグミ「結果は上々と言えます。特にスレイ操縦時の各データは予測数値の108%を達成しました。」

フィリオ「うん・・・さすがはスレイだ。」

ツグミ「嬉しそうですね。」

フィリオ「僕達のエースであり、自慢の妹でもあるからね。それで、アイビスの方は？」

ツグミ「・・・93%程度です。」

ルシア「初めてにしては上々じゃないか。」

フィリオ「でも、100%は発揮できてないよ。」

ルシア「そ、それもそうだが・・・」

ツグミ「ですが、これでカリオンの完成度の高さは実証されました。」

交戦データにおいても、部分的にはガリオンを上回る戦闘力を発揮しています。」

フィリオ「戦闘力か。はたして、僕達はこの結果を喜ぶべきなのか……。」

ツグミ「少佐……?」

フィリオ「かつてのDC総帥、ビアン・ゾルダーク博士の地球圏防衛思想は、確かに人類にとって必要なものだった。だから、僕は博士の考えに賛同し、リオンシリーズを設計した……機動兵器として。」

ツグミ「……。」

フィリオ「そして、戦いは終わった。だが、僕達はまだに戦争から解放されない……シリーズ77と僕達は、永遠に戦いの呪縛から逃れることができないのだろうか……。」

ツグミ「フィリオ……。」

フィリオ「ごめんよ、ツグミ。決して、ヤケになってるわけじゃないんだ。ただ、カリオンとリオンシリーズが戦っているのを見て、少しね……。」

ルシア「……フィリオ、俺は0号機の調整に立ち会ってくる。」

フィリオ「うん、解ったよ。」

ルシア「それじゃ。」

ルシアは、オフィスを出て格納庫へと向かった。

ヒューズトン基地　　格納庫

ルシア「性能は悪くないが、もう少し旋回がよくなるかな？」

アイビス「ルシア。」

ルシア「ん？アイビスか、どうした？」

アイビス「今回の襲撃事件で、本拠地が移されるんだって。」

ルシア「・・・仕方がないな、今度はシリーズ77の機体が狙われかねないからな。（おまけに、ブースト・ドライブのデータも外に漏れてる。ミツコめ・・・犯人はあいつだな。）」

アイビス「移動先はテスラ・ライヒ研究所だって。」

ルシア「テスラ研か。ちょうどいい、タイプのSのカスタムはテスラ研で行う予定だからな。ちょうどいい。」

アイビス「ルシア・・・また訓練に付き合っただけじゃないかな？」

ルシア「今日はもう休んでおけ。実践の後じゃ体を壊すぞ。」

アイビス「でも、テスラ研に移動してからじゃシミュレーター訓練ができないの。今からでもいい、少しでもスレイに追い付きたい！」

お願い、訓練に付き合って！」

ルシア「（アイビス……）わかった、俺の負けだ。シミュレータールームに行くぞ。」

ヒューストン基地 シミュレータールーム

アイビス「はあ……はあ……」

ルシア「ほら、また機体がブレてるぞ！」

ルシアはシミュレーターのガリオンでアイビスのカリオンを撃ち落とした。

アイビス「うわあっ!?!」

ルシア「……ミスが多くなった。今日はここまでにしる。」

アイビス「まだまだ……まだやれる……!」

ルシア「根詰めすぎるな！本当に体を壊すぞ！」

アイビス「でも！」

ルシア「お前の腕が悪いわけじゃない！お前の体を心配してるんだ！これ以上やると本当に……」

アイビス「でも……それでも……こうでもしないとスレイに勝

てない・・・！」

ルシア「!?!」

アイビス「お願い・・・！」

ルシア「(よほどスレイに言われたのが悔しかったんだな・・・) わかった。だがこの一回だけだぞ。それ以上はいくら駄々をこねても中止する。いいな？」

アイビス「ありがとう・・・！」

ルシア「行くぞ！」

アイビス「了解！」

再び、アイビスとルシアの模擬戦闘が始まる。

アイビス「くっ・・・！」

ルシア「またブレてるぞ！根詰めすぎるからこうなるんだ」

アイビス「くっ・・・！」

ルシア「後ろを取った、これで終わりだ！」

アイビス「このままじゃ何も変わらない・・・！どうすれば・・・」

ルシア(アイビス、酷なようだが手加減はしない。手加減をしては、いつまでもスレイに勝つことなんて出来やしないから。)

ガーリオンは、バーストレールガンをカリオンに向けて放つ。

アイビス「負けて……たまるかあああ!!」

アイビスのカリオンがその場で回頭し、バーストレールガンを紙一重で回避する。

ルシア「な、何!？」

アイビス「いける……!G・ドライバー、シュート!!」

カリオンのG・ドライバーでガーリオンの右腕、頭部を破壊する。

ルシア「直撃、駆動系に損傷……!？」

アイビス「フルブースト、いけええええ!!」

そのままカリオンはソニックカッターでガーリオンに突っ込み、ガーリオンを真っ二つにした。

ルシア「げ、撃墜された……俺が……!？」

アイビス「や、やった……」

ルシア「……プログラム終了。よくやったアイビス。今の感覚を忘れるなよ?」

アイビス「……」

ルシア「お、おいアイビス！？大丈夫か！」

アイビス「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ルシア「・・・・・・気を失っている・・・・・・緊張感が解けたのか・・・・」

ルシアはアイビスをシミュレーターカプセルから降ろし、医務室へ運んだ。

スタッフ「疲労が溜まっていますが、今夜ゆっくり休めば明日には普通通りに動けますよ。」

ルシア「そうか、わかった。後は頼む。」

スタッフ「はい。」

ルシア（フィリオ、お前がアイビスに目を付けた理由・・・・何となくわかった気がするよ。彼女ならきつと、星の海を渡れる・・・・そんな気がする。）

第2話 完

第2話 星への翼 (後書き)

ルシア「はぁ・・・」

アイビス「どうしたの？」

ルシア「いや・・・イスルギ重工の社長と話しててな。疲れるのなんのって・・・」

ツグミ「そういえば社長と知り合いみたいだけど・・・どんな関係なの？」

ルシア「大した関係じゃないさ。DC発足前に総帥とレンジ・イスルギの対話の時に知り合っただけさ。」

ミツコ「あらあら大した関係じゃないとは、見果てたものですわ。」

ルシア「な！？いつの間に!？」

ミツコ「いい機会です。皆様にお教え差し上げましょう。私と彼はそれはもう・・・」

ルシア「わぁぁぁ！誤解されるような事を言っつな!!」

ミツコ「あらあら照れちゃって、かわいいですわね。」

ツグミ「見事に社長に弄ばれてるわね。」

スレイ「不潔だな。」

アイビス「……………」

ルシア「オイオイオイ！冷めた目で見るなよ！泣くぞ！！」

ミッコ「では、本日はこの辺で。」きげんよう。」

ルシア「……………いつか目にも見せてやる……………！！」

第3話 マスタッシュユマン

翌日、ヒューストン基地 食堂

フィリオ「おはよう、ルシア。」

ルシア「おはよう、フィリオ。」

フィリオ「昨日アイビスの模擬戦闘に付き合ってたんだって？」

ルシア「ああ、知ってたのか？」

フィリオ「ルシア、アイビスに落とされたんだって？」

ルシア「な・・・!?!？」

フィリオ「シミュレーターのデータを見させてもらってね。ルシアの被撃墜数がカウントされてたから。」

ルシア「まさかあの場で回頭して攻撃を避けるとは思わなかったかな。油断したよ。」

フィリオ「フフフ・・・」

ルシア「何となくお前がアイビスを見込んだかわかった気がするよ。」

フィリオ「そっか・・・」

ルシア「後、この事誰にも言っていないだろうな？」

フィリオ「いやね、あまりにも衝撃な事だったからスタッフが基地中に噂を流しちゃったんだ。」

スタッフA「あのルシア中尉がアイビスに落とされるなんて信じられないぜ。」

スタッフB「怪我してたとかそういうのでもないしね。」

スタッフC「わざと落ちたんじゃないのか？」

スタッフA「映像データじゃ手加減したようにも見えなかったぞ？」

ルシア「な、なんてこった……！」

フィリオ「スタッフの衝撃も相当のものだったみたいだね。」

スレイ「ルシア、アイビスに落とされたとは『白銀の流星』も地に落ちたな。」

ルシア「うわ！？何だよスレイ後ろからいきなり!？」

スレイ「護衛役がメンバー最弱のアイビスに落とされたとなると、考えものだな。」

ルシア「う……………」

フィリオ「スレイ、ルシアも気にしてるんだからそういうことは言

わないの。」

スレイ「も、申し訳ありません・・・兄様・・・」

ルシア「フィリオ、それフォローになってないぞ。」

フィリオ「え？」

ルシア「自覚なしかよ・・・俺は機体搬入を手伝ってくる。」

フィリオ「怒ってる？」

ルシア「怒ってない！」

ルシアは足早に食堂を出た。

ヒューストーン基地 格納庫

ルシア「積荷の収容を急げ！もうすぐ出るぞ！」

スタッフ「了解！」

ルシア「ふう・・・今朝は散々だったな・・・」

アイビス「ルシア、そろそろ私達も搭乗する時間よ。」

ルシア「わかった、タイプSを搬入した後すぐ行くよ。」

アイビス「わかったよ・・・」

ルシア（アイビス・・・あれから少し落ち込んでるな・・・けど、あの時はああするしかなかったんだ・・・）

レイディバード 移動中

ツグミ「それじゃあ今回はここまで、休憩しましょう。」

ルシア「はあ・・・学科ばかりっていうのも退屈だよ・・・」

スレイ「訓練ばかりがプロジェクトTDじゃない。これも重要なことだ。」

ルシア「けど、レイディバードにシミュレーターがないとなると・・・
・テスト研では集中的にやらなきゃいけないな。」

ツグミ「そうね、フィリオ少佐とプログラムの検討を行ってみるわ。」

ルシア「・・・一度、カリオンでの連携攻撃の訓練をする必要があるな。」

スレイ「連携攻撃？」

ルシア「ああ、ヒュー斯顿基地に襲ってきたテロリストの戦闘で必要だと思ったのでな。あの時はカリオンの性能に助けられていたが・・・今後どうなるかわからないからな。」

ツグミ「ええ、そこも検討してみるわ。」

ルシア「頼んだぞ、タカクラチーフ。」

アイビス「……………」

ルシア「どうした、アイビス？」

アイビス「やっぱり……戦わなきゃいけないのかな……」

スレイ「おじげついたか？覚悟がないなら辞退してもいいんだぞ。」

ルシア「おいスレイ！」

ツグミ「……スレイの言うとおりね。それで死んでもらっては「
ちらが困るわ。」

アイビス「……この程度でおじげついたら今頃私はプロジェ
クトTDにいないよ……！」

ツグミ「ならいいんだけど……」

その時、艦内放送が流れた。

オペレーター「緊急事態発生！本艦に所属不明の機動兵器が接近中
！」

ツグミ「所属不明の……！？」

ルシア「偵察か・・・あるいはヒューストン基地を襲ったテロリストか・・・」

ツグミ「ルシア、悪いけど・・・様子を見てきてくれる？」

ルシア「わかった、すぐに戻る。」

レイデイバードからタイプSが発進し、所属不明機がいるとされるエリアに辿り着く。

ルシア「この辺りのはずだが・・・」

そこに、青い特機タイプが現れた。

ルシア「あれは・・・特機タイプ!？」

???「ほう・・・この世界でも同様の機体があるとはな・・・」

ルシア「何だあれは・・・グルンガストでもヴァルシオンでもない・・・!」

???「輸送機と鉢合わせると思ったが・・・思わぬ収穫だな。」

ルシア「その所属不明機!所属を明らかにしろ!」

???「ソウルゲインの修復は完全ではないが・・・その力・・・見定めてやる。」

ソウルゲインが戦闘態勢に入った。

ルシア「仕掛けてくる気か！？仕方ない・・・」

ルシアはレイディバードに通信を入れた。

ルシア「L135！こちらナンバー00、応答を！」

オペレーター「こちらL135！」

ルシア「所属不明機が戦闘を仕掛けてきた、これより迎撃する！」

フィリオ「映像を見たけど・・・あれはもしかしたらマスタツシユマンかもしれない。」

ルシア「マスタツシユマン？」

フィリオ「L5戦役で連邦軍が交戦たとされるアンノウンだよ。」

ルシア「確かにヒゲに見えるな・・・とにかく、輸送機はその場で待機してくれ。」

フィリオ「わかったよ、無茶はしないで。」

ルシア「わかっている。」

タイプSはマスタツシユマン・・・ソウルゲインに攻撃を仕掛ける。

ルシア「何としても輸送機の道を開けさせてもらう！」

????「この世界ではタイプSは現役で運用されているか・・・」

ルシア「まずは様子見た・・・ビームスプレーガン、ファイア！」

タイプSはハンドレールガンに内蔵されているビームスプレーガンをソウルゲインに直撃させるが、ダメージはほとんど入っていない。

???「装甲は抜けてない・・・問題はないな。」

ソウルゲインは両手にエネルギーを収束させる。

???「受ける！青龍鱗！」

ソウルゲインは青龍鱗を放つが、タイプSは回避し、ハンドレールガンで攻撃する。

ルシア「こいつの装甲・・・グルンガスト以上だ・・・！」

???「骨のある奴のようだな・・・」

ソウルゲインのパイロットがタイプSに通信を送った。

???「貴様、なかなかの腕前だな。」

ルシア「通信・・・？お前は何者だ！」

アクセル「アクセル・アルマーだ。覚えておけ。」

ルシア「アクセル・アルマー・・・？」

アクセル「この世界にも歯ごたえのある者がいたとはな、次は少々

本気を出させてもらおう。」

ルシア（この世界・・・？）

アクセル「玄武剛弾・・・撃ち抜けい！」

ソウルゲインが玄武剛弾を放ち、タイプSに直撃する。

ルシア「くっ・・・！攻撃力もグルンガスト以上か・・・！」

アクセル「次で終わりにさせてもらおう！」

ソウルゲインが拳をあわせ、エネルギーを集中させる。

ルシア「タスクやキョウスケではないが・・・一か八かだ！」

アクセル「行けい！白虎咬！」

ソウルゲインが白虎咬でタイプSに仕掛けに来る。

ルシア「今だ！ブラスターキャノン！！」

アクセル「何！？」

タイプSのブラスターキャノンでソウルゲインを小破させ、動きを止めた。

アクセル「完全ではないとはいえ、ソウルゲインをここまで追い詰めるとはな・・・」

ルシア「くそ……！ブラスターキャノンでも破壊出来ないか……」
そこで警報が鳴りだした。

ルシア「何だ……？所属不明機が接近している!？」

アクセル「チツ……何者かに感ずかれたようだな。これ以上は機体も腹も保たんか……」

ソウルゲインは撤退しようとした。

ルシア「待て！」

アクセル「最後に聞かせてもらおう。貴様、名は？」

ルシア「ルシア……ルシア・ゾルダークだ。」

アクセル「!？ 何……ルシア・ゾルダーク……!」

ルシア（何だ？俺のことを知っている……?）

アクセル（そうか、この世界では違うのだな。）

ルシア「とにかく、その機体は破壊させてもらおう!」

アクセル「慌てなくてもいい……いつか、また戦場で相まみえるさ……これがな。」

ソウルゲインは戦闘区域より離脱する。

ルシア「逃げられたか……だが、今は……」

そこに、先ほど感知した所属不明機と見慣れない特機が現れた。

ルシア「何だあの特機は……!?!」

ロレンツォ「頼むぞムラタ。ここを突破しなければスカルヘッドへ赴くことはできん。」

ムラタ「安心しろ、相手はタイプS……斬り甲斐があるわ……!」

ルシア「な、何だあれは……ガリオン?それに……シシオウブレード!?!」

ロレンツォ「そのパイロットに告ぐ。我々は無益な戦いは好まん、道を空けてもらつて。」

ルシア「!?!? そ、その声は……!」

ロレンツォ「! まさか主は……!」

ルシア「中佐……ロレンツォ・ディ・モンテナッコ中佐ですか!?!」

ロレンツォ「やはりルシア坊か……」

ムラタ「お互い顔見知りのようだな、どうする?」

ロレンツォ「うまくいけばこちらに引き込むことが可能だ。まだ仕掛けるな。」

ムラタ「・・・承知。」

ロレンツォ「ルシア坊・・・L5戦役での活躍は聞いている。よくこの地球圏を護ってくれたな。」

ルシア「いえ、それはハガネやヒリュウ改のみんなが・・・ピアン総帥がいてくれたおかげでもあります。決して自分だけの力とは限りません。」

ロレンツォ「そうか・・・連邦では今何をしている？」

ルシア「総帥が進めていた恒星間航行計画に参加しています・・・それが何か？」

ロレンツォ「そうか・・・連邦はあれから何か変わったか？」

ルシア「あれから半年しか経ってないんですよ、そんな簡単に変わるわけが・・・」

ロレンツォ「そうだ・・・何も変わらなかったのだ！」

ルシア「中佐・・・？」

ロレンツォ「ピアン総帥やマイヤー総司令の命を賭した革命の声でも・・・世界は変わらなかった!！」

ムラタ「・・・」

ロレンツォ「確かにエアロゲイターは退けたが災渦が過ぎれば元の木阿弥だ！今の連邦はどれほど変わったというのだ！！だから私は第4試験場から、このヴァルシオンを奪取し、宇宙に上がるのだ！」

ルシア「ヴァ、ヴァルシオンだつて！？（宙間戦闘用に改修されたとは聞いていたが・・・形が違いすぎる・・・！）」

ロレンツォ「私はこのDCの遺産を以て今一度、この世の有り様に疑問を呈する！」

ルシア「・・・・・・・・・・」

ロレンツォ「そこで、お前の力を借りたい。お前とならきつと世界を変えることができよう。」

ルシア「・・・申し訳ありませんが中佐、俺にはプロジェクトDでの使命があります。DCの再起なら中佐達だけで・・・」

ロレンツォ「・・・貴様も連邦に感化され落ちぶれたか・・・DCの後継者として情けないと思わんのか！！」

ルシア「俺は外宇宙に旅立つ彼女達を護りたいだけです！！」

ロレンツォ「外宇宙にだと・・・！ただの逃避行で世界が変わると思っな！！」

ルシア「！！プロジェクトDは・・・ビアン総帥やフィリオが創り上げた人類の夢だ・・・それを逃避行だと・・・！！」

ロレンツォ「・・・最早、議論は無意味か。」

ルシア「もう語ることはありません中佐・・・いや、ロレンツォ・デイ・モンテニヤッコ！ここでDCの遺物であるそのヴァルシオンを破壊する！！」

ロレンツォ「ムラタ。」

ムラタ「わかっておる。」

ムラタのガリーオン無明がルシアのタイプSの方に向かった。

ムラタ「惜しいな、貴様ほどの兵・・・頂点に立てるほどの力を持つておきながら何故、護衛という生温い椅子に甘んじている？」

ルシア「俺自身の力をどう使おうが俺の勝手だ！お前みたいに斬ることしか能がない奴に言われる筋合いはない！！」

ムラタ「剣の道こそ我が覇道、それ以外は何もいらぬ！」

ルシア「ならその覇道をここで終わらせてやる！！」

タイプSが左腕に装備しているプラズマカッターを抜いた。

ルシア「一意専心・・・ブリットみたいにくまくはいかないが・・・！！」

プラズマカッターでガリーオン無明に斬りかかるが、全て紙一重でかわされる。

ムラタ「青二才が・・・二の太刀はないぞ！」

ガリオン無明がシシオウブレードを抜き、タイプSに斬りかかる。僅かに装甲を掠めただけだったが、完全にかわすことができない。

ルシア「装甲がきれいに斬れたな・・・って感心している場合じゃない!？」

ムラタ「ほう・・・俺の太刀を見切ったようだが・・・掠める程度ではまだまだだな。」

ルシア「くそ・・・こうなったらあのヴァルシオンを・・・」

ムラタ「次はその頭部をもらおうぞ！」

ルシア「ブースト・ドライブ！一気にいかせてもらおう！」

斬りにかかったガリオン無明の攻撃をブースト・ドライブで避け、ヴァルシオン改・タイプCFに接近する。

ムラタ「何・・・早い!？」

ルシア「このヴァルシオンさえ破壊すれば・・・！」

ロレンツォ「ほう・・・ヴァルシオンを狙ってきたか・・・だが・・・」

ヴァルシオン改・タイプCFの胸部が開いた。

ロレンツォ「そのスピードではかわしきれまい！」

ルシア「しまっ・・・!?!」

ロレンツォ「クロスマツシャー!!」

ヴァルシオン改・タイプCFがクロスマツシャーを放ち、タイプSのリフターに直撃した。

ルシア「うわああっ!!」

テスラ・ドライブが損傷し、タイプSが墜落した。

ルシア「くそ・・・TDリフターが・・・!」

ロレンツォ「それでは離脱は困難だろう。」

ムラタ「くくく・・・随分と楽しませてもらった。次は両断させてもらう!」

ルシア「このままじゃ・・・こうなれば・・・」

ルシアはレイディバードに通信を入れた。

ルシア「T135!例の武装を射出してくれ!」

オペレーター「例の武装って・・・まさかあれを使う気ですか!?!」

フィリオ「危険だよ!いくらタイプSでも・・・」

ルシア「今はそんなことを言ってる場合じゃないだろ!! タイプSの耐久性に賭ける! 分の悪い賭けだが・・・やるしかない!」

フィリオ「・・・わかったよ。射出ポイントを指定する。そこに向かってくれ。」

ルシア「ポイントは・・・ってかなり離れてるな・・・だが、今は向かうしかない!」

タイプSはホバーで指定ポイントに向かう。

ロレンツォ「ん・・・離脱するつもりか?」

ムラタ「させんわ、ここで斬らねば収まりが悪い。」

ガリオオン無明がタイプSに短刀を突き付ける。

ムラタ「我が太刀を受けよ!」

タイプSに短刀が刺さり、ガリオオン無明が蹴り飛ばした。

ガリオオン無明がフルブーストで接近し、シシオウブレードで斬りかかる。

ルシア「まずい!?!」

ムラタ「チェストオオオ!!」

シシオウブレードが直撃する

直前で拳が飛んできてガーリオン無明を吹き飛ばした。

ムラタ「な、何!？」

そこに現れたのは、先ほど交戦したソウルゲインだった。

アクセル「やはり・・・当たりが浅いな。互いに本調子じゃないんだな、これが。」

ルシア「アクセル・・・!？何しに戻ってきた!」

アクセル「ある物がないか尋ねたかっただけなのだが・・・まだ交戦状態だったもので、助太刀しただけだ、こいつが。」

ルシア「ある物・・・?」

アクセル「簡単な物だ。ナイフか何か持ってないか?」

ルシア「一応非常用のサバイバルナイフがあるが・・・それが?」

アクセル「出来れば譲ってもらえないか?」

ルシア「何で?」

アクセル「・・・缶詰が開けられなくてな・・・」

ルシア「は?」

アクセル「何でもない。」

ルシア「わかった、背に腹は代えられない。適当なポイントに置いておくから後で拾え。」

アクセル「・・・すまん。」

ルシア「とにかく、指定ポイントに到着するまで時間稼ぎを頼む！」

アクセル「勝算はあるのか？」

ルシア「とりあえずはな・・・それが来ればなんとかなる。」

アクセル「・・・わかった。」

ムラタ「何かは知らんが、特機タイプか・・・斬り甲斐があるわ！」

アクセル「悪いが、食いぶちを獲得しなければいかんのでな。少々手荒にさせてもらう！」

ソウルゲインが分身してガーリオン無明に攻撃を仕掛ける。

ムラタ「分身した・・・！」

アクセル「舞朱雀・・・貴様に見切れるか！」

舞朱雀でガーリオン無明を攻撃するが、シシオウブレードで防いだ。

ムラタ「なかなかの強者だ・・・これぞ、我が生きる道！」

アクセル「盛り上がってるところ悪いが・・・そろそろ幕引きなん

だな、これがな。」

ムラタ「何？」

ルシアのタイプSが指令ポイントに到着していた。

ルシア「そろそろか……」

空中からタイプSの新しい換装パーツ

『スナイパー・ブーステッドライフル』が飛来し、タイプSの背部にドッキングされる。

ルシア「ドッキング完了！すぐに攻撃態勢に……」

アクセル「ほう……あれが勝算か……」

ムラタ「そんなものでこの太刀を受け切れるか！」

ルシア「受けなくていい……剣撃には狙撃だ！」

タイプSがスナイパー・ブーステッドライフルを連結し、ガーリオン無明をロックする。

ルシア「追尾照準完了、誤差修正！スナイパー・ブーステッドライフル、マキシマム・シュート！！」

スナイパー・ブーステッドライフルを発射し、ガーリオン無明の右腕に直撃する。

ムラタ「何……！？あの距離から当ててきた……！」

ルシア「もう一発！」

次はヴァルシオン改・タイプCFを狙い、発射するが装甲を貫通しなかった。

ロレンツォ「当てたのはいいが……それだけ距離が離れていては威力が半減するだろう。」

ルシア「それはどうかな？」

刺さった弾が爆発し、クロスマツシャーの発射口が損傷する。

ロレンツォ「何……！榴弾だと!？」

ルシア「それも想定して設計したのでね、当たり所がよければ戦艦だろうが特機だろうが一撃で落とせますよ？」

ロレンツォ「……強くなったな。」

ルシア「中佐には統合軍でお世話になりました。今なら命は取りません。」

ロレンツォ「……わかった。ムラタ。」

ムラタ「……致し方あるまい。」

ルシア「中佐、これだけは覚えておいてください。地球の人々は変わる事ができます。見限る機会を見誤らないでください。」

ロレンツォ「……………覚えておこう。ASRS展開、離脱する。」

ヴァルシオン改・タイプCF、ガリオン無明はその場から撤退した。

ルシア「レーダーからもう消えた……？」

アクセル（ASRSか……レモン、無事にたどり着いたようだな）

ルシア「アクセル、助かった。」

アクセル「礼はいい。」

ルシア「約束だ、ナイフはこの場に置いておく。」

アクセル「すまん。」

ルシア「それじゃ……次は、戦場以外で会いたいものだな……」

アクセル「……………ああ、そうだな。」

タイプSが戦闘区域から離脱し、レイディバートに戻った。

アクセル（戦場以外で……か。ルシア・ゾルダーク、連邦が腐敗すると……俺達の世界で起こした事と同じことをする可能性は十分にあり得る。お前はその時同じ選択を迫られる……多分な）

ルシア「ふう・・・何とかなったな・・・」

フィリオ「でも、腕のモーターが焼き切れてる。しばらくタイプSは使えないよ。」

ルシア「そうか・・・しばらくは訓練用のガーリオン・カスタムで何とか凌ぐしかないか・・・」

フィリオ「それには及ばないよ、君専用のカリオンがもうすぐ完成する。」

ルシア「そうか・・・俺も本格的にシリーズ77の訓練に参加できるな。」

フィリオ「でも、ナンバー00の責務・・・これからもよろしく頼んだよ?」

ルシア「分かっている、カリオンならもっと楽になる。それじゃ、俺はタイプSの修理にかかる。」

フィリオ「やつぱり・・・その機体に愛着が・・・?」

ルシア「・・・ああ。教導隊隊長、カーウアイ・ラウ大佐が乗っていた機体だ・・・あれは何があっても手放さないし、壊させもしない。それが・・・L5戦役で俺が背負った十字架なんだ・・・」

フィリオ（たしか・・・エルの話じゃカーウアイ大佐にとどめを刺

したのは・・・)

ルシア「別に気負ってるとかそういうのじゃないんだ。大佐が生き
た証を守り続ける・・・それだけだ。」

フィリオ「・・・わかったよ、タイプのSの修理も並行して行っよ。」

ルシア「すまないな、フィリオ。」

フィリオ(ルシア・・・あまり背負いすぎると心身共に傷だらけに
なってしまうよ・・・こんな調子ではいつかは・・・)

第3話 完

第3話 マスタッシュユマン (後書き)

ルシア「うん……」

アイビス「どうしたの？」

ルシア「いや、いつになったら俺達アニメに出るのかなって思ってた……」

スレイ「ああ、そのことが。」

ルシア「アニメじゃヒューストーン基地でのことが描かれてなかったし……そろそろプロジェクトDに触れてほしいものだな。」

ツグミ「悪いようだけど、ひとつ言わせてもらっわ。あなた、アニメに出ないわよ？」

ルシア「……ハハハ、またまたそんな冗談を……」

フィリオ「残念ながら、真実だよ。」

スレイ「大体からここでしか出られないお前が何故アニメに期待する？」

ルシア「……ノーコメントだ。」

フィリオ(どうせアイビスのためだろうけど……あえて言わないでおくよ。)

ゲシュペンスト・タイプS・スナイパー

ゲシュペンスト・タイプSに改造したブーステッド・ライフル、『スナイパー・ブーステッドライフル』を装備した機体。

この武装は貫通性能が高く、バリアを貫通する。徹甲榴弾を使用しており、威力が減衰することなく攻撃が可能。しかし、重量はブーステッド・ライフルのおよそ数倍、リフターを取り外さないと装備出来ないため、機動力は大幅に下がってしまった。

しかも、発射する際の反動に普通のPTでは耐えられないため、タイプSしか使えない。

しかし、射程、威力、命中精度はブーステッド・ライフルを凌駕しているため、後方支援としては非常に優秀な機体となっている。

武装

ビームスプレーガン

ハンドレールガン

プラズマカッター

ブラスターキャノン

スナイパー・ブーステッドライフル

第4話 護りたい夢

レイディバード 個室

ルシアは端末で、タイプSの格闘モーションデータを構成していた。ルシア「カイ少佐のモーションアレンジデータを入れて、これにR-1のT-LINKナックルのデータを組み合わせて・・・」

そして、一つのモーションが完成する。

ルシア「よし！これでタイプSも格闘攻撃に対応できるぞ。」

部屋のコールが鳴った。

フィリオ「ルシア、そろそろテスラ研に到着するよ。」

ルシア「わかった、すぐに行くよ。」

レイディバードはテスラ・ライヒ研究所に到着し、フィリオとルシアはジョナサン・カザハラのもとに向かった。

テスラ・ライヒ研究所

ジョナサン「ようこそ、テスラ研へ。というより、お帰り・・・
フィリオ。」

フィリオ「ご無沙汰しています、カザハラ博士。僕がEOTI機関

へ行つて以来になりますね……」

ジヨナサン「まあ、そう緊張するな。ここは君にとって学舎だったんだ。そんな顔はしなくていい。」

フィリオ「ありがとうございます」

ジヨナサン（ルシア君）

ルシア（はい？）

ジヨナサン（まだ彼はリオンシリーズを設計した自分を責めているのか……？）

ルシア（そうみたいで……俺も気にするなどは言っておいたんですが……）

リシュウ「ふっつ、やれやれ。また刀身の形状固定に失敗したわい。」

ジヨナサン「リシュウ先生。」

リシュウ「ジヨナサン。あの新型斬艦刀の刀身な、固定にするわけにはいかんか？その方が楽なんじゃが」

ジヨナサン「うん……。。零式斬艦刀以上の切れ味と、取り回しの良さを要求されたのは先生ですよ？」

リシュウ「それはそうじゃが、今のままでは刀身固定時間の問題が……」

フィリオ「……………」

ジヨナサン「ああ、すまない、フィリオ。思わず話し込んでしまった。」

フィリオ「ふふ……そういう所は相変わらずですね、博士。」

リシュウ「客人か?」

ジヨナサン「先生、おととい言ったでしょう。プロジェクトDのフィリオ・プレステイとルシア・ゾルダークですよ。」

リシュウ「おうおう。すまんの、最近物覚えが悪くてな。ワシはリシュウ・トウゴウじゃ。見ての通りの爺で、ここの顧問をやっている。」

フィリオ「ご高名は聞き及んでおります。グルンガストシリーズの剣撃モーシヨンは、先生の剣技が基になったものだとか。」

ルシア「へえ……ゼンガー少佐の零式とか式式のを……」

リシュウ「時代じゃよ。侍が鋼の馬に乗るなら、それが振るう剣も相当のものとなる。」

ジヨナサン「リシュウ先生の一番弟子は、まさに鋼の侍を地で行く男ですからな。」

フィリオ「元特殊戦技教導隊のゼンガー・ゾンボルト少佐ですね。剣撃戦にかけては右に出るものがないという……」

リシュウ「何の何の。ワシから見れば、まだまだ青いわい。」

ルシア「あ、あれで青いつて……………」

フィリオ「今、彼とエル…………エルザムはどこに？」

ジヨナサン「さあなあ。エルザム少佐の方からはたまに連絡が来るが。」

フィリオ「そうですか……………」

リシュウ「おぬし、エルザムと知り合いかの？」

フィリオ「ええ。幼馴染みなんです。」

リシュウ「ほほう、そうじゃったか。」

ジヨナサン「で、フィリオ。君のハートを射止めたキュートな女神は？」

ルシア（女神って……………誰のことだ？）

フィリオ「タカクラチーフなら、TDのパイロット達と機体の搬入作業に立ち会っています。」

ジヨナサン「そうか。銀河を翔ぶ天使達にも早く会いたいものだねえ。」

フィリオ「その前に…………お願いがあるのですが。」

ジヨナサン「……何かな？」

ルシア「……ホントにいいのか？」

フィリオ「うん。現状では、これが最善の策かと。」

ジヨナサン「……いいだろう、協力しよう。」

ルシア「気が引けるが……仕方ないな。」

ジヨナサン「そうだ、ルシア君に見てもらいたいものがあるんだが……」

ルシア「はい？」

ジヨナサン「まあまあ、付いてきなさい。」

ルシアはジヨナサンに連れられ、テスラ研の地下格納庫に辿り着く。

ルシア「こ、これは……!?!？」

ジヨナサン「どうだ、驚いただろう？」

ルシア「何でこんなところにエゼキエルが……あ、違うナイトが……」

ジヨナサン「言い直さなくてもいい。それが正式名称なのだろう？」

ルシア「は、はい……」

ジヨナサン「これはギリウム少佐がホワイトスターを調査している時に見つけたものらしい。通常のものより改造されているようだな。」

ルシア「まさか……」

ジヨナサン「恐らく、お前さんが向こうに寝返った時のために保管しておいたものだろう。まあ、無駄に終わったがね。」

ルシア「……」

ジヨナサン「君が異星人だって言うのは知っている。けど、最後は地球人として戦った、そうだろ？」

ルシア「俺が異星人だって言うのは……フィリオ達には黙っておいてもらえませんか？」

ジヨナサン「……打ち明けてなかったのか？」

ルシア「はい……」

ジヨナサン「何故だ、彼らはそんなことで拒絶なんてしないはずだ。」

ルシア「理由は……言えません。けど、俺が異星人であることは伏せておいてください……お願いします。」

ジヨナサン「……わかったよ。余計な混乱は避けたいからな。」

ルシア「すみません。」

ジヨナサン「けど、隠し事はいつかはバレる。そのことはわかって
いるね？」

ルシア「・・・覚悟の上です。」

ジヨナサン「よし、ここはいいから天使をお茶にでも誘ってきなさい。」

ルシア「え？」

ジヨナサン「あの赤髪の娘に気がある、違つか？」

ルシア「な、ななな何を・・・!？」

ジヨナサン「わかりやすいリアクションだな。ささ、ここはいいから行った行った。」

ルシア「は、はあ・・・」

テスラ・ライヒ研究所 食堂

ルシア（隠し事はいつかはバレる・・・か。確かにそうかもしれない、けど・・・）

クスハ「あれ、ルシアさん？」

ルシア「え・・・？」

クスハ「やっぱりルシアさんですね？」

ルシア「き、君は・・・クスハ！？」

クスハ「お久しぶりです。」

アイビス「ルシア、知り合い？」

ルシア「ああ、クスハはL5戦役で共に戦った戦友だ。」

クスハ「あ、そうだ。また新しい栄養ドリンクを作ったんですけど、いかがですか？」

ルシア「おお新作か、もらおうか。」

アイビス「だ、駄目だよルシア・・・！それは・・・」

ルシアは、アイビスの制止を聞かずクスハの栄養ドリンクを一気飲みする。

ルシア「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アイビス（絶対まずいに決まってるよ・・・・・・・・）

クスハ「どうですか？」

ルシア「・・・ハーブの香りがするな。何か入れたのか？」

クスハ「分かります？無重力栽培のハーブを、チベットの高地民族に伝わる製法で生成したエッセンスを入れてみたんです。」

アイビス「な、何でわかるの・・・。」

ルシア「なるほど、これはうまい！」

クスハ「喜んでもらえてうれしいです！」

アイビス「お、おいしそうには見えないけど・・・。」

ルシア「そうだ。クスハ、ちょっと。」

クスハ「は、はい？」

ルシア（アイビス達に俺の事を話したか？）

クスハ（ど、どうかしたんですか？）

ルシア（実は、俺が異星人だって言うことは黙っておいて欲しいんだ。）

クスハ（え！？何ですか？）

ルシア（余計な混乱は避けたい。頼む。）

クスハ（は、はい・・・）

そこに、コールが鳴り出す。

クスハ「あ、はい。クスハです。」

ジョナサン「レデイのお茶会にすまん。次の訓練のことで打ち合わせをしたい。アイビスとルシア君と一緒に管制室まで来てくれ。」

クスハ「分かりました。」

アイビス（次の訓練のことか……。何か特別なプログラムでも組んだのかな……）

テスラ・ライヒ研究所 管制室

クスハ「え？リシュウ先生も訓練に参加するんですか？」

リシュウ「そうじゃ、グルンガスト2号機でな。」

クスハ（先生が機体に乗るなんて初耳だけど……。大丈夫なのかしら？）

アイビス「……………」

リシュウ「この老いばれに特機が扱えるのか……。とか言いたげな顔じゃのう。」

アイビス「い、いえそんな……………！」

リシュウ「心配せんでいい。ワシは立会人みたいなもんでのう。機

体制御はT C・O S任せじゃ。」

アイビス「あ、それなら……」

リシュウ「何じゃ？」

アイビス「い、いえ、何でもないです！」

ルシア（零式にでも乗せたら無敵かもなこの人……）

スレイ「……………」

フィリオ「どうしたんだい、スレイ？何か疑問でもあるのかい？」

スレイ「少佐、実戦に近いデータということか実弾を使用するとうことでしょうか？」

アイビス「！」

フィリオ「…………その通りだ。」

ツグミ「え…………！」

スレイ「望むところです。所詮、シミュレーションはシミュレーション。緊張感のない訓練で実力は向上しませんから。」

アイビス「……………」

フィリオ「タカクラチーフ、君には現場でオペレーターを担当してもらう。」

ツグミ「私も戦闘に参加するのですか？」

フィリオ「場合によっては、そうなる。」

ツグミ「・・・わかりました。」

フィリオ「ルシアには0号機で指揮を担当してもらおう。AM部隊の指揮には慣れてるでしょ？」

ルシア「まあ、確かにな。」

フィリオ「でも、シリーズ77の機体はスピードが命だ。いかに素早く指揮を執れるか君次第だよ。」

ルシア「了解した。」

フィリオ「訓練は1700から開始する。各自は30分前にブリーフィングルームへ集合してくれ。」

ツグミ「了解です。」

アイビス（実弾を使った訓練・・・あたしに出来るんだろうか・・・）

時刻 1700

テスラ・ライヒ研究所 訓練場

フィリオ「CCより各機へ。事前に話した通り、ターゲットは実弾を装填している。」

アイビス「……………」

フィリオ「威力は弱めであるが、当たり所が悪ければ致命傷になりかねない。油断をしないように。」

スレイ「……………」

フィリオ「各機は連携を取り、全てのターゲットを5分以内に破壊してくれ。」

アイビス「5分……………」

スレイ「集中しろ、アイビス。お前のミスでこのミッションは失敗になる。お前は私のサポートに回れ。万が一、私が敵を撃ち漏らすことがあつたら、それを狙うんだ。」

アイビス「う、うん……………了解！」

ルシア（指揮するの俺の役目なんだけど……………まあいいか。これはただの訓練じゃないし。）

ツグミ「私はここでオペレートを行います。」

リシュウ「ワシは何もせんからの。頑張れよ、譲ちゃん達。」

クスハ「でも、先生……………どうしてグルンガストに？」

リシュウ「む……。まあ、ちと思つところがあつての。リハビリみたいなもんじゃ。」

クスハ「リハビリ?」

リシュウ「ああ、いやいや。ワシにこんな物は扱えん。歳も歳じゃし。う。ここでお主らの訓練を見物させてもらつわい。」

クスハ「はい……。」

ツグミ「所要時間は5分を想定していますが、私の計算では4分で遂行可能のほずです。」

アイビス「え……!??」

スレイ「……面白い。4分だな?」

ツグミ「ええ。期待するわ、スレイ。」

フィリオ「各機、準備はいいね?それではスタートだ。」

アイビス「やるんだ……!やってみせるしかないんだ!」

ルシア「各機、散開して連携しターゲットを全て破壊しろ。俺とクスハは8時方向の敵を、アイビスとスレイは4時方向の敵を叩け。」

スレイ「了解した。行くぞ、アイビス。」

アイビス「了解!」

ルシア「行くぞ、クスハ！」

クスハ「はい！」

2機つつに別れ、ターゲットへと向かう。

クスハ「そういえば、ルシアさんの機体色って銀色じゃないんですね？」

ルシア「ああ、これはプロトタイプみたいなものだし。大体、アイビスと色が被ってややこしいからな。白銀の流星は返上して黒い連星に改名しようかな？」

クスハ（連星って・・・単独なのに。）

スレイ（あの余裕・・・流石と言ったところか。ベテランの成せる業・・・なのだろうな。）

ツグミ「ターゲット、移動を開始。」

ルシア「各個に撃破、01、04は一撃離脱、クスハは俺が敵を密集させた後、広範囲攻撃で一掃してくれ。」

クスハ「分かりました！お願いします！」

スレイ「アイビス、固定砲台を優先的に落とせ。バルドンクは私に任せろ。」

アイビス「了解！」

ルシア「ミサイル斉射！」

ルシアはカリオンのホーミングミサイルで固定砲台を撃破、バルド
ンクの攻撃を回避し牽制する。

ルシア「いいぞ・・・もつと来い・・・」

バルドングがルシアのカリオンに攻撃を集中させてきた。

ルシア「今だ、クスハ！」

クスハ「はい！マキシ・ブラスター！！」

頃合いを見計らい、グルンガスト式式のマキシ・ブラスターでバル
ドンクを一掃させた。

ルシア「よし！こちらは全機撃墜した！」

ツグミ「0号機と式式は01、04の援護に向かってください。」

ルシア「了解した。クスハ、俺が先行するから周囲の警戒をしつつ
援護に向かってくれ。」

クスハ「はい！」

ルシアのカリオンはブースト・ドライブで先行する。

スレイ「ドライブ・・・シュート！」

スレイのカリオンのGドライブバーでバルドングを数機撃墜

アイビス「Gドライバー、シュート！」

アイビスのカリオンのGドライバーで固定砲台を破壊する。

バルドンクは後方からアイビスのカリオンの攻撃を仕掛ける。

アイビス「うわっ!?!」

スレイ「ぼさつとするな、まだターゲットは残っている！」

ルシア「後方の敵は任せろ！ターゲット、オールロック！マルチト
レースミサイル発射！」

ルシアのカリオンのマルチトレースミサイルでバルドンクを全機撃
墜した。

ルシア「これで最後のはずだ・・・」

オペレーター「ターゲット、全機破壊。」

ジヨナサン「ほほう。やるじゃないか、君の天使達は。」

フィリオ「ええ、操縦能力に関しては。でも、実弾を使っていると
はいえ、所詮訓練です。」

ジヨナサン「では？」

フィリオ「はい・・・予定通りに」

アイビス「やった……やったよ、あたし達！」

スレイ「はしゃぐな、アイビス。私がいる限り、当然だ。」

ルシア「おいおい、俺とクスハの立場はどうなんだよ？」

リシュウ（……そろそろかの。）

フィリオ「CCより各機へ。続いてミッション2に移る。」

格納庫から固定砲台が所定位置へ移動する。

ツグミ（変ね……。事前に聞いていた数じゃないわ。）

フィリオ「各機へ。次のターゲットには……………」

その時、グルンガスト2号機の警報が鳴りだす。

リシュウ「む！？」

グルンガスト2号機の動きがおかしくなる。

リシュウ「な、何じゃ！？グルンガストが！」

クスハ「先生！？」

リシュウ「い、いかん！機体が勝手に動きおる！」

クスハ「ええっ！？」

他の固定砲台もグルンガスト2号機と同様の動きを見せた。

アイビス「!?!」

リシュウ「ええい、何がどうなっておるんじゃ!?!」

ルシア「駆動系を攻撃して止めるしかない!」

ルシアのカリオンはグルンガスト2号機に接近する。

固定砲台はミサイルランチャーでカリオンを攻撃するが、全て回避する。

ルシア「リシュウ顧問!今助けます!」

リシュウ「いかん!迂闊に近づくな!」

グルンガスト2号機は、ブーストナツクルを放ちカリオンを攻撃した。

ルシア「しまった!?!」

ブーストナツクルが直撃し、カリオンが墜落した。

ルシア「うわあ!?!」

オペレーター「グルンガスト2号機、ターゲット全機、制御不能!カリオン0号機、墜落!」

ジヨナサン「原因は何だ!?!」

フィリオ「考えられることとしては制御データのバグです。しかし、2号機を含む全機が暴走するなんて……!」

ジヨナサン「まさか、ウィルスか!？」

固定砲台がツグミのガーリオン・カスタム、カリオンとグルンガス
ト式式に攻撃を仕掛ける。

ツグミ「きゃああつ!!!」

アイビス「うわっ!?!」

スレイ「仕掛けてきた!?!」

クスハ「……………」

アイビス「こ、これじゃ、正真正銘の実戦…………!」

ジヨナサン「緊急停止コードは!?!リセットも効かないのか!?!」

オペレーター「は、はい!」

スレイ「ど、どうすればいいんだ…………!?!」

クスハ「戦うしかありません…………!」

アイビス「クスハ!?!」

クスハ「私達で2号機とターゲットを止めるんです!」

ツグミ「でも、リシュウ先生が！」

リシュウ「ワシのことは心配いらん。こいつは頑丈だ。関節を壊して、動きを止めてくれい！」

スレイ「兄様、何とかならないのですか!？」

フィリオ「こちらでも対策を講じる。だが、クス八君が言った通り、2号機とターゲットを止めてくれ。」

アイビス「そ、そんな・・・!」

ツグミ「ターゲットは私達を敵だと認識している!これでは実戦と同じだわ!」

スレイ「・・・覚悟を決める。そうやら、やるしかないようだ・・・!」

アイビス「う、うう・・・!」

ツグミ「わ、私も・・・!??」

クス八「タカクラチーフは無理せず、支援に回ってください!アイビスさんとスレイさんは砲台を!先生のグルンガストは私が止めます!」

アイビス「そ、そんなことを言われても・・・!」

ツグミ「じ、実戦なんて・・・!」

ルシア「俺は動けない！お前達でやるしかないんだ！」

リシュウ「またルシア君に攻撃しないと限らん！早く止めてくれい！」

クスハ「行きませぬ！」

グルンガスト式、スレイのカリオンは2号機へと向かうが

アイビスのカリオン、ツグミのガールリオンは動かずにいた。

アイビス「……………」

ツグミ「……………」

クスハ「二人共、どうしたんです!？」

スレイ「放っておけ、クスハ。あの二人には実戦は無理だ。」

クスハ「でも、この状況で気持ちが悪く負けていたら!！」

スレイ「あの二人が役に立たないなら、私達でやるまでだ。」

アイビス「スレイ、あんた……………」

スレイ「私はプロジェクトTDのナンバー01だ。敗北は許されない！」

アイビス「でも、あたしは……………実戦なんて……………」

クスハ「……アイビスさん、私だって戦うのは怖いんです。」

アイビス「え？」

クスハ「それに、戦うのは辛い……。でも、私には守りたい人や守りたいものがあるんです。」

アイビス「クスハ……」

クスハ「思い出してください！フィリオ少佐が教えてくれたものを、アイビスさんの夢を！それこそが、あなたの守りたいものじゃないんですか！？」

アイビス「！」

クスハ「だから、戦ってください！プロジェクトDのために！自分の夢のために！」

アイビス「……わかったよ、クスハ。」

ツグミ「アイビス……」

アイビス「タカクラチーフ……あたし、やるよ。だから、フォロ―して。」

ツグミ「アイビス、あなた……」

アイビス「あたし、嫌だよ……。銀河を見る前に、こんな所で終わっちゃうなんて……。だから、戦うよ！チーフとスレイとあたし

で、夢を叶えるために!」

ツグミ(フィリオの夢・・・私の夢・・・それがプロジェクトD・・・)

スレイ「アイビス、動きを止めるな!グルンガストが来るぞ!」

リシュウ「逃げるんじゃ、アイビス!」

2号機が計都羅? 剣を抜き、アイビスのカリオンに接近する。

アイビス「!」

ツグミ「アイビス、マニュアルパターン17の45!」

アイビス「りよ、了解!」

2号機の攻撃がカリオンを掠める。

アイビス「これくらいのダメージに止まってなんかいられない!」

ルシア「砲台代わり位・・・!」

ルシアのカリオンはGドライバーを放ち、2号機に当て隙を作った。

アイビス「今だ!ブースト・ドライブ!ゴーツ!」

カリオンのソニックカッターで2号機に攻撃を当てた。

アイビス「やった!」

スレイ「へたくそ！マニユーパーターン17の45を使って、なぜ回避できない！」

アイビス「大丈夫！まだあたしもカリオンも飛べる！」

ツグミ「ダメージチェックはこちらでします！アイビスは戦闘に集中してください！」

アイビス「了解！行こう、スレイ、クスハ！」

スレイ「フン、お前に言われるまでもない！」

クスハ「先生、大丈夫ですか！？」

リシュウ「お、おう、今のところはな。早くこいつを・・・」

2号機はルシアのカリオンヘブーストナックルを放つ。

ルシア「ぐああっ！！」

リシュウ「ま、まずい！このままでは機体ごと破壊しかねんぞ！」

アイビス「ルシア！！」

クスハ「早くしないとルシアさんが・・・！」

ツグミ「アイビスとスレイで2号機を牽制して！クスハは2号機を止めて！」

スレイ「了解！」

アイビス「ルシアはやらせない！まだ教えてもらいたいことがたくさんあるんだ！」

スレイ「あいつがいなくなつては張り合う人間がいなくなる。それだけはなんとしても……！」

アイビス、スレイのカリオンはホーミングミサイルで2号機を攻撃し足止めをする。

クスハ「先生！少しでもだけ我慢してください！」

リシュウ「む……！おぬしの場合は程々に、な。」

クスハ「ブーストナツクル！」

式式のブーストナツクルで2号機の足関節を攻撃し、動きを止めた。

リシュウ「ふう……やれやれ。こやつめ、ようやく止まりおつた。」

クスハ「先生、お怪我は！？」

リシュウ「大丈夫じゃ。伊達に毎日鍛えとらんわい。」

オペレーター「2号機を含む全てのターゲット、活動を停止しました。」

ルシア「2号機を止めたと同時に……ウィルスは2号機を司令塔

にしていたようだな。」

ジヨナサン「ふうう……。一時はどうなることかと思ったよ。」

リシュウ「ワシの寿命が20分ぐらい縮んだわい。」

ジヨナサン「先生、それは短すぎやしませんか？」

リシュウ「そうか？ま、何にせよこれにて一件落着。印籠は出んがの。ふおっふおっふおっふおっ。」

ルシア「……突っ込む気力が……ない……」

フィリオ（よくやったよ、みんな……）

ツグミ「それで少佐、暴走の原因は判明したんですか？」

フィリオ「残念ながら不明だ。この件については、追って調査を続けよう。」

ツグミ「……」

フィリオ「……」

ツグミ「……わかりました。このまま帰投します。」

アイビス「ルシア、大丈夫？」

ルシア「あ、ああ……腕がまともに動かせない……多分折れている。」

クスハ「お疲れ様です。アイビスさん。」

アイビス「ありがとう、クスハ。あたし、あんたの言葉で……」

その時、アイビスのカリオンのエンジンが爆発した。

アイビス「うわっ！」

クスハ「アイビスさん！」

アイビス「ダ、ダメージが今になって……!？」

スレイ「脱出しろ、アイビス！」

アイビス「だ、駄目!間に合わない!!」

フィリオ「アイビス！」

アイビスのカリオンはそのまま墜落し、地面を滑った。

ルシア「アイビスウウウウウウ!!」

ルシアのカリオンはアイビスが墜落した場所へ向かった。

スレイ「と、飛んだ……!？」

ルシア「アイビス!返事しろ!!アイビス!!」

カリオンのコクピットハッチがひしゃげて開かなくなっていた。

ルシア「そ、そんな・・・！ハッチが開いていない！？」

ツグミ「だ、脱出できてない・・・！？」

スレイ「まだカリオンの中か！？」

フィリオ「すぐに救護班を向かわせる！！」

ルシア「何で今回に限ってタイプSに乗らなかったんだ俺は・・・！！」

クスハ「早くこじ開けないと！！」

ルシア「・・・俺が開ける。」

ツグミ「え！？」

フィリオ「無理だ！生身じゃハッチは開けられない！」

ルシア「だからと言って見過ごせるわけがないだろ！！」

クスハ「待つてください！その怪我でじゃ・・・！？」

ルシアはカリオンのコクピットハッチを掴みこじ開けようとする。

ルシア「ぐ・・・うっ・・・！！」

フィリオ「無茶はしないでくれ！このままじゃ君の腕が・・・！！」

ルシア「アイビスを助けられるんなら・・・こんな腕、いくらでも
くれてやる!!」

ジヨナサン「しかし・・・!」

ルシア「アイビス、お前が夢を叶えるために戦うのなら・・・俺は、
その夢を護るために戦う!!お前の夢は・・・肉塊になるうが俺が
護ってやる!!」

スレイ「!」

ルシア「おおおおおああああああ!!!!」

ルシアは全身全霊の力を込めて、コクピットハッチをこじ開けた。

テスラ・ライヒ研究所 管制室

ツグミ「・・・暴走の原因に関するレポートがまとまりました。

ジヨナサン「ふむ。では、かいつまんで聞かせてくれたまえ。」

ツグミ「犯人・・・つまり、今回の事件を仕組んだ人間は、テスラ
研のホストコンピュータに侵入し、私達のプログラムを一瞬の内に
書き換えています。」

ジヨナサン「ハッカーとしては超一流だな。ウチにスカウトしたい
ぐらいだ。」

ツグミ「その必要はないでしょう。」

ジョナサン「……ほう。」

ツグミ「そして、再犯もあり得ないと考えます。」

フィリオ「どうしてそう思うんだい？」

ツグミ「犯人が望んだ結果を得たからです。」

ルシア「……」

ジョナサン「ふうむ……。まるで犯人を知っているかのような口ぶりだねえ。」

ツグミ「いえ、私には見当が付きません。」

フィリオ「別の質問をするよ、タカクラチーフ。君にとって初めての実戦だったけどそれについては？」

ツグミ「……怖かったです……。でも、スレイやアイビスは
いずれ前線に立つことになるのですね……？」

フィリオ「……おそらくは。」

ルシア「あまり、考えたくないな。」

ツグミ「ならば、私も私のやり方で戦います……。彼女達はプロジェクトTDのパイロットですから。その彼女達が生き残るため

に私達も最善を尽くしましょう、少佐。」

フィリオ「ああ……」

ルシア「チーフ、俺を忘れてるぞ？」

ツグミ「今は無理でしょ？その腕じゃね……」

ルシア「あ……ハハハ……」

ツグミ「……では、カザハラ博士。犯人の追及についてはお任せします。」

ジヨナサン「わかった。」

ツグミ「これから、カリオンの修理に立ち会ってきます。……失礼します。」

ツグミは管制室を出て、カリオンの格納庫へと向かった。

リシュウ「……どうやら、彼女はお見通しのようじゃ。ジヨナサン、あぬしのやり方があざと過ぎたかのう。」

ジヨナサン「いえいえ。先生の演技に少々問題があったんですよ。」

リシュウ「馬鹿言え。表彰されてもいいぐらいじゃ。」

ジヨナサン「いやいや。別に理由があったとはいえ、先生がグルンガストに乗っている時点で無理がありましたな。」

リシュウ「む……。そこを突かれると痛いわい。」

フィリオ「でも、ルシアもわざと攻撃に当たったのも不自然なところがあったね。」

ルシア「し、仕方ないだろあんな状況で……」

ジヨナサン「だが、漢を見せてもらったよ。肝心のお相手には通じてなかったようだかな。」

ルシア「う……。……！」

リシュウ「文字通り、骨折り損のくたびれもうけじゃな。」

ルシア「はあ……。……」

リシュウ「しかし、自らの身を挺して女子を救う。この爺も胸が熱くなりおったわい。」

ルシア「ま、まさか顧問も同じようなことを……。……！」

リシュウ「いやいや、ワシのはベタで言うのが恥ずかしいわい。」

ルシア「は、はあ……。……」

フィリオ「……。まあ、彼女がデータを調べれば、遅かれ早かれこういう結果になりましたよ。」

ジヨナサン「だが、収穫はあった。」

フィリオ「ええ……。昨日までの彼女達は自分を取り巻く世界に対して、あまりに無知でした。結果として、アイビスは戦いに怯え、スレイはただ命令のままに戦い、ツグミは自分と戦いに距離を置いていました。」

ジヨナサン「だから、君は彼女達にリアリティを与えようとした。」

フィリオ「……彼女達に理解してもらいたかったです。TDのゴールにたどり着くためには多くの試練が待ち受けていることを……そして、その一つとして戦いも避けて通れないことであることを。」

リシュウ「だが、ワシの目から見てもいささか荒治療じゃったのもし、アイビスが大怪我を負っていたら、どうするつもりじゃった？ 幸いルシア君がハッチをこじ開けて処置が迅速に行えたから大事には至らなんだが……」

フィリオ「……その時にはアイビスには銀河を飛ぶ夢を諦めてもらいます……」

ルシア「フィリオ……」

フィリオ「彼女の腕は未熟です。このままでは、彼女は自分の夢を果たす前に命を落とすことになるでしょう……。だから、彼女にはそれを乗り越えるだけの強い意志を思い出してもらいたかったです。」

ジヨナサン「君の覚悟はわかったよ、フィリオ……」

フィリオ「カザハラ博士……。僕は科学者として自分のやってきた

ことに疑問を持っています。．．．だからこそ、僕は彼女達に戦いを乗り越えて、夢にたどり着いてほしいんです．．．」

リシュウ「そのためには、もう少し嬢ちゃんたちを鍛えてやらにゃいかんじやろうな。」

フィリオ「ええ．．．生きてさえいれば．．．命と情熱さえあれば、夢を果たすことは出来るでしょうから。」

ジヨナサン「．．．．．」

フィリオ「カザハラ博士、リシュウ先生、ルシア．．．僕にもしものことがあつたら、その時は彼女達をお願いします。」

ルシア「．．．フィリオ、そんな頼みは受けられない。」

ジヨナサン「そうだ。君自身もまだ夢の途中なんだから。」

リシュウ「そうじゃ。ワシらは協力は惜しまんが、それはおぬしらをゴールに辿り着かせるためでもある。」

フィリオ「ありがとうございます．．．」

ジヨナサン「夢の途中にいるのは人類も同じだ。そのために我々は新たな戦いを乗り越えなければならぬ。」

フィリオ「はい。」

ジヨナサン「我々も急ごう。未来を担う者達のために．．．」

テスラ・ライヒ研究所 格納庫

ルシア「本当にいいんだな、フィリオ？」

フィリオ「うん。そのためにプロトのカラーリングを施したんだから。」

ルシア「だが・・・彼女で大丈夫なのか？」

フィリオ「大丈夫、彼女ならきつと・・・星の海を渡れる・・・」

第4話 完

第4話 護りたい夢 (後書き)

ルシア「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アイビス「ど、どうしたのそんな険しい顔して・・・」

ルシア「何で・・・・・・・・」

ツグミ「何？」

ルシア「何でももの2、3分しか出番がないんだよ!!」

スレイ「またそのことか・・・・・・・・」

ルシア「これから実戦訓練でアイビス成長とか色々期待していた俺の身にもなれっての!!」

アイビス「お、落ち着いてよ!!」

フィリオ「そうだよ、どれだけ叫んでも君はアニメに出られない。」

ツグミ「そういう問題じゃないでしょフィリオ!？」

ルシア「ちつきしよおおおお!!!!」

クスハ「ほらほら落ち着いてください。はい、カルシウムたっぷり
の栄養ドリンクを飲んで。」

ルシア「ああ・・・」

ツグミ「うわ・・・あれ飲んで本当に落ち着いた・・・」

アイビス「ロシア、料理得意なのに味音痴なんだね。」

ロシア「・・・・・・・・・・・・・・・・それを言っなよ。」

第5話 人形の贈り物

テスラ・ライヒ研究所 医務室

ルシア「アイビス、具合はどうだ？」

アイビス「大丈夫、心配ないよ。」

ルシア「そうか・・・よかったよ。」

アイビス「チーフから聞いたよ・・・腕が折れてるのにあたしをカリオンから助け出してくれたって・・・」

ルシア「あ、ああ・・・大した事じゃないさ・・・」

アイビス「助け出した姿が王子様みたいだってチーフが言ってたけど・・・」

ルシア「!!」

アイビス「どういう意味なのかな？」

ルシア「あ、あれはそのあのですね・・・」

アイビス「どうしたのそんなに慌てて？」

ルシア「別になにかやらかすわけでもないしそついうわけでもないからしてあ・・・・・・・・」

アイビス「ちょ、ちょっと落ち着いてよ！」

ルシア「え！あ、ああ……………」

アイビス「どうしたの、顔真つ赤だよ？」

ルシア「な、何でもないぞ！別にそういうわけでもないから……………」

アイビス「え？」

ルシア「あ！そろそろタイプのSの調整に立ち会わなきゃいけないから……………」

ルシアは慌てて医務室を出て行った。

アイビス「……………変なルシア。」

テスラ・ライヒ研究所 格納庫

ジヨナサン「ついに完成したぞ。」

ルシア「ゲシュペンスト・タイプSV……………カイ少佐達が提案したハロウィンプランの高性能カスタムの試作機ですね。」

ジヨナサン「そうだ。主に格闘性能を向上させ、量産型ゲシュペンストに反映させるために開発されたものだ。」

ルシア「プラズマステークを両腕に……………装甲はグルンガストのものを使用し現行と入れ替え……………」

ジヨナサン「テストラ・ドライブを標準搭載し飛行も可能になった。」

ルシア「まさにゲシユペンストのための機体ですね。」

ジヨナサン「まだ最終調整が済んでないが、すぐにでも使えるようになるぞ。」

ルシア「テストの結果次第では量産型のカスタムが見送られる……責任重大ですね。」

ジヨナサン「大丈夫さ、君なら予測以上の結果が出せる。」

そこにコールが鳴り出した。

ツグミ『カザハラ博士、ルシア中尉、すぐに管制室に来てください。』

ルシア「何かあったのか？」

ジヨナサン「行けばわかるさ。」

テストラ・ライヒ研究所 管制室

ルシア「識別不明の機体反応？」

ツグミ「ええ、すぐに撤退していったようんだけど……」

フィリオ「気になるな……シリーズ77を狙っているのかも……」

ルシア（まさか・・・プロトの完成が・・・？）

ジョナサン「放っておくわけにもいかんな。」

ルシア「俺が行きます。」

フィリオ「駄目だよ。まだ腕が完治していない、タイプSも出せないし・・・」

ルシア「・・・もう一つだけなら・・・ある。」

ジョナサン「まさか、エアロゲイターのナイトを・・・？」

ルシア「はい。あれは脳波を使って動かすことも可能です。片腕でも十分に偵察は可能だ。」

フィリオ「それでも許可出来ないよ。」

スレイ「なら私が同行しよう。」

ツグミ「スレイ・・・」

スレイ「アイビスは動けない、クスハは参式の調整で出られない・・・なら残りは私しかないだろ？」

フィリオ「・・・わかった。でも、くれぐれも無茶はしないでくれ。」

ルシア「わかった。行くぞスレイ。」

スレイ「了解した。」

テスラ研を出たルシアのエゼキエル・アーガンタム、スレイのカリオンは反応があつた森林地帯へ移動をしていた。

スレイ「遅いぞ、大丈夫なのか？」

ルシア「やっぱり片腕じゃこうもなるさ。」

スレイ「それにしても、よく異星人の機動兵器を動かせるものだな。」

ルシア「基本はPTと変わらないからな、問題はない。」

スレイ「だが資料で見たものとは随分違う、お前がカスタムしたのか？」

ルシア「いや、最初からこんな形だった。」

スレイ「となると、向こうの指揮官はもう一人いたことになる。ルシアはそいつと戦つたのか？」

ルシア「あ、え〜と・・・いたようになかつたような・・・」

スレイ（曖昧だな・・・何か裏がありそうだが・・・）

そこに、ビーム攻撃が放たれる。

ルシア「！？ 敵か！」

スレイ「反応があつた所属不明機か。」

そこに現れたのは、R - 1 に似た機体だつた。

ルシア「あれは・・・R - 1!？」

スレイ「少し形が違わないか？」

ルシア「そうだ、マオ社でR - 1の量産機を試作しているはず、たしか名前はエルシュナイデ・・・何でこんなところに？」

???「敵機確認・・・カリオン、残る一機は不明・・・」

スレイ「味方ではないことは確かだな。」

ルシア「一応勧告・・・と言いたいところだが、攻撃を仕掛けてきた・・・機体を行動不能にし、パイロットを押さえる！」

スレイ「了解！」

???「攻撃・・・開始。」

エルシュナイデはG・リボルヴァーでエゼキエル、カリオンに攻撃を仕掛ける。

スレイ「遅いな・・・訓練用ドローンの方がまだマシだな。」

カリオンは余裕で回避したが、エゼキエルは直撃した。

ルシア「くっ……!」

スレイ「本調子じゃないのなら下がっている。」

ルシア「なんの、これしきの事で護衛役は務まらない!」

???「パイロット声紋確認……ルシア・ゾルダーク発見。」

ルシア「ん?」

スレイ「動きが鈍くなったな。」

???「ルシア・ゾルダーク、抹殺。」

エルシュナイデがG・レールガンでエゼキエルに集中させた。

ルシア「ぐわっ!?!」

スレイ「ルシア、無事か!?!」

ルシア「き、機体は大丈夫だが……身体が持つかどうか……」

???「抹殺する。」

エルシュナイデはツイン・ビームカノンでエゼキエルに攻撃、かわしきれず直撃する。

ルシア「や、やばいな……!?!」

スレイ「下がっている！足手まといだ！」

カリオンはG・ドライバーでエルシュナイデを攻撃するが、回避される。

???「障害は排除する。」

エルシュナイデはコールドメタルナイフを抜き、カリオンに接近する。

スレイ「テスラ・ドライブか・・・だが、このカリオンなら！」

カリオンはブースト・ドライブで離脱するが

???「ブースト・ドライブ、作動。」

エルシュナイデもブースト・ドライブでカリオンを追跡する。

スレイ「な、何!?!」

ルシア「ブースト・ドライブだと!?!」

???「排除する。」

エルシュナイデはコールドメタルナイフでカリオンに斬りかかる。

スレイ「しまった・・・!」

ルシア「やらせるかあああ!?!」

エゼキエルは短距離転移でカリオンの前に出て援護防御をした。

拍子にルシアの左腕が再び折れる。

ルシア「グ……!!」

スレイ「お前……腕が!？」

ルシア「き、気にするな……!折れたものはまた治せばいい……!
!」

スレイ「しかしそれでは……!!」

ルシア「俺はな……みんなで銀河に行くって決めた……!アイ
ビス、ツグミ、そしてスレイ……お前ともだ!」

スレイ「な……!!」

ルシア「だから俺はみんなを護るんだ……それはお前でも例外で
はない!!」

???「コクピット……スキャン確認……パイロットを抹殺。」

エルシュナイデはコールドメタルナイフでコクピット目掛けて攻撃
を仕掛ける。

ルシア「くたばれR-1の偽物!ガイスト・ナツクル!!」

エゼキエルは右腕にエネルギーを集中させ、エルシュナイデを殴り

地面にたたき落とす。

???「損傷・・・駆動系大破・・・」

ルシア「そのまま機体をもらうぞ！」

エゼキエルはレーザーブレードを抜き、エルシュナイデの頭部を破壊した。

ルシア「これで終わりだ、投降しろ！」

???「コード・ATA・・・発動・・・」

エルシュナイデが行動を停止した。

ルシア「どうした、気絶でもしたのか？」

ルシアは機体から降り、エルシュナイデのコクピットを開くと

ルシア「!? パイロットがない・・・!?」

スレイ「脱出したんじゃないのか？」

ルシア「いや・・・そんな時間はなかったはず・・・無人仕様でもなければ・・・」

スレイ「とにかく、フィリオ少佐に調査を依頼した方がいいだろう。」

ルシア「ああ・・・ツッ！」

スレイ「！ ルシア！腕が・・・！」

ルシア「だ、大丈夫だ・・・」

スレイ「患部が腫れていて何が大丈夫だ！貸せ！！」

ルシア「あ、ああ・・・」

スレイ「まったく・・・アイビスといいお前といい・・・どうしてそこまで自分の危険を顧みずに行動ができる・・・！」

ルシア「・・・さつきも言っただろ。俺はプロジェクトDの護衛パイロットとして」

スレイ「理由になってない！あの機体はコクピットを狙っていた・・・お前はあの時あそこで死んでいたのかもしれないんだぞ！仮に私達を護れても銀河に行けなかつたら意味がないだろ！！」

ルシア「ス、スレイ・・・」

スレイ「応急処置は終わった。早くテスラ研に戻るぞ。」

ルシア「あ、ああ・・・」

スレイ「・・・助けてくれてありがとう・・・」

ルシア「え？」

スレイ「な、何でもない！早く行くぞ！」

ルシア「・・・・・・・・・・」

テスラ・ライヒ研究所 医務室

フィリオ「全く・・・こんな無茶ばかりして・・・」

ツグミ「護衛パイロットがこんな無茶ばかりしているのも考えものよ？」

ルシア「仕方ないだろ・・・あの時はああするしか・・・」

フィリオ「スレイもすごく心配してたんだから・・・後で謝つてきなよ。」

ルシア「ああ・・・ところで、あの機体は？」

フィリオ「君が鹵獲した機体だね？確かにマオ社で開発が進んでいるR-1の量産型だったよ。話では試作3号機が運用されてるだけで、量産型は骨組みがやっと完成したところなんだ。」

ルシア「けど、その量産型はこうしてテスラ研にある。地上に・・・ましてこんなところにある事自体がおかしい。」

ツグミ「それと、パイロットの事なんだけど・・・脱出した形跡はなし。完全に有人仕様になっていたわ。」

ルシア「確かに人が乗っていた感じがしたんだが・・・でも・・・」

フィリオ「でも・・・何だい？」

ルシア「行動がワンパターン過ぎるんだ。それに迷いが無さすぎる。どんなパイロットでも突然の事態にはある程度戸惑うはずだ。まるで人形のような・・・」

ツグミ「人形・・・サイボークか何かかしら？」

フィリオ「とにかく、追って調査をするよ。タカクラチーフはゴールドとシルバーの調整に立ち会ってくれ。」

ツグミ「わかりました。」

ツグミは医務室を出て格納庫へと向かった。

ルシア「ゴールドとシルバー・・・いよいよ最終調整の段階に入ったのか。」

フィリオ「・・・ルシア。」

ルシア「何だ？」

フィリオ「君はカーウアイ大佐に手をかけた事に気負いを感じているのかい？」

ルシア「何・・・!？」

フィリオ「タイプSへの執着心、自分の体を壊してまでのアイビスとスレイの守護・・・それも全部カーウアイ大佐を殺めてしまった自分への贖罪のつもりかい？」

ルシア「……………ああ、あの時俺は……自らの手で教導隊の幕を閉じたんだ。これは俺が背負った十字架なんだ……………」

フィリオ「君は間違っている。」

ルシア「！何が間違いだ！俺はこの手でカーウアイ大佐を殺したんだ！俺は大佐を背負って生きていくしかないんだ！俺の背負った十字架に何が間違っているっていうんだ！！」

フィリオ「その背負い方が間違っているんだ！！何で君は何もかも自分で背負いこもうとするんだ……………何でその重荷を僕達にも分けたくないんだ！」

ルシア「フィリオ……………」

フィリオ「もう君の体は君だけのものじゃないんだ。君は大事なプロジェクトTDのメンバーだ、つらい事も悲しい事もみんなで分かち合う。それがチームなんだ。」

ルシア「……………」

フィリオ「君は彼女達と違って戦う事には慣れている。けど君にも無知の部分が存在していた。それは、何もかも自分で背負いすぎている事だったんだ。」

ルシア「そうか……………俺は自己犠牲をしすぎていたのか……………これじゃ、カーウアイ大佐に怒られていたかもな。」

フィリオ「そうだよ、エルもきつとこんな事をさせるために十字架

を背負えなんて言っていないよ。僕もその十字架を背負うよ、いつまで持てるかわからないけど……」

ルシア「ああ、よろしく頼む。フィリオ。」

テスラ・ライヒ研究所 格納庫

ルシア「……………」

ツグミ「どうかしら？これがゴールトとシルバーよ。ルシアは現物を見るのが初めてね。」

ルシア「……………これ、ホントにシャイン王女が？」

ツグミ「ええ、それがどうかしたの？」

ルシア「これ、お前の趣味も入っていないか？」

ツグミ「依頼では式典用にかわいく仕上げてくれってあったのよ。お姫様って感じがしない？」

ルシア「お姫様にハイパージャマーもEフィールドもついてないぞ！？一体これで何する気なんだよあのお転婆姫は！？」

ツグミ「リクセント公国の防衛を兼ねてるようなのよ。あの国にもリオンが配備されているけど、それだけでは護りきれないということとで依頼してきたのもあるのよ。」

ルシア「そうか……この機体はリクセントのフラグシップなんだ

な。」

ツグミ「そういえばルシアはシャイン王女と知り合いなのよね？」

ルシア「ああ、彼女のおかげで総帥がヴァルシオンVを用意してくれていた事が分ったんだ。結局会わず終いで礼も言えなかったけどな。」

ツグミ「納品する時にお礼を言えば問題ないわよ。」

ルシア「ああ・・・そうだな。」

アイビス「二人共早く来て！」

ツグミ「どうしたのアイビス？」

ルシア「何かあったのか？」

アイビス「再起したDCが演説を放送してるんだ！」

ルシア「何!？」

テスラ・ライヒ研究所 管制室

バン『……………然るに、東京宣言を経て、連邦政府の執ってきた施策はどうか？一部特権に偏った巨大な官僚機構は、無為無策のまま旧世紀からの諸問題を解決せず・・・会議と選挙工作に明け暮れ、問題を先送りするための立法に日々を重ねてきたに過ぎない。』

ルシア「バ、バン大佐・・・!?」

バン『だが、地球圏全体を覆っている事態は、すでにそのような思考の時間が終わったことを告げている。』

ジヨナサン「これは・・・あの時と同じだ・・・!」

ルシア「DCの・・・再来・・・!」

バン『地球と宇宙に生きる全ての人類諸君、私はここに宣言しよう！我々こそが地球圏を守り得る力であることを！私は宣言しよう！かつてビアン・ゾルダークが示唆した異星人の脅威を払拭できるのは・・・我ら新たなデイベイン・クルセイダーズ、「ノイエDC」をおいて他にいないと!』

リシュウ「・・・」

バン『先の東京宣言でもわかるように、連邦政府は今まで多くの真実を隠蔽していた。そんな者達の舵取りを任せることは、自殺行為に等しい。諸君らは偽政者の捨て駒という、意味のない死を望んでいるのか？そして、種族として根絶やしにされる惨めな結末を享受するつもりなのか？』

ルシア「・・・」

バン『否！諸君らには生を望む意思があるはずだ。己の未来を欲しているはずだ。生ある者として今選ぶ手段は一つ・・・それは人類の力と叡智を一つに集め、来るべき脅威に立ち向かうことである。そして、そのためには腐敗していくだけの官僚機構を排除し・・・強大な力の下に、多くの意思が統一されねばならない。』

フィリオ（同じだ・・・ビアン博士の時と・・・）

バン『今、この世界に必要な物はイージスの盾ではなく、ハルパーの鎌である！我らの意思に賛同する者はノイエDCに來たれ！己の力を欲望ではなく、人類と地球の未来のために使う者であれば、何人であろうと拒みはしない！心ある者達よ、新たな聖十字軍の旗の下に集え！そして、我らの手で自らの自由と未来を勝ち取るのだ！』

ルシア「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アイビス「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ツグミ「これじゃ・・・・・・・・DC戦争と何も変わらないじゃない・・・・・・・・！」

ルシア「バン大佐・・・・・・・・今になって何でDCを・・・・・・・・」

リシュウ「今だから・・・・・・・・ではないかの？」

ルシア「え・・・・・・・・」

リシュウ「しかし、その向けた刃を振り下ろす相手を見定める時が来るだろう・・・・・・・・」

ルシア「・・・・・・・・バン大佐なら、きっと間違った方へは歩まないはず・・・・・・・・アドラーのようには・・・・・・・・」

アースクレイドル

レモン「アクセル、テストタイプの反応が消えたわ。」

アクセル「こちら側のテスラ・ライヒ研究所の偵察に向かった量産試作型のWシリーズか。」

レモン「ええ、あなたが言っていたこちら側のルシア・ゾルダークの調査をしにね。」

アクセル「あちら側ではバンの代わりに務めていたからな。何故あんなところにいたのか……」

レモン「でも、バン大佐ほど穏やかな事はしてなかったけどね。あの意味ベーオウルフと同じ位恐ろしいことを……」

アクセル「所詮あちら側での話だ。こちら側では違う。」

レモン「そうね……。そういえば、バン大佐からお願いを聞かれたんだけど……」

アクセル「どうした？」

レモン「そのルシアをノイエDCに引き込んでくれて。」

アクセル「素直に聞くとは思えんがな……」

レモン「強制的にでも構わないそうよ。そこまでしてその子引き込みたいのかしら？」

アクセル「ピアン・ゾルダークの正当な後継者だからな。プロパガンタには打ってつけの素材だ、DCの兵士達の士気も上がる。」

レモン「じゃあ・・・W16に向かわせるわ。」

アクセル（ルシア・ゾルダーク・・・選択の時は来た・・・後は、お前次第だ・・・これがな。）

第5話 完

第5話 人形の贈り物 (後書き)

ルシア「あゝ．．．そろそろアニメに出してくれよ．．．」

アイビス「まだ言ってる．．．．．」

ツグミ「いい加減しつこいわよ？いくらネタがないからって．．．」

アイビス「チーフそれメタ発言！？」

スレイ「全く．．．あの時見せた行動は一体何だったんだ．．．？」

フィリオ「さ、こんなルシアは放っておいて皆でお茶しよう。」

ツグミ「そうね。」

アイビス「あ、ちょ、ちょっと！」

スレイ「ウジウジしてないでいい加減に割り切れよ？」

アイビス「あ、行っちゃった．．．．．」

ルシア「アイビス。」

アイビス「な、何？」

ルシア「絶対．．．アニメでのお前の活躍を見るからな。」

アイビス「あ．．．その．．．素直にありがとう。」

ルシア「さ、俺達も行こうぜ。」

アイビス「・・・うん。」

エゼキエル・アーガンタム（ルシア専用機）

ネビーイーム内に保管されていたエアロゲイターの指揮官専用機。

ギリアムが情報部を通じて機体入手し、研究のためにテスラ研へと送った。

現行のエゼキエルをかなり改造されたもので、エアロゲイターの量産人型機動兵器の武装を装備、全体的な性能を上げている。恐らく、ルシアがエアロゲイター側に寝返った時に運用されるために保管されていたものだとは推測される。

インスペクター事件後、エゼキエルはプロジェクトDの護衛機開発のために解体される。

武装

オプティカル・ライフル

レーザーブレード

メタリウム・キャノン

ガイスト・ナツクル

オルガ・キャノン

第6話 十字軍からの使者

テスラ・ライヒ研究所 個室

ルシア「バン大佐・・・DCを再起させて、もしこの隙を異星人に突かれたらどうするつもりなんだ・・・」

フィリオ「ルシア、起きてる？」

ルシア「ああ。」

フィリオ「タイプSVの最終調整が始まる。格納庫に来てくれ。」

ルシア「わかった。」

テスラ・ライヒ研究所 格納庫

アイビス「これがタイプSなの・・・！」

ルシア「ああ。ゲシュペンスト改造計画の一環で開発されたタイプSVさ。格闘戦に特化されて、装甲と最高速度を上げて敵に突撃するっていう寸法さ。」

スレイ「ただ突っ込めばいいというものでもないだろう。」

ルシア「L5戦役では突撃に特化された機体とパイロットがいる。突撃も立派な戦法さ。」

ツグミ「それで、今回はこれのテストを？」

ルシア「ああ、これは後の量産型にも活かされる。結果を残さない
と・・・」

その時、警報が鳴り出した。

アイビス「！」

テスラ・ライヒ研究所 管制室

ルシア「ノイエDCの部隊がテスラ研に・・・！？」

ジヨナサン「ああ、だがテスラ研を占拠するわけでもなく何かを待
っているかのようなんだ。」

フィリオ（まさかノイエDCの狙いは・・・）

ルシア「俺が様子を見に行きます。」

ツグミ「危険よ、一人だけじゃ！」

クスハ「私も行きます、数は一人でも多い方がいいでしょ？」

ルシア「いいのか、クスハ？」

クスハ「はい、また一人で無茶して怪我してもらっても困りますか
ら。」

ルシア「あ……そ、そうだな……」

フィリオ「そうだよ。ここはみんなで助け合わないと。」

ルシア「分かったよ。行くぞ、クスハ。」

クスハ「はい！」

ゲシュペンスト・タイプSV、グルンガスト式は敵部隊が駐留している地域へ向かう。

エキドナ「来たか……」

ルシア「……リオン系が数機、エルシュナイデもどきに砲戦仕様の機動兵器……」

カーラ「何あれ！？ゲシュペンスト？」

ユウキ「大分形が変わっている……改造されているようだな。」

クスハ「一体この人達は……」

ルシア「その機動兵器部隊に告げる！直ちに現域から離脱しろ！」

エキドナ「声紋確認……」

ルシア「テスラ・ライヒ研究所の占拠が目的なら、こちらにも相應の対応をさせてもらおうぞ！」

エキドナ「ルシア・ゾルダーク、ノイエDC総帥の命より貴官の身柄を拘束する。」

ルシア「何!？」

クスハ「ルシアさんを・・・!」

エキドナ「万が一、この要求が受け入れられない場合は・・・機体を行動不能にさせる。」

ルシア「どういう意味だ!」

エキドナ「お前をノイエDCにスカウトするよう命令を受けている。投降するのであれば危害は加えん。」

クスハ「そんな!今さらルシアさんをDCに戻して何をしようって言うんですか!」

エキドナ「そこに関しては私の思考する範囲ではない。」

ルシア「・・・お前達はどうか考えてるんだ・・・この状況で連邦に反旗を翻して・・・」

ユウキ「・・・」

カーラ「・・・」

ルシア「今の地球圏の状況が分からないはずがないだろ!エアロゲイターとの戦いが終わって半年・・・まだ地球は立ち直れずにいる!こんなところを異星人に襲撃されてみる、DC戦争以上の混乱が

起こるぞー!!」

クスハ「……………」

ルシア「お前達はそれでいいのか!? 本当の敵は何なのか・・・本当は分かっているはずだ!!」

エキドナ「…………その答え・・・要求を拒否したと取っついていいんだな?」

ルシア「今の俺は連邦もDCも関係ない・・・俺は、プロジェクトTDによって銀河の果てへ行く! それだけだ!!」

エキドナ「各機、攻撃を開始。多少の負傷は止む負えん、捕獲しろ。」

ユウキ「カルチエラタン1、了解。行くぞ、カーラ。」

カーラ「わ、わかったよ…………」

ルシア「クスハはテスラ研へ連絡を! 俺は敵指揮官機を叩く!」

クスハ「はい!」

ルシアのゲシュペンスト・タイプSVはユウキ、カーラのランドグリーズとの戦闘に入る。

ユウキ「連邦の腐敗・・・DC結成前から目の当たりにしてきた貴様は何故ノイエDCを・・・バン大佐を拒む!」

ルシア「言ったはずだ！連邦もDCも関係ないとな！」

カーラ「DCの前総帥、ビアン・ゾルダークの息子だって聞いてみれば・・・結構イケてる顔してるじゃない？」

ルシア「は！？」

ユウキ「カーラ、こんな時に何を言っている！」

カーラ「いやさ、ビアン総帥って顔濃かったじゃん？」

ユウキ「歳が低いから濃くないのは当たり前だろ。それより戦闘に集中しろ！」

ルシア（・・・歳を食っても、似てないだろうけどな・・・）

ユウキ「カーラ、フォーメーションで仕留めるぞ。くれぐれもコクピットには当てるな？」

カーラ「そんなへマ、するとでも？」

ユウキ「・・・いや、行くぞ！」

カーラ「まずは牽制ね。マトリクスミサイル発射！」

ランドグリーズのマトリクスミサイルでタイプSVを攻撃するが、ハンドレールガンでミサイルを全て撃ち落とした。

ルシア「ミサイルの狙い方が甘いな！」

ユウキ「だが、隙が出来た・・・さあ、俺の前から消え失せる！」

ユウキのランドグリーズはリニアカノンを放ち、タイプSVに直撃させる。

ルシア「うわぁっ!?!直撃!?!」

ユウキ「何!?!直撃したはずだぞ!」

カーラ「あのゲシュペンスト・・・なんて装甲をしてるのよ・・・!?!」

エキドナ（ランドグリーズのリニアカノンに直撃しても軽傷で済んでいるとは・・・レモン様に報告しておくべきか・・・）

ルシア「機体は大丈夫だが・・・受け続けてはこちらが持たないか・・・」

エキドナ「関節部を攻撃し、行動不能にさせる。」

クスハ「ルシアさん!」

ルシア「わかっている!」

タイプSVはハンドレールガンでエルアインスを攻撃するが、全て回避する。

エキドナ「データ予測範囲外・・・攻撃開始。」

エルアインスはGリボルヴァーでタイプSVを攻撃、数発食らうが

怯まずに接近する。

ルシア「このタイプS Vなら問題はない！一撃で仕留める！」

タイプS Vのメガ・プラズマカッターでエルアインズに斬りかかるが、ロシュセイバーで受け止めた。

ルシア「このパイロット・・・動きに無駄がない・・・！」

エキドナ「これもデータ範囲外・・・あちら側とは別人のようだな。」

クスハ「ル、ルシアさん・・・！」

ルシア「どうしたクスハ！？」

クスハ「何かが・・・来ます！」

ルシア「何かって何が・・・！？」

エキドナ「！？ 空間転移反応・・・」

そこに、骨型、植物型の怪物が姿を現す。

ルシア「な、何だあれは・・・！？」

カーラ「ユウ！あれって・・・」

ユウキ「あの遺跡で見た機動兵器か・・・」

ルシア「機動兵器という感じではない・・・宇宙怪獣か？」

クスハ「このままじゃ三つ巴に・・・！」

エキドナ「・・・各機、撤退しろ。」

カーラ「で、でも！」

エキドナ「アンノウンの相手は奴らがする。ここで無駄な戦力消費はしたくない。」

ユウキ「・・・了解。」

ノイエDC部隊が空域から撤退した。

ルシア「あいつら撤退する気か！」

クスハ「ルシアさん、今はあの怪獣を何とかしないと・・・。」

ルシア「仕方ないか・・・クスハ、お前はあの骨型を狙え。俺は植
物型を狙う。」

クスハ「はい！」

????「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ルシア「怪獣退治は3分で終わらせるのがセオリーだ。時間はかけ
ない！」

クスハ「これ・・・もしかしてブリット君が言ってた蚩尤塚に現れ

たっという・・・」

ルシア「雑草は刈り取る！メガ・プラズマカッター！」

タイプSVのメガ・プラズマカッターで触手を斬り、頭部のコアを刺し貫き撃破した。

ルシア「やはりあの赤い球体がコアか。クスハ、あの赤い球体を狙え！」

クスハ「はい！アイソリッドレーザー！」

式式のアイソリッドレーザーで骨型の怪獣のコアを破壊した。

ルシア「随分あっさり倒せたな・・・何であいつら撤退したんだ？」

その時、二人の頭に念が走った。

ルシア「！」

クスハ「！ な、何・・・！」

ルシア「何だこの感じは・・・！」

空間が歪み、赤い鬼のような機動兵器が転移で現れる。

クスハ「！」

ルシア「何だあれは・・・！？」

アルフィミィ「静寂を乱す存在……見つけましたの。」

クスハ「しゃ、喋った!？」

ルシア「さっきの怪物と違って人が乗っているらしいな。」

アルフィミィ「私はアルフィミィ……以後、お見知りおきを……
ですの。」

ルシア（何となく雰囲気がエクセレンに似てるなこの子……）

アルフィミィ「この世界を滅ぼす存在……」

ルシア「それって俺のことか？」

アルフィミィ「はい……まだその時が来ないのですが……今のうちに消えてもらいますの。」

ルシア「やっぱりこうなるか……（だが、俺が静寂を乱す……
世界を滅ぼす存在って一体……？）」

アルフィミィ「では……行きますの。」

アルフィミィのペルゼイン・リヒカイトがマブイタチを放ち、タイ
プSVと弐式に攻撃をする。

クスハ「きゃあっ!？」

ルシア「サイズの割になんて破壊力なんだ……!」

アルフィミィ「大きければいいものではないのですのよ?」

ルシア「……やっぱりノリがエクセレンに似てるな。」

クスハ「どうします?」

ルシア「とにかく、倒すしかない。クスハ、何でもいいから先に仕掛けてくれ。」

クスハ「わかりました。」

アルフィミィ「これで……消えてもらいますの。」

ペルゼイン・リヒカイトの機体全体からエネルギーが発せられライゴウエが放たれる。

クスハ「お願い、念動フィールド!」

ルシア「この程度避けてみせるタイプSV!」

式式は念動フィールドを最大に張り、タイプSVは回避でライゴウエをやり過ぎず。

クスハ「ブーストナツクル!」

式式はブーストナツクルを放つが、ペルゼイン・リヒカイトは攻撃をかわす。

アルフィミィ「残念でしたの……」

ルシア「余所見は禁物だ！」

タイプSVはブースト・ドライブでペルゼイン・リヒカイトに突っ込む。

ルシア「カイ少佐直伝の・・・究極！ゲシュペンストキック！」

タイプSVのゲシュペンストキックがクリティカルヒットする。

アルフィミイ「やはり・・・覚醒しつつありますの・・・！」

ルシア「クスハ！！」

クスハ「まだ終わりじゃありません！必殺！計都瞬獄剣！」

式式の計都瞬獄剣でペルゼインの鬼面片方を破壊する。

アルフィミイ「インチキ・・・？」

ルシア「まだまだあ！」

タイプSVが拳の連撃でペルゼインを追い詰め

ルシア「必殺！ゲシュペンストナツコオ！！」

ゲシュペンストナツクルでペルゼインを押し殴り大破させた。

アルフィミイ「・・・さすがに・・・厳しいですの。」

ルシア「転移反応・・・！」

アルフィミイ「今回は様子見程度でしたので……ここで退かせてもらいますの。」

ペルゼイン。リヒカイトは空間転移を行い、その場から撤退する。

ルシア「撤退したか……一体あいつは……」

クスハ「ルシアさん、カザハラ博士が至急帰還するようにと連絡がありました。」

ルシア「わかった。すぐに帰還しよう。（しかし……一体あの子は俺の何を知っているんだ……？）」

テスラ・ライヒ研究所 管制室

クスハ「ラングレー基地と連絡が取れないって、本当なんですか！？」

ジヨナサン「ああ……詳しい戦況はわからんが、東海岸方面は色々々と大変なことになっているようだ。」

クスハ「で、敵はそれほどまでに強大なんですか？」

フィリオ「彼らは地球側の機動兵器を使っているそうだが……問題はその投入方法……空間転移を用い、戦力を送り込んでくるんだよ。」

クスハ「……！」

ルシア（やはり恐れていたことが起こったか・・・！）

ジヨナサン「エアロゲイターが使っていた装置の解析が進んでいれば、何らかの手が打てたかも知れんが・・・時すでに遅し、だな。」

クスハ「それじゃ、ゴールドとシルバーを輸送機に積み込んでいるのは・・・？」

ジヨナサン「ギリウム少佐から警告があつてな。このテスラ研から避難させるためだ。」

クスハ「警告・・・？」

ジヨナサン「そうだ。異星人は新型機や試作機を狙って月のマオ社を襲撃・・・その後、占拠した。」

クスハ「え、ええっ!？」

ルシア「マオ社が・・・!？」

ジヨナサン「・・・どうやら、連中はこちら側の技術に必要な以上の興味を持っているらしい。」

フィリオ「・・・」

ルシア（バルマーとは違って、向こうはこちら側の技術を奪う気なのか・・・）

クスハ「リ、リオやリョウト君、ラーダさん達は・・・？」

ジヨナサン「彼らは最後まで社に残っていたが、脱出し・・・その後、ヒリユウ改に回収されたそうだ。」

クスハ「そ、そうですね・・・良かった。」

ジヨナサン「だが、問題はこれからだ。彼らがここにも現れる可能性は高い・・・」

管制室の扉が開き、ツグミが入室してきた。

ツグミ「失礼します。カザハラ所長、各機の搬出作業に関してご報告致します。」

ジヨナサン「うむ。」

ツグミ「ゴールド、シルバー、プロト、壱式2号機、タイプSV、鹵獲したエルシュナイデを輸送機へ積み込みました。後は参式の1号機から3号機とナイトですが・・・作業に少々手間取っています。」

ジヨナサン「やむお得ん。テストモードで参式を起動させ、輸送機の中へ移動させよう。」

ツグミ「分かりました。クスハ、お願いできる?」

クスハ「はい。起動準備をしてきます。」

ツグミ「彼女が手伝ってくれるのでしたら、1時間で全作業が終了すると思います。」

ジヨナサン「うむ。グルンガストの扱いに関しては、この研究所じゃあの子が一番だからな。」

ツグミ「はい。」

ジヨナサン「だが・・・参式1号機の武装追加とプロトの起動テストは間に合わなかったな。」

ツグミ「ええ・・・他の機体と一緒に伊豆基地で一時保管してもらうしかありません。」

ジヨナサン「ああ。1号機のエンジン交換の件も含め、向こうにいるロバートに預けよう。」

ツグミ「もちろん、それは無事に脱出できれば・・・の話ですが」

フィリオ「・・・・・・・・・・」

ジヨナサン「ともかく、プロジェクトTDが休止されるのは残念だよ。」

フィリオ「ですが、僕にそれを悲しむ資格はありません・・・・・・・・・・」

ルシア「フィリオ、お前まだ・・・」

フィリオ「・・・僕は・・・自らの意志で一度はテストラ研を去り、DCに参加した人間ですから・・・」

ジヨナサン「……………」

フィリオ「戦いが科学を發展させることはあっても、科学が戦いを導くことは許されない……そう常々おっしゃっていたカザハラ博士を裏切るような形で、僕はDCへ行き……リオンシリーズを設計し、DC戦争に荷担しました……」

ツグミ「フィリオ……………」

フィリオ「僕は……………」

ジヨナサン「フィリオ、私はこうも言っただか？科学者に失敗は付き物だ……………」

フィリオ「博士……………」

ジヨナサン「君のやったことの善悪の評価など、他人に任せておけ。そして、君自身が負い目を持っているなら、それは今後の研究で取り返せばいい。」

フィリオ「……………」

ジヨナサン「それでもまだ抵抗があるかね？」

フィリオ「いえ……戦いの向こうには星の海が待っています。そこへ飛び立つために人類は試練を乗り越えなければなりません。テレストリアル・ドリーム……プロジェクトDのゴールがその向こうにあるのなら……僕も戦うつもりです。」

ジヨナサン「フツ……やはり、外の世界に出たことは君にとって

プラスだったようだな。」

フィリオ「はい……。いろいろなものに触れることが出来ましたし……。彼女にも……。ツグミにも出会えましたしね。」

ツグミ「フィリオ……」

ジヨナサン「おいおい、本命はそちらの方か？」

フィリオ「いえ、彼女とプロジェクトTD……。そのどちらも僕にとっては大切な存在です。」

ジヨナサン「やれやら、真面目に返されるとこっちが照れるよ。」

ルシア「全くだ（けど、俺に人のことが言えた義理なのだろうか……。俺は半ば……）」

フィリオ「？ すみません……」

ジヨナサン「とにかく、受取人が来るとはいえ、状況が状況だ……」

ツグミ（受取人……？）

ジヨナサン「すまんが、君達も搬出作業を手伝ってくれたまえ。」

フィリオ「分かりました。」

ルシア「先に行くぞ、ナイトは俺のバイオメトリクスで動くからな。」

フィリオ「わかった。」

ルシア（ついに来たか・・・父さん、あなたの警告した異星人・・・ゲストが来ました。俺の本当の戦いが・・・始まるうとしています。何としても勝ち残ります。この地球を・・・地球に住む人達の夢を護る為に・・・）

??? ???

アルフィミィ「調査は終わりましたの・・・」

???「・・・・・・・・・・」

アルフィミィ「はい、まだその時が来るのは遠い先ですの。」

???「・・・・・・・・・・」

アルフィミィ「わかりましたの。引き続き、エクセレンとキョウスケの方を・・・」

第6話 完

第6話 十字軍からの使者 (後書き)

ルシア「ああ・・・俺もついに叫んじやったよ・・・ゲシユペンストキツク。」

アイビス「前にも叫んでなかった？」

ツグミ「あれは単なる悪ふざけよ。」

ルシア「そこまで言いますか・・・」

スレイ「それにしても、随分原作改変した機体が出てくるものなのだな。」

ルシア「ああ、原作じゃ何かと省かれた機体も大勢あるし。これを機会に全面的に出して多くの人に知ってもらえればいいかな？」

フィリオ「そうだね。」

ルシア「ところでフィリオ・・・俺のタイプSVやナイトに妙なモーションが入ってたんだけど・・・」

フィリオ「ああ、ばれちゃった？」

ルシア「ばれちゃったじゃねーよ何だよあれ！？何でゴールトとシルバーのモーションデータを入れたんだよ！」

フィリオ「テストのためだよ。」

ルシア「テストは俺がシルバーでやっただろ！」

アイビス「え・・・ルシア、シルバーに乗ったの？」

ルシア「ま、まあな・・・」

ツグミ「似合わないわね・・・」

ルシア「似合ってたまるか！！」

ゲシュペンスト・タイプSV

ゲシュペンスト・タイプSをハロウィンプランによって改造された改修機。

タイプRVとは違い、遠距離戦ではなく、接近戦に特化された。テスラ・ドライブとブースト・ドライブが搭載されたフライトユニットも追加され、フライトユニットは格闘戦での立ち回りやすさを考慮し、RVのものより小型化されている。ブースト・ドライブの加速で格闘戦の威力が増している。教導隊隊長のカイが使用しているモーシオンパターンの他に、ルシアオリジナルのモーシオンパターンも組み込まれている。

両腕、両脚には小型フィールドジェネレーターが搭載され、格闘戦の威力が増し、防御機構としても役立つ。スナイパー・ブーステッドライフルも装備され、超長距離戦、格闘戦をこなす万能の仕上げがりになった。

しかし、運用性は度外視されているので並大抵のパイロットでは扱うことが不可能である。

(ハロウィンプラン自体が専用機開発計画なので問題はない。)

正に、スーパーロボットなゲシユペンストに仕上がった。
武装

ビームスプレーガン

ハンドレールガン

メガ・プラズマカッター

ブレイク・ナツクル

ハイメガ・ブラスターキャノン

スナイパー・ブーステッドライフル

究極！ゲシユペンストキック

必殺！ゲシユペンストナツクル

第7話 テスラ研、脱出

テスラ・ライヒ研究所 格納庫

スタッフ「参式、ナイトの積み込み、終了。ご苦労様です、クス八さんにルシアさん。」

クス八「いえ。それじゃ、シーリング作業の方をお願いします。」

スタッフ「わかりました。クス八さんとルシアさんは引き続き式と0号機の起動準備に入ってください。」

クス八「え、でもあれは……」

リシュウ「……お前さん達には輸送機と一緒に日本へ行ってもらう。」

クス八「リシュウ先生……！どういうことなんですか！？」

リシュウ「道中は何かと危険じゃ。お前さん達に輸送機の護衛を頼みたい。」

クス八「危険なのはここも同じです！私も研究所に残ります！」

リシュウ「輸送機の中身はこれからの戦いに必要な物ばかりじゃ。異星人に渡すわけにはいかん。」

クス八「で、でも……！」

ルシア「クスハ、今奴らにこれを奪われたら・・・最悪の事態になりかねないぞ。」

クスハ「そ、そうですね・・・」

リシュウ「それと・・・ブリットにこれを渡してやってくれんか」

リシュウがコンテナハッチを開けると、PT用サイズの刀が格納されていた。

クスハ「こ、この刀は・・・!」

ルシア「シシオウブレード・・・!」

リシュウ「そうじゃ、ワシが特別に鍛えさせたパーソナルトルーパー用の実体刀じゃ。こいつをブリットに渡し、剣の道に励めと伝えてくれ。」

クスハ「リシュウ先生・・・」

リシュウ「なに、心配いらん。所長達にはワシがついておる。じゃから、後のことはお前達やワシの弟子達に任せるぞ。L5戦役と同じく、この星を異星人から護ってくれ。」

クスハ「・・・」

ルシア「・・・」

リシュウ「それがお前達の使命じゃ。よいな?」

ルシア「・・・了解。」

スレイ「・・・何度言えば分かる！RAM系のマニュアルはお前では無理だ」

アイビス「そんなこと・・・やってみなければわからないよ・・・！」

リシュウ「む、何の騒ぎじゃ？」

クスハ「あれはスレイさんとアイビスさん・・・」

ルシア「あいつらまたかよ・・・！」

スレイ「急加速突撃・・・、ラピッド・アクセラレーション・モビリティ・ブレイク・・・ブースト・ドライブを使いこなせないお前では、相手の標的になりに行くだけだ。」

アイビス「あと少し・・・あと少しであたしだって出来るよ。だから、こうして頭を下げて練習に付き合ってくれと頼んでるじゃないか・・・！」

スレイ「練習ならルシアに付き合ってもらえばいいだろう。それに、そんな義理は私にはない。」

アイビス「スレイ・・・！」

スレイ「言っておくぞ、アイビス。プロジェクトTDの正パイロットは私だ。お前はその補欠に過ぎない。私の邪魔になるような真似はするな。」

アイビス「……………」

ルシア「おいお前らしい加減にしろ！今がどんな状況かわかっているのか！」

スレイ「護衛役は口を挟まないでもらおうか？お前は私の護衛をやっついていれば十分だ！」

ルシア「何だその言い方は！！」

リシュウ「やれやれ……相変わらずじゃのう、あの三人。」

クスハ「と、止めなきゃ……………」

リシュウ「放っておけ。若い内にはよくあることじゃ。」

クスハ「で、でも……………」

スレイ「……所詮、『流星』では星の海を往くことは出来ん。」

アイビス「スレイ……………あんた！！」

ツグミ「そこまです、アイビス。メンバー間での過度のトラブルは見逃しません。」

アイビス「タカクラチーフ……………」

クスハ「アイビスさん、落ち着いて下さい。今は仲間同士で言い争ってる場合じゃ……………」

リシユウ「それを最初に言つたのはルシアじゃったんだが・・・そのお前さんが頭に血を上らせてどうするんじゃ。お前さんがそうではまとめられんぞ。」

ルシア「す、すみません・・・」

アイビス「わ、わかつたよ・・・」

スレイ「フ・・・当然の裁きだな。」

フィリオ「だけど、スレイ・・・その前の挑発的な言い方は良くないね。」

スレイ「・・・これはパイロット同士の問題だ。少佐は口を出さないでもらいたい。」

フィリオ「いや・・・今のは言葉遣いの問題だ。兄として見逃すわけにはいかないよ。」

スレイ「ぐ・・・」

フィリオ「さあ、スレイ。アイビスとルシアに謝るんだ。君達は仲間なんだからね。」

スレイ「・・・」

フィリオ「どうしたんだい、スレイ？最近、イライラしているみたいだよ。困ったことがあるなら僕に話してごらんよ。」

スレイ「……私はTDのパイロットであなたはその責任者だ！
今は兄妹ではない！！言葉遣いやプライベートにまで口を出される
筋はない！」

アイビス「スレイ……！」

スレイ「忘れるな、『流星』！ナンバー01は、この私……スレ
イ・プレステイだ！」

クスハ「スレイさん……」

リシュウ「……ふむ。フィリオが間に入ったのは逆効果じゃっ
たのう。」

フィリオ「……あれでも昔は「お兄ちゃん、お兄ちゃん」って僕
の後を離れなかつたんですが……」

ルシア「それ、いつの話だよ？」

リシュウ「彼女とて、いつまでも子供ではない。お前さんの優しさ
は分かるが、過保護はいかんぞ。」

フィリオ「……」

アイビス「……」

ツグミ「アイビス……すぐに感情に走るようでは、アストロノ
ーツは務まりませんよ。」

アイビス「……わかってる……」

ツグミ「ルシアも、今までそれで何回怪我したか忘れたわけではないでしょ？」

ルシア「わかってるよ、反省してるぞ。」

フィリオ「ところで、アイビス……スレイの言っていた『流星』って何のことだい？」

アイビス「……………」

ツグミ「パイロット達の間でのあだ名です。」

フィリオ「そうか……随分とロマンチックな名前をもらったね。それにルシアとお揃いじゃないか。」

ルシア「いや、そういう意味じゃないんだよな……」

ツグミ「ええ、『流星』というのは被弾率の高いアイビスが撃墜される様を皮肉ったものです。」

アイビス「……………」

クスハ「あ、あの……アイビスさん。気にしない方がいいと思いますよ。」

リシュウ「そうじゃ。いい意味での流星も目の前におるし、そのまんまズバリの名前の奴もおるからのう。」

クスハ（リュウセイ君が聞いたら怒り出しそうだけど……）

ルシア（まあある意味被弾率は高いだろうけど・・・）

アイビス「……………」

クスハ「アイビスさんは高速機動や長距離航行でいい結果を出しているじゃないですか。だから、自信持つてください。」

アイビス「ありがとう、クスハ……。でも、それだけじゃ駄目なんだ……。星の海を往くためには……」

フィリオ「……………」

ルシア（そう……。宇宙に行くには並大抵のことじゃ実現しない……地球圏を飛ぶのとは全く……）

その時、警報が格納庫に鳴り響く。

ツグミ「!?!」

リシュウ「まさか、奴らか!?!」

テスラ・ライヒ研究所 周辺地域

リシュウ「ジョナサン、何事じゃ!?!」

ジョナサン「先生！インスペクターが現れました!」

リシュウ「ぬうっ……。やはり、そうか!」

ジヨナサン「ツグミ君、輸送機の発進を急がせてくれたまえ！それから、スレイ君とクス八君に敵機の迎撃を！」

ツグミ「は、はい！」

スレイ「01、STOL発進！」

クス八「グルンガスト式、行きます！」

スレイのカリオン、グルンガスト式は格納庫から出撃した。

アイビス「タカクラチーフ！どうしてあたしは待機なの！？」

ツグミ「フィリオ少佐の指示です。」

アイビス「でも、相手は異星人なんでしょ！？少しでも戦力があつた方が・・・！」

ツグミ「わからないのですか？だからこそ、少佐はあなたに待機を命じたのです！」

アイビス「え・・・」

ツグミ「今、あなたが出撃しても死に行くようなものです。わかったら、格納庫で待機していなさい・・・！」

アイビス「・・・」

ルシア「アイビスはまだ分かるとして、何で俺まで待機なんだ？」

ツグミ「これも少佐の指示です。ルシアは機体に搭乗し、いつでも出撃できるようにしておいてください。」

ルシア「……なるほど、了解した。」

ジヨナサン「スレイ君、クス八君！すまんが、輸送機発進までの時間を稼いでくれ！」

クス八「はい！」

スレイ「……クス八、私は好きにやらせてもらうぞ。」

クス八「わ、わかりました！」

スレイ（初の実戦……だが、式式の力を借りずともやってみせる！）

????「……………」

クス八「動かない……様子見なのかしら？」

スレイ「待っているのは性に合わん。接近し一気に片付けるぞ！」

クス八「はい！」

カリオン、グルンガスト式式はガンセクトと戦闘に入った。

スレイ「ターゲット・ロック！落ちろ！」

カリオンはホーミング・ミサイルを放ち、ガンセクトを数機撃墜する。

クスハ「まだ行けます！アイソリッド・レーザー！」

グルンガスト式式のアイソリッド・レーザーでガンセクトを撃墜し

スレイ「G・ドライバー、シュート！」

カリオンのG・ドライバーでガンセクトを全滅させた。

スレイ「終わったか……。他愛のない相手だったな。」

クスハ「早く研究所に戻りましょう、スレイさん。もうすぐ輸送機が発進する頃です。」

スレイ「ああ、了解だ。」

ジヨナサン（何とか間に合ったか・・・？）

ツグミ「カ、カザハラ所長！！！」

ジヨナサン「どうした！？」

ツグミ「研究所の前方に転移反応が！！！」

ジヨナサン「！！！」

研究所前方の崖周辺に、怪獣型の機体が転移してきた。

リシュウ「何じゃ、あれは!？」

クスハ「か、怪獣!？」

フィリオ「あ、あの機体はギリラム少佐が言っていた・・・」

ジヨナサン「インスペクターの指揮官機・・・!やはり、本命を送り込んできたか!」

ヴィガジ「・・・フン、目先のエサにつられるのは地球人の特性だと言えるな。おかげで労せずにはテスラ・ライヒ研究所が手に入るというものだ。」

ガルガウはブーストでテスラ研へ接近する。

クスハ「テ、テスラ研が!!」

スレイ「くっ!私が行く!!」

ヴィガジ「うるさいハエ共め、これでもくらえ!」

スレイ「!」

ガウガウは口から球体状のミサイルを発射し、カリオン、グルンガスト式に攻撃を仕掛ける。

スレイ「くあっ!」

クスハ「きゃあああ!!」

ツグミ「スレイ！クスハ！！」

スレイ「あ……あの位置から当ててきた！？」

ヴィガジ「貴様らはそこで大人しくしている……命が惜しければな。」

カリオン、グルンガスト式は被弾した影響でうまく行動が出来ない。

ツグミ「あれでは二人の機体が！」

ルシア「俺が出て奴の注意を引く！」

ルシアは格納庫からカリオン0号機を出撃させた。

ヴィガジ「まだうるさいハエがいたか……」

ルシア「くたばれ化け物！G・ドライバー、フルシユート！！」

カリオン0号機はG・ドライバーでガルガウに集中攻撃を仕掛けるが、僅かに装甲が傷つくだけだった。

ヴィガジ「地球人にしてはなかなかやるものだな。」

ルシア「くそ！エゼキエルなら今頃……！」

スレイ「くっ、落ちてなるものか！テスラ研には兄様がいる！！翼が折れようと飛ぶんだ！！兄様を護るために！！」

「……その役目は私に任せてもらおう。」

スレイ「何！？誰だ！？」

そこに進入してきたのは、黒いヒュッケバインMk-?だった。

スレイ「黒いヒュッケバイン！？」

クスハ「あ、あれは！？」

ルシア「まさか……！」

ヴィガジ「何者かは知らんが、俺の邪魔はさせんぞ！」

「……フツ……それはどうかな」

ガルガウがブーストで再びテスラ研に接近するが、ヒュッケバインMk-?に阻まれる。

スレイ「は、速い！」

ルシア「あの動き……！」

「……行くぞ、トロンベ！」

ヒュッケバインMk-?トロンベは右腕のファング・スラッシャーを抜いた。

「……ターゲット・インサイト……！ファング・スラッシャー、発射！」

ファング・スラッシャーが直撃し、ガルガウを怯ませた。

ヴィガジ「うぬうつ!!」

ルシア「すごい・・・」

ヴィガジ「チツ、味な真似を!!」

クスハ「黒い機体・・・それにトロンベって!？」

スレイ「やはり、あの男は・・・!」

????「・・・」

ヴィガジ「貴様、何者だ？」

レーツェル「私の名前はレーツェル・ファインシュメッカー。そう覚えていただこう」

ルシア「・・・あれ？」

ヴィガジ「謎の食通だと？翻訳機が壊れているのか？」

クスハ「ま、間違いない!あの人はエルザ・・・」

レーツェル「・・・今の私はレーツェル・ファインシュメッカーだ。それ以上でもそれ以下でもない。」

クスハ「え?ええっ!？」

ルシア（いやあれどう見ても……）

ジヨナサン（バレバレだな。だが……間に合ってくれたか）

フィリオ「……ありがとう、食通さん。」

レーツェル「フツ……久しぶりだな、フィリオ・プレスティ。」

フィリオ「ああ。こんな所で君に会えるとは思ってもみなかったよ。」

レーツェル「友よ、再会の挨拶はこの危機を乗り越えてからにしよう。」

ルシア「!? 転移反応、来るぞ!」

インスペクターの機動兵器が研究所を取り囲んだ

クスハ「ああつ! 研究所が!」

ツグミ「か、囲まれた!」

フィリオ「タカクラチーフ、今のうちに輸送機を発進させるんだ。」

ツグミ「え……!? でも、あなたやカザハラ所長は……!」

ジヨナサン「我々はこのに残る。」

ツグミ「しかし、それでは!」

「 ジョナサン「所員達のこともある。私だけ逃げるわけにはいかんさ。」

リシュウ「そうじゃ。連中の目的がこの研究所のデータと成果物なら、ワシらの命まで取りはすまい。」

「 フィリオ「だから、君はここから脱出するんだ。僕達の翼と共に・」

ツグミ「フィ、フィリオ……！」

スレイ「兄様！一緒に逃げましょう！データよりも兄様の命の方が……！」

フィリオ「スレイ……。テスラ研には多くの科学者達の英知が刻み込まれている。それを失うことだけは何としても避けなければならぬんだよ。」

スレイ「に、兄様……！」

ツグミ「……」

「 ジョナサン「後のことは我々が何とかする。さあ、早く行きたまえ。」

ツグミ「わ……わかりました……」

「 ジョナサン「レーツェル、参式の2号機は確実に彼へ渡してくれ。」

リシュウ「そう・・・ワシらが作った新型の斬艦刀と共にな。」

レーツエル「・・・承知した。」

フィリオ「食通さん・・・僕の妹達と星の翼を頼むよ。」

レーツエル「心得た、友よ。そして、私は必ずここへ戻ってくる。
お前達を救い出すために」

フィリオ「ありがとう・・・エル。その時まで、ピアン博士の遺産
は預かっておくよ。」

ルシア「フィリオ、あれもよろしく頼む。」

フィリオ「わかってる。あれも、大切な遺産だからね。」

テスラ研格納庫からレイディバード、アイビスのカリオンが発進し
た。

スレイ「タカクラチーフ！何故、輸送機を発進させた!？」

ツグミ「・・・・・・・・それが少佐の意思だからです・・・・・・・・」

スレイ「な・・・・・・・・に!？」

クスハ（やっぱり所長達は・・・!）

ツグミ「アイビス・・・我々の使命はこのレイディバードを敵包囲
網から離脱させることです。」

アイビス「わかっている……！やってみせるさ！」

スレイ「戻れ、アイビス！！貴様、兄様を見捨てる気か！？」

アイビス「スレイ……今は……今はこうするしかないんだよ！こうするしか……！」

ルシア「わかってくれスレイ、フィリオも覚悟の上だったんだ。」

スレイ「く……！」

クスハ「スレイさん、フィリオさんや先生の気持ちをわかってあげてください……！あの人は私達や研究所のみんな……いえ、もっと多くの人達のために……！」

スレイ「……！」

レーツェル「……行くぞ。脱出ルートはこちらだ。」

ルシア「！？本気ですか！」

アイビス「その方向は……！？」

クスハ「で、敵の指揮官機がいる方へ行くんですか！？」

レーツェル「その通り。確かにあの機体は難物だが、逆に今のルートを守るのは奴だけだ。」

ツグミ「つまり、誰かがあれの相手をすれば、脱出できると……！？」

レーツェル「そうだ。その役目は私が引き受けよう。」

スレイ「勝手なことを言うな！お前のような男に任せておけるか！」

レーツェル「フツ……その意気は良し。だが、君の兄上の夢を壊したくなくば、私の指示に従っていただく。」

スレイ「……………」

ルシア「レーツェルさん、俺もやりますよ。奴はノロマだ、2機でかく乱すれば確実です。」

レーツェル「よかろう。この半年……お前がどれだけ成長したか、見定めさせてもらう！」

ルシア「了解！」

ヴィガジ「フン、こちらへ向かってくる気か？」

ツグミ「作戦内容を確認します。最優先事項はレイディバードの離脱……敵指揮官機はレーツェルさんとルシアに任せ、各機はこちらの護衛をお願いします。」

クスハ「はいっ！」

ルシア「レイディバードの最大船速なら後方の機動兵器は無視できる。前方、側方の妨害する敵機を優先的に撃墜しろ！」

アイビス「了解！」

フィリオ（頼んだよ、ツグミ・・・）

ツグミ（フィリオ・・・）

レーツェル「では、行くぞ！」

ルシア「足止め位ならこのカリオンでも・・・！」

ヴィガジ「いい度胸だ・・・！この俺が直々に相手をしてやる！」

ルシア「まずは牽制だ！」

カリオン0号機はホーミングミサイルでガルガウを攻撃し、足を止める。

ヴィガジ「この程度で俺のガルガウは倒れん！」

レーツェル「油断をするのは遠慮していただこう！」

ヒュッケバインMk-?はファング・スラッシャーでガルガウの頭部を攻撃し

ルシア「G・ドライバー、アタアアック！！」

カリオン0号機のG・ドライバーで背部を攻撃する。

ヴィガジ「そんなに消されたいかっ！」

ガルガウの胸部が開き、砲台が飛び出した。

ルシア「何だあれ!？」

レーツェル「回避しろ!」

ヴィガジ「ガルガウの咆哮を聞けえ!!」

ガルガウはメガスマツシャーを放ち、テスラ研周辺の崖を吹き飛ばした。

ルシア「何て威力だ・・・クロススマツシャーを超えている・・・!」

レーツェル「じき輸送機が離脱できる。時間を稼ぐぞ!」

ヴィガジ「させるか!!」

ガルガウは口からミサイルを発射するが、レーツェルのファンゲ・スラツシャーで撃ち落とす。

ルシア「この隙に・・・ソニック・カッター!」

カリオン0号機のソニック・カッターでガルガウの脚を攻撃し、怯ませる。

レーツェル「この隙は逃さん!」

ヒュツケバインMk-?トロンベはグラビトン・ライフルを放ち、ガルガウを転ばせる。

ヴィガジ「おのれちよございな・・・!」

ツグミ「進路クリア！このまま一気に行けます！」

レーツェル「よし、各機は私に続いて全速離脱！」

クスハ「は、はいっ！（リシュウ先生、カザハラ所長、フィリオさん……どうかご無事で……!）」

スレイ「兄様……必ず……必ず救い出します……!」

アイビス「フィリオ……あたし……頑張る……もっと……もっと頑張るよ……!」

ルシア「フィリオ……彼女達は必ず俺が護り通す……だから、無茶だけは絶対するなよ。」

ヒュツケバインMk-?、グルンガスト式、カリオン全機はレイディバードに続き、テスラ研を離脱した。

ヴィガジ「チツ、逃がしたか……まあいい。俺の任務はあの研究所の制圧だ。後はアギーハに任せるとしよう。」

ガルガウはテスラ研へと乗り込んだ。

リシュウ「……来おったか。じゃが、ワシらの目的の半分は達成したわい。」

フィリオ「ええ……彼らが無事にアメリカから脱出してくれることを祈りましょう。」

ジヨナサン「すまん、フィリオ。君にまで貧乏くじを引かせて」
フィリオ「……言っただけです。僕も地球の未来のために戦う覚悟は出来ていると……」

ジヨナサン「フツ、そうだったな。さて……それじゃ、インスペクターの指揮官を丁寧に迎えるとするか。」

レイディバード 機内

ツグミ「……駄目です。付近の連邦軍基地からの応答はありません……」

レーツェル「そうか……。アメリカ中部もインスペクターに制圧されつつあるようだな。」

ツグミ「彼らは地球側の兵器を使っているようでしたが……」

レーツェル「制圧した勢力の兵器をそのまま自軍戦力として使用する……補給線の維持と戦線拡大を両立させる手段だ。また、都市部に大規模な攻撃を仕掛けていないことから判断すれば……彼らは我々の軍事力だけでなく、生産力も手に入れるつもりだと思われる。」

ツグミ「と言うことは……?」

レーツェル「彼らは、自分達が後々利用しようと思っているものに対し、必要以上に手を出さない。そして……それはテスラ研も例外ではない。」

ルシア「だから、転移してきた機動兵器は攻撃を仕掛けてこなかったわけか……」

ツグミ「これから、私達はどうするんです？」

レーツェル「インスペクターは西海岸方面へ勢力を伸ばそうとしている。故に、太平洋方面に抜けるのは危険だ。我々はこのまま北へ向かう。」

ツグミ「でも、そちらに行っても同じことに……」

レーツェル「いや、ヒリュウ改がスペリオル湖上空へ降下してくる手はずになっている。」

クスハ「ヒリュウ改が来てくれるんですか!？」

レーツェル「そうだ。私はカザハラ所長の依頼で新型機や試作機を受け取り……ギリアムの頼みで君達をヒリュウ改へ導くために来たのだ。」

クスハ「あ、あの、レーツェルさん。ギリアム少佐をご存じだということ……やっぱり、あなたはライ少尉の……」

レーツェル「他人の空似だ。私はライディースの兄などではない。」

クスハ「え？兄って……」

ツグミ（クスハはそんなことを言ってないのに……）

ルシア（やっぱりバレバレだな。）

レーツェル「ところで、カリオンのパイロット達はどうしている？」

ツグミ「二人は休息をとっています。実戦経験の少ない彼女達に先程の戦闘は過酷だったようで・・・」

レーツェル「・・・」

レイディバード 格納庫

スレイ（兄様・・・兄様は夢に・・・プロジェクトDに全てを懸けてきた・・・その兄様が戦いの犠牲になるなんて・・・）

スレイに、ツグミとルシアが歩み寄ってくる。

ツグミ「ここにいたのね、スレイ。」

ルシア「何ともないか？」

スレイ「ルシアにタカラチーフか・・・」

ツグミ「この後、私達は連邦軍の戦艦ヒリュウ改と合流することになったわ。」

スレイ「彼らと協力してテスラ研を奪回するのか・・・？」

ルシア「いや、大西洋を渡り、南欧のアビアノ基地へ向かうことになった。」

スレイ「ならば兄様はどうなる！？敵の手にかかるのを黙って見ていると言うのか！？」

ツグミ「……………」

スレイ「タカクラチーフ！おまえはテスラ研を脱出する時ためらいがなかった……！おまえは兄様を欠いたままでプロジェクトDが完遂出来ると思っているのか！？」

ツグミ「……………」

スレイ「答える！」

ツグミ「あの場で、出来る最良の選択をしたままでです。そうとしか答えられません……」

スレイ「貴様……！」

ルシア「スレイ、気持はわかるが落ち着け。この輸送機にはフィリ才達の努力の結晶……言い換えれば、プロジェクトDの成果が積み重ねられているんだぞ。それを守るのも俺達の務めじゃないのか？」

スレイ「フン……新型のグルンガストと金持ちの道楽で作った機体のどこがプロジェクトDの結晶だ！？」

ツグミ「……それだけじゃないわ。この輸送機にはプロトも積み込まれている……」

スレイ「何っ……！？既に完成していたのか！？」

ツグミ「……………」

スレイ「今すぐ見せてもらうぞ。プロジェクトDのフラッグシップを。」

ツグミ「待つて、スレイ。 プロトは……………」

スレイ「プロトはナンバー01である私の乗機だ。パイロットとして自分の機体を確認させてもらう！」

ルシア「ま、待てスレイ！」

スレイは、プロトが格納されているコンテナを開ける。

そこには、銀色に塗装された機体があった。

スレイ「！これは……………この機体色は……………!？」

ツグミ「……………」

スレイ「応えろ、ツグミ！何故 プロトが……………アステリオンが白銀に塗られている!？」

ツグミ「……………それがフィリオの意志よ。」

スレイ「馬鹿な……………!そんな馬鹿なことがあってたまるものか！」

ツグミ「アステリオンのパイロットはアイビス……………これはフィリオ少佐が決めたことです。」

スレイ「アイビスが・・・あの「流星」が・・・私を差し置いてアステリオンのパイロットだと・・・」

ツグミ「聞いて、スレイ・・・」

スレイ「く・・・」

スレイはその場を立ち去った。

ツグミ「スレイ・・・」

ルシア「やっぱり、彼女は受け入れられなかったか・・・」

ツグミ「ルシア、何故、フィリオはスレイではなくアイビスを選んだのかしら・・・」

ルシア「・・・お前もフィリオの人選に納得がいてないようだな？」

ツグミ「当然よ・・・二人の操縦技術は格段の開きがあったのは・・・知ってるでしょ？」

ルシア「俺も、アステリオンの塗装に立ち会っていた。フィリオが選んだんだ。俺は、彼女に秘められた才能を信じる。」

ツグミ「けど・・・」

ルシア「これから、見極めていけばいいさ。それでも納得できないならそれでもいい。」

ツグミ「……………」

レイディバード 個室

アイビス（フィリオ…………。これからどうなっちゃうのかな……あかし達…………このまま戦いが続いたら、プロジェクトDは……）

突然、機内に警報が響き渡る。

アイビス「敵襲…………!?!」

ツグミ「アイビス、起きてる!?!」

アイビス「は、はい! 敵ですか、タカクラチーフ!?!」

ツグミ「…………スレイがカリオンで無断出撃しました。」

アイビス「え…………」

ツグミ「いかなる理由があろうと、この状況でも単独行動は許されません。ルシアは先行して追跡しています。あなたも直ちにスレイを追ってください。」

アイビス「りよ、了解です! で、でも…………」

ツグミ「私達もすぐに向かいます。あなたはルシアと足止めに専念してください。」

アイビス「スレイ・・・何があったの・・・？フィリオがいない今こそ、あかし達が頑張らなきゃならないっていうのに・・・」

第7話 完

第7話 テスラ研、脱出（後書き）

ルシア「いよいよプロジェクトDの真骨頂、見せてやれアイビス
！」

アイビス「わかってるよ！飛ぶよ、アステリオン！」

次回、流星、夜を切り裂いて

ルシア「戦場の夜空を切り裂け！アステリオン！！」

ツグミ「そのフレーズ何処かで聞いたことあるんだけど・・・」

ルシア「・・・気にするな。」

第8話 流星、夜を切り裂いて

ルシアはカリオンで抜け出したスレイを追いかけていた。

ルシア「止まれスレイ！お前一人で何が出来るって言うんだ！」

スレイ「……………」

ルシア「あいつらは簡単に所長やフィリオを殺しはしない！だから今は機会を待つんだ！」

突然、スレイは減速しだした。

ルシア「何…………？」

スレイ「お前が来るとは想定外だったが…………ちょうどいい。」

ルシア「スレイ何を…………」

スレイ「お前を倒して、アイビスを失墜させてやる！」

スレイは反転し、ミサイルで攻撃をしだす。

ルシア「うわ！？何考えてんだスレイ！状況が見えてないのか！」

スレイ「お前は知っていたのだろう…………？プロトのカラーリングを…………」

ルシア「ああ、確かにそうだ。」

スレイ「それでお前はアイビスばかりに固執していたのだろう？」

ルシア「何！？」

スレイ「答える！」

ルシア「違う！そんな理由でアイビスを鍛えさせたわけじゃない！」

スレイ「なら何故アイビスに拘る！！」

ルシア「そ、それは……………」

スレイ「……………なるほど、もついい。」

スレイはルシアの後ろに取りつき、カリオン同士のチェイスを繰り広げる。

スレイ「所詮、お前はナンバー00。護衛をするだけの埋め合わせに過ぎない！」

ルシア「思いあがるのもいい加減にしろ！操縦技術だけでアステリオンを扱えると思うな！」

スレイ「知った様な口を！！」

スレイはG・ドライバーを撃つが、ルシアはそれを全て回避し、旋回し後ろに取りつく。

ルシア「あんなじゃじゃ馬、手先だけで扱える代物じゃない！あれ

を乗りこなそうとする信念がなければ・・・力は発揮できない！フイリオは、アイビスなら扱えると信じて・・・」

スレイ「・・・やはり、最終的にはアイビスか・・・」

スレイは逆噴射でルシアの後ろに取りついた。

ルシア「何！？」

スレイ「お前は、私の目標だった。いつかはお前も出し抜き、真のナンバー01になるために必死に飛んでいた。それなのに、いつも後ろでもたもたするアイビスに合わせて・・・前に立とうとしなかった・・・」

ルシア「え・・・」

スレイは、ブースト・ドライブでルシアに突っ込んでくる。

スレイ「お前は・・・お前は、私の前を飛んでいれば良かったんだ・・・お前は・・・私だけを見ていればよかったんだ！！」

ルシア「何・・・！？」

スレイはソニックカッターでルシアのカリオン0号機を大破させ、墜落させた。

ルシア「ぐわああああ！？」

0号機はバラバラに四散し、破壊される。

スレイ「・・・やった・・・ついに私は・・・」

そこにアイビスのカリオンが進入してくる。

アイビス「ルシアのカリオンが・・・！？ウソでしょ・・・！？」

スレイ「来たか・・・待っていたぞ。」

アイビス「スレイ・・・！これってあんたがやったの！？」

スレイ「そうだとしたら？」

アイビス「何でこんなことを！！」

スレイ「理由なぞ必要ない。ただ、私はもう一度お前に実力を見せつける必要があったのだ！」

アイビス「ルシア！応答して！無事なの！？」

ルシア「あ、ああ・・・何とか脱出はできた・・・」

スレイ「これで実力ははつきりしたな、プロジェクトDのナンバー01はこの私だ！」

アイビス「スレイ、何でこんなことを・・・あたし達は今日まで一緒にやってきた仲間じゃない・・・！」

スレイ「仲間か・・・私は、一度たりともお前を同志だと思ったことはない・・・！」

アイビス「な……！」

スレイ（お前はただ、私の後ろに立っていればよかつたんだ。だが、ルシアじゃなくお前が私の前に立つことだけは……許さない。）

アイビス「考え直して、スレイ！こんなことをしてフィリオが喜ぶと思っっているの！？」

スレイ「所詮、少佐は技術者だ。パイロットにはパイロットの流儀がある……！」

ルシア「スレイ……こんなことをしても……誰も認めてはくれないぞ……！」

スレイ「……そうか……あくまで認めぬというのか……なら……！」

スレイは、アイビスに向けてミサイルを放つ。

アイビス「う、うわ！？撃ってきた!？」

スレイ「戦え、アイビス。ここでTDのナンバー01が誰なのかを……もう一度教えてやる！」

アイビス「……スレイ……あなを倒せば、あたし達の所に……TDに戻ってくるんだよね……」

スレイ「フン……やる気になったか。それでこそ、アイビス・ダグラスだ。」

アイビス「スレイ……！」

スレイ「心配するな、生命まで奪うつもりはない。」

アイビス「負けない……星の海を往くためにも、あんたをTDに連れ戻してみせる！」

スレイ「ならば、教えてやる……！ナンバー01は私だ！」

ルシア（まだわからないのか……スレイ……！そんなことじゃ永遠に……！）

スレイとアイビスは互いにG・ドライバーを撃ち、すれ違った後、スレイはすぐにアイビスの後ろについた。

アイビス「く……速い……！」

スレイ「機体の条件は同じ……要は腕の差だ！」

スレイはミサイルを放つ、アイビスは回避行動に出たが、爆風を何度か浴びてしまう。

スレイ「どうだ、アイビス！実力の差を思い知ったか！」

アイビス「だからって、あきらめてなんていられない！星の海を往くためにはフィリオとチーフ、ルシアとあたしとあんた、全員の力が必要なんだ！」

スレイ「まだ減らず口を叩くか……なら……」

スレイはG・ドライバーでアイビスを狙い撃つ。

スレイ「これで黙らせてやる!!」

ルシア「避けるアイビス!!」

アイビス「今だ!!」

アイビスはスロツトルを切り、その場で回頭し、G・ドライバーを避けた。

あの時、ルシアとの模擬戦で行った回避方法だった。

スレイ「な、何!?!」

アイビス「いつけえええええ!!」

アイビスはソニックカッターで攻撃をし、掠めた程度ではあったが、スレイに一撃を与えた。

スレイ「く…………!!」

アイビス「やった…………やったよ!!」

スレイ「アイビス!勝負はまだついていない!!」

アイビス「スレイ!!」

スレイ「負けるわけにはいかない!ナンバー01はこの私だ!!」

スレイはブースト・ドライブでアイビスに突っ込む。

スレイ「受ける、アイビス！おまえに、このスピードはかわせない
！！」

ソニックカッターが直撃し、アイビスのカリオンが大破する。

アイビス「だ、駄目だ……！これじゃ……このままじゃ……！」

カリオンは墜落し、破壊される。

アイビス「ああっ……！」

スレイ「フン……脱出はしたようだな。」

そこにレイディバードが追いついてきた。

ツグミ「ああっ……！」

クスハ「ア、アイビスさんとルシアさんが……！」

レーツェル（奴が落とされただと……！油断でもしていたのか……
・？）

スレイ「心配するな。二人共、脱出している。」

ツグミ「スレイ……あなた……」

スレイ「結果は見ての通りだ、タカクラチーフ。これで プロトにはだれが相応しいかはつきりしたな。」

ツグミ「……………」

ルシア「スレイ……貴様……！」

アイビス「よかった……スレイ……。TDに戻って……くれるんだね……」

クスハ「ア、アイビスさん！」

ルシア「アイビス、怪我は？」

アイビス「撃墜……されるのは慣れてる……からね……打撲……
……ぐらいはしたけど……大丈夫……だよ……」

スレイ「……………」

アイビス「スレイ……これで……気が済んだでしょ……一緒に……帰ろうよ……。あたし達はさ……プロジェクトTDの仲間なんだから……」

スレイ「……………」

アイビス「やつぱり……あたし……あなたにかなわなかったけど……いつか……絶対に……星の海を……飛んでみせる……よ……あなたと一緒に……だから……帰ろうよ……」

スレイ「アイビス……」

ルシア「スレイ、お前の方こそこれで判っただろう。何故、フィリ

才はお前じゃなくアイビスを選んだかを。」

スレイ「……………!!」

ルシア「ナンバー01に固執するお前と、もつと上のゴールを目指すアイビス……………どちらが星の海を往くに相応しいか……………これで明らかになっただろう。」

スレイ「黙れ!」

アイビス「スレイ……………」

スレイ「どうやら、あくまでも私の存在を認めない気だな……………ならば、私は別のやり方で私の力を証明するまでだ……………!」

アイビス「待って、スレイ!」

スレイ「アイビス!今日からお前は私の敵だ!次に会った時には生命を懸けての勝負だ!それまでに腕を上げておけ!」

アイビス「スレイ!」

スレイ「……………」

スレイは、ブースト・ドライブでこの空域を去って行った。

アイビス「スレイトツ!!」

クスハ「スレイさん……………」

レーツェル「……行ってしまったか。」

ツグミ「……………」

ルシア「……俺、余計な事……言ってしまったのかな……？」

レーツェル「いや、ルシアは間違っではない。今の彼女に受け入れられる余裕がなかっただけだ。」

連邦兵「どうします、タカクラチーフ？01を追いますか？」

ツグミ「……………」

連邦兵「タカクラチーフ？」

ツグミ「あ……ごめんなさい。その……」

レーツェル「……カリオンのあの速度には追いつけん。アイビス達を回収しよう。」

連邦兵「了解です。」

レイディバードは、アイビスとルシアのいる場所へ着陸する。

ルシア「立てるか？」

アイビス「うん、大丈夫。」

2人は、後ろを振り向いて、大破したカリオンを見る。

アイビス「……ごめんね、カリオン……」

ルシア（俺としたことが……あんなことで油断するとは……まだまだだな。）

その時、警報が鳴りだした。

ツグミ「な、何なの!?!」

連邦兵「こちらへ接近してくる機体を検知しました!おそろく、インスペクターです!」

ツグミ「!」

インスペクターが鹵獲したりオンシリーズや量産型ヒュッケバイン Mk-?がレイディバードを包囲する。

ツグミ「囲まれた!?!」

レーツェル「出撃するぞ、クスハ。」

クスハ「は、はい!」

レーツェル「タカクラチーフ、我々が突破口を開くまで何とかもたせてくれ。」

ツグミ「わ、わかりました……!」

レイディバードからヒュッケバイン Mk-? トロンベ、グルンガスト式、エルシュナイデ・カスタムが出撃する。

レーツェル「クスハ、前回の例もある。油断をするな。」

クスハ「本命が来るかも知れないってことですね・・・!?!」

レーツェル「そうだ。行くぞ!」

ツグミ「ルシア、大丈夫なの?」

ルシア「砲台代わりにはなるさ、急造品とはいえ戦力にはなる。」

ツグミ「くれぐれも」

ルシア「無茶して怪我しないように・・・だろ?」

ツグミ「・・・わかってるのならよろしい。」

レーツェル「ターゲット、インサイト!」

ヒュッケーバインMk-?トロンベはフォトン・ライフルを撃ち、
ガリオンを撃墜していく。

クスハ「アイソリッドレーザー!」

グルンガスト式式はアイソリッドレーザーでシュヴェールトを撃墜
するが、何機か突破される。

クスハ「突破された!?!」

ルシア「任せろ!」

エルシュナイデ・カスタムは両肩のビーム砲を展開し、照準をあわせる。

ルシア「BMセレクト、ガンファイト！ツインビームキャノン、発射！」

エルシュナイデ・カスタムのツインビームキャノンでシュヴェールトを撃墜する。

その時、何かが近づいてくる。

連邦兵「こちらへ高スピードで接近する機体あり！！」

ツグミ「な・・・何、これ？こんな速度を出せる機体があるなんて・・・！！」

レーツェル「インスペクターか？」

クスハ「違います、あれは・・・」

そこに現れたのは、サイバスターだった。

レーツェル「サイバスター・・・！！」

ツグミ「あれが・・・魔装機神！？」

クスハ「マサキ君！」

マサキ「よう、久しぶりだな！」

シロ「クスハ、元気だったニヤ？」

クスハ「シロちゃん・・・！」

クロ「マサキ、シロ、呑気に挨拶してる場合じゃニヤいつて。」

マサキ「おっと、そうだった。取り込み中だろ？手助けするぜ。」

クスハ「で、でも・・・。」

マサキ「異星人の話は知ってる。それに、そのつもりでこっちへ来たからな。」

クスハ「・・・ありがとう、マサキ君。」

マサキ「なあに、いいってことよ。」

ルシア「俺はてっきり迷子になって偶然・・・。」

マサキ「相変わらずここぞって時に・・・ってお前ルシアか!？」

ルシア「今更だな。」

シロ「マサキ、敵がこっちに向かってくるニヤ!」

マサキ「わかってる!行くぜ、シロ!クロ!」

クロ「OKニヤ!」

各機が敵の足止めをしていると、レイディバード上空に転移反応が出てきて

黒い機動兵器がレイディバードに取りついた。

クスハ「輸送機が!？」

マサキ「何だよあれあ!？」

レーツェル「インスペクターが保有する独自の機動兵器か……！」

ルシア「俺が相手をする!みんなは接近する機動兵器を止めてくれ!」

エルシュナイデ・カスタムは、プラズマカッターの柄を連結させ

黒い機動兵器「レストジエミラ」を斬り倒していく。

マサキ「待つてる、サイフラッシュで一網打尽に……」

シロ「マサキ、こっちに何かに向かってくるニャ!」

マサキ「敵か!？」

シロ「デ、データにはニヤい奴だニャ!」

マサキ「何っ……!？」

シロ「は、速い!おいら達の所へ来るニャ!……!」

マサキ「!?!」

猛スピードでサイバスターを横切り、その拍子にサイバスターを切り裂く。

マサキ「くうっ!?!」

クスハ「マ、マサキ君!?!」

マサキ「チツ、かすめられたか!」

ツグミ「あ、あの機体も・・・何てスピードなの・・・!?!」

アギーハ「ふふふ、こんな所で風の魔装機神に出くわすなんて・・・残り物に福があるって本当だね。ヴィガジに感謝しなきゃ。」

マサキ「てめえ、何者だ!?!」

アギーハ「あたいはアギーハ。インスペクターさ。」

マサキ「!?!」

アギーハ「あ、そうそう。付け加えとくと、裏のリーダーね?」

ルシア「・・・ハートマークをつけるなよ・・・」

シロ「裏?表は誰ニヤ?」

シロ「シロ、突っ込むトコはそこじゃニヤいでしょ。」

アギーハ「ねえ、あんた達・・・シュウ・シラカワを捜してるんでしょ？」

マサキ「！ 奴を知ってんのか!？」

アギーハ「ま、話だけはね。目にいろいろとやっつけてくれちゃったからさ。」

ルシア（まさか・・・南極事件の事か・・・!？）

アギーハ「もつとも、あの事件はあたい達にとつちや都合が良かったんだけど。」

マサキ「何・・・!？」

シロ「ど・・・どういうことニヤんだ、マサキ!？」

マサキ「そいつはこつちが聞きてえぐらいだぜ・・・!」

アギーハ「さ、細かい話は抜きにして・・・あんた、シュウ・シラカワの居場所を知らないかい？」

マサキ「それもこつちが聞きてえぐらいだ!!」

アギーハ「あつそ。やっぱりね。」

シロ「異星人がシュウに何の用ニヤ!？」

アギーハ「あらあら、ネコちゃん・・・細かい話は抜きって言ったでしょ。」

シロ「ニヤ・・・!!」

マサキ「こうなったら、力づくでもわけを聞きだしてやるぜ！」

アギーハ「ふふふ・・・レディの扱いが下手ね、ボク。そんなんじや、あたいのダーリンみたいなシブい男になれないわよ？」

マサキ「こ、この！ふざけやがって!!」

クロ「ニヤ、ニヤんか調子狂うわね。ホントに異星人ニヤの？」

マサキ「どのみち、あいつを何とかしなきゃここを突破できねえんだ！行くぞ!!」

アギーハ「ふふふ、そうはいかないよ。こっちも仕事だからね。持って帰るものは持って帰らないと。でも、その前にあんたと遊んであげるよ。」

マサキ「何っ!?!」

アギーハ「シルベルヴィントとサイバスター・・・どっちのスピードが上か、ハッキリさせときたいからね。」

マサキ「・・・!!」

レイディバード、格納庫では・・・

ツグミ「アイビス、どこへ行くの!?!」

アイビス「この輸送機に動かせる機体があるなら・・・それで出撃する・・・!」

ツグミ「無茶を言わないで!死に行くようなものよ!」

アイビス「ここにいたって、結果は同じだよ!だったら、あたしは自分自身の力を出し切りたい!星の海を往く・・・!そのためだったら何も怖くない!」

ツグミ(ナンバー01であることに固執したスレイ・・・そして、宇宙を翔ぶことに全てを懸けるアイビス・・・フィリオ・・・あなたは・・・)

アイビス「お願い、タカクラチーフ!あたしを出撃させて!」

ツグミ「・・・アイビス、これを見て・・・」

ツグミは、アステリオンが格納されているコンテナを開ける。

アイビス「これはガリオン・・・!?いや、違う・・・まさか、プロト・・・!」

ツグミ「そうよ。その名は『アステリオン』。あなたにこの機体を託すわ。」

アイビス「タカクラチーフ・・・」

ツグミ「私には、これが正しい選択かはわからない・・・だけど・・・」

アイビス「ありがとう、チーフ！あたし、絶対にやるよ！」

ツグミ「え……！」

アイビス「この機体はTDのみんなの夢の結晶なんだ……。だから、やるんだ……！」

ツグミ「アイビス……」

アイビス「絶対にやってみせるよ！」

アギーハ「さあ行くよ、坊や！」

マサキ「！」

クスハ「マサキ君！」

マサキ「来るな！あいつは俺に任せて、お前らは輸送機を守れ！」

アギーハ「ほらほら！よそ見してんじゃないよ……！」

シルベルヴィントはブーストでサイバスターに突っ込む。

アギーハ「いただくよ！サイバスター……！」

マサキ「スピード勝負で負けるかよ……！」

シルベルヴィントの高周波ブレードをサイバスターはかわす。

マサキ「今度はこっちの番だ！アギーハ！！」

サイバスターはディスクッターを構え突っ込む

マサキ「おらおらおらっ！！」

ディスクッターでシルベルヴィントを斬った。

アギーハ「ハッ、やるじゃないか！」

マサキ「どうだ！！」

アギーハ「アハハハ・・・ハハハハ！」

マサキ「！？」

アギーハ「さすがだよ、坊や。風の魔装機神つてのは伊達じゃないみたいだねえ。どうやら、あたいはあんたを甘く見てたようだ・・・次は本気で行くよ！」

マサキ「お決まりの台詞を言いやがって！」

アギーハ「だったら、かわしてみな！さっきみたいにさ！」

シルベルヴィントはフルブーストでサイバスターに攻撃を仕掛ける。

マサキ「何っ！？」

アギーハ「まだまだ！！」

シルベルヴィントは、猛スピードでサイバスターを翻弄しつつ攻撃を仕掛ける。

クスハ「マ、マサキ君!!」

マサキ「チツ、やるじゃねえか!!」

アギーハ「ほらほら、坊や。どうしたのさ?」

マサキ「調子に乗るな!勝負はまだこれからだぜ!!」

シロ「マ、マサキ!さっきの攻撃で左のウィングがやられたニャ!」

マサキ「何!?!」

シロ「これじゃ、バランスが上手く取れニャいし、スピードも出ニャいよ!」

アギーハ「心配はいらないよ、もう片方も壊してやるからさ!」

マサキ「くっ、この・・・!!」

クスハ「た、助けに行かなきゃ!!」

レーツェル「式式ではあの2体の速度に追いつけん!私に任せたまえ!」

アギーハ「あんたは呼びじゃないんだよ!」

レーツェル「！」

シルベルヴィントはフォトンビームを撃つが、ヒュッケバインMK
-?トロンベはかわす。

アギーハ「ハッ、いい腕じゃないか！けど、出鼻はくじいたよ！」

レーツェル「うぬっ……！」

アギーハ「さあ坊や、観念しな！」

マサキ「ふざけんな、誰が！」

レーツェル「いかん、あのままでは！」

ルシア「輸送機に取りついたあれも何とかしなきゃいけないし……
どうすれば……」

ツグミ「ルシア！輸送機の後部ハッチに取りついた敵機を破壊して
！」

ルシア「わ、わかった！」

エルシュナイデ・カスタムはビームスプレーガンを撃ち、取りつ
いたレストジェミラを破壊する。

ツグミ「レーツェルさんは指揮官機を何とかひるませて下さい！」

レーツェル「何をするつもりだ!?!」

ツグミ「説明をしている暇はありません！お願いします！」

レーツエル「・・・承知した！」

ルシア「俺もやるぞ！」

レーツエル「ターゲット・インサイト！撃て、トロンベよ！」

ヒュッケバインMk-？トロンベはグラビトン・ライフルをシルベルヴィントに当てる。

アギーハ「！？ あんたの相手は後でしてやるよ！！！」

ルシア「そうは問屋がおろさないってな！」

エルシュナイデ・カスタムはリフターのミサイルを発射しシルベルヴィントの足を止める。

アギーハ「ええい鬱陶しい奴だね！」

輸送機に取りついていたレストジェミラがエルシュナイデ・カスタムを取り押さえる。

ルシア「チイツー！！！」

アギーハ「先にあなたから片付けてやるよ！」

レーツエル「・・・それまでお前が無事ならばな。」

アギーハ「何！？」

ツグミ「システム・オールグリーン！テスラ・ドライブ、ETOL
！！速度、このまま！ハッチ開放！」

レイディバードのハッチから、アステリオン発進され、ミサイルを
発射しエルシュナイデ・カスタムに取りついたレストジェミラを撃
墜する。

マサキ「何だ！？」

クスハ「ガーリオン・・・！？」

レーツェル「いや、違う。」

クスハ「え！？」

ルシア「ついにはばたいたか・・・星への翼が・・・」

アギーハ「ハハッ、まだ新型を隠していたとはね！けど、あたいの
シルベルヴィントには追いつけやしないよ！」

ツグミ「相対速度・距離算出！データ、アルテリオンにロード！今
よ、アイビス！」

アイビス「やってみせる！」

アステリオンはブースト・ドライブでシルベルヴィントに突っ込む。

アイビス「フィールド収束！いつけえええええ！！！」

アギーハ「!?!」

アイビス「うわあああつ!?!」

ソニックブレイカーをぶつけ、シルベルヴィントにダメージを与える。

アギーハ「ちいっ!?!」

アイビス「やったの!?!」

アギーハ「このシルベルヴィントを捉えるとはね……!?!だけど、浅いんだよ!?!」

ツグミ「アイビス、相手はバランスを崩したわ!?!すぐにスプリットS!?!続いて、マニユールバーRAMVs!」

アイビス「く……うっ!?!」

ツグミ「!?! 機体を制御しきれていない!?!」

アイビス「な、何とか……やってみせるよ……!?!」

マサキ「チャンスだ!?!先に仕掛けるぜ!?!」

アイビス「え!?!先!?!」

マサキ「行くぞ、アギーハ!?!」

アギーハ「!?!」

マサキ「こいつはさっきのお返しだ！」

サイバスターは魔方陣を展開し、火の鳥を召喚する。

マサキ「くらいやがれ、アギーハ！！！」

サイバスターが変形し、火の鳥を纏って突っ込む。

マサキ「アアカシツク！バスタアアアアツ！！！」

アギーハ「こいつ、シルベルヴィントに！？！」

アカシツク・バスターの直撃でシルベルヴィントが怯む。

アギーハ「チツ、バランスーが！！！」

アイビス「す、凄い……！あの速度……！」

マサキ「何をぐずぐずしてやがる！次はおめえの番だ！」

アイビス「え！？！」

ツグミ「そうよ、アイビス！ターン後、マニユーバーRAMVSを
！」

アイビス「わ、わかった！」

アステリオンは変形し、シルベルヴィントに仕掛ける。

アイビス「やるんだ！絶対に成功させるんだ！」

アステリオンはマシンキャノンを放ち牽制後

アイビス「ラピッド・アクセラレーション！モビリティ・ブレイク
！！」

ミサイル発射後、ブースト

アイビス「続いてヴォレー・シュート！」

続いてブレイク・フィールドを展開

アイビス「相手の軌道を見切れ！その内側に飛び込む！！」

シルベルヴィントにミサイルが何発か命中し、ソニックブレイカー
を当て旋回後

アイビス「フル・ブースト！決めてみせるっ！！」

フル・ブーストで突っ込みシルベルヴィントを半壊させた。

アギーハ「よ、よくもやってくれたね！！」

ルシア（よくやった・・・アイビス・・・）

アギーハ「ちい、推進系まで！」

マサキ「これでおあいこだぜ、アギーハ！」

アギーハ（チツ・・・！今の状態じゃ、あの2機にはちよいと手こずりそうだね・・・！下手をすりゃ、後の任務に支障が出ちまう。それに、奴らを逃がしたのはヴィガジのミスさ。これ以上、奴の尻拭いをする義理はないね・・・！）

マサキ「オラ、どうした!？」

アギーハ「サイバスター、それに新型！この勝負、ひとまず預けるよ！」

ルシア「させん!!！」

エルシュナイデ・カスタムはツイン・プラズマカッターを構えブースト・ドライブで突っ込む。

アギーハ「なっ!?!？」

ルシア「とどめの一撃っ!!！」

シルベルヴィントが突かれる・・・その直前

レストジェミラが転移し盾になる。

ルシア「何!?!？」

アギーハ「・・・助かったよ、シカログ・・・」

シルベルヴィントは空域を離脱、他の敵機も撤退を始めた。

アイビス「やった・・・やったよ・・・!!！」

ツグミ「アイビス……」

マサキ「へっ……即席にしちゃあ、悪くねえ連携だったな。」

アイビス「……………」

マサキ「俺の名前はマサキ。マサキ・アンドーだ。あんたは？」

アイビス「アイビス・ダグラス……」

マサキ「あんたが奴の隙を突いてくれて助かった。礼を言っぜ。」

アイビス「こ……こっちこそ……」

クスハ「マサキ君……アイビスさん……」

マサキ「とりあえず、これで一段落か。」

ルシア「ここで仕留めておきたかったが……邪魔が入ったな。」

レーツェル「マサキ、我々はここを離脱し、ヒリュウ改と合流するが……君はどうする？」

マサキ「状況が状況だからな。俺も一緒に行くぜ。」

レーツェル「そうしてもらえると、こちらも助かる。」

アイビス「……………」

アステリオンのコンソールから音声が流れてきた。

フィリオ「アイビス……」

アイビス「通信……！？いや、違う……レコーカーに残されたメッセージ……？」

フィリオ「君がこのメッセージを聞いているということは、一つの壁を超えたのだと思う。おめでとう、アイビス。」

アイビス「フィリオ……」

フィリオ「アイビス……君は「流星」というあだ名を嫌がっているようにけど……流星は闇に落ちていくんじゃない……流星は夜を切り裂いて飛んでいるんだ。」

アイビス「流星は夜を切り裂く……」

フィリオ「アイビス……僕は、君が流星になる日を信じているよ。」

アイビス「フィリオ……」

ルシア「アイビス、行くぞ。」

アイビス「う、うん。」

ルシア（流星は、夜を切り裂いて飛ぶ……それが実現された今、俺達……プロジェクトTDは大きな一歩を踏み出せた。本当におめでとう……アイビス……）

第8話

完

第8話 流星、夜を切り裂いて（後書き）

ルシア「突然で何だが、みんな海に行こう！」

ツグミ「ホントに突然ね。」

アイビス「でも・・・何で？」

ルシア「何でもさ。」

エクセレン「そう言って、下心モンモンだったりして？」

ルシア「そ、そんなことはないさ・・・ハハハハ。」

エクセレン「まあ無理もないわねえ。アイビスちゃんあの惱殺ポーズを見れば・・・」

ルシア「違う、断じて違う!!」

ツグミ「必死に否定してるところが見苦しいわ。」

アイビス「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ルシア「と、とにかく今回はここまでだ！みんなも海に入る時は準備運動を忘れずに！それじゃまた！」

ツグミ「ちなみに言うけど、今は海に行く季節じゃないわよ。」

アイビス「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エクセレン「大丈夫よんアイビスちゃん。後でとっちめておくから。」

キョウスケ「まだとっちめるつもりかエクセレン。」

エルシュナイデ・カスタム

不明勢力から鹵獲した、マオ・インダストリーで開発されていたR

- 1の量産型のカスタム機。

エルアインスを元に行っているため、戦時急造機となっている。

エルアインスとの違いは、頭部デザインをヒュッケバイン寄りに改造、TDリフターを装備したことによる機動力の底上げ等、戦時急造機とは思えないほど高性能となった。

後にレイオス・プランとプロジェクトTDとの共同で、マ改造・・・もとい本格的な護衛機として改造される。

武装

ビームスプレーガン

5連ミサイルランチャー

ツイン・プラズマキャッター

ハンドレールガン

ツインビームカノン

特殊能力

ジャマー

E W A C (強)

第9話 現れる「影」

レイディバード 格納庫

クスハ「じゃあ、マサキ君はシラカワ博士の手掛かりを得るためにテスラ研へ？」

マサキ「ああ。もしかしたら、あいつがあそこへ現れるんじゃないかと思つてな。」

シロ「でも、ここへ来るまでにメチャクチャ時間がかかったニヤ。」

クロ「うん・・・地球を3周ぐらいしたニヤ。」

クスハ「え、ええっ!？」

ルシア「やっぱり迷つてたんじゃないか。」

ツグミ「す、すごい航続距離と連続稼働可能時間なのね・・・」

マサキ「・・・あんた、クロとシロを見ても驚かねえんだな。」

ツグミ「ええ、あなたのお話はクスハや所長達から聞いていました。だから・・・とても光栄です・・・」

マサキ「いや、そこまで言われると照れちまうぜ。」

ツグミ「クロちゃん、シロちゃん、あなた達みたいなお可愛いネコちゃんのナビゲーターに会うことができ、今度ゆっくりお話を聞か

せてね。」

クロ「わかったニヤ。」

マサキ「何だ、俺じゃねえのかよ。」

クスハ「ツグミさんはアーモードモジュールのシステム開発担当なの。だから……」

マサキ「ふん。……ところで、シュウの野郎はテスラ研に現れなかったのか？」

クスハ「ええ……」

マサキ「エルザ……じゃなかった、レーツェルさんよ。あんたはあいつの居場所を知ってるか？」

レーツェル「いや……DC戦争後、彼とは会っていない。」

ルシア「俺も、L5戦役から音沙汰なしだな。」

マサキ「そうか……。また振り出しに戻っちゃったな。」

クスハ「マサキ君……」

マサキ「ああ、気にしなくてもいいぜ。これは俺の個人的な問題だからな。それに……お前らと一緒に行動してれば、奴が向こうから現れるかも知れねえ。」

シロ「ヒリュウやハガネに乗ってた方が情報も集めやすいニヤ」

マサキ「ああ。今はインスペクターとノイエDCを何とかしなくちゃならねえ。」

そこにアイビスから通信が入る。

アイビス「こちらコックピット、ヒリユウ改を確認しました。」

ツグミ「え、本当？」

アイビス「はい、向こうとの連絡も取れました。今から着艦します。」

クスハ「良かった・・・これで・・・」

レーツェル「・・・どうやら、私の役目は終わったようだな。」

クスハ「え・・・？」

レーツェル「私は所長からの依頼で。参式の2号機をある男に届けねばならないのだ。ここで失礼させていただきます。」

ツグミ「でも、あなた一人だけでは・・・」

レーツェル「心配することはない。後のことは頼むぞ、タカクラチーフ。」

ツグミ「はい。」

クスハ「あの、レーツェルさん・・・」

レーツェル「何かね？」

クスハ「色々とありがとうございました。どうか気をつけて……」

レーツェル「ああ。では、諸君……また会おう。」

スペリオル湖 ヒリュウ改 ブリッジ

リユーネ「マサキ！元気だった？」

マサキ「リユーネ……！お前、この艦に乗ってたのかよ？」

リユーネ「うん、まあ……色々あってね。」

マサキ「ふん。」

リユーネ「って、他に何か言うことないの？」

マサキ「他に言うことお？」

リユーネ「ほら……しばらく見ない内に綺麗になったな、とかさ。」

ルシア（また言ってるよ……殴られるからあえて言わないでおくが……）

マサキ「おう、そう言やしばらく見ない内に……」

リユーネ「見ない内に？」

マサキ「太ったんじゃないかねえか？」

ルシア「へ？」

リユーネ「なっ……！あたしは毎日トレーニングしてるよ！そんなことあるもんか！」

シヨーン「やれやれ、女性に対して一番言っではならぬことを……修行が足りませんな。」

レフィーナ「……何にせよ、彼らと無事に合流できて幸いでした。」

シヨーン「ええ。」

クスハ「レフィーナ艦長……ヒリュウは何処へ向かっているんですか？」

レフィーナ「南欧のアビアノ基地です。そこにはハガネやシロガネもいますよ。」

クスハ「じゃあ、ブリット君やキョウスケ中尉達と会えるんですね？」

シヨーン「そうです。」

ツグミ「あ、あの……」

シヨーン「あなたは・・・プロジェクトTDのツグミ・タカクラチーフですな？」

ツグミ「は、はい。あの・・・今後、テスラ研はどうなるのですか？」

シヨーン「何とも言えませんな。インスペクターの襲来によって、北米方面軍はもとより・・・統合参謀本部の方もかなり混乱しているようですので。」

ツグミ「そう・・・ですか・・・」

レフィーナ「タカクラチーフ？」

ツグミはふらつき、クスハに支えられる。

マサキ「お、おい！大丈夫かよ？」

ツグミ「ごめんなさい・・・。少し疲れたようで目まいが・・・」

シヨーン「無理もありません。クスハ少尉、彼女を医務室へ。」

ルシア「後のことは任せておいてくれ、タカクラチーフ。」

クスハ「ツグミさん、こちらへ・・・」

ツグミ「ありがとう、クスハ・・・」

ヒリュウ改 通路

ルシア（インスペクターの襲撃・・・ノイエDCの蜂起・・・一体どうなるんだ地球は・・・あいつも無事だったらいいんだが・・・）
考え込んで歩いていると、ルシアは誰かにぶつかる。

????「きゃ!?!」

ルシア「おっと、大丈夫・・・で・・・!」

レフィーナ「あ・・・!」

ルシア「な、何ですか艦長その格好!？」

レフィーナ「寝付けなくて無意識に歩いていたら・・・ああ、私っ
たら・・・またやっちゃった・・・」

ルシア「それにそのヌイグルミ・・・ライオン?」

レフィーナ「え、ええ・・・ダンディライオン2号ちゃんです。」

ルシア（ダンディライオン2号って・・・1号は?）

レフィーナ「あ、あの・・・このことは・・・」

ルシア「い、言えるわけないでしょ艦長がヌイグルミ抱えてネグリ
ジェでうるついているなんて・・・」

レフィーナ「はあ・・・幻滅しました?」

ルシア「え……………」

レフィーナ「艦長がこんな子供みたいなことをして……………だからホワイトスターもインスペクターに奪われることに……………」

ルシア「話には聞いてましたが……………インスペクターにとっては貴重な兵器製造プラントだから……………狙うのも無理はない。」

レフィーナ「あの時は仕方がなかった……………頭の中ではそう思っただけなんですけど……………」

ルシア「……………誰もそう簡単に受け入れられるはずがありません。」

レフィーナ「え……………?」

ルシア「俺も、父が殺された時は簡単に仲間を受けられませんでした。でも、時間を掛けて信頼を作って……………今に至ります。」

レフィーナ「……………」

ルシア「でも今回は取り返すことができます。だから、最後まで諦めずに戦いましょう。」

レフィーナ「……………はい、ありがとうございますルシア中尉。」

ルシア「いえ……………あ、誰かに見られるのも面倒なので早く艦長室に……………」

レフィーナ「はい、お休みなさい。」

そして、ヒリュウ改はアビアン基地へ到着する。

ヒリュウ改 格納庫

タスク「こいつがリオンシリーズの最新型か。」

レオナ「ええ。確か・・・アステリオンという名よ。」

タスク「アステリオン・・・じゃ、分身して音速の蹴りとかブチかますのかな？」

ルシア「何だよそれ？」

アイビス「あの・・・あたしの機体に何か・・・？」

タスク「もしかしてルシアが乗ってんのか？」

ルシア「いや、アステリオンに乗っているのはこいつだ。」

タスク「へえ・・・そうなんだ。」

アイビス「は、はい！プロジェクトTD所属、アイビス・ダグラス・
・特殊プロジェクトのテストパイロットであるため、階級はあり
ません・・・！」

ルシア「おいおい何で緊張してんだ？」

タスク「そうそう、そんなに堅くなることねあって。歳もそんなに
違わなさそうだしさ。俺、タスク・シングウジ。いや、新メンバ
ーに君みたい可愛い子がいてラッキーだなあ。」

アイビス「え．．．その．．．可愛いって．．．あたし．．．え．
．．．」

タスク（つと、ヤベえ。レオナの前でついつつかり．．．）

アイビス「ルシア以外に言われたの．．．初めて．．．」

タスク「．．．．．へあ？」

ルシア「お、おい別に言わなくていいだろそのこと!？」

タスク「ルシア、まさかお前．．．．．」

ルシア「い、いやあの時は上官としての立場だからして．．．そ
の．．．」

レオナ「．．．タスク。」

タスク（き、来たあ）

レオナ「少し彼女と話がしたいの。二人だけにしてもらえないかし
ら。」

タスク「？ あ、ああ．．．」

ルシア「じゃ、また後でなアイビス。」

タスクとルシアは格納庫から出ていく。

アイビス「あの・・・あたしに何か？」

レオナ「あなた・・・プロジェクトTDの所属とおっしゃられましたね？」

アイビス「は、はい・・・」

レオナ「スレイ・・・スレイ・プレステイは今どちらに？」

アイビス「スレイとお知り合いなんですか？」

レオナ「ええ・・・私はレオナ・ガーシュタイン。以前はコロニー統合軍にいました。そして、DCの所属だった彼女とは、模擬戦で何度か手合わせをしています。」

アイビス「・・・」

レオナ「彼女の宙間戦闘技術は群を抜いていましたから・・・一時はトロイ工隊に転籍するという話もあったのですが・・・」

アイビス「トロイエって・・・あのエリート部隊の・・・」

レオナ「ええ。でも、彼女はその話を断ったのです。自分はプロジェクトTDのテストパイロットであり、そのナンバー01だと言って・・・」

アイビス（スレイ・・・）

レオナ「彼女は・・・スレイ・プレステイは今、どこに？」

アイビス「スレイは・・・あたし達の下を去りました・・・」

レオナ「え・・・」

アイビス「詳しい事情はあたしにもわかりません・・・ただ、スレイは最後にあたしのことを敵だと・・・」

レオナ「そう・・・」

アイビス「レオナさん・・・あなた、スレイのライバルだったのかも知れないけど・・・あたしにもスレイに負けられない理由がある・・・」

レオナ「・・・」

アイビス（そう・・・あたしは強くなりたい・・・星の海を往くための強さ・・・フィリオ・・・あたし・・・夜を切り裂く流星になるよ・・・！）

数日後 アビアノ基地 シミュレータールーム

アラド「わわっ！ラミアさん、ちょっとタンマ！」

ラミア「・・・実戦でそんなものが認められると思うのか？」

アラド「うわっ！ー！」

ラミアの攻撃でアラドは一撃で落とされる。

アラド「や、やられた・・・！」

キョウスケ「・・・そこまでだ、アラド。シミュレーターから出る。」

アラド「りよ、了解ッス。」

キョウスケ「ラミアも出ていい。一息入れよう。」

ラミア「了解でござりまするのです。」

アラド「負けちゃったりしたのです。」

カチーナ「アラド！てめえ、何回撃墜されりゃあ気が済むんだ！？」

アラド「じゅ、15回ぐらいッスかね。」

カチーナ「あたしは正直者は好きだぜ？そういう奴はグラウンド1周だっ！行って来い！」

アラド「は、はいっ！」

そう言ってアラドはグラウンド（？）へと向かう。

エクセレン「・・・それじゃ審査員の皆様、今の模擬戦の採点をどうぞ〜」

リュウセイ「うん、40点？」

ルシア「35点くらいでいいんじゃないのか？」

キョウスケ「20点だな。」

カチーナ「10点で充分だ！」

エクセレン「わお、お敵しいことぞ！」

マリオン「……………では、4人の意見を聞かせてもらいましょうか。」

リュウセイ「やっぱり、ビーム系の武器は向いてないと思うんだけど。」

キョウスケ「破壊力重視の、大型の物がいいだろうな。やはりアルトのようなタイプが向いていると思うが……………」

カチーナ「斬艦刀とは言わねえが……………ぶん回せる剣だぞ。」

ルシア「突進力があるな、でもブースト・ドライブが使えないとなるとなあ……………」

マリオン「なるほど……………では、現状に機体で彼に向いていると思われるものは？」

リュウセイ「そうだな……………アルブレードかな？」

キョウスケ「なるほど・・・振り回せる大型の近接戦武器か。」

カチーナ「その内、赤く塗ってやるうかと思ってたが・・・しょうがねえ、あいつに譲ってやるぜ。」

マリオン「わかりました。色々と参考になりましたわ。では、後はよろしく。」

エクセレン「ラドム博士・・・あんなことを聞いて何をやらかすつもりなのかしらん？」

ラミア「ビルドビルガーの接近戦用武装を決めるためのものだと聞いていましておりましたりしますが・・・」

エクセレン「なるへそ。それでキョウスケにカチーナ中尉、リュウセイ君にルシア君ってわけなのね。で、結果的にビルトビちゃん
の右腕には何がつくのかしらね？」

キョウスケ「アルトでの採用が見送られた・・・リボルビング・バンカーかも知れんな。」

リュウセイ「ブレード・トンファーならぬチェーンソー・トンファーなんてのはどう？」

ルシア「力場を纏つての鉄拳なんてのかもしれないな・・・」

カチーナ「漢なら、指先一つでダウンだぜ。」

エクセレン「・・・カチーナ中尉、一応女の子なんだから。」

カチーナ「一応って付けんな！それに、今はアラドの話だろうが！」

アラド「カチーナ中尉！グラウンド1周、行ってきました！」

カチーナ「おう、御苦労。」

アラド「それで、あの……。クスハ少尉が……」

クスハ「……。皆さん、お疲れ様です。」

エクセレン「あら？どうしたの、クスハちゃん？」

クスハ「アラド君とラミアさんがここで特訓してるって聞いたので、飲み物を持ってきたんです。」

エクセレン「!!！」

キョウスケ「……馬鹿な……！」

カチーナ「な、何だと!？」

ラミア「……?」

リュウセイ「ク、クスハ……。ま、まさか。その飲み物って……」

クスハ「うん、特製の栄養ドリンクよ。」

アラド「すみません、少尉。わざわざ俺達のために。」

リュウセイ「ヤ……。ヤバいぞ、お前。」

アラド「え？何が？」

ラミア（どういうことだ？あの飲料には毒物が混入されている・・・
？いや、状況的にあり得ん。その証拠に・・・）

ルシア「クスハ、ちょっと味がまたよくなったんじゃないのか？」

エクセレン「って既に飲んじゃってるし・・・」

クスハ「はい、今回は味の方も自信作なんです。リュウセイ君も飲んでみる？」

リュウセイ「い、いや、遠慮しとく・・・」

カチーナ「あ、あたしもな。」

エクセレン「わ・・・私とキョウスケは缶コーヒーで全然オツケー
なんで・・・ねえ。」

クスハ「そ、そうですか・・・」

アラド「じゃあ、俺・・・いったまゝす。」

リュウセイ「あ、待て！」

アラド「うー！！」

ラミア「！？」

エクセレン「ア、アラド君!？」

アラド「う………うまい………うますぎる………
・!もう一杯!」

リュウセイ「へっ!？」

カチーナ「ホ、ホントかよ!？」

アラド「ええ、喉ごしもスッキリ爽やか何とやらで。」

ルシア「おお意外にわかるんだな、アラド。」

クスハ「良かったら、ラミアさんもどうぞ。」

ラミア「………(クスハ・ミスハ……データによれば、ブルックリン少尉と同じく念動力者……もしや、私の正体に勘付いて……?考えられる。アラド曹長やルシア中尉の飲み物に異常はなかったが、私の方には……)」

クスハ「あ、あの……?」

ラミア(やむを得んな……。ここでベーオウルフ達に疑われるわけにはいかん。何か混入されていたとしても……後で解毒薬を調合すれば済む話だ。)

クスハ「あの、無理をして飲んでいただかなくても結構ですから……」

ラミア「いや、もらおう。………む!？」

キョウスケ「ラミア？」

ラミア「う……………」

ルシア「お、おいラミア!？」

ラミア（き、機能不全……………馬鹿な……………!？）

ラミアはクスハ汁により、悶絶する。

クスハ「ああつ、ラミアさん!？」

カチーナ「た、倒れやがったぞ！」

リュウセイ「ラミアア!!！」

ルシア「リュウセイ、それ大袈裟過ぎだ……………」

エクセレン「わお、やっぱり必殺……………！」

ハガネ 格納庫

ヴィレッタ「……………なるほど。さっきの騒ぎはそれが原因か。」

リュウセイ「ああ……………アラドは平気だったけど。」

エクセレン「あの子、胃袋の方も頑丈みたいね。」

マサキ「単に味音痴なだけじゃねえか？」

クロ「言えてるニヤ。」

ルシア「それ俺に言ってるのか、マサキ？」

クスハ「・・・私、栄養ドリンクを作るのもうやめます・・・」

ルシア「そ、それは困る!？」

エクセレン「まあまあ、ラミアちゃんはすぐに気がついたんだし、アレの効果はバッチリなんだから・・・」

シロ「そう言えば、マサキも前にアレを飲んだ後、調子が良くニヤったもんニヤ。」

マサキ「ま、後は味の方さえ何とかかなりやな。」

リュウセイ「けど、アレ・・・混ぜてる物が物だけになあ。」

ルシア「いやあのままで充分だろ？」

マサキ「それはおめえだけだったの!」

エクセレン「だから、ブリット君あたりを毒味役にして、頑張りなさいな。」

クスハ「ど、毒見役・・・」

ルシア「ヴェレッタ大尉、少しいいか？」

ヴィレッタ「どうしたの？」

ルシア「ちょっとお願いが……」

ヴィレッタ「……わかったわ、そういう事情があるのなら、私の方から何も言わないでおくわ。」

ルシア「助かる。」

エクセレン「あらんどうしたのヴィレッタお姉さまと密会だなんて……もしかして……」

ヴィレッタ「そういうのじゃないから安心なさい。」

エクセレン「そう……残念。」

ルシア「何で残念がるんだ？」

テツヤ『パイロット各員へ伝達。直ちにブリッフィングルームへ集合せよ。』

ヴィレッタ「召集がかかったわね。行きましよう。」

ライ「了解です。」

八ガネ ヒリユウ改 シロガネ各艦はアラドとラミアの救難信号をキャッチし、現地へ急行する。

アクセセル「む？来たか。」

アラド「あれは！？」

キョウスケ「無事か？アラド、ラミア。」

アラド「キョ、キョウスケ中尉！」

エクセレン「お待たせしちゃってごめんしてね。前のお客さんから延長入っちゃって・・・」

ラミア「エクセ姉様・・・意味がわかりやしませんのでありますけど・・・」

ダイテツ「各機、敵機の迎撃に当たれ！」

アラド「こ、これで何とか・・・」

リー「アラド・バランガ・・・やはり敵との接触を図ったか。」

アラド「え！？」

リュウセイ「な、なに言ってるんだ！あいつは・・・！」

リー「貴様の意見など聞いていない。見ての通り、アラド・バランガはノイエDCのスパイだった。故にここで奴を処分する。」

リュウセイ「なっ・・・！」

ブリット「中佐、本気でそんなことを言ってるんですか!？」

リー「そうだ。・・・まったく、貴様らの考えの甘さには虫酸が走る。この状況下で、敵からの離反者を偵察に出すなど・・・」

カチーナ「ケツ！虫酸が走るのはめえの頭の堅さの方だぜ!！」

リー「あの状況を把握できぬ者が何を言うか。現にアラド・バランは自ら通信を断ったのだぞ。」

アラド「ち、違う！それは・・・!!！」

ルシア「機体の損傷か、あるいは敵の電波妨害は考えないのですか?」

リー「機体を損傷させたとして、私は騙されんぞ。」

マサキ「あの野郎、あれが演技だって言うのか!？」

リユーネ「状況を把握できてないのはあなたの方じゃないのさ!」

リー「部外者は黙っている。」

マサキ「何だと!？」

リー「フン・・・民間の協力者風情が。」

ルシア「その対応・・・指揮官として疑問がありますね。」

リー「元DC総帥の後継者に言われる筋合いはない。貴様にも疑い

が未だにあるのだぞ。」

テツヤ「やめろ、リー！今はそんなことを言っている場合じゃない！」

リー「それが上官に対する態度か、テツヤ？下が下なら、上も上だな。」

テツヤ「何っ!?!」

リー「貴様の認識の甘さが奴らを増長させているのだ。やはり、貴様は指揮官としては失格……せいぜいナンバー2止まりの男だ。」

テツヤ「お前にそんなことを言われる筋合いはない！」

レフィーナ「あ、あの……!」

ダイテツ「いい加減にせんか！馬鹿者共がっ!」

リー「!」

テツヤ「!」

シヨーン（落ちましたな、雷が。）

ダイテツ「この状況下で己の成すべきことを忘れ、口論するとは何事だ!」

テツヤ「も、申し訳ありません……!」

ダイテツ「直ちにアルブレードとアンジユルグを救助し、敵を撃破せよ！」

リー「……了解。」

カイ「アラド、ラミア。すぐにそこから離脱し、こちらと合流しろ。」

アラド「でも、ゼオラが！ゼオラがいるんです！！」

カイ「何……！？」

ラトウーニ「ま、まさか、あのファルケンに……！？」

ルシア「ラトウーニからは聞いていたが、アラドと同じスクールのパイロットか……」

ゼオラ「……」

アラド「けど、あいつ……俺を敵だと思っ込んでる！」

ラトウーニ「！」

アラド「それに、俺と一緒にいた記憶がねえみたいなんだ！」

ラトウーニ「え……っ！？」

リュウセイ「も、もしかして……！」

ラトウーニ「記憶操作を受けているの……！？」

ルシア「アードラーみたいなやり口を……！」

キヨウスケ「……エクセレン、俺達で先陣を務めるぞ。」

エクセレン「はいな。ちよつと状況が複雑そうだしね。荒事に慣れてる私達の方がいいでしょ。」

キヨウスケ「慣れたくて慣れてるんじゃないがな。……ラミアはともかく、アラドは満足に戦えんはずだ。急ぐぞ。」

ルシア「キヨウスケ、二人の離脱援護は俺とアイビスが務める！」

キヨウスケ「了解した、退路を確保してくれ。」

アクセル「あれは……間違いない。機体色こそ違うが……ゲシユペンストMk-?……！W17に続いて、おれにはツキがあるらしいな。『こちら側』の貴様に恨みがあるわけではないが……同じ存在にならんとも限らん。(己が道を行き、すべてのバランスを崩すイレギュラー……『こちら側』の貴様はどうだ?……キヨウスケ・ナンブ……!)」

カイ「キヨウスケ中尉、フォワードはお前達に任せる！」

キヨウスケ「了解。」

アクセル「全機、ターゲット変更。ただし、ベーオウルフ……ゲシユペンストMk-?には手を出すな。やつの相手は俺がする。」

ルシア「行くぞ、アイビス！」

アイビス「了解！ブースト・ドライブ、ゴー！！」

エルシュナイデ・カスタム、アステリオンでアルブレードとアンジユルグの元に急行する。

アクセル「あの声……ルシア・ゾルダークか。」

ルシア「アラド、ここは俺が相手をする！ひとまず下がれ！」

アラス「りよ、了解ッス！」

ゼオラ「邪魔しないで！アラド・バランガを倒すのはこの私よ！」

ルシア「お前、ノイエDCで何て刷り込まれたんだ？」

ゼオラ「アラド・バランガはラトを連れ去った、私達の敵よ！そして、ラトを連れ帰る！」

ルシア「悪いが、ラトウーニをそっちに渡す気はない！」

ビルドファルケンがオクスタン・ライフルBモードで攻撃するが、エルシュナイデ・カスタムはかわしながらハンドレールガンで攻撃を仕掛ける。

ゼオラ「！？今のパターンは……！？」

アイビス「あの子、ルシアのパターンを知っている！？」

ルシア「やはりな、スクールでは旧教導隊のデータを利用してパイ

ロットを養成していた。俺のデータも知っていて当然だ。」

ゼオラ「さすが、閃光を負かした流星の力ね……」

ルシア「!?!」

アクセル「そこまでだ、ルシア・ゾルダーク。」

アクセルの駆るラーズアングリフはマトリクス・ミサイルを放つ

エルシュナイデ・カスタムは小型レドームのジャマーでミサイルを無効化する。

ルシア「その声……アクセル・アルマー!?!」

アクセル「やはり、戦場で再会したか。宿命つて奴だ、これがな。」

ルシア「その機体……ランドグリーズの発展機か。」

アクセル「そいつは量産試作型のWシリーズから奪取したエルアインスだな。」

ルシア「Wシリーズ……?」

アクセル（ルシア・ゾルダーク……ベアウルフと共に行動しているとは……だが、『あちら側』と同じことをしないと限らん。ここで仕留めさせてもらっぞ。）

ルシア「何だか知らないが、敵なら倒すまでだ!」

エルシュナイデ・カスタムはミサイルを発射するが、ラーズアングリフのジャマーにより無効化される。

アクセル「甘いな、次はこちらの番だ！」

ラーズアングリフはFソリッドカノンの照準を合わせる。

「ターゲットロック、行けい！！」

Fソリッドカノンが発射され、エルシュナイデ・カスタムの頭部を掠める。

ルシア「チツ！角がもってかれたか！」

アクセル「角だけでは済まさん！」

エルシュナイデ・カスタムの後方からマトリクス・ミサイルが接近してくる。

ルシア「いつの間に！？」

アイビス「ルシアはやらせない！」

アステリオンがマシンキャノンでマトリクス・ミサイルを撃ち落とす。

ルシア「助かった、アイビス。」

アクセル「ほあ・・・いい相棒を持ったものだな。」

ルシア「俺の大事なチームT.Dの仲間だ。」

アクセル「フ……だが、ここで仕留めさせてもらおう!」

ラーズアングリフ、エルシュナイデ・カスタムが睨みあう中心で、
転移フィールドが発生する。

アクセル「!」

ラミア「こ、この反応は!?!」

ユン「か、艦長!!前方に空間転移反応が!!」

レフィーナ「転移反応!?!」

ダイテツ「アインスト……いや、インスペクターか!?!」

ルシア「まさかエアロゲイター!?!」

エイタ「いえ!そのどちらの反応でもありません!」

ダイテツ「何だと!?!」

アクセル(……もう来たか。ヴィンデル……!)

転移フィールドから、ソウルゲインに似た機動兵器が姿を現す。

ラミア「間違いない、あれは……!!」

リオ「て、転移してきた!？」

ヴィンデル「……あれがそうか。なるほど、我々の世界よりも戦力は充実しているようだな。」

アイビス「あれ、インスペクターの機動兵器なの……!？」

リユース「でも、ホワイトスターであんな機体は見てないよ!」

レオナ「フォームはインストシリーズの物とは違う……」

ヴィレッタ（そして、エアロゲイターの機動兵器でもない。）

リョウト「でも、転移技術を持っているということは……」

タスク「まさか、新顔の異星人かよ!？」

マサキ「いや、怪しい技術絡みなら……シユウと関係のある奴かも知れねえ。」

イルム「何とも言えんね。ただ、敵だつてのは間違いないな。」

ヴィンデル「面喰っているようだな。無理もなかつ。」

アクセル「早かったな、ヴィンデル。……『システムXN』の調子は?」

ヴィンデル「通常転移は安定している。」

ラミア「やはり、ツヴァイザーゲインか……!」

ヴィンデル「アンジュルグ・・・乗っているのはW17か？アクセ
ル。」

アクセル「そうだ。転移の影響が知らんが、少しおかしい。・・・
いきなり怒鳴るなよ？ヴィンデル。」

ヴィンデル「・・・？」

ラミア「ヴィンデル様・・・その機体・・・まさか完成しちゃった
りしてなかったりしたりしなかったりしちゃうのでしょうか？」

ヴィンデル「・・・なに・・・？レモンの遊び道具ときが、私に
対して・・・」

アクセル「言つたる？おかしいってな。・・・言語系がやられてい
るらしい。言葉遣いは気にするな。血圧が上がるぞ、こいつは。W
17、普通にしゃべって構わん。」

ラミア「了解、・・・ヴィンデル様。ツヴァイザーゲイン・・・安
定しているように見えるが、まさか完成したというのか？」

ヴィンデル「その通りだ。見ての通り、通常転移機能に問題はない。
」

ラミア「つまり、お前達本隊が動く・・・と？」

アクセル「そういうことだ、こいつがな。これから指令も多くなる
だろう。レモンは貴様に期待している。・・・そのザマを見る限
り、俺は心配だが・・・任務遂行に全力を尽くせ。」

ラミア「ああ、わかっている・・・（指令が来れば、私の任務もやりやすくなる・・・だが、安心感がわかないのは・・・なぜだ？少し前までは、あれほど指令を待ち望んでいたというのに・・・もしや・・・情緒を司る感情中枢も破損しているというのか・・・？）

キョウスケ「奴らは何をしている・・・？」

ルシア「あの機体・・・マスタツシユマンに似ている・・・」

ライ「・・・ラミアの様子がおかしい。」

エクセレン「そうねえ・・・。ラミアちゃん、どうかしたの？戦闘中なんだけど？」

ラミア「・・・いかな、これ以上の戦闘遅延は不自然だ。一度交戦すべきだと思うが、どうだ？」

アクセル（・・・ん？Wナンバーの方から・・・？）

ヴィンデル「人形の方から、私に指示するとはな。だが、ツヴァイの実戦テストも兼ねて、ここまでやって来たのだ。W17・・・付き合ってもらうぞ。それにトラブルとはいえ、人形ごときに不遜な口の利き方をされるのは不愉快だな。」

ラミア「・・・すまん。」

アクセル「フツ・・・レモンは喜びそうだな。」

ヴィンデル「アクセル、お前はゼオラ曹長と共に戻れ。」

アクセル「なんだと？何故だ？」

ヴィンデル「ベーオウルフが絡んでくると、お前は冷静さを失う傾向がある。」

アクセル「……『向こう側』と『こちら側』の奴は違う。俺だって、それくらいのこと。」

ヴィンデル「大事をとってだ、アクセル。この段階でしくじるわけにはいかんだ。……お前を失うわけにもな。」

アクセル「……。」

ゼオラ「し、しかし、それでは私に与えられた命令を遂行することが出来ません！」

アクセル「ゼオラ曹長、ここは命令に従え。自分で考え、どちらの命令に従うべきか決めろ。……自分で、だ。」

ゼオラ「え……？」

ヴィンデル「機会は別に与えてやる。今回は私の命令に従え。いいな？」

ゼオラ「……。」

アクセル「……ベーオウルフ、か。」

ヴィンデル「アクセル……お前の敵は、あの男ではない。……」

理解していると、自分で言っていたな？」

アクセル「……………わかってるさ、これがな。後は任せるぞ、
ヴィンデル。(ここでツヴァイに敗れるのなら……………『こちら側』
の奴はその程度……………気にする必要もない。)」

ゼオラ「くっ……………！ラト、連れて帰ってあげなくてごめん……………
！」

アクセル、ゼオラはASRSを展開し、離脱した。

ラトウーニ「ゼオラ!?!」

アラド「ぜ、ゼオラーツ!!」

ラミア(退いたか、アクセル隊長……………)

ヴィンデル「……………システムXNの復元によって、我々はいよいよ
動き出すことが出来る……………我らの手によって再び『アギユイエウ
スの扉』が開かれるのだ。」

ラミア「……………」

ヴィンデル「こちら側ではあの時のような不覚はとらんぞ、ハガネ、
そしてヒリユウ改の者共よ。(そして……………我らを『向こう側』で
追撃してきたDCの……………)」

ラミア「連邦軍特別任務実行部隊『シャドウミラー』指揮官、ヴィ
ンデル・マウザー大佐……………」

ヴィンデル「……む？」

ラミア「……来い。実戦テストをするのだろう？私は機嫌が悪い。・お前達のやり方を見ていると……なぜか神経系にノイズが混ざる……何があっても恨まないでもらおう……！」

ヴィンデル「人形風情が面白いことを言う……W17！」

すぐにアンジユルグとツヴァイザーゲインが戦闘態勢に入る。

ヴィンデル「W17……レモンはお前のことを気に入っているよ。うだが……私は自分で確かめたことしか信じないのでな……最新型の性能、見せてもらおう。」

ラミア「その最新型も……どうやらおかしくなり始めたらしい。」

ヴィンデル「……？」

ラミア（レモン様……単に私は欠陥品なだけですか……？それとも……）

キョウスケ「ルシア、ラミアの援護を頼む。お前が一番近い。」

ルシア「了解した。アイビス、一旦下がってくれ。」

アイビス「うん、気をつけて。」

エルシュナイデ・カスタムもツヴァイザーゲインに攻撃を仕掛ける。

ヴィンデル（奴がルシア・ゾルダークか……）

ルシア「見れば見るほどマスタッシュ・マンぞつくりだな……」

ヴィンデル（『向こう側』と同じか……確かめさせてもらう。）

ツヴァイザー・ゲインが分身し、右腕を回転させる。

ヴィンデル「これが避けられなくては、お前は『向こう側』のよう
な力はない！残影玄武弾！」

残影玄武弾が放たれ、アンジュルグとエルシュナイデ・カスタムは
回避行動に移る。

ルシア「分身して攻撃……なかなか手ごわい……！」

ラミア「ルシア中尉、援護射撃で怯ませろ！」

ルシア「わかった！」

エルシュナイデ・カスタムはハンドレールガン、ツインビームカノ
ンを発射しツヴァイザー・ゲインを牽制する。

キョウスケ「便乗させてもらう！」

ヴィンデル「ベーオウルフか……！」

キョウスケ「この間合い、取った！」

アルトアイゼンのスクエア・クレイモアをツヴァイザー・ゲインに浴
びせ

ラミア「コードセット！ファントムフェニックス！！」

アンジユルグのファントムフェニックスでツヴァイザーゲインを小破させた。

ヴィンデル「なるほど。やはり、こちらでも我々の前に立ち塞がるのはこいつらか。だが、おかげでツヴァイの慣らしは上々だ。」

ラミア「私は……」

ヴィンデル「待つがいい。もう少しだ。我々の世界で成し得なかったこと……こちらでは可能にしてみせよう。いいな、W17、次の指示を待て。」

ツヴァイザーゲインは、転移で現地から撤退する。

クスハ「き、消えた……！」

ライ「それも転移で、か。」

ヴィレッタ「あの機体は単独で空間転移が可能なようね。」

ラッセル「インスペクターの機体の中にそれを行ったものはいません……。もしかして、あれは第三の……？」

イルム「いや……。多分、地球人だろう。ゲシュペンストやアルブレードが奴に従っているようだったからな。」

ラミア（その通り……。地球人だ。私は……。違うがな……）

ルシア（ラミアの様子はおかしかった・・・あの機体が出てきてか
らずっと・・・一体、何が起こるっていうんだ・・・？）

第9話 完

第9話 現れる「影」（後書き）

ツグミ「ここで重大なお知らせです。」

アイビス「とあるユーザーさんからの提案で、オリジナルのライブキャラを登場させることにしました。」

ルシア「そのユーザーさんから設定の提供を受け、こちらである程度改変を加えて登場させる予定です。」

エクセレン「いいの？元々スポットが当たらないキャラを絡めるってコンセプトがあったのに・・・」

ルシア「いやそれでも消化しきれないのがチラホラ見えてきたから・・・ちょうどいいかな？って。」

リュウセイ「いいじゃねえかライブルキャラ。で、いつ出るんだ？」

ルシア「それはまだ未定だ。」

マサキ「本当に登場するのか？」

ルシア「絶対出るから安心しろ。まあ・・・本当の事言つとあんまり会いたくない。」

キョウスケ「ワケありのようだが、何があった？」

ツグミ「それもいずれ明らかになりますので、今日はここまでです。」

第10話 フェアリー・ダンシング

アビアノ基地 格納庫

リーダー「……ラトウーニ、あなたには非常に聞きづらいことなんだけど……スクールではやはりあの手の記憶操作がよく行われていたの……？」

ラトウーニ「はい……。ひどい例では、人格そのものを変えられてしまった仲間も……」

リュウセイ「何だって……!?!?」

ブリット「そ、そこまでやるのか……」

ルシア「改めて聞くと、ひどいものだな。」

ラトウーニ「でも、自分では記憶を変えられたことがわからない……私も……もしかしたら……」

リーダー「ラトウーニ……」

ラトウーニ「けど、私はまだまし……。オウカ姉様やアラド、ゼオラ達との記憶があるから……それに、みんなと出会えたし……みんなとの思い出は大切なものになったから……でも、ゼオラは……」

リュウセイ「……あの子の記憶はもうもとに戻らないのか？」

ラトウーニ「……わからない……」

アラド「大丈夫だよ、ラト。俺が何とかしてみせるって。」

ラトウーニ「アラド……」

ブリット「何とかするって……どうやって?」

アラド「それはわからないツスけど……俺……諦めるわけには
いかないんです。あいつとの約束を守るためにも」

ラーダ「アラド……彼女は完全に変わってしまったの?」

アラド「俺に関する記憶はそうだったみたいツスけど……すぐに
カッとなる所とか、融通が利かない所とかは同じで……ラトのこ
とも覚えてたし……」

ラーダ「……じゃあ、彼女の記憶を元に戻すことが出来るかも知
れないわ。」

アラド「え!? 本当ツスカ!?!」

ラーダ「ええ。おそらく、彼女が受けているのは暗示系の記憶操作
よ。」

リュウセイ「暗示系……?」

ラーダ「人格や記憶を完全に作り変えてしまうのではなく……元
からあるものに何らかのイメージを加え、内容を変える方法……」

ブリット「催眠術みたいなものなんですか？」

ラーダ「概念的には似ているわ。だから、与えられたイメージ……彼女の記憶を歪めている原因となっているものを取り除けば……」

アラド「……」

リュウセイ「……ブリット、ルシア、あの時に似てるな。」

ブリット「ああ。あの時のそれは……忒式のT・LINKシステムだった。」

ルシア「今回はその歪めているイメージ、というわけだな。」

アラド「ど、どういうことなんです？」

リュウセイ「前例があるってこった。それも、成功例。」

ブリット「だから……今回もきつと上手くいくよ。」

アラド「……」

リュウセイ「アラド、ラトウーニ……お前達の姉さんと一緒に、あの子どもスクールから助けてやるつぜ……本当の意味でな。」

アラド「はい。」

ラトウーニ「……」

ハガネ　ブリーフィングルーム

ダイテツ「・・・全員、揃っているな。では、これよりブリーフィングを始める。大尉、内容の説明を。」

テツヤ「はっ・・・今回の作戦目的は、ノイエDCの南欧方面侵攻の橋頭堡となつていているリクセント公国を奪還することである。まず、作戦の第一段階についてだが・・・シロガネを中心とする別働隊が、リクセント周辺に展開する敵部隊に対し、陽動をかける。その間、我々は地中海から同国領土内へ進行する。」

ヴィレッタ「現在のリクセントの状況は？」

テツヤ「偵察隊からの情報によれば、敵はライノセラス級を中心とした部隊をリクセント城内に展開している。そこで、我々は戦力を二つに分け・・・先発隊であるハガネが城内の敵を外へ陽動、その後、後発隊であるヒリュウ改が敵旗艦を攻撃・・・敵部隊をかく乱する。」

イルム「後発隊の編成は？」

テツヤ「それについては・・・カイ少佐、お願いします。」

カイ「うむ。後発隊の任務はフォワードとバックスの連携が重要になることから・・・SRXチームとATXチームにやってもらう。」

キョウスケ「了解です。」

エクセレン「早く片付けてカーニバルを再開させなきゃね。」

ルシア「カーニバル？」

ブリット「ノイエDCに占拠された時は、リクセントではサミットの最中だったんだ。」

ルシア「……そんな時にノイエDCの襲撃とはな……空気の読めない奴らだ。」

カイ「……残りの者は先発隊となる。ただし、アイビス……」

アイビス「は、はい。」

カイ「お前には機体の特性を生かし、我々が先に誘き出す敵を可能な限りかく乱してもらいたい。……出来るか？」

アイビス「わかりました。……やってみせます。」

カイ「ルシアはアイビスのバックアップを頼む。一機だけでは流石にかく乱は難しい。」

ルシア「了解です。」

カイ「では、後発隊の詳細だが……」

ハガネ 格納庫

ルシア「本気なのかタカクラチーフ!？」

ツグミ「ええ。」

ルシア「本当にシャイン王女を今回の作戦に参加させるのか!？」

シャイン「これは私の意志でもありません。」

ルシア「お言葉ですが王女、戦うということを何か理解しておられるのですか？」

シャイン「覚悟は出来ております。そのためのフェアリオンでございます。」

ルシア「……………」

シャイン「私に皆様のお手伝いをさせて下さいませ。」

ラトウーニ「ルシア、王女の決意は本物よ。」

ツグミ「既にダイテツ艦長からも許可はもらっているわ。」

ルシア「……………わかった。」

ツグミ「それじゃ……………」

ルシア「しかし王女、これだけは覚えておいてください。戦場になれば、どんな生命でも一兵士にしかありません。」

シャイン「たとえば、それが王女の身であるとしても……………ですわよね?」

ルシア「・・・覚悟が出来ているのなら、それでいいです。王女、共にリクセントを取り戻しましょう。」

シャイン「はい！」

リクセント公国 周辺区域

ダイテツ「ステイルル2より各機へ。別働隊を突入させるため、城内のランドグリーズを城外へ誘き出せ。ただし、こちら側は城内へ進入してはならん。」

カイ「了解！・・・各機へ。聞いての通り、標的は射程の長いランドグリーズだ。相対距離に留意し、上手く奴らを城外へ誘き出せ。」

レオナ「では、下手に前進しない方がいいですね。」

カイ「ああ。焦っていきなり奴らの射程圏内へ飛び込むような真似をするなよ。」

レオナ「了解」

ルシア「レオナ。」

レオナ「何かしら？」

ルシア「本当にあのライノセラスにアーチボルドが・・・？」

レオナ「ええ、間違いないわ。」

ルシア「奴が生きていたとはな……!!」

レオナ「……………そうね、あなたもアーチボルドには縁があったわね。」

ルシア「ああ、エルピスでの借りをここで返してやる……!」

アラド（敵の大將がアーチボルドなら、ユウキ少尉とリルカーラ少尉もあそこにいるかも知れねえ……正直言つて、あの人達とはやり合いたくねえけど……リクセント公国を取り戻すためには、戦わなくちゃならねえ……!）

ツグミ「アイビス、くれぐれも突っ込み過ぎないように。」

アイビス「了解……!」

ダイテツ「全機、攻撃を開始せよ!」

レオナ「ズイーガーリオン、その名の如く、勝利を!」

ズイーガーリオンのブレードレールガンで接近するリオンを斬る。

NDC兵「先に母艦を沈めるぞ!」

NDC兵「了解!」

タスク「ジカ〜ンっと!そうはさせるかってんだ!」

ジガンスクードは胸部を展開

タスク「ギガ・ワイドブラスター!!」

NDC兵「うわああああ!!」

ギガ・ワイドブラスターでリオンは数機消滅した。

カチーナ「おらおら! さっさとこっちの来やがれ!!」

ラッセル「カチーナ中尉、それじゃ敵に目的が悟られます・・・」

カイ「だが、おかげでランドグリーズは城外から出始めている。」

ルシア「頃あいだな、アイビス行くぞ!」

アイビス「了解!」

エルシュナイデ・カスタム、アステリオンはブースト・ドライブで城外に出たランドグリーズへ向かう。

アイビス「当たれ当たれ!」

アステリオンはバーストレールガンでランドグリーズを牽制

ルシア「上出来だ、アイビス!」

エルシュナイデ・カスタムのツイン・プラズマカッターでランドグリーズを切り刻む。

ルシア「ランドグリーズの三枚おろしだ。寿司にはなれないけどな

「！」

カイ「いいぞ、敵をかく乱できている！」

イルム「それじゃこの隙を狙って・・・」

グルンガストは胸部にエネルギーを集中させ

イルム「ファイナルビーム!!」

ファイナルビームを放ち、ランドグリーズを撃墜

アラド「ブレード・トンファーで!!」

アルブレードのブレード・トンファーでランドグリーズの左腕を破壊する。

カイ「詰めが甘いぞ、アラド!!」

カイの量産型ゲシュペンストMk-?がアルブレードの前に躍り出る。

カイ「ジェット・マグナム!!」

ジェット・マグナムでランドグリーズを撃墜する。

アーチボルド「多少の損害が出たようですが、何とかハガネを食い止められそうですね。じゃ、僕達も打って出ましようか。それでチェックメイトです。機動部隊の発進を・・・」

一般兵「少佐！0時方向から接近する艦影が！！」

アーチボルド「なるほど、別働隊がいたんですか。外周の部隊にさっさと撃墜させて下さい。」

一般兵「だ、駄目です！突破されます！！」

アーチボルド「！」

別方向からヒリュウ改が現れ、SRXチーム、ATXチームが出撃する。

エクセレン「あら、熱盛大歓迎ってとこね。」

キョウスケ「市街地に近づいたら、無駄弾を撃つなよ。」

エクセレン「わかってますって。きれいな街を焼きたくないもんね。」

マサキ「ここは任せてくれ！」

リユーネ「キョウスケ達は敵の母艦を！」

キョウスケ「了解した。」

リュウセイ「ライ、今回は俺がバックスをやる。お前はフォワードに回れ！」

ライ「……気でも使っているのか？」

リュウセイ「そうじゃねえよ！アーチボルドは義理の姉さんの仇なんだろ？」

ライ「・・・お前に気を使われるとはな、俺もずいぶん・・・」

リュウセイ「俺達はチームだ、互いにフォローしあうために組んでんだ。」

ライ「・・・フ、お前がそんなことを言うとはな。」

リュウセイ「へへ、いいから行けよ！」

ライ「了解、先行する！」

カイ「キヨウスケ達が突入出来たか。アイビスとルシアでライディース少尉の援護を！」

イルム「あいつ、まだ頭に血が上ってっからな。ここは任せて、ライの奴のサポートをしてくれ。」

ルシア「了解、行くぞアイビス！」

アイビス「了解！」

エルシュナイデ・カスタム、アステリオンはブースト・ドライブでR-2パワードの傍まで接近する。

アーチボルド「また懲りずに突撃してくるとは・・・いいでしょう、君も姉上の元にとって差し上げましょう。直営部隊で迎撃を。」

ライノセラスの配置されたバレリオンはR-2パスワードへ攻撃を仕掛ける。

ライ「くっ・・・!?!」

その隙にランドリオンがR-2パスワードを包囲する。

ライ「チィッ!!」

リュウセイ「うおおおお!!」

R-1がランドリオンに突撃

リュウセイ「T-LINKナツコオオオ!!」

T-LINKナツクルでランドリオンを殴り飛ばした。

リュウセイ「後ろは任せろ!行け!」

ライ「すまん!」

アイビス「ライデース少尉の援護を!」

ルシア「道を開けるぞ、ライデース!」

エクセレン「色男さん、こっちも援護するわよ!」

エルシュナイデ・カスタム、アステリオン、ヴァイスリッターでR-2パスワードの前方に展開するランドリオンを撃墜していく。

ライ「アーチボルド・・・貴様だけは俺の手で・・・!!」

R-2 パワードはライノセラスに照準を合わせ

ライ「ハイゾルランチャー、シュー!!」

ハイゾルランチャーを撃ち、ライノセラスに直撃させる。

アーチボルド「これはいけませんねえ。」

ライ「くっ・・・まだ動くか!」

ラミア「ライディース少尉、同じポイントを再度狙えるか?」

ライ「無論だ!」

ラミア「ならば、一点集中で!」

ライ「貫く!!」

ハイゾルランチャー、イリュージョン・アローで再度攻撃し、ライノセラスが停止する。

エクセレン「わお! ナイスツインプレイ!」

ライ「仕留めたか・・・?」

ライノセラスのハッチが展開し始める。

キョウスケ「各機、警戒しろ!」

そこから、巨大な機動兵器が姿を現す。

リュウセイ「な、何だありゃ!?!」

アーチボルド「いやぁ危ないところでした。惜しかったですねえライデース君?」

ルシア「アーチボルド……!のこのこを出てきやがったな!」

アーチボルド「これはこれは、ビアン博士のご子息様ではありませんか。おっと、今は無関係でしたね。」

ルシア「お前がDCにいるなんてな……!エルピスでの恨み、ここで晴らす!」

アーチボルド「おやおや、あの時見ていただけの人が言えた義理ですか?」

ライ「アーチボルドオオオ!!」

アーチボルド「おっと、そこまで。あなた方気になりませんでしたか?サミット出席者が何処に行ったのか。」

ライ「何?」

クスハ「まさか……あの戦艦の中に……」

アーチボルド「ああ、その手も考えましたが、彼らはいま安全なシエルターの中にいます。王国の住民や爆薬と一緒にね。」

ブリット「な、何だって!？」

アーチボルド「フフフフフ．．．そういうわけで連邦軍の皆さん。即時戦闘停止の上、武装解除してください。従わない場合は．．．ドカン!ですよ．．．」

リュウセイ「テ、テメエ．．．!」

アイビス「何の関係もない民間人を人質に取るなんて．．．!」

ルシア「毎度ながらあざとい手を使う．．．!」

ライ「要件を飲んだところで．．．貴様が約束を護る保障があるのか．．．!あの時のように!」

アーチボルド「ほお．．．僕が信用できないと?まあ軍人として、テロリストの脅迫に屈するわけにはいきませんか。では、後で言い訳ができるようにしてあげましょう。」

ライ「何．．．!？」

アーチボルド「シエルターは一か所だけじゃありませんからね．．．」

アイビス「まさかあいつ．．．!？」

アーチボルド「では、景気づけにまず一発。」

リュウセイ「待て!!」

アーチボルド「待ちませんよ・・・フフフフ・・・はぐいドッ
カーンっと!!」

アーチボルドが起爆スイッチを押したが

爆発は起こらなかった。

アーチボルド「ハハ・・・ハハハ・・・ハ？」

ブリット「爆発・・・しない・・・？」

ユウキ「どうやら間に合ったようだな。DCの全てがああ男のよう
な卑劣漢ではない。」

カーラ「全ての爆弾処理成功。ユウ、あなたの読み通りだったよ。」

ユウキ「カーラ、よくやってくれた。」

カーラ「本当を言うとね、連邦軍にも同じこと考えて協力してくれ
た人がいたんだ。」

ギリアム「・・・」

ルシア「ギリアム少佐・・・いつの間に・・・!？」

アーチボルド「やれやれ・・・身内に謀れるとは・・・」

キョウスケ「奴の手はブラフだ、一気にカタをつけるぞ!」

リュウセイ「ああ！」

ライ「アーチボルド！今こそその罪、購え！！！」

アーチボルド「そろそろ引き際のようにですね。ですが、僕の楽しみを邪魔してくれたお礼をしておかないと・・・この対特機用アーマードモジュール『グラビリオン』でね！」

アイビス「グ、グラビリオン！？」

ルシア「確かにプランにはあったが・・・開発されていたなんて・・・！！」

アーチボルド「ああそうでした、この武器はルシア君にはよく知っているものですよ。」

グラビリオンは両腕に重力エネルギーを集中させる。

クロ「あ、あれって・・・！？」

マサキ「ブラックホール・クラスター！？」

ルシア「違う！メガ・グラビトンウェーブだ！」

アーチボルド「ご名答！では、その威力を味わってもらいますよ！」

グラビリオンはメガ・グラビトンウェーブを放ち、味方を巻き込み攻撃をする。

アイビス「わあああ！！！」

リュウセイ「うわっ!？」

ライ「ぐう……!!！」

アーチボルド「ハハハハ! どうですか? ヴァルシオン顔負けの威力ですよ!」

マサキ「ぐ……なんて威力だ……!」

ルシア「攻撃力はオリジナルのヴァルシオン同等か……!」

ライ「アーチボルドオオオオ……!!！」

アーチボルド「おやあ……しぶといですねえ……では、もう一発。」

ルシア「まずい……! もう一度あれを食らったら……!」

シャイン「お待ちなさい! それ以上はやらせませんわ!」

ハガネから、フェアリオン・タイプG、タイプSが出撃する。

シャイン「私の国を返していただきます! 覚悟なさいませ!」

アーチボルド「ほお……王女自ら御出陣とは……」

シャイン「民と国を守る……それが私の戦い! ですから、私は戦いに身を投じる覚悟を決めました!」

アーチボルド「・・・それが、何を意味するかおわかりですか？」

シャイン「己と他人の血を流すということでございましょう？その覚悟は出来ています・・・！この赤いフェアリオンはその証！私の国と民を脅かす者に容赦は致しませんわ！」

アーチボルド「高貴なる者の務めというわけですか、結構。」

グラビリオン全身からミサイルが発射される。

ライ「シャイン王女！」

シャイン「システムリンク、弾道よし！」

ラトウーニ「W・I[^]3NKシステム、ダブルモード！」

シャイン「シンクロ！」

フェアリオンがミサイル攻撃をかわし、迎撃をしていく。

アイビス「す、すごい・・・！」

テツヤ「何故あんなことができるんだ・・・！？」

ツグミ「フェアリオン・タイプSとタイプGはW・I[^]3NKシステムでリンクしているんです。シャイン王女の情報予知、転送されたその情報を元にラトウーニ少尉が2機を同時にコントロールしているんです。」

シヨーン「だから、あのような機動が可能になっているということ

ですか。」

ルシア「アイビス、グラビリオンに攻撃して隙を作るぞ！」

アイビス「了解！フルシユート！！」

アステリオンはマシンキャノン、ミサイル攻撃でグラビリオンを牽制

ルシア「貫く！」

エルシュナイデ・カスタムのツイン・プラズマカッターでテスラ・ドライブを破壊しバランスを崩す。

アーチボルド「おつとと！？」

エクセレン「ここ！ラミアちゃん援護射撃！」

ラミア「了解でありんす！」

シャドウランサー、オクスタン・ランチャーEモードでグラビリオンを攻撃する。

アーチボルド「こ、これはいけませんねえ……！！」

ラミア（敗れた者の指導者が戦場に立つとは……だが、それ故に負けられぬということか！）

アンジュルグは弓を引き絞り、グラビリオンに狙いを定める。

ラミア「ファントムフェニックス！！」

ファントムフェニックスはグラビリオンに直撃、機能を停止させた。

シャイン「ラトウーニ、とどめですわ!」

ラトウーニ「はい!」

アーチボルド「こ、これはまずいですね・・・!」

シャイン「託しますわ、あなたに!」

ラトウーニ「受け取りました。あなたから!」

フェアリオン2機がブレイク・フィールドを展開し、グラビリオンに突撃する。

ラトウーニ「ファイナル・・・」

シャイン「ブレイクですわ!」

フェアリオンの合体攻撃　ロイヤル・ハートブレイカーでグラビリオンを貫き、破壊した。

アイビス「すごい・・・!」

ルシア「改めて見ると、とんでもないものを作ったもんだな・・・俺達。」

アーチボルド「ま、こんなところでしょうか。楽しみは次に取っておくしましょう。ASRS展開!」

脱出したガールオンがASRSを展開し、リクセント公国から撤退した。

ライ「アーチボルド……く……！」

ユウキ「我々も撤退する。カーラ、お前達も直ちに脱出しろ！」

カーラ「了解！」

ユウキ、カーラの部隊もリクセントから撤退をする。

クスハ「ブリット君……あの人達のおかげで……」

ブリット「ああ、あいつらもまた何処かで会うような気がする。」

ルシア「ん？」

アイビス「どうしたの？」

ルシア「避難した国民が城の傍で集まっているな。王女、エスコートします。」

シャイン「はい。」

エルシュナイデ・カスタム、アステリオン、フェアリオン2機は城へ降りた。

ジョイス「おお……シャイン様……！」

シャイン「みんな！私が至らぬばかりに、苦勞をかけました！」

ラトウーニ「シャイン王女……………」

アイビス「本当によかった……………」

ルシア「ああ。これで2度、この国は救われた。（だが、早くこの戦いを終わらせなければ、3度目がないとも言えない。もう2度とこんなことが起こらないように…………俺達は戦い続ける。）

ハガネ 格納庫

リュウセイ「しかし、色んな意味でビックリしたな。このフェアリオンには。」

アイビス「う、うん…………。連携戦闘と回避能力に主点を置いた機体だっことは知ってたけど…………まさか、あんな動きをするなんて…………」

エクセレン「ホント、見事にレボリユーションしてたわね。」

ブリット「それ、古くないですかエクセレン少尉？」

リュウセイ「あれ、カザハラ所長とフィリオ少佐が考えたモーションなのかな？」

ツグミ「ま、まさか……………」

イルム「二人で踊りながらモーションデータを入れ込んだんじゃない

いだらうな……」

エクセレン「あらん、意外にそうだったりして？」

ツグミ「そ、想像したくない……。フィリオはともかく、所長のそんな姿は……」

ルシア「……………不本意ながらいい出来だったな。」

アラド「ところで、ラト……なんでそんな格好してんの？」

ラトウーニ「こ、これは……タカクラチーフから、まずは形から最初だけって言われて……」

アラド「新型のパイロットスーツかと思ったよ。で、お前……こいつに乗るの？」

ラトウーニ「外見の方をもうちよつと何とかしてもらえば……」

ツグミ「嘘……。このデザインが気に入らないの……」

ラトウーニ「え……?」

ツグミ「その服、そのリボン……。パイロットと機体の完璧なコーディネートなんだけど……」

ラトウーニ「コ、コーデイナイト……?」

アイビス「そ、そう言えば、タカクラチーフの趣味って……」

ルシア（ああ、それで今後のパイロットスーツもあんな感じに……）

イルム「外見ねえ。なら、装甲を変えなきゃならないな。」

エクセレン「他だと可愛げのない着せ替えになっちゃうんじゃない？」

クスハ「か、可愛げ？」

ツグミ「じゃあ……機体は重くなるし、可愛くなくなってしまうけど、ガーリオンの装甲を……」

リュウセイ「……俺はあれでいいと思うけどなあ。」

ラトウニー「え？」

リュウセイ「とりあえず、機体性能の方に問題はないんだろう？」

ラトウニー「う、うん……」

リュウセイ「じゃあ、あれ……可愛いし、スカートはいてるし。

ラトウニーに似合ってると思っぜ。」

ラトウニー「……」

アラド（スカート……関係あるのかな？）

エクセレン「ていうかどっちを褒めてるのかしら？」

キョウスケ「フェアリオンの方ではないのか？」

ラトウーニ「なら……あのままにする……」

ツグミ「良かった……。私も少尉に似合ってると思っわよ。」

アイビス（や……やっぱり？）

ルシア（そっちでくるか……）

リュウセイ「さて……。そうと決まれば、早速写真を撮っとくとするか。」

ツグミ「じゃあ、私が撮ってあげるわ。フェアリオンと一緒にね。」

リュウセイ「お！ いいねえ、それ！」

ラトウーニ「……」

ツグミ「ほらほら、ラトウーニ少尉も入りなさいな。」

ラトウーニ「え……。？で、でも、リュウセイに悪いから……」

リュウセイ「なに言ってんだ。お前、こいつのパイロットだろ？一緒に撮ろっぜ。」

ラトウーニ「うん……」

アラド「じゃあ、俺も！」

イルム「こらこら、野暮を言うんじゃないの。」

アラド「え？ あ……そ、そうツスね。」

ルシア「あれで本人、自覚してんのかな？」

アイビス「さ、さあ……？」

ツグミ「じゃあ二人共、撮るわよ。」

リュウセイ「おう、頼むぜ。」

ラトウニー「……………」

イルム（親父の奴、あの外見はこれも見越してのことか？……………いや、さすがに考えすぎか。）

304

ハガネ 個室

ルシア「……………」

ツグミ「ルシア、王女の決意は本物よ。」

ルシア「だからって、何も俺達と共に闘うなんて……………」

シャイン「今回の作戦でリクセントは救われました。しかし、他にも同じような国が数多くあるはず。私も、それを救うお手伝い

をしたいのです。」

ラトウーニ「ルシア……やっぱり反対するの?」

ルシア「……ここで反対してるなら、最初から作戦にも参加させてないさ。」

シャイン「それじゃあ……!」

ルシア「ただし、一つだけ条件があります。」

シャイン「え?」

ルシア「必ず、俺とカイ少佐の訓練を受けること。それでいいですね?」

シャイン「はい!望むとこ……いえ、喜んでお受けしますわ!」

ルシア「それと……あの時、父の事を教えてくださってありがとうございました。」

シャイン「いえ、少しでも手助けになったのでしたら、光栄ですわ。」

ツグミ「やっとお礼、言えたわね。」

ルシア「ああ。」

シャイン「あの時は、色々大変だとお聞きしました……でも、無事だなによりですわ。」

ルシア「いえ、大したことではありません。」

ツグミ「そういえば、1週間位時間があつたんだからリクセントに顔を出しておけばよかったのに……」

ルシア「タイプのSの受け取りもあつたし……すぐにもプロジェクトTDに参加したかったからな。」

ツグミ「そんなに慌てなくてもよかったのに……」

ルシア「そういえば……あの時なんでフィリオは1週間も時間を空けたんだ？」

ツグミ「え……?」

ルシア「お茶会位なら2、3日あればヒューストン基地に到着できる。何で1週間も空けたのか今でもわからないんだ……」

ツグミ「そ、それは……身体を休めて欲しかったからじゃないかしら?」

ルシア「別に気にしなくてもよかったのに……まあ、タイプのSの受け取りがおかげで出来ただけだな。」

ツグミ「そ、そうだわ、このパイロットスーツどうかしら?」

ルシア「……これ、王女とラトウーニのか?」

ツグミ「ええ。」

ルシア「何もパイロットスーツまで合わせなくてもいいだろ・・・」
ツグミ「アイビスとルシアだって、アストロノーツのパイロットス
ーツを着てるでしょ？」

ルシア「ああ、あの金魚鉢みたいなの・・・」

ツグミ「金魚鉢言わない。」

ルシア「わ、わかったよ・・・で、それと何の関係が？」

ツグミ「機体とパイロット、双方の相性を合わせることで100%
力を発揮できるの。だから、少尉と王女、フェアリオンに合わせた
パイロットスーツをコーディネートしたってわけ。」

ルシア「あんまり噛み合っていない気がするが・・・」

シャイン「私、これはいいと思いますわ。ね、ラトウーニ。」

ラトウーニ「は、はい・・・」

ルシア「なんだかな・・・（無理やり、話を逸らされた感
じがあるな。別に隠さなかったっていいだろうに・・・）」

第10話 フェアリー・ダンシング（後書き）

ルシア「痛たたたた……」

カイ「ん、どうしたルシア？」

ルシア「最近身体の節々が痛くって……」

カイ「何だ、鍛え方がなつとらんのではないのか？」

ツグミ「でも彼の身体能力は目を見張るものがあります。身体の節々が痛くなることなんて……」

クスハ「そういえば……フィリオ少佐とルシアさんが音楽を聴きながら何か話してましたけど……」

ルシア「お、おいクスハ!？」

カイ「お前一体何をしてたんだ？」

ルシア「いや……あの……フェアリオンのモーションデータの構築を手伝ってくれて……」

ツグミ「そ、それでフィリオとモーションデータの作成を？」

ルシア「あ、ああ……」

カイ「全く、プロジェクトTDで何をしとるんだか……」

エクセレン「でもいいんじゃない？アイビスちゃん達と銀河のアイドルを目指せるかもよん？」

ルシア「できたとしてもバックダンサーしかできねえよ。」

ツグミ「銀河のアイドル……いいかもしれないわ。早速衣装のデザインを考えなくちゃ……」

ルシア「いかん、余計な刺激を与えてしまったか……」

第11話 流星と彗星、激突

アースクレイドル 司令部

???「・・・そうですか。リクセント公国が・・・」

ヴィンデル「そのせいでノイエDCはヨーロッパ侵攻の足がかりを失った。」

???「まあ、私達にとっては大きな問題ではございませんわ。」

ヴィンデル「うむ・・・かえって都合がいいぐらいだ。」

???「例の件に関しては、私から直接バン大佐に伝えますわ。」

ヴィンデル「了解した。」

???「あ、例の件で思い出しましたが・・・例のモノは？」

ヴィンデル「問題ない。既に確保してある。しかし、協力的にするには時間が掛かる。」

???「なるべく早めにお願ひしますね。あの力は利益を生み出すに相当するものですから。」

ヴィンデル「ところで、ミッション・ハルパー決行の日は決まったのか？」

???「まだですが・・・オペレーション・プランタジネットの前

になるようですわね。」

ヴィンデル「妥当な線だな。」

????「その頃、ハガネとヒリュウ改は伊豆基地にいるはず……」

ヴィンデル「伊豆を抑えるのは誰だ？」

????「ケネス・ギャレット少将です。」

ヴィンデル「あの男か……問題ではないな。」

????「いずれにせよ、あなた方シャドウミラーにとってはチャンスですわよ?」

ヴィンデル「言われるまでもない。」

????「では、最後に……。彼らとの交渉の糸口が見つかりそうですわ。」

ヴィンデル「何?本当か?」

????「ええ。うまくいきましたら、ご連絡します。……それでは、ごきげんよう。」

????「が通信を切る。」

レモン「……美しいバラにはトゲがあるって言うけど、あのお嬢ちゃんは別格ね。」

ヴィンデル「彼女のような存在は、時に腐敗の原因となるが・・・
新たな世界を生み出すための力の源にもなる。だが、大抵の者は不
相応の権力を望み、自滅するが・・・彼女は違う。」

レモン「そうね。あの子、根っからの商売人だもの。プロジェクト
TDだって、その実は売り込み手段の一つでしょ。・・・彼らに
対しての。」

ヴィンデル「だろうな。」

レモン「ある意味、純粹なのよ。だからこそ、私達もある程度まで
の手の内を見せられる。切り札は別にしてね。」

ヴィンデル「ああ。ローズが彼らとの接触到に成功すれば、我らが望
む世界はより確実なものとなる。」

レモン「・・・ええ。」

ヴィンデル「ところで、彼女の様子はどうだ？」

レモン「進展なしよ。彼が助けしてくれるとの一点張り、ある意味う
らやましくはあるけど。」

ヴィンデル「あの力・・・ベーオウルフとは似つかぬほど非常識だ
な。」

レモン「女の子は魔法使い・・・ってよく言ったものね。」

ヴィンデル「何としてもあの力をこちらのものにする。闘争の世界
を実現するためにもな。」

レモン（闘争が日常になればこそ、彼女のような存在が重宝される。……ってことね。不本意ではあるけど。）

ハガネ　ブリーフィングルーム

カイ「……敵機との相対距離が100、パターン14で反撃された場合、こちらがとるべき行動は？」

アラド「加速して突っ込んで、相手より先に攻撃する！」

シャイン「いったん距離を取って、相手の攻撃をかわした方がいいと思いますわ。」

ルシア「……シャイン王女が正解です。」

アラド「え？」

カイ「お前は攻撃範囲の差を忘れとる。パターン14だと最悪の場合、相討ちになるぞ。」

アラド「そ、そこはイチバチっことで。」

ラトウーニ「ア、アラド……」

ルシア「イチバチが通用するのはアルトとキヨウスケくらいだ。」

カイ「二人共、接近戦で心がけなければならぬことは何なのか……
・言ってみる。」

シャイン「敵との間合いをちゃんと見極めることのでございませうか？」

アラド「肉を切らせて、骨も切らせることだと思えます！」

ラトウーニ「アラド……それじゃ、やられっぱなしだから。」

ルシア「それじゃ、射撃戦闘での基本は？」

シャイン「自分と相手、双方の射程を見極め、確実に目標に命中させる……ことのでございませうか。」

アラド「突撃しながら撃ちまくる！」

ルシア「アホ！それじゃ弾の無駄使いだ！」

アラド「え、でも戦闘中じゃそんなの気にしてられないツスよ？」

ルシア「……弾薬は無限じゃない、お前のせいで弾薬が使えない機体も大勢出てくる。」

アラド「そ、そこは……突撃あるのみで……」

ルシア「何一つ進歩してねーよ！」

カイ「やれやれ……誰の影響を受けとるんだか。お前はもう一度基礎から叩き込んだ方が良さそうだな。」

アラド「トホホ……よ、よろしくお願いします。」

ルシア「……………」

カイ「どうした、浮かない顔をしているが。」

ルシア「……………なんとなく、昔のことを思い出しましてね……………」

カイ「……………ああ、あいつのことか。」

ルシア「お互いに真正面から突撃して……………カイ少佐に怒られてましたね。」

カイ「そうだったな。だが、お前はすぐに打開策を見出したじゃないか。」

ルシア「1000回掛かりましたけどね。」

カイ「早い方さ。」

ルシア「けど、それが原因であいつは……………」

カイ「お前に責任があるわけじゃない。気にするな。」

ルシア「……………俺が教導隊に入ってから一年半で姿を眩ましたまま……………行方知れずになって……………ギリアム少佐も情報を掴んでないらしく……………」

カイ「そのことなんだが……………DC戦争中に何度か目撃されていたようだ。あいつのゲシュペンストが……………」

ルシア「!?!? 本当ですか!?!?」

カイ「俺も実際この目にした、見間違えるはずがない。あんな仕様のゲシュペンストは他に知らんからな。」

ルシア「それで、今は?」

カイ「連邦軍の情報網を掻い潜り、追跡を免れているようだ。一度DCと交戦したとの記録もある。」

ルシア「……………」

カイ「まったく、何処にも属さずにPTを動かすとは…………一度説教を垂れこんでやらねばな。」

ルシア「…………無事だと、いいんですけどね。」

カイ「…………そうか、それもあってアラドの訓練に付き合つて言い出したのか。」

ルシア「はい、また昔みたいに孤独を感じさせて悲しい思いをさせないようにと…………アラドのパートナーであるゼオラを救い出す手助けをしたいのです。」

カイ「…………そうか。すまん、アイビスのこともあるというのに。」

ルシア「いえ、そちらの方はタカクラチーフとレオナ達に任せてあります。」

アラド「二人して何の話です？」

ルシア「いや、こちらの話だ。」

カイ「さっさとシミュレータールームに行くぞ。」

ハガネ 食堂

ツグミ「結局、かなり負け越したわね。落ち込んでる？」

アイビス「……見ての通りです……」

レオナ「アイビス、模擬戦は模擬戦よ。」

アイビス「え……？」

レオナ「確かに日々の訓練は大切……でも、腕は実戦の中でこそ磨かれていくものだと思うわ。」

アイビス「でも、あたし……」

レオナ「……まだ戦うことに違和感を感じているの？」

アイビス「ちょっとね……。でも、そんなことを言ってもらえない状況なのもわかってる……。目指す先が戦いの向こうにあるのなら、あたしは戦うことをためらわない……」

ツグミ（アイビス……フィリオと同じことを言うのね……）

レオナ「大事な夢があるのなら、今は生き残ることを第一に考えた方がよくてよ。」

アイビス「生き残ること……。」

レオナ「ええ。プロジェクトDであなたのやるべきことが残されているなら。」

アイビス「……そうだよね……。負けたって生きていれば、何度でも挑戦できる……。やるうっていう意志があれば、いつか何だって出来るよね……。」

レオナ「それはあなた次第よ。」

アイビス「ありがとう、レオナ。……またシミュレーターで相手してくれるかな……?」

レオナ「それは喜んで引き受けるけど……。同じメンバーのルシアにも頼んではいかがかしら?」

アイビス「ルシアとは何度も模擬戦をしてるから……。他の人と模擬戦をすれば、もっと力がつくんじゃないかなって……。」

ツグミ「そうね、毎度同じ人じゃマンネリ化しちゃうものね。それに、一度アイビスはルシアに勝ったことがあるし。」

レオナ「え、ルシアが?」

アイビス「ぐ、偶然だよ……。」

レオナ「それでもすごい結果じゃない。誇りにしてもいいくらい。」

ルシア「アイビス、いるか！」

ツグミ「ホラ、噂をすれば何とやらってね。」

レオナ「あなた、一度アイビスに負けたんですってね？」

ルシア「って何で知ってんだよ！？……まさかタカクラチーフ
！」

ツグミ「あらいけない……」

ルシア「ってそういうことじゃなくて！スクランブルがかかった。
シロガネに敵部隊が向かっているらしい！」

アイビス「シロガネが！？」

ルシア「ああ、足の速い俺とアイビスで救援に向かう。すぐにこっ
ちにも敵が来るぞ！」

レオナ「わかったわ。」

地中海 沿岸

量産型W「W16、こちらへ接近してくる機体を感知した。」

エキドナ「……来たか。」

ゲシュペンスト・タイプSV、アステリオンが戦闘区域に進入

アイビス「！ シ、シロガネが！！」

ルシア「遅かったか……！」

エキドナ「あの機体は……」

アイビス「まさか、あいつら……シロガネを持っていく気!?!」

エキドナ「間違いない、プロジェクトTDの試作機、ゲシュペンスト・タイプSの改造機か。」

アイビス「このままじゃ、まずい……。何とかしなきゃ……！」

ルシア「待て、何かが接近してくるぞ。」

アイビス「！ こ、この反応は!?!」

そこに、スレイのカリオンが出現した。

スレイ「……やはり、アステリオンか！」

アイビス「スレイ！ スレイなの!?!」

ルシア（何故このタイミングでスレイが……？）

スレイ「アイビス……！」

アイビス「スレイ……戻ってきてくれたんだね……」

スレイ「……………」

アイビス「状況は見ての通りよ！シロガネを奴らの手から救うのに手を貸してよ！」

スレイ「……………お前がアステリオンに乗っているということは、ツグミもお前を認めたということか……」

アイビス「スレイ……？」

スレイ「忘れたか、流星！次に会う時は敵同士だと言ったのを！」

アイビス「！」

スレイ「今の私はノイエDCのスレイ・プレステイ少尉……お前の敵だ！」

ルシア「何！？」

アイビス「どういうことよ、スレイ！ノ、ノイエDCって……なに考えているのよ！？」

エキドナ「……………スレイ少尉、お前の任務は後方の警戒だったはずだが？」

スレイ「邪魔者は私が引き受ける。そちらはそちらの任務を遂行しろ。」

エキドナ「（命令に違反しても決着をつけたい相手と言ったことか。・・・こちらの時間が稼げるな。）いいだろう。」

アイビス「スレイ・・・あんた！」

スレイ「・・・・・・・・」

ルシア「よりによってDCに下るとはな・・・！」

量産型W「・・・主要ブロックの制圧、及び操艦方法の学習完了。」

エキドナ「よし、お前達はシロガネで後退しろ。」

量産型W「了解。」

シロガネが空域から後退していく。

アイビス「ああ！シロガネが！」

スレイ「他人の心配をするより、自分のことを考えるのだな。」

アイビス「！」

スレイ「お前がアステリオンに乗るのなら、私はお前をコックピットから引きずり降ろす！」

アイビス「スレイ……。フィリオは・・・戦いが続くことにずっと心を痛んでいた・・・」

スレイ「……………」

アイビス「でも、あの人はそれを終わらすためにシリーズ77の戦線投入を決意した……自分の心押し通して……！」

スレイ「……………」

アイビス「なのに、どうしてあなたは自ら戦いを広げようとするのよ！？あんだ、本当に宇宙を飛ぶ気があるの！？」

スレイ「黙れ！宇宙宇宙と……お前はそれしか頭にないのか？」

アイビス「それがあたし達のプロジェクトTDじゃないの！」

スレイ「やはり、お前とは相容れないようだ……」

アイビス「スレイ！！」

スレイ「見せてもらうぞ、アイビス！お前がアステリオンに相応しいかどうかを！」

ルシア「……………確かめる必要はない。」

スレイ「何……！？」

ルシア「今のお前に何を言っても理解できないだろう……だから……」

タイプSVはブーストでカリオンに接近する。

ルシア「プロジェクトTDの機体を使い、戦いを拡大する真似をするなら・・・そのカリオンを破壊する!!」

エキドナ「傍観しているわけにもいかんな・・・」

ラーズアングリフはマトリクス・ミサイルを発射し、タイプSVを足止めする、

ルシア「チツ、邪魔をするな!」

アイビス「ルシア、ここは任せて。」

ルシア「アイビス・・・?」

アイビス「スレイを認めさせるには・・・あたしが戦って勝つ以外に方法はないよ・・・!」

ルシア「・・・わかった、任せる。」

エキドナ「時間を稼がせてもらうぞ。」

ルシア「あの行動パターン・・・一度テスラ研で遭遇したパイロットか!」

エキドナ「フォールディング・ソリッドカノン、展開。ターゲット・ロック。」

ラーズアングリフは砲身を展開し、タイプSVに狙いを定める。

エキドナ「ファイア！」

Fソリッドカノン撃つが、タイプSVは回避し接近する。

ルシア「砲撃戦用の機体は、近接戦が脆弱だ！仕留める！」

タイプSVはメガ・プラズマカッターで斬りかかるが、

ラーズアングリフはレーザー・ブレードで受け止めた。

ルシア「何！？」

エキドナ「弱点を補完するのは基本中の基本だ。」

アイビス「ルシア！」

スレイ「人の心配をしている場合か！」

カリオンがミサイルでアステリオンを牽制する。

スレイ「アイビス！　どんな手段を使って兄様をたぶらかした！？」

アイビス「た、たぶらかしたって、何のこと！？」

スレイ「とぼけるな！その白銀の機体は何よりの証拠！私はお前を許さない！私の誇りに賭けて、お前の全存在を否定してやる！！」

カリオンはG・ドライバーを撃ち、アステリオンに掠めさせる。

アイビス「くっ、この程度で！」

アステリオンはブレイク・フィールドを展開し、カリオンへ突っ込む。

スレイ「突っ込んでくるだけでは！」

カリオンは咄嗟に回避したが、アステリオンは旋回しカリオンを追いかける。

スレイ「何！？」

アイビス「ブレイク！！」

ソニック・ブレイカーでカリオンにダメージを与える。

スレイ（アイビスの腕が上がっているだと……！？ルシアだけではない……ツグミのコーチによるものか……！）

アイビス「スレイ、まだ遅くはない……。あたしと帰ろうよ……。そして、一緒に星の海へ……」

スレイ「何が星の海だ！お前に私の気持ちがあわかってたまるか！その機体はやはり緋色に塗られるべきだったのだ！」

アイビス「スレイ……！あんた、まさか……それを気にして……！？」

スレイ「黙れ、アイビス！お前は流星……。そして、私はお前を敗北の闇に落とす彗星だ！！」

アイビス「そこまで言うなら見せてやる・・・！あたしだってアステリオンと一緒に成長しているんだっ！！」

アステリオンは変形しカリオンへ突っ込む

アイビス「スレイ！もう今までのあたしじゃない・・・！マニユーパーRAMVs！スレイ、行くよ！」

マシンキャノン、ミサイルを予測軌道へ撃ちまくる。

アイビス「アステリオンならやれる！相手がスレイだろうと！」

ブレイク・フィールドを展開し

アイビス「軌道を見切って・・・突っ込む！！」

スレイ「それがどうした！」

カリオンへ突っ込むが、カリオンは全て回避する。

スレイ「貴様の攻撃など全て見切っている・・・！マニユーパーRAMVsだろうと同じことだ！！」

カリオンのG・ドライバーでアステリオンは小破してしまふ。

アイビス「ダメだ・・・！スレイのスピードが追えない！」

ルシア「マニユーパーRAMVsをかわした・・・！？」

スレイ「RAM系のマニユーパーが出来たからと言って調子に乗る

な・・・！私にお前ごときのテクニクが通用するものか！

アイビス「く・・・！」

スレイ「悔しければ、スペシャルレベルのマニューバーでもやってみせるのだな！」

エキドナ「・・・勝負はついたようだな。少尉、直ちにそいつを撃墜しろ。」

スレイ「そ、それは・・・！」

エキドナ「どうした？あの女はお前の敵ではないのか？」

スレイ「・・・」

エキドナ「ならば、私が撃たせてもらおう。」

ラーズアングリフはアステリオンに照準をいれ

エキドナ「範囲攻撃実行。」

マトリクスミサイルでアステリオンを攻撃する。

アイビス「駄目だ・・・！回避できない・・・！？」

ルシア「アイビス！！」

タイプSⅤがアステリオンの前に立ち、マトリクスミサイルの直撃を受ける。

アイビス「ルシア、大丈夫!？」

ルシア「タイプSなら多少の無茶は効く・・・それに言っただろ、お前が夢のために戦うなら、俺はその夢を護るために戦うとな!」

アイビス「え・・・!？」

スレイ「ルシア・・・やはり貴様は・・・」

エキドナ「・・・追手が来たか。」

そこにハガネが進入してくる。

スレイ「ハガネか・・・!」

ツグミ「カリオン01・・・!スレイあなたなのね!？」

スレイ「・・・」

レオナ「スレイ・プレスティ・・・あなたとこんな形で再会するとはね。」

スレイ「レオナ・・・レオナ・ガーシュタインか。」

タスク（なるほど・・・レオナと同じ感じの子だな・・・）

レオナ「・・・元の鞘に収まったということかしら?」

スレイ「そうだ。お前と違ってな。」

レオナ「でも、収まる所を間違えているのではなくて？」

スレイ「・・・！」

テツヤ「エイタ、シロガネの反応は！？」

エイタ「レーダー圏内から離脱しつつあります！」

テツヤ「な、何っ！？」

ダイテツ「追跡を続ける！見失ってはならん！」

エイタ「りよ、了解！」

カイ「まさか、連中の目的がシロガネの撃沈ではなく、拿捕だったとはな。」

イルム「リクセント奪還に対する意趣返しだとも？」

カイ「スペースノア級は連邦軍のフラッグシップだからな。あり得る話だ。」

キョウスケ「こちらの士気低下と使い勝手のいい戦闘母艦の入手・・・
・一石二鳥というわけか。」

ライ「そのためにわざと少戦力でシロガネを誘き出したか・・・」

エクセレン「あらあら、あの陰険艦長ちゃん、まんまと敵の罠にはめられたってわけね。」

キョウスケ「俺達もそうだ、まんまと奴らの手にはめられたのだからな。」

ツグミ「アイビス、応答して！無事なの！？」

アイビス「な、何とか・・・」

量産型W「母艦用ASRS導入完了。」

エキドナ「了解。各機、撤退を開始せよ。スレイ少尉、お前も撤退しろ。」

スレイ「何を言う、エキドナ！私はまだ戦えるぞ！」

エキドナ「トドメをためらうようでは無理だな。」

スレイ「貴様・・・！」

エキドナ「お前は直ちにシロガネを追尾し、護衛しろ。それで先程の命令違反を不問にする。」

スレイ「・・・了解した・・・」

アイビス「ま、待ってよ、スレイ！」

スレイ「アイビス、今日のところは見逃してやる。だが、私はお前を許さない。お前が飛び続けるのなら、必ず闇へ消えていく流星にしてやる・・・！この私の手でな！」

カリオンはブースト・ドライブでシロガネへと向かう。

アイビス「スレイ……！」

ルシア（ だけは銀河は往けない……何で理解しようとし
ないんだ……！ ）

量産型W「ASRS、展開準備完了。」

エキドナ「早急に展開し、撤退せよ。」

エイタ「!? シロガネがレーダーから消えました！」

テツヤ「何っ!?」

ダイテツ「まだレーダー圏内のはずだ！」

エイタ「し、しかしレーダーから突然反応が……！」

ラミア（ASRSか……シロガネに導入できるほどのものを用意
していたとは……前もってシロガネ拿捕を計画していたのかも
しれんな。）

ダイテツ「全機に一度帰還命令を出せ。補給作業終了後、再発進・
……シロガネの搜索任務に就かせろ。」

テツヤ「りよ、了解です……。」

ハガネ 食堂

ツグミ「また落ち込んでるの？」

アイビス「……見ての通りです……」

ツグミ「ほらほら……顔を上げて。あなたのためにトレーニングメニューを作ってみたのよ。」

アイビス「え……？タカクラチーフがですか？」

ツグミ「実はね……TDの時からトレーニングメニューはフィリオと私が作っていたのよ。」

アイビス「知らなかった……。チーフはシステムエンジニアだと思ってたから……」

ルシア「まあ……アイビスの場合は目の前のことで精一杯だったわけだから……」

ツグミ「私だってTDに参加した以上、宇宙飛行士としての基礎課程はクリアしたわよ。もつとも、私の専攻はナビゲーターだったから……あなた達とは別コースだったけどね。でも、実技はともかく理論とコーチングは自信あるわよ。」

アイビス「そうだったんですか……。まさか、チーフはあたしの教官だったなんて……」

ツグミ「このメニューはあなたが出撃した際のバトルデータを分析して作ったものだから……TDの時よりもより実践的で、よりあなた個人に即したものになっているわ。」

アイビス「じゃあ、あたし・・・強くなれるんですか？」

ツグミ「それはあなた次第ね。」

アイビス「あたし、やります！強くなれるんなら何だって！」

ルシア「その意気だ。」

ツグミ「・・・何でも？」

アイビス「はい！」

ツグミ「じゃあ、一つだけお願いがあるんだけど。」

アイビス「あ・・・あの・・・もしかして、服のことですか・・・？」

ツグミ「え・・・？」

アイビス「チーフの趣味は・・・女の子にフリフリの格好をさせることだって聞いたことが・・・」

ツグミ「・・・間違っではないけれど、私だって着せる相手は選ぶわよ。似合う似合わないを考えてね。」

アイビス「嬉しいような・・・悲しいような・・・」

ルシア「さり気にひどいなタカクラチーフ。」

ツグミ「心配しないの、アイビス。あなたは確かに落ち込みやすく緊張に弱くて、口下手で・・・人見知りで、世間知らずで、照れ屋で、堅物で、子供っぽくて、恋愛観なくて凸凹少なめのスタイルで・・・」

ルシア「その何が悪い!!」

アイビス「え・・・ええ・・・!!?」

ツグミ「え・・・ちよつと何ルシア・・・声荒げて・・・!!?」

ルシア「あ!・・・あえ〜とあのですね・・・」

ツグミ「ちゃんと最後まで聞きなさいよ。それでもアイビスには誰にも負けないものを持っているわ。」

アイビス「それって・・・」

ツグミ「内緒よ。・・・それよりも私のお願い・・・今日から、私のことはツグミって呼んで。」

アイビス「え・・・!?」

ルシア「うん?」

ツグミ「今まではシステム開発チームのチーフとテストパイロットだけど・・・フィリオとスレイが帰ってくるまでは、私達三人がプロジェクトTD・・・私達はお互いをパートナーと認め合い、助け合って頑張っていかなくちや。」

アイビス「タカクラチーフ……」

ツグミ「そうじゃないでしょ?」

アイビス「は、はい……ツグミ……!」

ルシア「……堅いな。」

ツグミ「まあ良しとしましょう。改めてよろしくね、ルシア、アイビス。」

アイビス「こっちこそ……ツグミ。」

ルシア「ああ……ツグミ。」

ツグミ「アイビス……宇宙を飛びたいの?」

アイビス「もちろん!」

ツグミ「失敗した時は……?」

アイビス「何度でも挑戦する……。決して諦めずに……!」

ツグミ「その気持ちを忘れないでね。あなたはきっと強くなれるわ。」

アイビス「了解!」

ツグミ（フィリオ……私にも少しずつだけどわかってきたわ。あなたがアイビスを選んだわけが……私はあなたを待ちます……）

アイビスとルシアの三人で少しずつ夢を育てながら・・・)

第11話 完

第11話 流星と彗星、激突（後書き）

アラド「うう・・・また負けたッス。」

ルシア「あのな・・・いい加減考えずに突撃をやめろよな。」

ラトウーニ「でも、ルシアはアラドの攻撃を全て見切ってたわね。」

ルシア「昔取った杵柄ってやつだ。」

アラド「な、なるへそ・・・」

ルシア「ま、今回はここまでにして飯にしよう。」

アラド「よっしゃ！飯だ飯だ！」

ルシア「アラド、何か忘れてないか？」

アラド「・・・・・・・・・・あ！」

シャイン「何かありますの？」

ルシア「今回の模擬戦で一度でも被弾させたら、飯を奢る約束をしておいてね。」

ラトウーニ「え、でも全然当てられなかったけど・・・」

ルシア「逆に一発でも当てられなかったら、おかわり禁止にするって約束もしててな。」

アラド「そんなあゝ、おかわり抜きなんて俺にとっては死活問題ッス。」

アイビス「大丈夫だよ、アラド。あたしも同じだから。」

アラド「ヘッ？何ですか？」

アイビス「あたしも一発も当てられなかったからチーズケーキ2つまでしか食べられないんだ。」

アラド「そ、そうなんスカ・・・お互い苦労しますね。」

ルシア「大体から食べ過ぎも良くないんだ。少しは自分を律しろお前ら。」

アイビス「は、はい・・・」

アラド「努力するツス・・・」

第12話 仕組まれた子供達

ハガネ シミュレータールーム

アラド「こいつでもらった！行け、リボルビング・ステエエエエク
！！」

ライ「いい踏み込みだが・・・こちらの読み通りだ。」

アラドの乗るアルトアイゼンはリボルビング・ステークでR-2パ
ワードを貫こうとするが

紙一重で回避される。

アラド「か、かわされた!？」

ライ「詰めが甘いぞ、アラド！」

R-2パワードのビーム・チャクラムでアルトアイゼンを破壊する。

アラド「ま、またやられた!！」

カイ「バカモン！相手との間合いに気をつけると何度言ったらわか
る!！」

アラド「す、すみません！」

カイ「罰だ！廊下に立って頭を冷やしてこい!！」

アラド「バ、バケツつきで？」

カイ「ああ、今度は三つだ!!」

アラド「りよ、了解ッス。」

エクセレン「あらあら手厳しいことで……教導隊にいた時もある感じだったの？」

ルシア「いや……もうちょっと厳しかった……」

カイ「まったく、あいつは……」

ライ「……やはり、あの戦い方が身体に染みついているようですね。」

カイ「どう思う？」

キョウスケ「接近戦に関しては以前より腕を上げています。アルトを短期間であそこまで使いこなせています。」

ライ「その長所を伸ばす方向でいいと思いますが……現状ではバランスが悪いですね。」

カイ「ま、矯正中だからな。」

ライ「……彼を見ていると昔のリユウセイを思い出します。」

カイ「確かに……あいつも突撃馬鹿だった。」

ライ「……今も馬鹿ですが。」

エクセレン「あらら身も蓋もない……」

ライ「しかし、この間のリクセント奪還作戦の時のように、臨機応変な対応ができるようになっていきます。DC戦争中とは違い、今では無理して奴に合わせる必要もなくなりました。」

カイ「……やはり、アラドには相方がいた方がいいということか？」

ライ「ええ。他人と呼吸を合わせることから学ぶ物も多いでしょう。」

カイ「……そうだな。（だが……奴のパートナーとなるべき者は……）」

ハガネ 格納庫

シャイン「器用ですね……頭の上にバケツを乗せて立つなんて」

アラド「あの、王女様……見せ物じゃないんすけど。」

アイビス「また怒られたの？カイ少佐に……」

アラド「ご名答ッス。」

ルシア「これで何回目だアラド？」

アラド「じゅ、15回くらいツスカね・・・」

リュウセイ「模擬戦の相手は誰だったんだ？」

アラド「ライディース少尉のR-2パワードツス。」

ラトウーニ「アラドの機体は？」

アラド「アルトアイゼン・・・。キョウスケ中尉からも許可が下りたし・・・接近戦でいただきだっと思ってたんだけど・・・結果は輪っかでゴツン。あれ、ホントに砲撃戦用？」

リュウセイ「器用だからねえ、あいつ。」

シャイン「さすがライディ様でございますわ。」

リュウセイ「それに、アルトは扱いが難しいからなあ。リーチも短いし。」

アラド「さつき思い知ったツス。とてもじゃないけど、キョウスケ中尉みたいには・・・」

シャイン「でも、頑張ってくださいませ。私応援しちゃったり・・・あ、いえ、応援致しますわ。」

アラド「俺も王女様みたいにラトが相方だといっただけ・・・」

ラトウーニ「それ・・・ゼオラの役目だと思う・・・」

アラド「・・・ああ、わかってる。」

アイビス「その子、あなたのパートナーで・・・確か、今は・・・」

アラド「ええ・・・」

ルシア「・・・」

アイビス「頑張れ、アラド。」

アラド「へ？」

アイビス「その子を助けるのは大変だろうけど・・・そんな顔してたら、出来ることも失敗しちゃうよ。ほら・・・いつもの根拠のない自信を見せてみなよ。あんたの場合、その方がうまくいくよ、きつと。」

アラド「ええ、頑張るツス。」

ルシア「ほ・・・まさかアイビスがアドバイスするなんて・・・」

アイビス「私だって諦めずに頑張ったからアステリオンにも乗れて・・・ルシアに一度でも勝ったから、だからアラドも諦めなければ絶対ゼオラを助けられるよ。」

ルシア「ああ、その時が来たら全力でバックアップする。」

アラド「ありがとうございます！」

リュウセイ「……そうそう、さっきハガネにビルトビルガーが運ばれてきたらしいぜ。」

アラド「え？本当ツスか!？」

リュウセイ「ああ。セッティングが終わったら、すぐにテストするんじゃないか?」

アラド「じゃ、じゃあ……」

その時、格納庫に警報が響く。

リュウセイ「な、何だ!？」

ライ「リュウセイ、出撃命令が出たぞ。」

リュウセイ「敵はノイエDCか!？」

ライ「ああ……。それもビルトファルケンだそうだ。」

アラド「!?!」

ラトウーニ「まさか……ゼオラが!？」

アラド「こ、こうしちゃいらねえ!」

アイビス「どこへ行くの!？」

アラド「俺、先に出ます!?!」

ライ「待て、ブレードはまだ整備中だぞ！」

アラド「なら、リオンで出ます!!！」

リュウセイ「アラド！ 待て!!！」

地中海沿岸

ゼオラ「……来たわね。」

アラド「ゼオラ!!！」

ゼオラ「あなたを待っていたわよ、アラド・バランガ」

アラド「それは……俺がラトを連れ去った『敵だからか?』」

ゼオラ「そうよ。あなたを倒せば、あの子も目を覚ます。きっと、私やオウカ姉様の所へ戻ってくるわ。」

アラド「そんなわけがあるか！ラトは自分の意志でハガネに乗ってんだぞ！」

ゼオラ「それはあなた達があの子にそう思い込ませているからですよ!!！」

アラド「そりゃこっちの台詞だ！お前やオウカ姉さんは、メイガスやアギラばあさんに騙されてんだ！」

ゼオラ「馬鹿なことを言わないで！あなたなんか私達の絆が・・・
スクールの絆がわかるもんですか！」

アラド「わかるさ！わかるから、お前やオウカ姉さんを助けてえんだ！」

ゼオラ「何ですって・・・！？」

アラド「俺はこっちに来て気付いたんだ・・・アードラーやアギラばあさんは、俺達を兵器として利用するために・・・自分の研究のために都合のいいことばかり教え、信じ込ませてきたんだ。」

ゼオラ「そんなの嘘よ！」

アラド「じゃあ、俺達に昔の記憶がねえのは何でだ？何故、俺達は番号で呼ばれていたんだ？」

ゼオラ「俺達、ですって！？ラトから聞き出した情報を自分のことみたいに語らないで！」

ルシア「アラド、駄目だ。」

そこにゲシュペンスト・タイプSVが進入する。

アラド「ルシア中尉！？」

ルシア「完全にそう信じ込まされている・・・なかなか助け出すのは難しいぞ。」

アラド「それじゃあ・・・！」

ルシア「だが、諦めずに説得し続ければ暗示に綻びが出てくる。その隙を狙ってゼオラを助けるんだ。」

アラド「は、はい！」

ゼオラ「……………」

アラド「いいか、ゼオラ。アギラばあさんは俺達のことを人間と思っちゃいねえ……！あいつにとっちゃ俺達は物も同然！ただの実験台やサンプルに過ぎねえんだよ！」

ゼオラ「いい加減なことを言わないで！母様はそんな人じゃないわ……！」

アラド「な……！こ、このわからず屋……！」

ゼオラ「誰がわからず屋よ!？」

アラド「お前だ！ちったあ頭の方もそのでっけえ胸並に柔らかくしたらどうだ……！」

ゼオラ「ま、また胸のことを言ったわねえっ……！」

ルシア「!？」

アラド（！また、だと!?も、もしかして……俺と一緒にいた時の記憶がまだ残ってるのか!?だったら、ラーダさんが言ったみてえに昔のあいつを取り戻せる……!?）

ルシア（……形はどうあれ、暗示に綻びが出てきたか……これはチャンスだ。）

ゼオラ「やっぱり、あなただけは許せない……！必ず私の手で倒す！」

アラド「ふ、ふふふ……」

ゼオラ「何がおかしいのよ!？」

アラド「やれるもんなら、やってみる。けどな、俺の悪運の強さと身体の頑丈さをなめんじゃねえぞ。」

ゼオラ「言ったわね！」

アラド「俺はタダじゃやられねえ！力づくでもお前を取り戻してみせる！ファルケンと一緒にな！」

ゼオラ「上等よ！かかってきなさいっ!!！」

ルシア「俺が牽制する、その隙にファルケンに取り付け！」

アラド「了解ッス！」

そこに、ビームが2人の間に通り引き離される。

アラド「うわっ!？」

ルシア「何だ！」

オウカ「あなたに邪魔はさせません。」

そこにラピエサージユが戦闘区域に進入する。

アラド「オ、オウカ姉さん!？」

ルシア「オウカ・・・あれがアラドの姉さんか・・・」

オウカ「アラド・バランガ、あなたに姉呼ばわりされる覚えはありません。」

アラド「!!！」

ルシア「どうなっている、アラド?」

アラド「前は俺のことを弟って言ったのに・・・!」

ルシア「記憶操作をされたか・・・」

オウカ「聞き捨てなりませんね、記憶操作を行っているのは、あなた達の方でしょうか? 私達の元からラトを連れ去り、自分達の兵器に仕立て上げた・・・」

ルシア「でたらめを・・・!」

オウカ「よくも私のラトを・・・兵器として利用してくれましたね・・・!」

アラド「ね、姉さん・・・!本気なのか!?俺達のことを本気で忘れちまつてるのか!？」

オウカ「私にあなたのような弟はいません。ラトをたぶらかした罪・
・あなたの命をもって償いなさい。」

アラド「！くそ・・・！ゼオラを同じだってのかよ・・・！」

ルシア「かなり強力な操作をされているな・・・それにあの機体・
」

アラド「・・・・・・・・・・」

ルシア「アラド、お前はゼオラに集中しろ。オウカの相手は俺がする。」

アラド「は、はい！」

アラドのリオンは、ビルトファルケンと戦闘に入った。

アラド「くそつ、さすがにはええぜ！」

ゼオラ「リオンでファルケンに追いつけるものですか！」

アラド「くそつ！撃墜王・・・じゃねえ、撃墜され王の意地と底力を見せてやるぜ！」

ビルトファルケンはオクスタン・ライフルEモードを撃つが、リオンに掠めた程度で終わる。

アラド「うわつとと！？」

ゼオラ「そんなモーシヨンパターンじゃいい的ね！」

ルシア「あのモーシヨンパターン・・・あの時の・・・！」

アラド「いいんだよ！このデータは俺好みだからよ！」

ゼオラ「だからいつまでたっても負け越し・・・！？ な、何言ってるの私・・・」

ルシア「その調子だ、アラド！」

オウカ「やらせはしません！」

ルシア「おっと、お前の相手はこの俺だ。」

オウカ「あなた達を倒した後で、ラトを取り戻させてもらいます！」

ルシア「ラトウーニは自分の意志で俺達のところにいる！何度も言うが騙されているのはお前らの方だ！」

オウカ「性懲りもなく同じようなことを・・・！」

ルシア「ラトウーニは俺達の仲間だ！たとえ姉だろうと容赦はせん！」

オウカ「愚かな・・・私達の絆も知らずに・・・！」

ラピエサージュは両肩からミサイルを発射するが、タイプSVはかわし接近する。

ルシア「射程内！行け！」

タイプSVはハンドレールガンで攻撃をするが、ラピエサージユは素早く回避する。

ルシア「かわされた！？」

オウカ「あなたのモーションデータは既に把握済みです。非常に優秀なデータで役にたっていますよ。」

ルシア「余程スクールでは俺のデータが人気らしいな・・・けどな・・・」

タイプSVは胸部ハッチを開きエネルギーを集中させる。

ルシア「自分のパターンは自分がよく知っている！ハイメガ・ブラスターキャノン！！！」

ハイメガ・ブラスターキャノンを放ち、ラピエサージユ左ウィングに掠める。

オウカ「小賢しい・・・！こうなったら・・・ゲーム・システム起動・・・！シンクロ！」

ルシア「！？ ゲーム・システムだと・・・！？」

オウカ「さあ、覚悟なさい！」

ラピエサージユはミサイルを発射しタイプSVを牽制、O・OランチャーBモードを直撃させた。

ルシア「ぐっ!?!」

オウカ「流石のあなたもゲーム・システムには対応しきれないようですね。」

ルシア「わかっているのか……!それを使えばお前は……!」

オウカ「あなたに心配されずとも、私は以前からゲーム・システムへの適応調整を受けている……」

ルシア「たとえそのシステムを使いこなしてもな……お前がアキラ・セトメに操られていることに変わりはないぞ!」

オウカ「お黙りなさい。母様を愚弄することは許しません。」

ルシア「救援が来るまで時間が掛かる……何とかアラドのために足止めをせねば……!」

ゼオラ「アラド・バランガ!そんな機体で私とファルケンに勝つことなんて出来ないわよ!」

アラド「勝つつもりなんてねえ!」

ゼオラ「何ですって!?!」

アラド「俺はお前との約束を守りてえだけだ!」

ゼオラ「約束!?!何よ、それ!?!」

アラド「どうせ言っても、今のお前にゃ猫の耳・・・じゃねえ、馬の耳に小判だからな！」

ゼオラ「それを言うなら、馬の耳に念仏！猫に小判よ！」

アラド「ええい！後のことはお前を連れ戻してから考えるっ！」

ビルトファルケンのオクスタン・ライフルBモードをかわし、マシンキャノンを当てる。

ゼオラ「くっ！何でリオンに手こずらなきゃならないのよ！！」

アラド「リオンだって、戦い方次第でやれるさ！それに、俺だっていつまでも昔の俺じゃねえ！！」

リオンがビルトファルケンに取りつく直前、遠方射撃がリオンに直撃する。

アラド「ぐああっ！！」

ゼオラ「！」

ルシア「アラド！」

そこにアーチボルドの部隊が現れる。

アーチボルド「ふむ・・・。確かに以前と比べて腕は上がっているようですね、アラド君。」

アラド「あ、あんたは！？」

ゼオラ「少佐……！」

アーチボルド「上手く獲物を釣れたようですね、ゼオラ君。」

ルシア「アーチボルドか……！」

アーチボルド「ルシア君がいるということは、いずれはアラド君のお友達……そして、プリンセス・シャインが釣れる。」

アラド「な、何!?？」

アーチボルド「リクセント公国ではいろいろとお世話になりましたね……アラド君、いえ、ブロンゾ28。」

アラド「……！」

ルシア「ブロンゾ28……？」

アーチボルド「スクールにいたものは番号で呼ばれています。ちなみにゼオラ君はブロンゾ27、ブロンゾ28は、アラド君の本来の名前のようなものです。」

アラド「お……俺を……！」

アーチボルド「おや、何か気に障りましたか？」

アラド「それをその名で呼ぶんじゃないやねええっ……！」

リオンはアーチボルドのエルアインスにレールガンを撃ちまくり突

つ込むが、すべて回避される。

アラド「かわされた!?!」

アーチボルド「ふふふ、怒りで我を忘れましたか。若いですねえ・
・アラド君。それに、この僕に勝てると思いますか?」

アラド「!?!」

アーチボルド「ふふふ・・無謀にも程がありますよ!」

エルアインスのツインビームカノンでリオンのテスラ・ドライブが破壊される。

アラド「うあああつ!?!つ、翼がやられた!?!」

アーチボルド「ふふふ、ひと思いには殺しませんよ。他の獲物を狩り出すためにもねえ。」

アラド「う、うあああつ!?!」

エルアインスはG・リボルヴァーでリオンを攻撃

アラド「ぐあつ!?!」

ルシア「アラド!」

オウカ「逃がしません!」

ラピエサージユはタイプSVの前に出て5連チェーリングンを撃ち牽

制する。

ルシア「くそ！これじゃアラドを助けに行けない……！」

アーチボルド「さあ、楽しいダンスの始まりです！」

エルアインスはリオンの右足を撃ち抜く。

アラド「うあうっ！！！」

ゼオラ「……！！！」

アーチボルド「ふふふ……はははは！」

次に左足を破壊

アーチボルド「あゝっははははは！この感覚、たまりませんねええ！！！」

左腕のミサイルポッドを破壊

アーチボルド「格別、格別です！無抵抗の人間を相手にするのか！やはり、格別う！！！」

右腕を破壊し、リオンを墜落させた。

ゼオラ「……（何なの……？この気持ち……あいつは敵……。私の敵……。なのに……。どうして痛むの……。私の心が……。？）」

アーチボルド「ふうう……これで気持ちか幾分か晴れましたよ。」

ルシア「アラド！応答しろ、アラド！」

アラド「……………」

アーチボルド「おや、アラド君……もう終わりですか。どうやら僕の見込み違いだったようですね。」

ゼオラ「……………」

アーチボルド「では、ゼオラ君。最後の念押しは君の手で。」

ゼオラ「……………」

アーチボルド「どうしたのです？それがあなたの任務でしょう？」

ゼオラ「……………はい……………」

アーチボルド「さあ、トドメを（あなたのパートナーが二度と立ち直れないようにね。）」

ゼオラ「ターゲット・ロック……………」

ルシア「駄目だ……………間に合わ」

ラトウーニ「ゼオラ、駄目！！」

ゼオラ「！ラト！？」

アーチボルド「あの機体は・・・！」

戦闘区域にアステリオン、R-1、ビルトビルガーを連れたフェアリオン2機が進入する。

シャイン「よくもラトのお友達を！許しませんわ！」

アーチボルド「ふふふ・・・待っていましたよ、プリンセス。」

シャイン「!？」

アーチボルド「あなたのような子供にコケにされたままでは、僕の沽券に関わりますのでね。ここで屈辱を晴らさせていただきます。」

シャイン「勝手に言ってなさいませ！」

アイビス「アラドは!?!あの子は大丈夫なの!?!」

リュウセイ「ルシア、アラドは!?!」

ルシア「応答がない・・・気絶したのか・・・あるいは・・・」

ラトウーニ「アラドは大丈夫・・・」

リュウセイ「え!?!」

ラトウーニ「あの子は絶対に諦めない。ゼオラを助けるまでは絶対に。だって、それがアラドだもの。」

オウカ「無駄よ、ラト。あれだけの攻撃を受けてはアラド・バラン

ガは無事ではありません。」

ラトウーニ「!?」

リュウセイ「何だあいつ!?」

アイビス「武装が継ぎ接ぎみたいに……!?」

ラトウーニ「オ、オウカ姉様……!」

オウカ「ラト……アラド・バランガを倒し、今度こそあなたを連れ帰ります。」

リュウセイ「何だつて!?」

ラトウーニ「そんな……この間はアラドのことを……!」

オウカ「あの男は……私達からあなたを奪い去った憎むべき敵なのですよ!」

ラトウーニ「ね、姉様……また記憶操作をされて……!」

オウカ「記憶を操作されているのはあなたの方ですよ!さあラト、私達の元に戻り、本当の事を思い出して……」

ルシア「何が本当の事だ……!お前の中のラトウーニはどうなのかは知らないけどな……今のラトウーニを信じず、見ようともしないお前らなんかラトウーニは渡さない!」

シャイン「そうでございます!たとえそれが姉君だろうとも、容赦

は致しません!!」

オウカ「私達の絆を知らない者達がずけずけと……!!」

ルシア「オウカは俺が抑える!お前達はアラドの方を頼む!」

アイビス「だったら……!あたしがフォワードをやる!リュウセイはバックスを!」

リュウセイ「おう!ラトウニ、王女さん!ビルガーを頼むぜ!!」

シャイン「わかりましたわ。」

オウカ「させません!」

ルシア「それは……こちらのセリフだ!!」

タイプSVはラピエサージユのO・O・ランチャーをメガ・プラスマカッターで斬り、破壊する。

オウカ「くっ……!!」

ルシア「今だ!」

アイビス「アステリオン、BFモード!フル・ブースト!!」

アステリオンはマシンキャノンでアーチボルドのエルアインスを牽制する。

アーチボルド「くっっ!?!」

R・ウィングで接近し、R-1に変形し

リュウセイ「R-1必殺！フルマックスファイヤーッ！！」

G・リボルヴァーを乱射し敵部隊を牽制する。

アーチボルド「何がマックスファイヤーですか。ただの乱れ撃ちじや……」

リュウセイ「二人共、今だ！！」

フェアリオン2機はビルトビルガーをリオンの元まで運ぶ。

ゼオラ「！！」

シャイン「エネルギーフィールド、出力最大！ラトウーニ、ビルガーをアラドに渡して下さいませ！」

ラトウーニ「はい！」

アーチボルド「何をする気知りませんが、これまでです。全機、攻撃開始！」

敵部隊はリオンに砲撃を加えるが、フェアリオン・タイプGのEフィールドで庇う。

シャイン「くっ！これでもガードは固かったりするんですから！」

ゼオラ「あ、あの機体、バリアを張ってるの！？」

オウカ「あのようなサイズであんな防御力が出せるなんて・・・！
？」

ルシア「こういう時にも役に立つんだよ、フェアリオンは！」

アーチボルド「いちいちシャクに触る人形ですね。集中攻撃を！」

さらに攻撃が増し、Eフィールドが突破され被弾する。

シャイン「きゃああっ！！！」

リュウセイ「お、王女さん！！！」

アイビス「あの子達をやらせてなるか！」

R-1、アステリオンがバリアを張りフェアリオン・タイプGを庇
う。

リュウセイ「くああっ！ね、念動フィールド、全開っ！！！」

アイビス「うううっ！！！」

シャイン「ラ、ラトウーニ！早くなさいませ！」

ラトウーニ「アラド！目を覚まして、アラド！」

アラド「う、うう・・・！ラ、ラト・・・？」

ラトウーニ「早くビルガーに乗って！」

アラド「え！？ ビルガー！？」

ラトウーニ「早くっ！！」

アラド「あ、ああ！！」

アラドはリオンからビルトビルガーに乗り換える。

アラド「こ、こいつ、温まってる・・・！ラドム博士がセツティン
グしてくれたのか！？そ、それに新武器・・・！？ガトリング砲に
メタルソード、接近戦用の爪・・・いや、大バサミ！？な、何だこ
りゃ！？出たトコ勝負の仕様じゃねえか！」

ゼオラ「あ、あの機体・・・こっちにデータがある！け、形状が違
うけど・・・あれがファルケンと対の！？」

アラド「こ、こうなったら・・・！こうなったら、ぶっつけ本番！
出たトコ勝負でやったらああっ！！」

ビルガーはブースターを吹かし

アラド「うおおお！飛べえっ！ビルトビルガー！！」

テスラ・ドライブで飛行する。

アーチボルド「！？」

アラド「アーチボルド・グリムズ！！」

アーチボルド「正面から！？わざわざ的になるつもりですか！」

アラド「アルト譲りの突進力！あんたに見せてやるぜえっ！！！」

ビルガーはコールドメタルソードを抜き

アラド「さっきの借りを返してやる！行くぜ、アーチボルド！！！」

ブーストで一気にエルアインスに突っ込む。

アラド「うおおおっ！！！」

コールドメタルナイフがエルアインスの右腕を掠める。

アーチボルド「くうっ！やってくれますね、アラド君！」

リュウセイ「あ、あいつ！やりやがった！」

ルシア「さすが、本番には強い奴だ。」

ゼオラ「あ、あの子にあんなことが出来るなんて……！（！私・
・今、何を！？まるでアラド・バランスを昔から知ってたみたい
に……！？）」

アラド「う、うわっ！コ、コントロールが！？」

アイビス「アラド！？」

アーチボルド「……でも、詰めは甘かったみたいですねえ。重
ね重ねふざけた真似をした罰です。死になさい」

アラド「!!」

エルアインスがビルガーに攻撃を仕掛ける直前、
遠方射撃で右腕が吹き飛んだ。

アーチボルド「なっ!?!どこから!?!」

そこにハガネ、先行してきたR-2が戦闘区域に進入する。

ライ「……………」

アーチボルド「!!」

R-2はツイン・マグナライフルを撃ちエルアインスに直撃させる。

アーチボルド「く、くふつ……………!あの距離から……………」

ライ「……………足が遅い分、射程距離で稼ぐしかないのな。」

アーチボルド「ライデイス君……………」

ライ「だが、貴様への狙いは外さん。」

エクセレン「さすが色男さん!百発百中ね!」

ラトウーニ「アラド……………」

アラド「わかってる!ゼオラは必ず取り戻す!みんなが持ってきて

くれたこのビルトビルガーでな！」

ゼオラ「それはこっちの台詞よ！あなたを倒し、ラトを連れて帰るわ！」

オウカ「そうです、ラト。私達のところへ戻りなさい。」

ラトウーニ「私はあなた達の所へは行かない・・・」

ゼオラ「あなたの意思は関係ない！これは母様の命令よ！あなたは私達の所へ帰るべきなの！」

ラトウーニ「ゼオラ・・・！」

ゼオラ「それに、私達ノイエDCには正義がある！インスペクターから地球を守るのは私達しかない！だからラト、あなたも・・・」

ルシア「今のDCに正義などあるものか！」

オウカ「離反したあなたは黙りなさい！」

ルシア「んなるお！！！」

ラピエサージユはマグナム・ビークで攻撃を仕掛け、タイプSVはラピエサージユの右腕を掴み防御する。

オウカ「この者達の戯言を聞く必要はありません。今すぐ私達の元に来るのです、ラト！」

ラトウーニ「嫌。私は行かない。私は自分の意思でハガネのみんなと一緒にいるもの。」

ゼオラ「……！わ……わかったわ！こうなったら、あなたを倒しても連れて帰る！！」

ラトウーニ「！？」

リュウセイ「な、何だって！？」

リオ「倒しても連れてくって……！！」

イルム「それじゃ本末転倒でしょうが。」

リョウト「あの子、思考が混乱しているのか……！？」

ラーダ「ええ……強い暗示や記憶操作を受けているせいだわ。」

リュウセイ「ふざけやがって！そんなのはもうたくさんだぜ！」

ルシア（そう……そんなのはエアロゲイターだけで十分だ、すぐにでも終わらせる！）

ラーダ（クエルボ……それがあなたの選んだ道だと言うの……！？）

カイ「アラド、彼女はお前達に任せるぞ。」

キョウスケ「アルトの兄弟機……使いこなして見せる。」

アラド「は、はいっ！」

カイ「ラトウーニ、ファルケンと一緒に彼女を取り戻せ。いいな？」

ラトウーニ「はい・・・！」

アーチボルド「さて・・・決着をつけましょうか、ライディース君
！」

ライ「それは俺の台詞だ！アーチボルド！！」

R-2はツイン・マグナライフルでエルアインスを牽制し接近

アーチボルド「あなたも突撃ですか、全くつくづく馬鹿が多い！」

ルシア「その馬鹿に・・・」

アイビス「あんたは倒されるのよ！」

ルシア「たらふく食いな！ハンドレールガン！」

アイビス「軌道を見極め、撃つ！」

ハンドレールガン、マシンキャノンがテスラ・ドライブ、左脚を破壊する。

アーチボルド「な・・・！？」

ライ「喰らえアーチボルド！！」

その隙にビームチャクラムでエルアインスを大破させた。

アーチボルド「こ……こんな！こんな馬鹿な！！」

ライ「終わりだ、アーチボルド！」

アーチボルド「こ、この僕がこんな所で死ぬわけがありません！この僕がこんな所で！！うわああっ！！」

エルアインスが爆発し、破壊された。

ライ「……………」

リュウセイ「やったのか、ライ！？」

ライ「……………だといいな。」

タクス「どういうこと？」

レオナ「アーチボルドはしぶとい男よ。エルピスでも死んだものと思われていたけど……」

キョウスケ「ある意味、ハンスよりタチが悪いな。」

カイ「障害はなくなった、各機はビルガーに近づくと敵機を迎撃、アラド達はファルケンの奪還を！」

キョウスケ「了解。任せるぞ、アラド。」

アラド「了解ッス！」

ラトウーニ「ゼオラ、少しだけ我慢して！」

フェアリオン・タイプSはロールキャノンでビルトファルケンを牽制し

ゼオラ「ラト・・・！」

オウカ「ゼオラはやらせません！」

リュウセイ「させるかよ！」

キョウスケ「俺達の相手をしてもらう！」

アラド「ゼオラ、俺は約束を護ってみせる！！！」

ビルトビルガーはM90アサルトマシンガンでビルトファルケンに攻撃をするがかわされる。

ゼオラ「そんなものに！」

アラド「まだあんだよ！」

M90アサルトマシンガンに取り付けられたAPTGMを発射し、ビルトファルケンの背部に直撃する。

ゼオラ「！ド、ドライブ・バインダーが！！！」

アラド「ゼオラっ！！！」

ゼオラ「し、しまった!!」

アラド「ゼオラ!俺とラトと一緒に来るんだ!!」

ゼオラ「ふざけないで!誰がつ!!」

ビルトビルガーはビルトファルケンのバルカンの直撃を受ける。

アラド「ぐっぐっ!!」

イルム「アラド!」

ゼオラ「放して! 放しなさいよ!!」

アラド「は、放すかつ!!ここで放したら、お前はっ!!おまえは本当に俺のこと忘れちまうだろ!!」

ゼオラ「忘れる・・・?忘れる!??」

その時、ゼオラに頭痛が走った。

ゼオラ「つつ!あああっ!!」

アラド「ゼオラ!??」

ゼオラ「い、嫌っ!!」

オウカ「どうしたのです、ゼオラ!??」

ゼオラ「忘れたくない!忘れたくない!忘れたくない!!」

アラド「ゼ、ゼオラ!？」

ゼオラ「だから、やめて!!お願いです!セトメ博士、やめて下さい!!」

ラトウーニ「!？」

ゼオラ「お願いだから……!!お願いだから、やめてええっ!!」

アラド「お、お前……!!」

オウカ「いけない……!?!ゼオラの援護を……ツツ!？」

ラトウーニ「オウカ姉様!？」

オウカ「ゲ、ゲーム・システムの限界時間が……!？」

ラトウーニ「ゲーム・システム……!？」

リュウセイ「テンザンと同じ……!？」

ルシア「今のうちだ!あの機体を取り押さえ……」

????「させないよ。」

突然、緑の球体がビルトファルケン、ラピエサージュを護るようにビルトビルガー、タイプSVに攻撃する。

アラド「うわああっ!!」

ルシア「くっ……何だ突然!？」

???「ハッ、とんだ出来損ないの人形達だな。」

アラド「な、何!？」

そこに銀、青、茶色の機動兵器が姿を現す。

エクセレン「な、何なのあれ!？」

キョウスケ「新手か……!？」

アラド「お前ら、何者だ!？」

スリザス「知る必要はない、お前はここで死ね!」

ウルズ「そこまでにしておけ、スリザス。」

スリザス「ウルズ!？」

ウルズ「パパの命令を忘れたか？僕達の任務はアウルム1とブロンゾ27の回収だ。」

スリザス「嫌だ！僕はブロンゾ28を殺す！出来損ないのデータが僕達に組み込まれているなんて我慢出来ないんだ!」

ウルズ「僕の言うことが聞けないのか……?」

スリザス「う……!？」

アンザス「そうだスリザス、ウルズに逆らうと後が怖いよ？」

スリザス「くっ……お前達、命拾いしたな！」

ウルズ「アウルム1とブロンゾ27は撤退しろ。」

オウカ「退くわよ、ゼオラ。」

ゼオラ「は、はい……！」

ラトウーニ「オウカ姉様!!！」

ルシア「間に合わなかったか……！」

アラド「ゼ、ゼオラ！行くな、ゼオラーっ!!！」

ベルゲルミル3機、ビルトファルケン、ラピエサージュは現域から撤退した。

ラトウーニ「……そんな」

アラド「く、くそ……！くそおおっ!!アギラ……アギラ・セトメ!!てめえ、よくもゼオラを……!!よくもゼオラをおおっ!!……」

ラトウーニ「……」

ラーダ（アラド……）

ハガネ ブリーフィングルーム

ラーダ「やはり、あの子……ゼオラは暗示系の記憶操作を受けているようね……」

ラトウーニ「ええ……」

アイビス「……アラドは？あの子は……大丈夫なの……？」

ルシア「あと少しだつてところだつたからな……」

アラド「俺は大丈夫ツスよ。」

アイビス「アラド……！」

アラド「心配しないで下さい、アイビスさん、ルシア中尉。」

ルシア「無理……してないか？」

アラド「ええ。確かにゼオラがああなつたのはショックだったけど……あいつ、俺のことを完全に忘れちゃったわけじゃないってわかりましたから。」

ラトウーニ「でも……セトメ博士が……」

アラド「ラト……俺、あいつを信じるよ。セトメ博士に何をされようが……俺のことを忘れてはしないって。」

ラトウーニ「……」

アラド「あいつ、頑固だから・・・きつと俺のことも忘れやしないさ。そして・・・俺はあいつを取り戻してみせる。おれのもう一人の相棒・・・ビルトビルガーでな。」

第12話 完

第12話 仕組みられた子供達（後書き）

アラド「うう……」

アイビス「どうしたのアラド？」

ルシア「やっぱりさっきので落ち込んでるのか？」

アラド「そうじゃなくて……ビルガーの肝心の武装をなぜ使わなかったのかって、マリオン博士に怒られたツス。」

ツグミ「ああ……確かに使ってなかったわね。」

キョウスケ「調整中だったこともある。気にするな。」

アラド「アニメと同じで出し惜しみ戦法で行く気なんスカね……だからいつもゲームで撃墜し切れず撤退され、資金を逃してばかりなんスよ……」

ルシア「それ……誰に向けての意見だ？」

エクセレン「さあ……今、眠気眼でモニターにかじりついている人に言ってるんじゃないのかしらん？」

アイビス「だ、誰のことです？」

ルシア「それは聞かない方向で頼む……」

……とまあ、おふざけはここまでにしておいて……

みなさん、東日本大地震、大丈夫でしたか？

自分は北陸だったので何ともありませんが……親戚が千葉にいることもあつて心配です。

長野、静岡とも続いているのでまだ気が抜けない状況が続いていますが、被災者の皆さん、希望を捨てずに生き抜いて下さい。

架空の話とはいえ、スパロボでも毎回化け物のような敵にも、希望や勇気を捨てずに勝ち続けてきたじゃないですか。（遊星主とか、宇宙怪獣とかe t c . . .）

きつと今回も乗り切つて復興できるものと信じています。現に阪神や中越、能登半島も壊滅的被害が出ていましたが、復興できています。

これは最後まで諦めずに動いた人間の力の賜物です。そう、人間の底力こそが、勝利の力ギです！

と、スパロボ風な書き出しでしたが、被災者及び遺族の方々にお見舞い申し上げ、少しでも多くの不明者の生存を祈っております。

そして、自分も節電に協力したいと思い（これを今書いてる自分に言えた義理ではありませんが……）少しでも力になれたらなと思つています。

みなんで地震を乗り切つて、またスパロボと一緒に楽しみましょう！

第13話 汚れないその瞳で

八ガネ 個室

ジャーダ「・・・そうか・・・お前が捜してた仲間がな・・・」

ラトウーニ「でも、私・・・諦めない・・・。必ず姉様とゼオラを・・・」

ジャーダ「そうだ、諦めちゃいけない。昔の俺達みてえにな。」

ラトウーニ「・・・」

ジャーダ「あの時・・・コックピットの中で死にかけてたお前を見つけた時・・・俺とガーネットは絶対にお前を助けてやろうって思った。医者からお前の心が元に戻らねえって言われた時も、諦めはしなかった。必ず回復するって信じて、俺達でお前を引き取った。」

ルシア（そんな事があつたなんてな・・・）

ジャーダ「そして、その結果が・・・今のお前だ。だから、お前の仲間達も助けられるさ。お前が諦めない限りはな。」

ラトウーニ「うん・・・」

ガーネット「ちょっと、ジャーダ！いい加減あたしにも代わってよ！」

ジャーダ「わ、わかったわかった。・・・ったく、いいこと言っ

たのに。」

ガーネット「ハイ、ラトウーニ、ルシア！元氣してる。」

ラトウーニ「ガーネット・・・！」

ルシア「そつちも相変わらずみたいだな。」

ガーネット「どお？リュウセイとは上手くいってる？」

ラトウーニ「え・・・？」

ガーネット「その反応・・・さては何かあったわね？なにになに？
教えて？」

ラトウーニ「い、一緒にアミューズメントセンターへ行つて・・・
ゲームをやつたの・・・」

ガーネット「ふんふん。」

ラトウーニ「それから・・・こないだ写真を一緒に撮つたの・・・」

ルシア「ほお・・・」

ガーネット「それでそれで？」

ラトウーニ「それだけ・・・」

ルシア「・・・それだけ？」

ジャーダ「な、何じゃそりゃ!? たく、あの唐変木は女の子の扱
いってもんが・・・」

ガーネット「んもう、あんたは引ッ込んでなさいっての!」

ラトウーニ「ガ、ガーネットこそ・・・お腹の子供はどうなの・・・?
」

ガーネット「それがねえ、聞いてよ! なんと双子なのよ、双子!」

ルシア「おお・・・!」

ガーネット「んも、これからが大変! ジャーダの少ないギャラじ
ややっていけないかも!」

ジャーダ「わ、悪かったな!!」

ラトウーニ「おめでとう・・・ジャーダ、ガーネット・・・」

ルシア「俺からも祝わせてくれ。」

ガーネット「ありがと、二人共。」

ジャーダ「そういうわけで、お前の家族が二人増えちまった。」

ガーネット「だから、みんなでああなたの帰りを待ってるわ。その時
には・・・あなたの仲間達も連れてくるのよ?」

ラトウーニ「うん・・・」

ルシア「それじゃ、俺はオオミヤ博士のところに行くから。ジャーダ、ガーネット、俺もきつと行くから。」

ジャーダ「いいのか？今お前……なんとか計画に参加してるんだろ？」

ルシア「プロジェクトTDな……二人にはDC戦争後は世話になつたからな。何か礼をと思って……」

ジャーダ「ロボットの人形とかはなしにしてくれよ？」

ルシア「リユウセイじゃあるまいし……もっとまともなものを用意しておくさ。」

ガーネット「ありがと、待ってるわ。」

ルシア「ああ……」

伊豆基地 個室

ツグミ「テスラ研の件……本当に申し訳ありませんでした、オオミヤ博士……」

ロバート「ああ、気にすることはないさ。君達が全力を尽くしてくれたことは知っているからね。それに、次の作戦じゃ君達がテスラ研の奪還を担当するんだろう？」

アイビス「え……？本当ですか？」

ロバート「おや、まだ聞いてなかったのか？」

ツグミ「は、はい……」

ルシア「俺は概要しか聞いてませんが……」

ロバート「なら、次の作戦でも全力を尽くしてくれ。そして、所長や先生、フィリオ先輩を……」

アイビス「はい！」

ツグミ「少佐はプロジェクトTDの成功に不可欠な方です。必ず救い出してみせます。」

ロバート「アステリオン……プロジェクトTDの成果もこの目で見せてもらったよ。さすが、リオンシリーズの生みの親、フィリオ先輩だな。」

アイビス「オオミヤ博士は少佐とは知り合いなんですか？」

ロバート「俺がテスラ研にいた頃、何かと面倒見てくれてね……パーティーの余興では二人でアイドルソングを歌いながら踊ったりもしたんだ。」

アイビス「へえ……少佐にそんな趣味があつたんだ……」

ロバート「先輩が言うには、その頃に流行っていたアイドルデュオのダンスを観て……それを連係戦闘のモーションに応用することを思いついたんだそうだ。」

アイビス「それって、まさか・・・」

ロバート「で、来る日も来る日もそのダンスを観ていたら、自然に踊れるようになったんだと。」

ツグミ「ふふ・・・あの人らしいわ。」

アイビス「・・・少佐の見る目、変わりそう・・・」

ルシア「俺はとっくに変ってるけどな。」

ロバート「とにかく当時から独特の発想を持った人だった。出来れば、カリオンの方も見たかったんだが・・・」

ツグミ「・・・申し訳ありません。3機のカリオンの内、2機は完全に破壊され・・・もう1機はスレイによってノイエDCに提供されました。」

ロバート「ノイエDCにか・・・」

ツグミ「ええ・・・。彼女は自分の意志で私達の敵になったのです・・・」

アイビス「・・・」

ロバート「スレイ・プレステイ・・・。先輩の自慢の妹君か・・・」

アイビス「スレイは今、ちょっとだけやることを見失っているだけなんです・・・」

ツグミ「だから、きっと彼女はカリオンと共に戻ってきます。いつかきつと・・・」

ロバート「そうだな・・・。彼女も先輩の夢のプロジェクトのメンバーなのだから。」

カーク「・・・ところで、ロブ。ヒュッケバインMk-?用のAMボクサーのことだが。」

ロバート「ああ。あんたやリョウトから送られてきたレポートに目を通して、改善策を考えておいた。」

リョウト「じゃ、じゃあ・・・ボクサーが使えるようになるんですね。」

ロバート「ああ、R-GUNパワードにも使っている新型のコンデンサーを流用すればな。早速、作業を始めよう。リョウト、マオ社での修行の成果を見せてもらおうぞ。」

リョウト「は、はい！」

ツグミ「オオミヤ博士、後学のために私にもボクサーの調整作業を手伝わせていただけないでしょうか。」

ロバート「ああ、喜んで。」

ツグミ「じゃあ、アイビス・・・」

アイビス「わかってる。今日のトレーニングメニューはルシアとやるよ。」

ツグミ「頑張つてね。スレイとカリオンに勝つためにも。」

ロバート「じゃあ、タカクラチーフ・・・君達は先にハンガーへ行つてくれ。俺はデータをまとめておくから。」

ツグミ「わかりました。」

ルシア「アイビス、行こうか。」

アイビス「うん。」

伊豆基地 シミュレータールーム

アイビス「軌道は読めた！そこだ！」

ルシア「読み方が甘い！」

アステリオンのミサイル攻撃をかわし、ガーリオンはバースト・レールガンでアステリオンを撃墜した。

アイビス「ま、またやられた!？」

ルシア「よし、一旦終了するぞ。」

カチーナ「すげーなお前ら、あれだけの高速戦闘をこなすなんてよ。」

タスク「目が渦巻き状態ッスよ。」

ラッセル「それでもルシア中尉は攻撃を全て回避しています。」

ルシア「いや……4、5回判断が遅かったら当たってた。」

ラッセル「え？」

レオナ「確かに、今までの模擬戦で一瞬でも判断を誤っていたら、命中していた攻撃もあったわ。」

タスク「すげえ腕してんなアイビス。」

アイビス「ううん、偶然だよ。」

ルシア「だが着実に力は付いてきている、偶然では片づけられない。」

タスク「そうそう、もっと自信持ちなよ。」

ルシア（スレイ……お前の想像以上にアイビスは強くなってきている。いずれはお前をも超える……）

アイビス「それじゃあ……マニニューバーの見直しをしてもう一回……」

その時、警報が鳴りだす。

タスク「な、何だ何だ？」

カイ「ルシア、アイビス、いるか!？」

ルシア「どうしたんですか少佐、そんなに慌てて？」

カイ「ヴァイスリッターが……エクセレンが無断出撃をし出した。」

レオナ「え！？」

タスク「エクセ姐さんが！？」

カイ「足の速いお前達の機体ですぐに後を追ってくれ！マサキとリユーネも既に出ている！」

アイビス「了解！」

ルシア「タイプSVは調整中……エルシュナイデで行くしかないか！」

伊豆基地 海岸付近

ヴァイスリッターがいる区域にサイバスター、ヴァルシオーネ、アンジュルグ、アステリオン、エルシュナイデ・カスタムが進入する。エクセレン「また来たわね！あんましつこいと、あちこち手え突っ込んで奥歯ガタガタ言わせるわよっ！」

アイビス「え！？」

ルシア「な、何だ何だ？」

エクセレン「……って、あら?」

ラミア「エクセ姉様……口以外から奥歯に触れるのは、かなりの難易度だったりしちゃうと思いますのですが?」

エクセレン「あら? ラ、ラミアちゃん?」

マサキ「人が心配して追いかけてきたつてのに……何だ、さっきの言い草は!？」

エクセレン「あらら、マーサ達だったのね。はい、みんな……おゲンコ?」

リユーネ「ゲンコ!? 何発欲しいのさ!？」

エクセレン「ん、リユーネナツクルはご勘弁。ね?」

ルシア「いい加減にしてくれ、話が進まん。」

マサキ「まったく、勝手に飛び出した上にこんな所でドンパチやってるなんて……なに考えてんだよ?」

クロ「……説得力ニヤいわね。」

シロ「だニヤ。どっちかって言うとそういうの、マサキの専売特許だもんニヤ。」

アイビス「そ、そうなんだ。」

クロ「しかも、その後で迷子にニヤっちゃったりするから大変ニヤの。」

ルシア「それは痛いほどよくわかる。L5戦役時でも偵察中であらぬ方向に……」

マサキ「こら！余計なことを言うんじゃないやねえ！ていうかお前が話を止めてどうすんだよ！」

ルシア「あ……スマン。」

エクセレン「あの……ところで、マイスイートダーリンは？」

ラムリア「隊長のことでございませうやがるのですか？まもなくこちらへ到着されちゃったりしますのです。」

エクセレン（もしかして……あの嬢ちゃんが出て来ないのはキョウスケがいないせい？）

マサキ「それよか、さっさとあいつらを片づけるぞ！」

リユーネ「ああ、わかったよ！」

ルシア「アイビス、俺がバックスをやる。訓練の成果を化け物共に見せてやれ！」

アイビス「わかったよ！プロミネンス、ファイア！」

アステリオンのプロミネンスでアインストゲミュートを攻撃するが、小破で終わる。

ルシア「アインストの上位種か・・・なら！」

エルシュナイデ・カスタムはツインビームカノンを撃ち、足を止める。

ルシア「今だ！」

アイビス「フルブースト!!」

ソニックブレイカーで突っ込み、ゲミュートを破壊する。

リユーネ「やったじゃん、アイビス！」

マサキ「へえ・・・いつの間にあんなに強くなったんだ？」

アイビス「夢を実現するためだから、今までの倍以上に特訓をしているんだ。」

エクセレン「そうねえ、強くて頼りになる教官殿がそばにいるものねえ。」

ルシア「え、あ、まあ・・・ははは・・・」

ラミア（夢のために強く・・・か。不思議なことに嫌悪感は湧かない。私は・・・本当に壊れてしまったのか・・・）

エクセレン「っと、人を褒めてる場合じゃなかったっけね！」

ヴァイスリッターはオクスタン・ランチャーEモードでクノッヘン、

グリートを撃墜していく。

その時、アインストが転移出現する。

アイビス「敵の増援!？」

ラミア（新型のアインスト……。いや、あれは!？）

マサキ「お、おい!ありゃ何の冗談だ!？」

リユーネ「ま、まさか……。あれって!」

エクセレン「アルト……。アイゼン……。!」

????（その通りですの。）

エクセレン「!」

アインストアイゼンの中央にペルゼイン・リヒカイトが転移出現する。

ルシア「あれは!？」

エクセレン「やっぱり……。あなたね。」

アルフィミィ「……。。」

エクセレン「さて、どういっつもり?アルトちゃんの偽物を作りだすなんて……。イタズラにしちゃ手が込みすぎてない?」

アルフィミィ（・・・キョウスケ。）

エクセレン「え!?!」

アルフィミィ（あの人の事を考えると・・・胸が・・・もやもやいたしますの・・・）

エクセレン「はあ!?!」

アルフィミィ（なのに・・・私はあの人のことを・・・よく知りませんの・・・だから・・・その“殻”しか作ることができませんのよ・・・）

エクセレン（殻? どういうこと? あの子が・・・アインストシリーズを作り出しているとしても・・・!?!）

マサキ「あいつがとっておきの奴か! 偽物のアルトと言い、いったい何者なんだ!?!」

エクセレン「・・・」

リユーネ「エクセレン! なにポーツとしてんのさ!?!」

エクセレン「え? リユーネちゃん、あの子の声が聞こえなかったの!?!」

リユーネ「あの子!?! あんたの独り言は聞こえてきたけど、そんなの知らないよ!」

ラムリア（・・・前回、アインスト・アルフィミィの音声はこちらで

も記録できたが・・・今交信していたのならば・・・機密通信を行っていたとしても言うのか？)

エクセレン(さっきの声が聞こえたのは・・・私だけ?)

アルフィミイ(そう、あの人・・・キョウスケも、こうやって話すことはできませんの・・・でも、あなたとなら・・・だからこそ、あなたが必要ですよ、エクセレン。あなたが・・・あなたこそが・・・)

エクセレン「もうっ！わけわかんないことばっか言わない！あなたと私、そしてキョウスケ・・・どういふ関係があるのかは知らないけど・・・あなたは・・・とても危険な感じがする。キョウスケに合わせるわけにはいかない・・・！」

アルフィミイ「・・・(キョウスケ・・・もうすぐ・・・ここへ・・・)」

ルシア「とにかく、先に奴の相手をした方がよさそうだな。取り巻きのアルトは任せる。」

ラミア「了解でござんす・・・む？」

ルシア「・・・ホント気が抜けるな・・・」

ラミア(わざと言ってているわけではないのだが・・・)

エクセレン「ルシア君、ボックスお願いできるかしら？」

ルシア「ああ、任せてくれ。」

アルフィミィ「また会いましたのね。」

ルシア「今回は機動性重視だ、とどめは他に任せるしかないか。」

アルフィミィ「静寂を乱す・・・滅び、災厄を招く存在・・・」

ルシア「またわけのわからないことを！」

エクセレン「キョウスケ、キョウスケって、恋のライバルにしちゃ物騒な相手ね。」

アルフィミィ（エクセレン・・・私はまだ、あなたを・・・）

ルシア「フルシュート！」

エルシュナイデ・カスタムはミサイル、ハンドレールガンを撃ちペルゼインを怯ませ

エクセレン「んじゃま、集中砲火で！」

ヴァイスリッターはオクスタン・ランチャーBモードで攻撃するが、損傷部分が再生する。

そこに、アルトアイゼン、グルンガスト参式が進入してくる。

キョウスケ「エクセレン！みんな、無事か！？」

エクセレン「キョウスケ！・・・って、間に合っちゃったわね・・・」

キョウスケ「すまん、出遅れた。その分は・・・」

アルフィミイ「いらっしやいましたのね・・・キョウスケ・・・」

キョウスケ「・・・！」

マサキ「あいつ、喋りやがったぞ!？」

アイビス「もしかして、あれには人が乗っているの!？」

ラミア「おそらくは・・・と思われたりしてますのです。前回の戦闘記録から、そう推測されたりなんかしちゃってますのすわ。」

アルフィミイ「キョウスケ・・・あなたは・・・あなたは何者なんですか?」

キョウスケ「何・・・?それはこっちの台詞だ。答えてもらおう・・・あのアルトの偽物はなんだ?」

アルフィミイ「いいえ、偽物とは違いますのよ。もっと・・・まったく異なる物・・・あなたのことが知りたくて・・・作ってみたのですけど・・・でも・・・殻だけでは・・・」

ブリット「殻・・・だって?」

アルフィミイ「キョウスケ・・・もっと・・・もっと、ずっと・・・あなたが知りたいのです・・・。あなたが何なのか・・・私の・・・何なのか・・・」

キョウスケ「わかるように言え。．．．それはどついつ意味だ？」

アルフィミィ「私を乱す．．．それがあなた。」

キョウスケ（こいつ．．．どついつもりだ？それに．．．やはり
エクセレンに．．．）

エクセレン「ちょっとあなた！何でそこまで私やキョウスケに拘るの！？それくらいは説明してよね！」

アルフィミィ「．．．キョウスケ．．．一緒に．．．来ていた
きたいんですの。」

エクセレン「え．．．!？」

アルフィミィ「一緒に．．．私と．．．」

キョウスケ「．．．どこへだ？どこから来て．．．そしてどこへ行
く．．．?」

エクセレン「ちょ、ちょっとキョウスケ!？」

アルフィミィ「新しい宇宙．．．。始まりの地を．．．捨てるた
め．．．」

キョウスケ「新しい．．．宇宙？」

クスハ「始まりの地．．．!？」

ルシア「何のことなんだ．．．?」

キョウスケ「・・・やはり・・・何を言っているのか意味がわからんな。それに、俺がお前の思う通りに動くと思うのか？」

アルフィミイ「はい・・・。動いていただきますの・・・。」

ペルゼインから思念体が現れ、アルトアイゼンを捕縛する。

キョウスケ「何!?　ぐうつ、頭が!」

マサキ「キョウスケ!」

エクセレン「うぐ・・・あ・・・ああ、これは・・・!？」

リユーネ「エクセレン、あんたまで!　いったいどうしたのさ!？」

エクセレン「あ・・・あの子は・・・!？」

リユーネ「エクセレン!」

キョウスケ「機体が・・・動かん!」

ラミア（何だ、この波長は・・・!?　過去のデータになつたくないパターンだ。・・・しかも、通信妨害まで!？）

クスハ「キョウスケ中尉!　エクセレン少尉!」

ブリット「やらせん!　オメガ・ブラスター!」

ルシア「ツインビームカノン発射!」

グルンガスト参式のオメガ・ブラスター、エルシュナイデ・カスタムのツインビームカノンの攻撃は

ペルゼインの鬼菩薩によって防がれる。

ブリット「何!?!」

アルフィミイ「あなた達に力があっても……資格はありませんの。」

ブリット「力……?」

クスハ「資格……?」

ルシア「さつきからわけのわからないことを……」

アルフィミイ「始まりの地……守護者の力……もう一つのルーツ……邪魔ですの。」

ペルゼインはライゴウエを放ち、グルンガスト参式とエルシュナイデ・カスタムに攻撃する。

ブリット「うわああっ!」

クスハ「きゃああっ!」

ルシア「ぐっ!?!」

アルフィミイ「さあ、キョウスケ……」

キョウスケ「く……うう……！」

エクセレン「あ……ああ……！」

アルフィミィ「さあ、キョウスケ……私と……」

キョウスケ「くうっ!!」

アルトアイゼンは手を伸ばしたペルゼインを払いのける。

アルフィミィ「！ 拒絶した……!？」

キョウスケ「……」

アルフィミィ「何故……ですか？」

キョウスケ「お前の思うようには……動かんと言ったはずだ……
！俺の行動は俺の意思で……決める……！」

アルフィミィ「どうしてですの……？あなたは身体は……私達
の……」

キョウスケ「相変わらず、わけのわからんことを……！」

アイビス「キョウスケ中尉、大丈夫なの!？」

キョウスケ「問題ない……とも言えんが、ここは押し切るぞ……
！」

ラミア（アインスト・アルフィミィ・・・データを収集したいところだが、やむを得んか。）

アルフィミィ「キョウ・・・スケ・・・何故・・・ですか？私は・・・あなたのことを・・・」

キョウスケ「ゴタクはそこまでだ！」

エクセレン「思わせぶりって・・・好きじゃないの！」

アルトアイゼンはスクエア・クレイモアを至近距離で放ち、ペルゼインに直撃させ、後方からオクスタン・ランチャーEモードを零距离射撃で中破させる。

エクセレン「答えてもらわよ！あなたの正体と、目的を！」

アルフィミィ「仕方ありません・・・今回はここまでにいたしますの・・・」

キョウスケ「！今頃？どういうことだ？」

アルフィミィ「ごきげんよう・・・私の・・・キョウスケ・・・」

エクセレン「待って！あなたは・・・いえ、あなたの目的は！？私やキョウスケとはどういう・・・！」

アルフィミィ（大丈夫・・・わかる時が来ますの・・・あなたが・・・目覚めさえすれば）

エクセレン「……………!!」(目覚める!?) 私か!?)

ペルゼイン・ヒリカイトは転移で撤退した。

マサキ「消えやがった!?!」

リユース「あ、あいつ、いったい……………」

エクセレン(やっぱり……………やっぱり、そっなの?あの子……………
あの子は……………)

ルシア「キョウスケ、すぐに伊豆基地に戻ろう。これが陽動だった
ら……………」

キョウスケ「わかった、すぐに基地に戻るぞ。」

伊豆基地 ブリーフィングルーム

マサキ「アインストが来なかった?」

リョウト「うん、ハガネは基地で警戒していたんだけど……………」

ルシア「基地を潰してきたんじゃないかと、エクセレンとキョウスケ
に接触するために……………」

エクセレン「……………」

カイ「エクセレン……………何故、あの時ヴァイスで飛び出した?」

エクセレン「何というか、敵の気配を感じたというか・・・呼ばれたというか・・・」

カイ「気配？」

エクセレン「ええ・・・で、気づいたらヴァイスちゃんに・・・」

マサキ「まさか、おめえ・・・アルフィミイに操られてたとか言うんじゃないだろうな？」

エクセレン「ん〜、そういうわけじゃないと思うけど・・・でもまあ、まんまと出て行っちゃったわけだから、操られたと言えなくもない・・・かな・・・」

キョウスケ「・・・わからんな。次はなんとしても止めるぞ、エクセレン。」

エクセレン「そのあたりはよろしく。抱きしめててくれたりすると、効果てきめんよん？」

キョウスケ「イスに縛り付けた方が確実だ。」

エクセレン「・・・相変わらずムードがないことで。（それにしても、あのお嬢ちゃん・・・何でキョウスケ、キョウスケって・・・恋のライバル・・・というには、あんまりにも物騒な相手ね。それに・・・私にだけ声が聞こえる時があるのも、ね。）」

ケンゾウ「揃ってるな、SRXチーム。」

リュウセイ「コバヤシ博士・・・」

ケンゾウ「リュウセイ少尉、ライディース少尉、お前達にSRXチームの新メンバーを紹介する。」

マイ「・・・・・・・・・・」

リュウセイ「・・・・・・・・！」

ケンゾウ「マイ・コバヤシ。私の娘であり、アヤの妹だ。」

ライ「・・・・・・・・」

ルシア（なるほど・・・これで俺も呼ばれた理由がよくわかった・・・）

ケンゾウ「マイ・・・以後、お前は彼らと行動を共にし、ハガネに乗れ。いいな？」

マイ「わかった・・・父様。」

リュウセイ「・・・・・・・・」

ケンゾウ「ヴィレッタ大尉、マイ、お前達はR・GUNの移送を。」

ヴィレッタ「了解。行きましょう、マイ。」

マイ「ああ。」

マイ、ヴィレッタは格納庫へと向かった。

ライ「……………」

リュウセイ「あいつ……もしかして、過去の記憶が？」

ケンゾウ「そうだ。コアから排除される以前の記憶を失っている。」

ライ「コア？」

ケンゾウ「お前達がオペレーションSRWで撃墜したホワイトデスクロス……ホワイトスターの中枢でもあった大型機動兵器・ジュデッカの中心核だ。」

ライ「そんなものが残っていたとは……」

ルシア「俺はてつきり、メテオ3の爆発に巻き込まれたものか……」

ケンゾウ「お前達がジュデッカを撃墜した後、コアが本体から弾き飛ばされて地球へ落下……それをメテオ3……いや、セプタギンが回収し、再生を行った。」

ライ「しかし、あれは……」

ケンゾウ「そう、セプタギンもお前達の手によって破壊され……ジュデッカのコアはアイトネウス島沖の海底に沈んだ。そして、それが回収され、私のラぼへ持ち込まれたのだ。」

ライ「……………」

ケンゾウ「解析の結果、コアは自己再生を行っていたことが判明し、さらに詳しく調べるため、切開作業を行った。そして、内部から出てきたのが……彼女だった。」

リュウセイ「じゃあ、やっぱりあいつはレビ……！」

ケンゾウ「……ジユデツカのコアは損傷が著しく、自己再生機能そのものにも異常が生じていた。その結果、再生はレビ・トーラーへ至る前の段階で止まっていたのだ。」

ルシア「前の段階……まさかそれが……」

アヤ「そう……私の妹、マイよ。」

ライ「……………」

ルシア（確かラーダさんの話では……マイはアヤ大尉より年上……本来なら大尉が妹の立場にあると……）

ケンゾウ「彼女はマイとしての自我を持っているが、再生される前の記憶は失っている。」

リュウセイ「じゃあ、ホワイトスターにいた時のことも覚えてねえってのか？」

ケンゾウ「……そうだ。」

アヤ「……………」

ライ「大尉……彼女にはレビ・トラーのことを？」

アヤ「いえ……教えていないわ。」

リュウセイ「じゃあ、あいつは何も知らないままR・GUNに乗るつてのよ？」

ライ「……我々と行動を共にすれば、彼女はいずれ事実を知ることになると思いますが」

アヤ「そう……隠し通すことは出来ないわ。」

ケンゾウ「……………」

リュウセイ「じゃあ、何でだ！？何で本当のことを教えずにあいつを戦わせようとする！？これじゃ、やってることはジュデッカやスクールと同じじゃねえか！」

アヤ「……………!!」

リュウセイ「事実を知らせず、このまま戦わせようつてのよ？」

ケンゾウ「その通りだ。」

リュウセイ「ふざけんな！そんなのはもうたくさんだぜ!!」

ケンゾウ「だが、マイのSRXチームへの導入はすでに決定されたことだ。そして、SRXはさらなる力を発揮する。」

ライ「そのことはヴィレッタ隊長も承知の上なのですね？」

ケンゾウ「……ああ。」

ライ「……」

ケンゾウ「なお、この件に関しては箝口令を敷く。ハガネやヒリュウのクルーに事実を教えるはならん。」

リュウセイ「な……！俺達でうまく誤魔化せつてのによ……！」

ケンゾウ「そうだ。」

ライ「……」

リュウセイ「遅かれ早かれ、あいつのことに気付く奴は出てくる！それでもかよ……！」

ケンゾウ「ああ。これは命令であり……マイのためでもある。」

リュウセイ「くっ……！無茶苦茶だぜ、こんな話！」

リュウセイはラボから出て行った。

アヤ「リュ、リュウ……！」

ライ「自分も……今回の措置には疑問が残ります。」

ライもラボを後にした。

アヤ「ライ……………」

ケンゾウ「……………」

アヤ「お父様、あの二人が言った通りです。このままマイを偽り続けても、いずれは……………」

ケンゾウ「…………レビ・トラーの残留思念が消えるまでだ。」

ルシア「マイの中にまだレビの思念が…………!?!?」

ケンゾウ「レビの存在がマイの中から消え去った時…………私は彼女に真実を告げる。」

アヤ「でも、どうやってレビの残留思念を…………!?!?」

ケンゾウ「それは…………マイ次第だ。内なる呪縛は自分自身の力で断ち切らねばならん。」

アヤ「あの子自身の力で……………」

ケンゾウ（そうだ…………。もう私が直接手を下してはならない…………過去の過ちを…………繰り返すわけにはいかんだ。マイや…………アヤに対しても）

ルシア「…………とにかく箝口令のことは了解しました。俺の口外にしません。」

ケンゾウ「すまん、ルシア中尉。」

ルシア「いえ・・・俺も人の事は言えませんから・・・」

アヤ「で、でもあなたは・・・」

ルシア「違うんです大尉・・・俺は・・・異星人であることを伏せているんです・・・」

アヤ「え・・・!?!?」

ルシア「都合がいいことに、L5戦役時のメンバーは当たり前のように接していてくれます。おかげで異星人であることを言う者はいません。」

アヤ「で、でもなんで隠しておくの・・・!受け入れられない人間なんてここには・・・」

ルシア「・・・怖いんですよ、アイビス達に知られてしまうことが・・・」

ケンゾウ「・・・」

ルシア「異星人が宇宙を行くなんて、母星に帰るための手段にしかしてないんじゃないのかって、思われたくありませんから・・・」

アヤ「・・・」

ルシア「この戦いが終われば、どんな結果が待っていようと真実を告げるつもりです。」

「アヤ「わかったわ、私達からは何も言わないでおくわ。」

ルシア「すみません、アヤ大尉。（もし・・・アイビス達に嫌われることになっても、素直に受け止めてプロジェクトDを去ろう・・・そして、安心して宇宙に行けるように、DCを使って地球圏を護る剣になる・・・それまで・・・アイビスを強くするために・・・尽力を尽くすまでだ・・・）」

第13話 完

第13話 汚れないその瞳で（後書き）

ツグミ「そろそろオペレーション・プランタジネットの決行ね。」

ルシア「この作戦はテスラ研奪還も重要なフェイズになる。」

アイビス「うん、フィリオ達は絶対に助け出してみせる……！」

ツグミ「ところで……もうすぐ、アレの話も出てくるわね。」

ルシア「アレ？……ああ、15話のことか？」

ツグミ「他のユーザーさんからの提案であるライバルキャラの初出演も控えてるけど……まとまつてるの？」

ルシア「あ、ある程度は……な。」

ツグミ「意外と設定提出も目を通すだけで、まだまともにもまとめないのよね。」

アイビス「そ、そうなの？」

ルシア「だ、大丈夫だ！いざとなればスパロボ補正でなんとか……なる……かな……？」

ツグミ「まあ、期待しないで待たせてもらっわ。」

第14話 壊れた人形

ハガネ 格納庫

アラド「およ？あれ、R・GUNツスよね？」

カチーナ「ああ。ようやくこっちに来やがったか。」

マイ「……………」

シャイン「あの方がパイロットですね。」

アラド「へへ、女の子なんだ。」

シャイン「私とタメ……あ、いえ、同い年ぐらいでございませうか。」

アラド「王女様よりちよい上ぐらいじゃないツスか。」

クスハ「あ、あの子は…………？」

アラド「どうしたんスか、クスハ少尉？」

カチーナ「ううん……あいつ、どこかで見たような気がするな。」

クスハ「……………」

ラトウーニ（もしかして…………）

アラド「みんなして、どしたの？」

ラトウーニ「……………」

アラド「ま、いいや。ちよっくら挨拶してくるよ。」

シャイン「私も行きますわ。」

マイ「……………」

アラド「俺、アラド・バランガ。君の名前は？」

マイ「マイ…………。マイ・コバヤシ……………」

アラド「え？コバヤシ？」

ラトウーニ「もしかして、アヤ大尉の…………？」

マイ「ああ…………妹だ。」

ラトウーニ「妹……………」

クスハ（アヤ大尉の妹さんは…………確か、事故で亡くなられたって…………）

ラトウーニ「……………」

マイ「……………」

シャイン「私はシャイン・ハウゼンです。あなた、お年はおいくつ

ですの?」

マイ「よくわからない……」

シャイン「え?何故です?」

マイ「覚えてないから……」

アラド(この子、もしかして、俺と同じで……?)

シャイン「申し訳ございません。余計なことをお聞きしてしまったようですね……」

マイ「構わない……」

アラド「実は俺もさ、自分の年齢がよくわからねえんだ。」

マイ「え……?」

アラド「でも、そんなに年齢は離れてねえと思うし……」
「二二じや俺達ぐらいの歳のパイロットって珍しいからさ、仲良くやるっぜ。」

シャイン「私も是非あなたとお友達になりたいですわ。」

マイ「友達……?」

シャイン「はい……」

マイ「……」

シャイン「駄目でございますか？」

マイ「い、いや……………」

アラド「決まりだな。じゃ、お近づきの印に俺達で艦内を案内するぜ。」

マイ「う、うん。」

シャイン「ラトウーニ、あなたもおいでなさいませ。」

ラトウーニ「はい……………」

マイ、アラド、シャイン、ラトウーニは格納庫を出た。

カチーナ「あのガキ、どっかで見たとような気がする……………」

クスハ「……………」

カチーナ「そうだ！オペレーションSRWの時だ！あいつ、エアロゲイターのレビ・トローラーに似てやがるぜ！あん時、やつ映像はハッキリしてなかったが、あの顔立ちは……………」

クスハ「でも、レビ・トローラーはその後……………」

カチーナ「ああ、あたしらが倒した。なら、他人の空似か…………？
おいルシア！」

ルシア「はい？今タイプSVの整備中なんだけど……………」

カチーナ「あのマイって奴、見覚えねえか？」

ルシア「……………いや、俺にはさっぱり。」

カチーナ「あいつがわからねえってことは……………ホントに似てるだけなのか…………？」

クスハ「……………。」

ヒリュウ改　ブリッジ

レフィーナ「え……………!?司令部の様子が変わってますって?」

ショーン「はい。先程から音信不通……………各部への指示伝達も滞っています。」

レフィーナ「何か事故が起きたのでしょうか?」

ショーン「それならば、伝達の方法はいくらでもあります。」

ダイテツ「……………総員、第1種戦闘配置。」

テツヤ「は……………!?!?」

ダイテツ「この空気……………気に入らん。総員、第1種戦闘配置だ。」

ショーン「そうした方が賢明ですな。どうもキナクさい雰囲気です。」

「

レフィーナ「りよ、了解しました。総員、ただちに第1種戦闘配置
！」

伊豆基地 司令部

一般兵「ケネス少将、ハガネとヒリュウ改に動きが！」

ケネス「フン、気づきおったか？」

レイカー（ダイテツ……レフィーナ中佐……！）

ケネス「さすがは貴様の子飼いの連中だ。いい勘をしておる。レイカーすぐに連中へ武装解除命令を出せ。ワシも使える手駒を失いたくないのでな。」

司令部に警報が鳴り響く。

ケネス「何だ！？」

一般兵「わ、湾内に急速浮上してくる物体あり！！識別はプラチナム1！シ、シロガネです！！」

ケネス「ば、馬鹿な！あの艦が何故ここに！？」

伊豆基地 周辺区域

湾岸からシロガネが飛び出してくる。

テツヤ「シ、シロガネ!!」

リー「……久しぶりだな、テツヤ」

テツヤ「リー!お……お前、無事だったのか!？」

リー「……そうだ。」

テツヤ「無事なら、何で連絡をしてこなかった!?俺達がどれだけ心配したと……」

リー「その必要はない。」

テツヤ「何!？」

リー「フフフ……もうその必要はないのだ。」

シロガネからランドグリーズ、ゲシュペンストMk-?、エルアイ
ンスの部隊

ラーズアングリフとスレードゲルミルが発進する。

エキドナ「……」

ウォーダン「……」

レフィーナ「あ、あの機体は!？」

ダイテツ「ノイエDCか!!」

テツヤ「リー！これはどういうことだ！？」

リー「見ての通りだ、テツヤ。私は連邦軍と決別した。異星人共を殲滅させるためにな。」

テツヤ「な、何だって！？」

ダイテツ「全艦、迎撃態勢！PT各機、緊急発進！！」

ハガネ、ヒリユウ改からPY部隊が発進する。

タスク「お、おいおい！どうなってんだよ、こりゃあ！？」

キョウスケ「どうやら俺は・・・はめられたらしい。こんな時に。何を考えている・・・」

マサキ「くそつ、リーが連中を手引きしやがったのか！？」

ライ「それだけとは思えん、他にもいるはずだ。」

マサキ「何っ・・・！？」

ラミア「・・・」

キョウスケ「状況ははっきりせんが・・・ここで引き下がるわけにはいかん。・・・切り開く・・・！行くぞ！」

マサキ「おうー！ー！」

ラミア「……………動くな！」

アンジュルグはミラージュソードをハガネのブリッジへと向けた。

マサキ「!?」

ラミア「全機に告ぐ。直ちに武装解除してもらおう。」

エクセレン「わお！ラ、ラミアちゃん!？」

カチーナ「武装解除だと!？」

キョウスケ「どういうことだ？ラミア。この状況で冗談を言うとも思えんが、説明しろ。」

ラミア「…………キョウスケ・ナンブ。お前達に説明する必要はない…………武装解除だ。強制はしない。それにお前達のことだ。素直にこちらの命令に従うなどと思っていない。だが、私の機体…………アンジュルグには自爆装置が搭載されている。」

ルシア「何…………!？」

ラミア「ただの爆薬ではない。この距離ならば…………お前達はおろか、ハガネやヒリュウ改も撃沈できる。」

ダイテツ「！」

レフィーナ「な、何ですって!？」

ラミア「ここまで言えば、お前達が取べき行動は…………もうわか

るはずだが?」

アラド「ラ、ラミアさん、どうしたんだよ!? 何でそんなことを!」

ラミア「それが私の・・・任務だからだ。」

アラド「に、任務!??」

ライ「お前は・・・!」

ラミア「繰り返す。直ちに武装解除せよ。抵抗、もしくは距離を離すような素振りを見せれば、機体を自爆させる。」

リユーネ「馬鹿言ってるんじゃないよ! そんなことをしたら、あんただって死ぬんだよ!??」

ラミア「任務の遂行が最優先だ。・・・それ以外に興味はない。」

リユーネ「!!」

カチーナ「ラミア! てめえっ!!」

ラミア「・・・お前達の心がけ次第だ。無駄な事をしなければ、全員の命は保証する。さらに我々「シャドウミラー隊」の一員として活動することができる。・・・やることは今と変わらない。」

キョウスケ「シャドウミラー・・・だと・・・!??」

シロガネからツヴァイザーゲイン、ヴァイスセイヴァーが発進した。

アラド「あ、あのロボットは!？」

ブリット「この間、転移してきた特機……!!」

ヴィンデル「ご苦労だった、W17」

ラミア「はっ……」

クスハ「W17!?!?そ、それって……ラミアさんのことなんです
か!？」

ラミア「そう……。それが私の本当の名称だ。」

クスハ「ほ、本当の……名称!？」

キョウスケ「お前達は何者だ?今ラミアが言ったシャドウミラー……
・それが組織の名前なのか？」

ヴィンデル「そう。そして、私の名はヴィンデル・マウザー……
シャドウミラーの指揮官だ。」

キョウスケ「……」

ヴィンデル「会えて光栄だ。連邦軍特殊鎮圧部隊ベールブルズ隊長……キョウスケ・ナンブ大尉。「こちら側」では、さしたる力
を持たない……とは聞いているがな、フッフ……」

ルシア「“こちら側”って……あの時アクセルが言っていたこ
とと同じ……!」

キヨウスケ（特殊鎮圧部隊の大尉だと・・・？俺が・・・？）

エクセレン「ちょっと、あんた達！ウチのラミラちゃんに何したの！？」

レモン「何もしていなくてよ？彼女は始めから、そのためにあなた達に接触した。わかりやすく言えば、スパイってわけね。」

エクセレン「・・・！」

レモン（そう・・・この子が・・・エクセレン・・・こんなかたちで出会うことになるとは、ね・・・）

エクセレン（何かしら・・・この感じ・・・。この人は・・・？）

ラミア「・・・」

ルシア「前々からにあってはいたが・・・まさか本当にスパイだったなんてな・・・」

レモン（アンジュルグ・・・W17・・・？ハガネのブリッジを制圧しろと言ったはずなのに、どうして外から・・・？そうせざるを得ない状況にでもなったのかしら？）

ヴィンデル「では・・・返答を聞こうか、ダイテツ・ミナセ中佐。武装解除に応じるか、否か？」

ダイテツ「・・・」

ケネス「待て、話が違つぞ！やつらの指揮権はワシが握ることになつておるはずだ！」

ヴィンデル「お前は・・・ケネス少将か。司令部の制圧は成功したようだな。」

ダイテツ「何だと？」

レフィーナ「せ、制圧！？」

ケネス「貴様・・・余計なことを言いおつて！」

カイ「うぬっ！すでに外側は埋められていたということか！」

ダイテツ「ステイール2より各機へ！その場で一時待機せよ！」

カイ「りよ、了解・・・！」

ヴィンデル「賢明な判断だ。」

キョウスケ「ちっ、サマ師どもが・・・。仕込みはすべてできていた・・・ということか。ヴィンデルと言つたな・・・お前達の目的は何だ？こんなまわりくどいやり方をしたからには・・・それなりの目的があるはずだが？」

ヴィンデル「我らの目的は一つ・・・理想の世界を創ることだ。」

キョウスケ「理想の世界だと？」

イルム「こりやまた、随分と大仰な話だな。」

ルシア「要するに世界征服・・・ということなのか？」

ヴィンデル「言い方を変えれば、そうかも知れん。だが、何を以て理想の政界とするかは、世界を創る者のみが決定する権利を持つ。」

ラミア「・・・・・・・・・・」

ヴィンデル「そして、世界征服はその権利を行使するための過程に過ぎない。」

カチーナ「ゴタクはいい！てめえの理想とやらを言ってみろ！！」

ヴィンデル「・・・・・・・・永遠の闘争・・・・・・・・絶えず争いが行われている世界・・・・・・・・それが我々の理想の世界だ。」

アイビス「永遠の闘争・・・・・・・・！？」

マサキ「ふざけんな！そんな世界のどこが理想だ！！」

レモン「理想よ。戦争があるから、破壊があり・・・・同時に新たな創造が始まる。戦争があつたからこそ発展した技術がどれほどあるか、考えたことがあつて？」

ツグミ「戦争で発展した技術・・・・・・・・！？」

レモン「そう・・・・例えば、テスラ・ドライブ・・・・。戦争がなければ、現状ほどの小型化・高性能化は進んでいなかった・・・・」

ツグミ「！」

レモン「そして、ヒュッケバインを始めとするEOTを応用した人型機動兵器・・・トロニウムを動力源とするSRX・・・これらは異星人との戦争がなければ生み出されなかつたわ。」

リュウセイ「！」

ルシア「耳が痛い話だ・・・」

レモン「あなたが使っている兵器は戦争が生み出した技術の結晶・・・人類の叡智とも言えるものなのよ・・・」

アイビス「そんなことが・・・そんなことがあつてたまるもんか！」

ツグミ「科学は人類の発展のためにあるものよ！戦争のための技術が人類の叡智などあるはずがないわ！」

ヴィンデル「だが、戦争なくして人類の発展はあり得ん。それは歴史が証明している。」

リー「大佐の言う通りだ。戦争があるから英雄は生まれる。そして、その者こそが・・・異星人を駆逐する者となる。」

テツヤ「お前、本気でそんなことを言っているのか!？」

リー「テツヤ・・・インスペクターを倒せるのはシャドウミラーだけだ。」

テツヤ「何!？」

リー「故に私は彼らの側についた。そして、人類は闘争によって己を高め・・・さらなる力を得る。そう・・・貴様ら以上の力をな。」

テツヤ「お前はそのためだけに戦争を継続させると言うのか！？そのために犠牲を払っても構わないと言うのか！？」

リー「犠牲はすでに払われている。貴様やケネスのように無能な軍人のせいだな。」

テツヤ「！」

リー「シャドウミラーこそ、私の理想の軍隊。兵士は己の任務に忠実であり、命を捨てることに厭わない。」

ウォーダン「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エキドナ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ラミア「・・・・・・・・・・・・・・・・」

リー「彼らでなければ、地球圏を防衛することが出来んだ。」

クスハ「だからと言って、戦争を継続させるなんて間違ってると思います！」

ブリット「そうだ！俺達は戦争を続けるために戦ってるんじゃない！お前達のような連中からこの世界を・・・そこで生きる人達を守るために戦っているんだ！！」

リー「フン、末端の兵士は己の任務のことだけを考えていればいい。

そして、任務を確実に遂行する兵器であればいいのだ。」

アラド「ふざけんな！俺達は兵士であっても、兵器じゃねえ！マシンじゃねえんだ！！」

ラミア「……………」

アラド「ラミアさんだって、そうじゃないんすか!?!」

ラミア「……………」

ヴィンデル「W17に問うても無駄だ。先程リー中佐が言った通り、奴は任務に忠実な人形だからな。」

アラド「え!?!」

クスハ「に、人形だなんて……………」

ルシア（まさか……………イングラム少佐やヴィレッタ大尉と同じ……………!?!）

ヴィンデル「……………最後通告だ、ダイテツ・ミナセ中佐。武装解除をしてもらおう。さもなければ……………死だ。」

ダイテツ「……………」

テツヤ「艦長……………!」

ダイテツ「闘争が人類の発展を促す……………確かに、あの男の言う通りだろう。」

ヴィンデル「……………」

ダイテツ「だが、戦いによって生み出されるもの、そして失われるもの……その意味を理解せず、結果だけを見る者に、戦争を語る資格などない！」

ラミア「……………そうだ。それが正しいのだろう。」

ヴィンデル「む……………!？」

レモン「W17……………!？あなた、何を!？」

ラミア「ヴィンデル様、レモン様……………」

アンジュルグはツヴァイザーゲインにとりつく。

ヴィンデル「貴様、何の真似だ!？」

ラミア「コードATA……………」ASH TO ASH……………発動……………!」

レモン「私達を……………!？待ちなさい、W17!」

ラミア「我々はこの世界……………」「こちら側」に来るべきではなかったのだ……………戦争によって成り立っていた世界……………それが「向こう側」……………我々の世界だ。しかし、戦争を否定する事によって創られていく世界もある……………それがここだった。私のような作り物……………戦争ののために生まれた子供が介入すべき……………いや、介入できる場所ではなかったのだ……………!」

レモン「W17・・・！それがあなたに芽生えた“意思”なの・・・！？」

ヴィンデル「ええい、所詮は人形！貴様、狂っていたかつ！」

ラミア「「向こう側」の尺度ではそうだろう。だが・・・学んだと言ってもらおう！」

ヴィンデル「W15、16！アンジュルグを引きはがせ！」

エキドナ「はっ。」

ウォーダン「させはせんぞ、W17！造物主に逆らうなどと！」

ラミア「W15・・・おまえは心さえ借り物の任用のままだったようだな。この状況を予測すらできなかったか。遅いぞ・・・！」

レモン「あなたは・・・次のステージに進んだのね・・・やはり、あなただけが・・・あなたこそが・・・最高傑作・・・」

ラミア「いや、私は欠陥品だ。仲間をあざむき、生みの親にすら牙をむく・・・な。すまない・・・レモン様。私は・・・」

レモン「W17・・・！」

ヴィンデル「！！」

アンジュルグが大爆発を起こし、ツヴァイザーゲイン、ヴァイスセイヴァーに大ダメージを与える。

リョウト「!!」

クスハ「ああっ!!」

エクセレン「ラ、ラミアちゃん!!」

ラーダ「そんな・・・!!」

ヴィレッタ「自爆したのか・・・!!」

ルシア「あの爆発では・・・生還は絶望的・・・か。」

アラド「う、嘘だろ・・・!?ラミアさん!!」

キョウスケ「・・・俺達を・・・守るためか・・・!?」

マイ（あ、あの人は・・・何故、あんなことを・・・）

エキドナ「ご無事ですか？ヴィンデル様、レモン様・・・!」

レモン「・・・私は大丈夫よ。回避行動が早かったおかげかしらね・・・（予測できなかったわけじゃないけど、まさか・・・この状況でなんてね・・・）それより、ヴィンデル・・・ツヴァイは!？」

ヴィンデル「ぬうう・・・機体は無事だが、システムXNが損傷したか。戦闘も不可能・・・!おのれ、人形風情がよくも・・・!」

レモン「撤退しましょう、ヴィンデル。システムXNのこともあるし、これ以上傷を広げるべきではないわ。」

ヴィンデル「仕方あるまい……！リー中佐、ハッチを開ける。帰還する。」

リー「はっ。」

ヴィンデル「W15、16……後詰めはお前達に任せる。」

ウォーダン「承知。」

レモン「え……！？あれは……！？」

帰還途中のヴァイスセイヴァーの目の前に

レモン（アンジュルグの……！？）

アンジュルグのコクピットブロックがあった。

ヴィンデル「レモン、何をやっている？退くぞ！」

レモン「よし、回収……。了解よ、すぐに行くわね。」

ヴィンデル「とんだ邪魔が入ったな。だが、この次は……！」

カチーナ「あいつら、逃げる気か！？」

レモン「戦いはこれからよ。ちよつと予想外の邪魔が入ったけれど……まだまだ、有意義な闘争を楽しみましょうね。」

エクセレン「……！」

レモン（また会いましょう、エクセレン・・・）

ツヴァイザーゲイン、ヴァイスセイヴァーがシロガネに帰還する。

リー「ASRS展開！急速潜行！」

シロガネが海へと消え、反応がロストする。

キョウスケ「くっ！逃がさんぞ！」

ウォーダン「キョウスケ・ナンブ・・・ここから先は通さぬ。」

エキドナ「お前達の相手は我々がする。」

キョウスケ「邪魔をするならば、押し通るまでだ・・・！」

カイ「各機、攻撃を開始しろ！！」

ルシア「了解！このまま黙って見過ごすわけにはいかない・・・！
闘争の世界なぞ認めるものか！！」

ブリット「ルシア、奴には気をつける。あの特機は斬艦刀を使う！」

ルシア「斬艦刀！？まさかゼンガー少佐が！？」

キョウスケ「いや、あれはゼンガー少佐ではない。」

エクセレン「でも名乗りとかまるつきりゼンガー少佐なのよね。」

ウォーダン「ほう・・・あれがルシア・ゾルダークか・・・」

エキドナ「W15、奴の相手は任せる。」

ウォーダン「承知！」

ルシア「来たか・・・グルンガストとも違う・・・一体あれは・・・」

ウォーダン「いざ勝負！」

スレードゲルミルはドリル・ブーストナツクルを放つが、タイプS
Vは回避しブースト・ドライブで接近する。

ルシア「あの長い得物なら・・・懐に飛び込めば喰らわない！」

ウォーダン「甘いぞ！」

スレードゲルミルの頭部のドリルが回り出す。

ルシア「な!?!」

ウォーダン「ドリル・インフェルノオオオオオ!!」

ドリル・インフェルノが頭部を直撃、一部が損壊する。

ルシア「ちいつ! あんな隠し玉が・・・!?!」

ウォーダン「ほお・・・今の一撃を持ちこたえるとはな、だがこの
一太刀は耐えられまい!!」

スレードゲルミルは左肩のユニットを出し、斬艦刀を展開する。

ウォーダン「我はウォーダン！ウォーダン・ユミル！メイガスの剣なり！！」

ブリット「まずい！！」

アイビス「ルシア逃げて！！」

ルシア「今逃げちゃいいのだ！ここは……」

ウォーダン「斬艦刀！稲妻重力落とし！！」

ルシア「いちかばちかだああああ！！」

振り下ろされた斬艦刀を、タイプSVは神経白羽取りで受け止めた。

ウォーダン「何！？」

ルシア「や、やってみるもんだな……二度としたくないけど……」

ツグミ「斬艦刀を……しかもPTのパワーで受け止めるなんて……」

イルム「さすがにグルンガストでもやりたかねえな。」

ウォーダン「だが、その状態では反撃できまい！」

ルシア「できるんだよな、こいつがな！」

タイプSⅤの胸部ハッチを開く

ウォーダン「!?!」

ルシア「ハイメガ・ブラスターキャノン!!」

ハイメガ・ブラスターキャノンの直撃を喰らい、スレードゲルミルが吹き飛ばされる。

ルシア「あれだけ至近距離で食らっては、ただではすまないだろう。」

しかし、損傷部分が再生をし出す。

ルシア「な、何!? 再生した!?!」

エクセレン「あ、言い忘れてたわね。」

キョウスケ「何故かは知らんが、傷が再生するらしい。」

ルシア「早く言ってくれよ!(だが今の再生の仕方・・・まさか・・・)」

エキドナ「・・・W15、シロガネから撤退命令が来たぞ。」

ウォーダン「承知した。」

スレードゲルミル、ラーズアングリフと残存戦力が伊豆基地から撤

退した。

ユン「敵機、撤退しました！」

キヨウスケ「……………（ラミア……おまえは何がしたかった？スパイと裏切り……どちらがお前の真意だ？）」

ケネス「おのれ、ヴィンデル！獅子身中の虫めが！」

ルシア（どつちがだよ……）

ケネス「永遠の闘争だと！？理想の世界だと！？この非常時に戯言をぬかしおって！奴らを生かしておけば、ワシらの足元がすくわれかねん！ダイテツ・ミナセ！直ちにシロガネを追撃せよ！」

ダイテツ「……………何故、レイカーではなく少将がワシらに命令を下すのだ？」

ケネス「総司令部からの命令により、本日付けをもってワシが極東方面軍の司令官となった！」

ダイテツ「何！？」

レフィーナ「そんな……！話が突然すぎませんか、少将！？」

ケネス「ならば、総司令部に確認を取るがいい！」

シヨーン（これは……やはり……）

ダイテツ（上の方で何かあったな。それも最悪に近い事態が……）

ケネス「何をぐずぐずしておる！さっさとシロガネを追え！！」

ダイテツ「（…………レイカーは人質と言うわけか。）力回。これより、本艦とヒリュウはシロガネを追撃する。」

ハガネ　ブリーフィングルーム

カチーナ「くそっ！ラミアの奴が敵のスパイだったとはな！」

キョウスケ「……………」

リーダー「……………」

カチーナ「この分じゃ、あたしらの情報はあのシャドウミラーって連中に相当洩れてるに違いねえぜ！！」

ラッセル「しかし、彼女はシャドウミラーの命令に逆らって……………」

カチーナ「あめえぜ、ラッセル！奴の真意がどうだろうが……………今までいけしゃあしゃあと仲間のフリして、敵に情報を流してたことに違いはねえんだ！」

クスハ「なら、どうしてラミアさんは自爆したんですか……………？どうして私達を助けてくれたんですか……………？」

カチーナ「そ、そいつは……………！！……………そうだ、ラミアのおかげであたしらは……………」

エクセレン「ラミアちゃんにとって……いつの間にか、私達は敵じゃなくなってた。仲間だって思ってくれてたのよ……でなきや、自分を犠牲にしてまで、あんなこと……」

カチーナ「だが、それすらも仕組まれたことかも知れねえ……ラミアの意思とは関係のない所で……それに、他にもスパイがいる可能性だってあるぜ。」

ラッセル「ほ、他にも？」

カチーナ「ああ、あのマイって奴だ。」

ラーダ「……！」

カチーナ「あいつは、エアロゲイターのレビ・トラーに似てやがる。まさかとは思うが、もしかしたら……」

ラッセル「彼女はアヤ大尉の妹さんなんですよ？いくらなんでもそんな……！」

クスハ「……」

キョウスケ（……いい読みかもしれん。ホワイトデスクロスと戦った時、アヤ大尉は……）

ラーダ（やはり、あの子のことをアヤに確かめなければ……）

ルシア（早速……怪しまれてきたか……この分だとマイの事がバレるのも時間の問題か……）

連邦軍基地 周辺区域

「???」情報が確かなら、シロガネはここに向かっ
てきているはず。
・普通ならこんな情報信じるのは何の考えもなしに1目賭けを全
賭けするほど馬鹿げているんだが・・・当たれた36倍・・・見返
りは大きい。待ってるよ・・・絶対助けてやるからな！」

第14話 完

第14話 壊れた人形（後書き）

ルシア「シロガネを追ってシャドウミラーに制圧された基地へと向かった俺達。そこには生還したラミアとゼンガー少佐達の旧教導隊の面々が戦っていた。そこには、教導隊時代、共に戦った戦友の姿もあった。」

次回 「追放者に舞い降りる天使」

ルシア「閃光の隼が、戦場の空を舞う。」

第15話 追放者に舞い降りる天使

シロガネ 個室

ラミア「う．．．ここは．．．？．．．．．どういことだ？私はアンジュルグもろとも．．．（各部に損傷はなし．．．まさか、自爆装置が完全に機能しなかったとでも？それにここは？ハガネでもヒリユウ改でもない．．．。状況の把握が最優先か）」

個室の扉が開いた。

ラミア「む．．．！誰だ！？」

レモン「．．．はい、W17．お目覚めのようね。」

ラミア「レモン．．．様．．．！？あなたがおられるということは．．．ここはシロガネ．．．ん？言葉が．．．」

レモン「言語系は修復済みよ。私は構わないけど、いつまでもあの喋り方じゃ、あなたのイメージが．．．ね。」

ラミア「．．．ありがとうございます。レモン様、あなたがご無事で．．．私にも損傷がないということは、アンジュルグの自爆は．．．」

レモン「ご安心なさいな。私は回避が早かっただけよ。ツヴァイは大きなダメージを受けたわ。システムXNの一部が損傷．．．あの場で撤退せざるを得なくなった．．．つまり、あなたの試みは成功したってこと。後のことは簡単よ。奇跡的に残ったコックピット

ブロックを回収・・・損傷箇所を修理したのよ。言語系を含めて、ね。」

ラミア「ありがとうございます・・・。それで・・・私を生かした理由は何ですか？」

レモン「ふふ・・・さすがに勘がいいわね、W17・・・わけを聞かせてもらおうと思っただけね。」

ラミア「・・・・・・・・・・」

レモン「あなたは指令を無視したばかりか、味方である私達もろとも消えようとした。」

ラミア「・・・この世界に・・・我々の居場所はありません。それが・・・わかっただけです。だから私は・・・」

レモン「そこよ。あなたには・・・いえ、Wシリーズには指令に対して疑問を持つどころか・・・それに逆らって行動するような思考ルーチンを組み込んでいないのよ？」

ラミア「では、私は・・・やはり壊れているのでしょうか？修理をされたはずの今でさえ、その気持ちは・・・」

レモン「・・・修理をしたのは体と、言語系のみよ。それ以外は、今までのあなたのまま。」

ラミア「・・・・・・・・・・」

レモン「あなた・・・まるで人間になったようね。」

ラミア「人間・・・？レモン様、私はWシリーズ・・・作られた物です。創造主である、あなたの意にそむく・・・そんなことが許されるわけがありません。」

レモン「ある意味・・・あなただけが、私の望むままの存在になりつつあるのかも、ね・・・」

ラミア「・・・え？」

レモン「ハガネとヒリュウ改の確保・・・その指令を伝える時、自分で考え、自分で決める・・・そう言ったわよね？」

ラミア「・・・はい、その結果・・・私は・・・」

レモン「そう、完全な自我の確立・・・。Wシリーズは本当の意味で“自分で考え、決める”ことはできないように作られているの。だけど・・・あなたただ、そのステージまで上がることができた・・・シャドウミラーが求める、兵器としてのWシリーズという意味では失敗作・・・」

ラミア「・・・」

レモン「でも・・・科学者としても私が、あなた達に望む最終形・・・それがあなたよ。」

ラミア「・・・レモン様が望んだ・・・もの？」

レモン「テストケースとして、W15にはゼンガー・ゾンボルトの人格をインプット・・・彼はそのように振舞ってはいるけど・・・」

それはオリジナルではなく、コピー・・・“ゼンガーならばこう判断するだろう”・・・という、シミュレーションに過ぎない。しかも、W15を安定させるにはメイガス・ゲボの存在が必要だった・・・つまり、彼は自分の力で自身を律することができない」

ラミア「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レモン「でも・・・あなただけは、あなただけの自我が生まれた。与えられた指令に従わず、自分自身の意思で判断し、行動するといふ・・・ね。」

ラミア「・・・・・・・・これから私は・・・どうすればいいのですか・・・？レモン様の望む者・・・それに私がなれたとしても、Wシリーズとしては失敗作・・・この世界には居場所がなく、Wシリーズとしての使命も果たすことができない・・・では、私は・・・」

レモン「思い悩むことはないわ。また、決めればいいだけのことよ。あなたの力は、私がよくわかっているわ。・・・どう？戻って、また力になってくれないかしら？」

ラミア「・・・・・・・・・・・・・・・・はい。レモン様がそうおっしゃるのならば」

レモン「ダメよ、W17。あなた自身が決めるの。Wシリーズとしても・・・いいえ、ラミア・ラヴレスの意思でね。」

ラミア「・・・・・・・・・・出ます。」

レモン「ふう・・・・・・・・後、ついでと言っちゃなんだけど・・・」

ラミア「はい？」

レモン「彼女も連れてってはいけないかしら？」

ラミア「彼女？」

レモン「入ってきて。」

シャルロット「……………」

ラミア「レモン様、彼女は？」

レモン「彼女はシャルロット・フローリアン、旧教導隊のメンバーで、私達のところで身柄を拘束していたの。」

ラミア「教導隊の……しかし何故彼女を？」

シャルロット「私が持っている力を利用していたんです。」

レモン「そう……彼女には傷や痛みを治す力が備わっているの。」

ラミア「傷を……!？」

レモン「非現実的ではあるけど……真実よ。彼女の力は、私達が望んでいる闘争の世界で必要になってくる。」

シャルロット「何度も言うように私は協力する気なんて……!」

レモン「そう、だからラミアと一緒にここを出てもらいたいの。」

シャルロット「ふえ．．．!?」

レモン「だって、あなたのような女の子が戦争に利用されるなんて．．．心が痛むもの。」

シャルロット「．．．一体どういう風の吹きまわしなんですか．．．」

レモン「さて．．．ね。」

ラミア「．．．．．」

レモン「後部格納庫にヴァイサーガが置いてあるわ。それに乗っておきなさい。」

ラミア「．．．」

レモン「後、あなた用にアシユセイヴァーも用意しておいたわ。」

シャルロット「．．．!?」

レモン「あなたの機体．．．ヴィンデルが壊しちゃったからね。そのお詫びってこと。カラーリングも合わせておいたから．．．」

シャルロット「でも．．．私、教導隊っていつてもただの看護兵で．．．まともにPTなんて．．．」

レモン「そう．．．通りで動きがおぼつかなかったわけね。大丈夫、あれには究極のマン・マシン・インターフェイスが搭載されているから、考えた通りに動くわ。」

シャルロット「……………」

レモン「それと……………これも預けておくわ。」

シャルロット「……………データチップ？」

レモン「これには私が考案した「ナハト」と「アーベント」のデータが全て詰まっているわ。」

シャルロット「何で……………敵である私にこんなものを……………」

レモン「科学者として、失敗作のまま終わらせるのも気が収まらなくてね。有効に使ってくれれば本望よ。」

シャルロット「……………」

ラミア「レモン様……………」

レモン「生きて両親の元に戻りなさい。必ずね。」

シャルロット「……………お父さんとお母さんは……………殺されました。」

レモン「え……………!?!?」

シャルロット「……………」

レモン（まさか、手引きをしたあの男と関係が……………?）

シャルロット「……………」

レモン「ごめんなさい、つらいことを聞いてしまって。」

シャルロット「いえ……………」

レモンはシャルロットを抱きしめる。

シャルロット「ふえ……………!?!?」

レモン「あなたの両親の代わりにはならないと思うけど……………お詫
びに、母親の温もりを……………気が済むまで感じさせてあげる。」

ラミア「……………」

シャルロット「う……………うええええ……………!」

レモン「W17、彼女をお願いね。せめて、今の保護者の元に帰れ
るように護ってあげて。」

ラミア「はい……………レモン様。」

レモン「行く前にもう一つだけ聞かせて。ATXチームのエクセ
レン・ブラウニング……………彼女は……………どんな子だった?」

ラミア「やはり、彼女とレモン様には関係が……………?」

レモン「……………」

ラミア「もしや、向こう側では……………肉親……………」

レモン「さあて、ね。」

ラミア「……………」

レモン「で、どんな子？」

ラミア「ベールウルフのパートナーです。つかみどころのない、不思議なお方。……私にもよくして下さいました。そして……どこことなく雰囲気似ています。レモン様と……」

レモン「そう……。何故、そのことを最初に報告しなかったの？」

ラミア「……自分でもよくわかりません。なぜか……伝えてはいけないような気がしました。そして、それはエクセレン・ブロウニングにも……」

レモン「……そのあたりからだったのね、あなたに変化が起こり始めていたのは。」

ラミア「……おそらくは……」

レモン「じゃ、エクセレンの話をしてくれたお礼に、一つだけ教えてあげましょう。アギユイエウスの扉……もうじき開かれることになるわ。」

ラミア「……！もしか、システムXNが？」

レモン「例の機能回復にはもう少し……後はコアを手に入れさえすれば。」

ラミア「コア・・・ヘリオスか。だが、あの男の行方はまだ・・・」

レモン「システムXNの設置は・・・さっき話したわよね？」

ラミア「ツヴァイザーゲイン。アンジュルグの自爆装置でも破壊まではいたらなかった・・・」

レモン「さ、急ぎなさい。すぐにこの艦はアクセルの舞台と合流するわ。顔なんか合わせたら、ただじゃ済まないわよ？あなたも、いいわね。」

シャルロット「はい・・・」

ラミア「では、レモン様・・・私は行ったり来たりなんかしちゃ・・・む!？」

シャルロット「ふえ!？」

レモン「あらあら・・・やっぱりね。」

ラミア「レモン様、これは・・・。言語系は修理してくださったのでは・・・」

レモン「・・・パーツ交換をしまえば簡単だったんだけど・・・それだと、メモリーの一部が消えてしまうのよ。ほんの少しだけだね。今のあなたの形成しているものが、そこに含まれているのかもしれない・・・そう考えたら、パーツ交換はできなくなってしまうのよ。バグが少し残るかも・・・とは思ったけれど、本当に残っちゃってたわね。」

シャルロット「ふふ……変な喋り方。」

ラミア「ぬ……」

レモン「あら、あなたの笑顔、初めて見たわね。」

シャルロット「……」

レモン「……どうする？交換するならやってあげるけど？時間はかからないわよ。」

ラミア「いえ、すばらしい判断です。私を私のままにしてくれたこと……感謝しちやいますのです……レモン様。」

レモン「ふふ……お行きなさい、W17。私達とあなた……どちらの戦いが正しいのか……この戦争の行く末が、それを証明してくれるでしょう。」

ラミア「はい。……お元気で、レモン様……」

シャルロット「ありがとうございました……私を助けてくれて……」

レモン「あなたのパートナーによろしくね。」

量産側W「こちらMW2441。基地の制圧、及び補給物資の確保を終了。」

アクセル「わかった。間もなくシロガネが来るはずだ。搬入準備を急げ。」

量産型W「了解。」

アクセル「……Wシリーズ、か。造反したW17を確保したと連絡を受けたが……普通に考えれば解体処分だな、こいつは。どうやら完全におかしくなっていたか。……だが、そんな不良品が、あそこまでの腕を持っているものか？それに、以前俺に意見をしてきたことといい、人形達の中では別格だ。……俺と唯一引き分けたWナンバー……フツ。俺としたことがな。戦争のために生み出された人形を気に掛けるとは。」

Sミラー兵「アクセル隊長、シロガネが来ました。」

アクセル「……ああ、了解した。」

シロガネが区域に入った。

アクセル（護衛にW15とW16が見当たらん。伊豆で後詰めに回っているのか？）「こちらアクセル・アルマー！シロガネ、応答しろ。」

しかし、シロガネから応答がない。

アクセル「どうした？リー艦長。」

突然、シロガネのハッチが爆発する。

アクセル「！」

そこからヴァイサーガ、オレンジに塗装されたアシユセイヴァーが発進する。

リー「おのれ、ハッチが破られたか！」

アクセル「なんだ！？ハッチを破壊して……出撃！？それに、あの機体は……！」

ラミア「……む！？あのアシユセイヴァー……指揮官仕様か……。どうやら最悪のタイミングで飛び出してしまったようだな。」

シャルロット「うわぁ……。あんなに敵機が……。！？！」

アクセル「まさか、W17か！？その出撃の仕方を見ると、再調整された……。というわけではないようだな、こいつは。」

ラミア「アクセル隊長……。その通りです。私は闘うために出撃しました。私の戦いを……。私の意思で……！」

アクセル「なんだと……。！？（こいつ……。やはりほかのナンバーとは違う……。！）」

ヴィンデル「レモン、何故W17があれに……。それにあのアシユセイヴァーは何だ！？！」

レモン「さすがは私の最高傑作ね。再調整を施すつもりだったのに・

・その前に脱走されたようね。アシユセイヴァーはエンジェル用に改良してただけど・・・裏目に出ちゃったわね。まさかW17が脱走の手引きをしてたなんてね。」

ヴィンデル「レモン、奴に情が移ったか・・・！」

レモン「慌てないで。私まであの子みたいに裏切ったりはしないわ。それだったら、もうちょっと逃がすタイミングを考慮するわよ。こんな、間違いなく破壊される状況で飛び出させはしない・・・」

ヴィンデル「・・・」

レモン（ここで散るなら、そこまで・・・あなたの行く道は険しくてよ？W17・・・エンジェル・・・）

ラミア「・・・」

アクセル「・・・W17、そしてエンジェル。武装解除しろ。今戻るなら見逃す。レモンに再調整をしてもらえ。」

シャルロット「冗談じゃないわ！誰が戻るもんですか！」

ラミア「それでは、今の私は失われてしまいます。そうならないために・・・私は出てきたのです。Wナンバーとしても自分から・・・決別するために。」

アクセル「決別、か。俺も向こう側と決別するためにここへ来た。貴様も同じ理由で自分の世界を捨てるつもりか？」

シャルロット（・・・向こう側って・・・さつきからこの人達何を・

・・・?)

ラミア「・・・そういうことになるのでしょうか。・・・ですが、もう決めたのです、アクセル隊長。」

アクセル「・・・わかった。行きたければ、俺を倒すことだ。」

ラミア「・・・了解。」

アクセル(言語系の異常は修正されている、か。レモンがそんな半端な調整をするはずがない・・・まさか、あいつ・・・)

レモン「・・・」

アクセル「他の者はエンジェルの捕獲を。裏切り者のW17・・・これも隊長の責任だ。・・・相手は俺がする。」

ラミア「一対一で、私との決着・・・こだわっているようですね。隊長。」

アクセル「フツ・・・そうだな。俺の性分だ。アシユセイヴァーの慣らしにはちょうどいい。・・・ヴィンデル、リー。見物していないで、補給物資の搬入を急げ。・・・カタはすぐにつく。」

ヴィンデル「了解した。任せる。」

アクセル「・・・来い、W17」

ラミア「了解です。命令ではなく、自分の道を行くために・・・あなたを倒します、隊長。立ち塞がるなら撃ち貫くのみ・・・」

アクセル「気に入らん物言いだな、こいつが。貴様が影響をうけた連中……予想がつく。……となれば、ますます貴様には負けられん……!」

ラミア「シャルロットは指示する方角へ退避しろ。アクセル隊長は私が止める。」

シャルロット「は、はい!」

ヴィンデル「ここまで来てエンジェルを逃がせるか……!各機、あのアシュセイヴァーを捕獲しろ!破壊しても構わん!」

Sミラー兵「了解。」

シャルロット「レモンさんの言う通り……思ったように動く……これならセナの足を引っ張ることもない!」

Sミラー兵「エンジェルを捕獲する。」

量産型ゲシュペンストMk-?がシャルロットのアシュセイヴァーを包囲する。

シャルロット「捕まってたまるもんですか!私だって一応訓練はしてきたんだから!」

アシュセイヴァーはガンレイピアで前方のゲシュペンストMk-?を撃墜し突破を図る。

シャルロット「今のうちに……!」

後方からのメガ・ビームライフルで足止めを食らってしまった。

シャルロット「くっ……!?!」

Sミラー兵「これで……」

後ろから取りつこうとしたゲシュペンストMk-?が、別方向からの攻撃で破壊される。

アクセル「何!?!」

シャルロット「これは……!?!」

量産型W「8時方向に敵機接近。」

ヴィンデル「!」

そこに、黒いゲシュペンスト……ゲシュペンストMk-?・タイプTV・アーバレストがアシユセイヴァーの前に出た。

セツナ「無事か、シャル!」

シャルロット「セナ!」

アクセル「貴様……セツナ・テストロッサか!」

ラミア（あれが……向こう側の世界で墮天使と恐れられた男か……）

ヴィンデル「エンジエルを奪還しにきたか！」

セツナ「ヴィンデル・マウザー……！あの時のチップを返しにきてやったぞ！」

アクセル「フツ……あの時のリベンジと言うわけか。」

セツナ「シャル、その機体どうしたんだ？シャドウミラーの機体のはずなのにお前のカラーリングを……」

シャルロット「話は後！とにかく、あのマントを纏った特機は味方だから。」

セツナ「……本当に信用できるのか？」

ラミア「信用しろとは言わん。だが、私は行動で示すのみだ。」

セツナ（……俺の感覚が奴に警戒していない……だったら、あいつから放たれる人と違う気配は何なんだ……？）

量産型W「さらにアンノウン接近。」

ヴィンデル「何だと……！？」

さらに別方向からゲシュペンスト・タイプRV、ヒュッケバインMK-？トロンベ、グルンガスト参式が介入する。

ラミア「あれは……！」

ギリアム「応答せよ、シャドウミラー隊指揮官……ヴィンデル・

マウザー大佐。」

ヴィンデル「何者だ？」

ギリアム「ヘリオス……といえばわかるだろう。」

ヴィンデル「！！」

レモン「まさか……嘘でしょう!？」

アクセル「顔はともかく、この声……間違いないようだな、こいつは。」

ギリアム「……………」

セツナ「ギリアムさん……!」

シャルロット「てことはあの2機は……!」

レーツェル「まさか、このような再会をするとはな。」

ゼンガー「久しいな、セツナ・テストロッサ。」

セツナ「ゼンガーさんにエルザ……」

レーツェル「今の私はレーツェル・ファインシュメッカーだ。」

シャルロット「ふえ!?!でもあれ……」

セツナ「……どう見てもエルザさんだよな……」

ヴィンデル「ふ、ふふふ・・・久しぶりだな、ヘリオス・・・ヘリオス・オリンパス。それがお前の素顔か？」

ギリアム「・・・・・・・・」

ゼンガー（ヘリオス・オリンパスだと？）

レーツェル（ギリアムのことか？）

ギリアム「ヴィンデル大佐・・・再びお前と会うことになるとはな。」

ヴィンデル「ああ、お前が残したシステムXNのおかげだ。やはり、アギユイエウスの扉はファーストジャンパーであるお前に通じていたようだな。」

ギリアム「・・・・・・・・」

レモン「随分と捜したのよ、あなたを。」

ギリアム「お互いにな。」

ヴィンデル「いつ気付いた？」

ギリアム「マスタツシユマンがこちら側に現れたことを知った時・・・いや、お前達が初めてテスラ研に来た時だ。」

レモン「あらあら、最初からバレてた・・・・・・・・ってこと？」

ギリアム「テストラ研でシステムXNの作動に目処がついた頃・・・
真っ先にプロジェクトチームへ接触して来たのはDCではなく、お
前達シャドウミラーだったからな。」

ヴィンデル「故に疑念を持ったか。」

ギリアム「だが、今やそれは確信に変わった。システムXNはお前
達に制御できるものではない。その機能は限定されているとはいえ、
下手に使用すれば世界の因果律が狂う。アギユイエウス・・・そし
てリユケイオスの扉は二度と開かれてはならないのだ。」

レモン「ふふ、確かに・・・そうかもしれないわね。あなたですら
こちら側に飛ばされてしまったくらいの不安定さだものね。」

ギリアム「・・・・・・・・・・」

レモン「おかげで私達も多くの仲間を失ったわ・・・」

アクセル「・・・・・・・・・・」

ギリアム「システムXNはこの世界に存在してはならない。そして・
・・・お前達もな。」

ラミア「・・・・・・・・・・」

ヴィンデル「ふん、お前に言えることか。」

ギリアム「だからこそ、俺はこの世界で待っていた・・・システム
XNを悪用する者を・・・追放者達を・・・その存在を抹消するために

」

ヴィンデル「……………ヘリオスよ、我らに降るのなら今の内だぞ。」

ギリアム「断る。」

ヴィンデル「ならば、力づくでも従わせるまでだ。」

レーツェル「来るか…………！」

アクセル「…………どうやらツキがあったようだな。一度に決着をつけるチャンスが巡ってくるとは。」

ラミア「むしろ幸運なのは私の方かも知れません。この状況を一転させるきっかけは…………彼らが作ってくれる。」

アクセル「よく言う…………饒舌になったものだな、W17。」

レーツェル「彼女は…………」

ゼンガー「キョウスケの部下だ。しかし…………」

ギリアム「Wシリーズ…………君は我々の味方なのか？」

ラミア「好きに判断すればいい。私が戦うべき相手はシャドウミラ…………。それ以外は、かかってこない限り手は出さん。」

ギリアム「…………いいだろう。ゼンガー、レーツェル、異存は？」

ゼンガー「ない。」

レーツェル「行動でその証を立てるのであれば。」

セツナ「シャルを助けてくれたんだ・・・手を貸そう。」

ラミア「・・・感謝する。」

アクセル「甘いな・・・貴様も、教導隊の者達も。それでは、真の意味で世界は救えん。人の意思が世界のバランスを崩す、これがな。」

ラミア「・・・しかし、人の意思が世界を作り出すのもまた事実・・・私は今まで、それをわかってうとしなかった。私は指令さえこなしていれば良かった。ですが・・・自分の意思で世界に干渉することを、その意味を知ってしまった。」

アクセル「・・・ならば、貴様はこの世界をどうしたい？戦いを終わらせ・・・平和をもたらすつもりだとも・・・？“夢”まで見れるようになったか？・・・W17」

ラミア「・・・」

ヴィンデル「・・・平和は何も生み出さん。ただ世界を腐敗させていくのみ。そして、闘争を忘れた者達は兵士を・・・軍を切り捨てる。我らの存在を否定するのだ。」

シャルロット「そんなの・・・戦いをしたがる人の都合じゃない！」

ヴィンデル「何だと？」

ラミア「その通りだ・・・戦いを望まない者、平和という世界に可能性を見出す者達にとっては、むしろその方がイレギュラー・・・なのだと思います。」

ヴィンデル「人形風情がつらつらと・・・!」

レモン「W17・・・こういう話を知っているかしら? 知恵のリングを食べたアダムとイブは・・・楽園から追放されたのよ?」

ラミア「承知です。ならば・・・私は自分の足で、次の楽園を探しましょう・・・」

ヴィンデル「全機、ヘリオスを捕獲せよ!」

エルアインズ部隊がタイプRVに接近してくる。

ゼンガー「チエストオオオオオオオ!!」

グルンガスト参式は参式斬艦刀でエルアインズ部隊を一撃で薙ぎ払う。

ヴァル「別方向から敵機接近。」

セツナ「ギリアムさんはやらせん! ヴァル、イクス・ドライバだ!」

ヴァル「ラジャ、イクス・ドライバ作動開始。」

タイプTV・アーバレストの肩バーニアから放熱板、背部ウィングを展開し粒子を放出する。

セツナ「シヨウダウンだ！」

タイプTV・アーバレストはエルアインス目がけて飛び、コールドメタルソードで2機撃墜し、正面に向かってきたエルアインスを背負い投げで海に叩きつけ、後方に回ったゲシュペンストMk-?を逆手でコールドメタルソードを突き刺す。

セツナ「よし次だ！」

レーツェル「あの機動性・・・今までと違う・・・？」

ギリアム（恐らく、あの組織が絡んでいるものだろう・・・いよいよ動くか・・・？）

ヴィンデル「く・・・！出せるWシリーズは全て出せ！」

ギリアム「お前達がしていること・・・それがどのような結果を招くのか・・・わかつているのか！」

アクセル「何・・・？どういうことだ、ヘリオス。」

ギリアム「・・・お前達は知るまい。」

アクセル「？」

ギリアム「この世界は我々という異物を受け入れながら、奇跡的なバランスで保たれている。」

アクセル「何・・・？」

ギリアム「本来なら、崩壊してもおかしくはない。あり得ないのだ、このような世界は。」

アクセル「ならば、何故俺達は・・・この世界は存在し続けているというんだ？」

ギリアム「何かの力が・・・何者かの意思が作用しているのだ。」

アクセル「何者かの・・・だと？」

ギリアム「さながらこの世界はその者が作り出した実験室のフラスコ・・・その実験の結果が出た時、我々の存在は・・・」

アクセル「だから、干渉をやめると？・・・ここまで来て、はいわかりましたと言えると思うのか？貴様がその事を本気で危惧しているなら、貴様こそが・・・最初に自分自身をどうにかすべきではないのか？「ファーストジャンパー」・・・さまよい人、ヘリオス・オリンパス・・・！」

ギリアム「・・・そうかも・・・しれん・・・」

アクセル「貴様にもわかってはいるはずだ、こいつが。この世界を作り出した者が何であろうと、俺達を導いた存在が誰であろうと・・・俺は俺の意思・・・自分が信じる世界のために戦争をしている・・・！その結果、世界が滅びるならば・・・それもまた、この世界が選んだ結末なのさ。」

ラミア「・・・」

ゼンガー「ならば、ここは退けん。我らもまた己の信念のために・・・」

・この世界を存続させるために戦っている……!」

アクセル「いいだろう。勝ち負けでしか、善悪を決めることはできん……それが戦争だ、こいつがな!」

シャルロット「戦争でしか善悪が決められないなんて……間違ってる!」

アクセル「なら俺に勝ってみせろ!戦争では勝者が全てを得るのだからな!」

シャルロットのアシユセイヴァーはハルバートランチャーを構える。

シャルロット「ハルバートランチャー発射!」

アクセル「甘い!ソードブレイカー!」

ハルバートランチャーを避け、アクセルのアシユセイヴァーはソードブレイカーを撃ち攻撃する。

セツナ「シャル避ける!」

シャルロット「ダメ、間に合わない……!」

ソードブレイカーが直撃する直前、ハイメガ・ブラスタークャノンが飛んできてソードブレイカーを迎撃する。

アクセル「何!」

そこのハガネ、ヒリュウ改、先行してきたカイとルシアの機体が現

れる。

エクセレン「わお！ここにいたのはやっぱりボス達だったのね！」

ゼンガー「エクセレン・・・それに、キョウスケ達か。」

ラミア「エクセ姉様！」

エクセレン「え！？」

ブリット「ラ、ラミアさん！！」

マサキ「お前、無事だったのか！？」

ラミア「・・・見ての通りだ。」

リユーネ「あ、あの爆発で・・・？」

エクセレン「ちょっとラミアちゃん！いままでどこで何やってたの？まさか、生きて会えるなんて・・・」

カチーナ「何を言ってやがる！元いた場所に戻ってただけだろうが！」

ラミア「・・・そう思われても仕方がない。私は・・・」

レーツェル「経緯はどうあれ、今の彼女は我々の味方だ。私が保証する。」

ツグミ「レーツェルさん・・・！」

ライ「エルザム・・・兄さん。」

レーツェル「勘違いしてもらっては困る。私はレーツェル。ファイ
ンシユメツカー・・・お前の兄ではない。」

ライ「・・・!!」

リュウセイ「いや、そんなこと言われたってありゃどう見ても・・・
」

タスク「あ、あの旦那だよなあ。」

レーツェル「・・・」

ルシア（少佐・・・内心焦ってない？）

ライ「兄さん・・・あなたの言葉を信用しろと？」

レーツェル「その気になれば、彼女はいつでも我らを討つことが
できた。それに・・・この状況下で我々を陥れようと言うのも不自然
ではないか？」

ライ「・・・」

カチーナ「今まであたしらを欺いてきた奴だぜ？そう簡単に・・・」

ゼンガー「彼女の戦に迷いはない。結果がそれを証明している。」

ギリアム「・・・私も同感だ。」

カチーナ「……………」

ラッセル「カ、カチーナ中尉……」

カチーナ「へッ、あのメンツにそこまで言われちゃあ信じるしかねえか。」

ルシア「カイ少佐、あのゲシュペンスト……」

カイ「セツナのタイプTだな。大分改造が施されているようだな。」

アラド「ヴァイスと顔がそっくりだ……!」

セツナ「あれは……タイプS!？」

シャルロット「じゃあさっきのもしかして……!」

ルシア「セツナ……セツナ・テストロツサだな!？」

セツナ「……………」

シャルロット「やっぱりルシア!元気だった?」

ルシア「シャルロットも元気そうで何よりだ。ところで何で二人がこんなところに……」

セツナ「……………教える必要はない。」

ルシア「……………まあ確かにそんな状況じゃ……」

セツナ「お前には教える義理はない。」

ルシア「何・・・!?!」

エクセレン「あらら、何だか険悪なムード・・・」

クスハ「ルシアさんの知り合いじゃないんですか?」

カイ「ああ、昔教導隊で一緒だな。」

ツグミ（ついに・・・出会っちゃったわね・・・）

アイビス（ど、どうなるのかな・・・?）

ルシア「とにかく、敵機を片づけるぞ!」

セツナ「お前は下がっている、俺だけで十分だ。」

ルシア「これだけの数を前に何を言ってるんだ!?!」

セツナ「お前の力なんかなくともこの程度・・・」

ルシア「そうやって驕って俺に負けたの忘れたわけじゃないよな?」

セツナ「イカサマをしたお前が言えた義理か?」

ルシア「それはお前の言いがかりだろ!」

エクセレン「あ、あの・・・お二人方?」

アクセル「……………」

ルシア「大体からお前は賭けに拘り過ぎてるんだよ！少しは慎重に動け！！」

セツナ「そういうお前は慎重になり過ぎて足元すくわれんだよ、少しは運任せを試みたらどうだ？」

カチーナ「お、おいおいあいつ味方じゃねえのかよ……！？」

ヴィンデル「……………」

アラド（斬艦刀を白羽取りしてた人が言うか……………）

リョウト「ふ、二人共……今は言い争ってる場合じゃ……」

セツナ「それとも賭けもできない程臆病者にもなったか？」

ルシア「戦闘を運に任せるなんて本末転倒だろ！！」

レモン（あらあら、若いわねあの二人……）

レフィーナ「あ、あの……ルシア中尉……？」

リオ「ちょ、ちょっとあなた達……！！」

シャイン「そこまでにしときませんと……！！」

ルシア「いいよな！負けても腕じゃなくて運がなかったって言い訳

ができるんだからな！それで死んでちゃ元も子もないけどな！」

セツナ「俺に百回負けてメソメソしてたお前に言われたくはないな。」

ルシア「！！こいつ言わせておけば……！！！」

カイ「いい加減にせんか馬鹿者共！！！」

ルシア「！！！」

セツナ「！！！」

シャルロット「……あつちやく……」

アラド「雷……落ちちゃったツスね……」

カイ「敵を前にして喧嘩をしとる場合か！！少しは頭を冷やせ！！！」

ルシア「す、すみません……！」

セツナ「……」

アクセル「……終わったようだな。」

ヴィンデル「……レモン、システムXNを使うぞ。通常転移だ。」

レモン「ちよつとお待ちなさいな。修理はまだ完全じゃないのよ？今の状態じゃ、距離は稼げないけど……」

ヴィンデル「構わん。この場から離脱できればいい。」

レモン「でも、ようやく姿を見せたヘリオス……このまま放っておいていいの？」

ヴィンデル「万が一でも、ここでシステムXNをこれ以上損傷させるわけにはいかん。」

レモン「……W17の例もある、か。そうね、コアを手に入れても、システムに問題があったら意味がないものね。」

ヴィンデル「最悪の場合、やつなしでもあの機能は発動できる。……我々がこちらへ来たようにな。」

レモン「その分、確実性には欠けるけどね。」

ヴィンデル「……」

レモン「アクセル、帰還して。転移するわよ。」

アクセル「……この状況では止むを得ん……か。」

キョウスケ「撤退する気が！」

アクセル「キョウスケ・ナンブ……また会おう。」

ギリアム「いかん……このままでは……！」

レモン「ひとまずお別れよ。ヘリオス・オリンパス……ミスタ

「フーストジャンパー。」

ヴィンデル「また会おう。例の機能を回復させた後でな。」

ギリアム「逃がさん！」

ゲシュペンスト・タイプRVはシロガネに向かってメガ・バスターキャノンを放つ。

しかし、当たる直前で転移をし、仕留め損なう。

レーツェル「反応が消えた……！追跡は……不可能か。」

ギリアム「……俺の贖罪は……まだ終わらないのか……」

ダイテツ「各機、一旦伊豆基地へ戻り、オペレーション・プランタジネットに参加するぞ。」

キョウスケ「了解。」

エクセレン「っと、その前に……そのヴァイスちゃんくりそつのゲシュちゃんはどうするの？」

カイ「お前達、ハガネに着艦しろ。色々と積もる話もあるからな。」

セツナ「……カイさん、申し訳ありませんがお断りします。」

カイ「何！？」

セツナ「俺達にはまだやることが残されています。」

シャルロット「本当にごめんなさい、カイ少佐。」

ルシア「お、おい待てよ!？」

セツナ「ルシア・・・俺はお前の存在を全否定する・・・何もかも奪っていった悪魔であるお前をな・・・」

ルシア「!？」

ゲシュペンスト・タイプTV・アーバレスト、アシュセイヴァーは何処かへと飛んで行った。

カイ「待たんかセツナ、シャルロット!」

レーツェル「・・・行ってしまったか・・・」

ゼンガー「・・・」

アイビス「ルシア、セツナに恨み持たれてるみたいだけど・・・何かあったの？」

ルシア「・・・あいつの逆恨みさ、気にするな。」

ツグミ「・・・」

タスク「あれあ相当憎まれてるなあ・・・」

カチーナ「お前何やらかしたんだ？」

カイ「ルシア、後でも構わんから話してやれ。」

ルシア「……………はい。」

カイ（全く……………まだまだ青いな……………ルシアも……………セツナも……………）

ハガネ　ブリーフィングルーム

ダイテツ「……………ゼンガー少佐達が出たことは正しかったようだな、ラミア・ラヴレス。」

ラミア「……………私を信じて下さったこと、感謝しています。」

ダイテツ「では、ここにいる皆に真実を話してもらおう。」

ラミア「わかりました。私が知っている限りのこと……………お話ししましょう。」

ギリアム「……………」

ラミア「さて……………何から？」

ダイテツ「シャドウミラーとは何者か……………からでいい。」

ラミア「彼らは……………地球連邦軍特殊実行部隊。」

カイ「……………特務隊のことか？だが、名称が違っぞ。」

シヨーン「ふむ……。シャドウミラーなどという特務隊は聞いたことがありませんな。」

ラミア「それは『こちら側』の話……。ですが、『向こう側』の連邦軍には存在していた。」

タスク「こ、こちら側だとか向こう側だとか……。何のことなんですか？」

ラミア「一言で言えば、こことは違う世界のことだ。」

レフィーナ「違う……。世界？」

ラミア「そう、極めて近く……。限りなく遠い世界。……。順を追って説明しよう。新西暦160年代から盛んになった、スペースコロニーの独立自治権獲得運動、NID4……。それは地球政府とコロニーの間に大きな確執を生み出した。コロニーの台頭を恐れた地球連王政府はNID4を弾圧……。連邦とコロニーの対立は激化し、ついには機動兵器を使用したテロ事件が数多く発生……。世界は混沌に包まれた。そして、ある事件によりコロニーの命運は大きく変わることになる……。」

レーツェル「もしや、それはエルピスで起きた……。？」

ラミア「はい。地球至上主義のテロリストがスペースコロニー・エルピスへ潜入……。内部で毒ガスを使用し、住人の大半を死に至らしめた事件です。」

レオナ「どういうこと……。！？あの事件はそのような結末では……。」

」

ラミア「犠牲者の中には、連邦宇宙軍総司令・・・マイヤー・V・
ブランシュタイン・・・そしてその長男エルザムと、彼の妻である
カトライアも含まれていた。」

レーツェル「な・・・！」

ゼンガー「何だと!？」

レオナ「そんな・・・！」

ライ「義姉上だけでなく、父と兄までもが・・・？」

エクセレン「ちょ、ちょい待ち！ラミアちゃん！じゃあ、ここにい
るエルザム兄さんは!？」

アラド「ま、まさか、幽霊!？」

ルシア「何でそうなる・・・。」

レーツェル「悪いが・・・私の足はご覧の通りだ。・・・
付け加えれば、私はエルザムではなく、レーツェルだ。」

ヴィレッタ「もしや、ラミアが言う向こう側とは・・・？」

ギリアム「そう・・・。並行世界、パラレルワールドだ。」

カチーナ「パラレルワールド!？」

ギリウム「……世界は常に分岐の可能性を持っている……我々が存在するこの世界とは別の……並行した世界だ。」

ルシア「言うことは……特構構想がない世界……異星人が存在しない世界……そもそも機動兵器が存在しない世界もあるということですか……!?!?」

ギリウム「そう……それが、彼女が始めに言った言葉、“極めて近く、そして限りなく遠い世界”……パラレルワールドだ。」

ラミア「その通りです。ヘリオ……いえ、ギリウム少佐。私達シヤドウミラーは、その中の一つから「こちら側」の世界へやって来たのです。」

ヴィレッタ「……」

ラミア「無限の可能性の中の一つ……だからこそ、私がいた世界……向こう側と、この世界では、多くの事柄が異なっています。」

ライ「では、エルピス事件の後は?」

ラミア「コロニーの治安維持とNID4の弾圧が強化され……結局、コロニーが独立することはなかった。そして、DC戦争が勃発……我々連邦軍は苦戦の末、ビアン博士を打ち倒し……勝利を収めた。」

ルシア（やはり……向こう側でも父さんは……）

ラミア「その後、ビアン博士が示?した異星人の脅威を重く見た連邦軍は……地球圏防衛のため、大幅な軍備増強を敢行……その

結果、多種多様な機動兵器が開発された。」

リョウト「多種多様?」

ラミア「そう。Z&R社のヴァルキュリアシリーズ、F.I社のアサルト・ドラグーン・・・イスルギ重工のリオンシリーズ、マオ社のパーソナルトルーパーなどだ。」

イルム「最初の2社は聞いたことがないメーカーだな・・・」

ラミア「そして、その中でも、数多く生産され、連邦軍の主力兵器となったのが・・・マオ社のゲシュペンストMk-?とイスルギ社のリオンだ。」

テツヤ「ゲシュペンストMk-?が数多く生産・・・?どれくらい作られたんだ?」

ラミア「・・・びじと3000機。」

テツヤ「3000・・・!?こちらと桁が違いすぎるぞ!」

イルム「なるほど・・・。シャドウミラーのゲシュペンストMk-?の謎が解けたぜ。あれはお前達が向こう側から持ってきた機体だったんだな。」

ラミア「そうです。」

イルム「そして、こっちのゲシュペンストMk-?と仕様が違うのは、向こうで改良が重ねられたから、か。」

ラミア「はい。そして、それはエルアインスにも同じことが言えます。」

リョウト「エルアインス・・・？」

ラミア「向こう側でのアルブレードの正式名称・・・ルシア中尉が使っている機体の元だ。その名の通り、R-1の量産型・・・ゲシユペンストMk-?に次ぐ主力機としてマオ社が開発した物だ。」

リョウト「ゲシユペンストの次・・・？」

ラトウニ「なら、量産型のヒュッケバインMk-?は・・・？」

ラミア「向こう側でのヒュッケバインシリーズは・・・1号機・・・008Rの暴走事故によって、開発計画の見直しが軍から要求され・・・その後も何機か試作機が作られたようだが、量産には至っていない。」

アヤ「・・・向こうでのSRXはどうなっているの？R-1が量産されているということとは・・・」

ラミア「何度か開発が中断されたようだが・・・侵略計画を開始した異星人との戦闘へ投入するため、最終的にはロールアウトしている。」

ライ「異星人・・・そうか、エアロゲイターか。」

ラミア「・・・違う。インスペクターだ。」

マサキ「何！？あいつらが先に来たってのか!？」

ラミア「そうだ。」

ブリット「そ、それでラミアさんはエアロゲイターのことを知らなかったのか……」

ヴィレッタ「……メテオ3は向こうの世界でも落下したのか？」

ラミア「いえ……」

ヴィレッタ「では、SRXの動力源はトリウムではないと？」

ラミア「データを見た限りでは……おそらく「こちら側」と同じかと思われます。」

リュウセイ「何だって！？メテオ3が落ちてきてねえのに、何でトリウムがあるんだ！？」

ラミア「……トリウムについてのデータはない。だが、存在自体は確認されていたようだ。」

ヴィレッタ（何者かがトリウムを地球にもたらしたと言うのか……？）

キョウスケ「ことのあらましはわかった。……ある意味、ここからが本題だ。俺達の世界に直接関わりのあることだからな。」

ラミア「……」

キョウスケ「シャドウミラーがこちら側の世界へ来た理由は？そし

て、その方法は？」

ラミア「理由・・・ロールアウトが遅かった私はよく知りませんが・・・データはあります。」

キョウスケ（ロールアウト・・・？）

ラミア「それは緩やかな腐敗・・・。平和という安息の下で、地球連邦は・・・いえ、“世界そのもの”が少しずつおかしくなっていた・・・とあります。シャドウミラー隊指揮官・・・ヴィンデル・マウザー大佐はその世界を憂い、クーデターを起こしたのです。」

アイビス「絶えず争っている世界を作るために？」

ラミア「そう、戦争は終結してはならない。その後待つのは平和という名の腐敗・・・だが、闘争が日常である世界ならば、それは永遠に起こることはない。そのようなバランスのもとに、世界は調律される、と。」

ツグミ「そんなの・・・理論上のものに過ぎないわ。」

ラミア「・・・理論上と言うよりは確立の問題だ。闘争を日常とする・・・混沌たる世界であれば、腐敗が起こる可能性は低いということだ。」

キョウスケ「待て。それが正しいか否か・・・議論するつもりはないが、こちら側でそれをやろうという理由がわからん。」

エクセレン「そうね・・・ちょっと無責任な言い方かも知れないけど・・・自分の庭でやってよって感じ？」

カチーナ「まったくだぜ。．．．それか、そうできない理由でもあったのかよ？」

ラミア「．．．その予想が正解に近いです。我々シャドウミラーが「こちら側」にきた理由．．．それはある部隊に敗れたため．．．いえ、もつと正確に言えば、混沌たる世界のバランスを崩すほどの力を持った部隊が現れ．．．世界を破壊し始めていたためです。」

エクセレン「その部隊って．．．もしかして、そっちのボスのヴィンちゃんが言ってた．．．？」

ラミア「はい。ゲシュペンストMk-?を隊長機とした連邦軍特殊鎮圧部隊、ベーオウルブズ．．．」

キョウスケ「ベーオウルフ．．．。アクセル達が散々俺に対して言っていた．．．」

ラミア「そうです。ベーオウルブズ．．．隊長はキョウスケ・ナンブ大尉。」

キョウスケ「．．．そういう．．．ことか。」

タスク「なる、それでアクセルはアルトアイゼンをゲシュペンストMk-?．．．キョウスケ中尉をベーオウルフって呼んだわけか。」

カチーナ「．．．あの野郎がしつこくキョウスケを狙ってきやがった理由がわかったぜ。大方、向こうのキョウスケ大尉殿にこっぴどくやられたんだろ？で、逆恨みでこっちに因縁付けて来た、と。」

ラミア「それは違います。アクセル隊長は・・・恐れていたのです。こちら側のキョウスケ・ナンブが・・・向こう側のベーオウルフが持っていた・・・謎の力を得ることを。」

キョウスケ「謎の力・・・だと？向こう側とやらの俺は、念動力のようなものを持っていたというのか？」

ラミア「・・・詳細な記録は残っていませんが、もつと異質の・・・人知を超えたものだったようです。」

エクセレン「わお！人知を超えてるって・・・あらゆる博打で必ず勝てるのか？」

キョウスケ「・・・それはいい、な。」

ルシア「いいのかよ・・・」

ラミア「いえ、その力は・・・常人をはるかに超えた肉体の能力・・・筋力、反射神経、回復能力を持ち・・・乗り込んだPTの姿をも変質させた・・・とあります。」

キョウスケ「乗っている・・・機体の姿も・・・だと？」

ルシア（まるでズフィールド・クリスタルだな・・・）

ラミア「はい・・・そしてベーオウルブズは今のハガネやヒリュウ改とほぼ同じ戦力を持っていました・・・結果、シャドウミラーは彼らに追い詰められてしまったのです。そして、シャドウミラーが最後に選択した手段が・・・」

ヴィレッタ「……こちら側への転移というわけか。」

ラミア「はい。」

キヨウスケ「ここが次の問題点か。ラミア……その転移の方法は？」

ギリアム「……それについては俺が説明しよう。」

キヨウスケ「!?!」

カイ「ギリアム……何故、お前が？」

ギリアム「それは……俺もシャドウミラーと同じく、向こう側から来た人間だからです。」

第15話 追放者に舞い降りる天使（後書き）

ルシア「さて・・・ジ・インスペクターも最終回となり、OG3発売の可能性が見出してきて、今回は長かったがこの作品も盛り上がる直前・・・なのに・・・」

セツナ「・・・・・・・・・・」

ルシア「何でお前はこっちはばかり睨みつけてんだよ！」

セツナ「あの時の恨み・・・忘れたわけではないだろうな・・・？」

ルシア「だあかあらあ！あれはお前の逆恨みだっつてんだろぅが！！」

アラド「ま、まあまあ・・・」

アイビス「こんな時に喧嘩しなくても・・・」

シャルロット「あゝあまた始まつちゃった・・・ごめんなさい、教導隊時代からこんななのよ。」

カイ「全く何も変わつとらんなお前達。」

ゼンガー「・・・・・・・・修行が足りん。」

ギリアム「だがああ見えてお互いの力は認め合っているようだがな・・・・・・・・」

アラド「そ、そんな風に見えないツス・・・」

セツナ「賭けはしないとか言いながら土壇場で賭けてたらしいな？」

ルシア「ケースバイケースだろ！毎回賭けに拘ってどうすんだよ！」

アイビス「ま、また始まつちやった・・・」

シャルロット「・・・こんな二人ですが、皆さんよろしくお願
いします。」

ルシア・セツナ「余計なお世話だ！！」

第16話 流星と閃光のソロバトル

ハガネ ブリーフィングルーム

ルシア「ギリアム少佐が向こう側の人間って……！」

ラーダ「じゃあ、少佐はこの世界の人間ではないと……!?」

ギリアム「……………ああ。」

レーツェル（やはり、あの時の話は……そういうことだったのか。）

ヴィレッタ「……………」

ギリアム「向こうでの俺は……テスラ研でシステムXNという装置の研究に従事していた。」

ツグミ「システムXN……?」

ギリアム「空間・次元転移装置のことだ。2基存在し、それぞれ『アギユイエウス』、『リユケイオス』と言う。だが、俺はアギユイエウスの起動実験に失敗し……単身、この世界へ飛ばされてしまった。」

レーツェル「では、ヘリオス・オリンパスという名は……」

ギリアム「向こうでの俺の名前だ。そして、元の世界へ戻れなくな

った俺はギリウム・イエーガーと名乗り・・・この世界で生きる決意をした。その後はカイ少佐やルシア、ゼンガー、レーツェルも知つての通りだ。」

ゼンガー「……………」

ギリウム「お前達・・・いや、ここにいる者達には今まで真実を話さず、すまなかつたと思つていて・・・だが、後続者が現れる可能性がある以上・・・俺は素性を明かすわけにはいかなかった。」

ゼンガー「後続者・・・それはシステムXNを使つて転移してくる者のことか？」

ギリウム「そうだ。アギユイエウスとリュケイオスが向こう側に残つている以上・・・俺と同じようにこの世界への転移を試みる者は必ずいる・・・だが、もしそれがテスラ研の人間ではなく、システムXNの悪用を目論む者だったら・・・その者は俺を捜し出し、己の目的のために利用しようとするだろう。」

ヴィレッタ「利用？」

ギリウム「そうだ。アギユイエウスは作動の確実性を向上させるため、俺とリンクするように作られていた。つまり、俺はシステムXN・アギユイエウスのコアとも言える存在なのだ。」

ゼンガー「それで、お前は・・・」

ギリウム「ああ。こちら側で素性を隠し、次なる転移者を持ち続けた。そして、その結果現れたのが・・・」

カイ「シャドウミラーだったということか・・・」

ギリアム「ええ。ただ・・・俺と彼らの転移タイミングには大きな差があったようです。」

ラミア「そう、シャドウミラー隊がテスラ研を占拠し、転移したのは・・・一番初めに転移を成功させた人物・・・『ファーストジャンパー』ヘリオス・・・つまり、ギリアム少佐が転移してから、約2年後のことでした。」

ダイテツ「・・・転移を行ったシャドウミラー隊の規模は？」

ラミア「連邦軍よりダツシュしたASK系、RGC系の試作機や新主力機のエルアインス・・・さらにテスラ研で入手したSRG系、EG系などの機体・・・そして、シャドウミラーが元々所有していたゲシュペンストヤリオン、フルギアやソルプレツサなどを合わせて・・・496機。」

レフィーナ「そ、そんなに・・・」

ラミア「はい。ヴェンデル大佐に賛同する他部隊の兵士やDC残党も加わっておりましたので、しかし・・・実際にたどり着いたのは、おそらくその半分以下かと。」

クスハ「え・・・！？何故なんですか？」

ラミア「同一世界内での空間転移とは異なり、時空転移は不確定要素が多く・・・なにより不安定だ。例えるなら、濁流の中で蜘蛛の糸を辿るようなもの・・・私の言語系に誤作動が起きたのも・・・この時の影響だ。」

クスハ「げ、言語系って……!?!」

ツグミ「も、もしかして、あなたは……!?!」

ラミア「私の正式名称はW17……指令を忠実に実行し、戦争を継続させるためだけに生まれた……人形だ。」

クスハ「……!」

ツグミ「つまり、人造人間……」

ラミア「そう。シャドウミラー隊ではWシリーズと呼ばれている。その中でも優秀な性能を持ち、特殊任務を遂行する者がWナンバーズ……つまり、私は17番目にロールアウトした最新型……W17。今後はそう呼んでもらって構わん。」

ラトウーニ「……」

アラド「な、名前がナンバー……!それでいいんすが、ラミアさん!?!いいわけないでしょう!?!」

ラミア「アラド・バランガ……そうか……お前も……そうだったな。」

ゼンガー「……もしや、ウォーダン・ユミルもお前と同じく……?」

ラミア「そうです。彼は15番目……W15。お気付きの通り、向こう側のゼンガー・ゾンボルト少佐のデータを基にして作られた

ナンバーズです。」

ゼンガー「……奴が乗る特機は？」

ラミア「向こう側で入手したグルンガスト参式をこちら側の技術で改造したものだと思われませう。」

レーツェル「しかし、彼らは何故ゼンガーの写し身を……？」

ラミア「……ベーオウルブズの対抗手段とするためです。キョウスケ・ナンブには及ばなかったようですが」

キョウスケ（……向こう側の俺に一体何が……？そんな力に興味はないが……気になる、な。）

ゼンガー「……向こう側の俺は？」

ラミア「データによれば、アースクレイドル内乱後、行方不明……となっっています。」

ゼンガー「……そうか。」

キョウスケ「……シャドウミラーはアクセルやウオーダン、そしてラミア、お前達とともに……向こう側で果たせなかった目的を果たすつもりか。」

ラミア「……はい。向こう側は、ベーオウルブズが存在によって完全にバランスを失っていましたので……」

ブリット「……永遠の闘争……。戦い続けることでバランスを

取る世界なんて……！」

ツグミ「戦いの度に技術は進歩していった……確かに、それは間違っていないけど……」

エクセレン「戦いを望む者……戦争を続けたい人達には理想の世界かも知れないけど……そうでない人達にとっては地獄……ね。」

キョウスケ「……俺達の世界で好き勝手なことをさせるわけにはいかん。」

ギリアム「だから、何としても彼らを阻止し、彼らが持つシステムXNを破壊せねばならん。」

ラミア「……その通りです。」

ルシア「最後に一つだけいいか？アクセルは俺の名前を聞いて結構驚いていたが……向こう側の俺は何をしたんだ？」

ラミア「……向こう側のルシア・ゾルダークは……DC残党をまとめ上げ、腐敗した連邦政府とシャドウミラーに対し、宣戦布告を宣言していました。」

リユーネ「ルシアがDCを？」

ラミア「ええ、連邦の腐敗による地球環境の悪化を懸念していたルシア・ゾルダークは、地球人類抹殺を掲げある作戦を実行しました。」

ルシア「地球人類を抹殺!？」

マサキ「向こう側じゃエライ違いだな・・・」

クロ「そうニヤ、こっちのルシアはそんなこと考えニヤいニヤ。」

ルシア「・・・多分、ピアン総帥が倒されて周りが見えてなかったんだろう・・・」

ラミア「経緯はどうあれ、ノイエDCを立ち上げ、賛同した連邦軍とDC残存戦力を宇宙に上げ、連邦政府の主要都市に対し攻撃、1日で壊滅させた・・・とデータにあります。」

マサキ「い、1日で!？」

ルシア「馬鹿な・・・戦略衛星を使ったとして、全戦力を投入しても不可能だぞ!？」

シロ「まさか、グランゾンが量産されていたとかニヤのかニヤ?」

ラミア「いえ、ノイエDCに集められた戦力はAMとPT・・・総帥機であるヴァルシオンのみ・・・」

ルシア「それじゃあ、何故1日で・・・しかも宇宙からの攻撃で可能になったんだ・・・?」

ラミア「連邦政府によるコロニー弾圧の影響で、廃棄コロニーが多数宇宙を漂っていた・・・それを集め・・・主要都市に向け攻撃を仕掛けた・・・」

リュウセイ「そ、それって……リアルロボットアニメでよくやるコロニー落としじゃねえか!？」

ルシア「それを現実に行なったって言うのか……!？」

ラミア「はい。コロニー落としの影響で主要都市とその半径50キロメートルは壊滅、最終的にシャドウミラーがこちら側へ転移する情報を掴んだルシア・ゾルダークは……廃棄されたエルピスをテスラ研に落とし、ベーオウルフもろとも滅ぼそうとした……とあります。」

ルシア「だが、結局はシャドウミラーは転移に間に合い難を逃れたってことか……」

ラミア「はい……」

ダイテツ「……」

ラミア「ダイテツ艦長、私の話は……以上で終わりです。」

ダイテツ「……」

ショーン「……ダイテツ中佐、これからの彼女の処置は？」

ダイテツ「現状維持だ。」

ラミア「しかし、私は……」

ダイテツ「素性と過去はどうあれ、今のお前も意思は我らと同じなのだろう?？」

ラミア「……はい。」

ダイテツ「ならば、それでいい。ラミア・ラヴレスの名を語り、我々を脅迫したW17は死亡した。上にはそう報告しておく。……他に異論のある者は？」

ライ「……」

キヨウスケ「……」

ギリアム「……」

ラミア「……あ、ありがとうございます！」

エクセレン「……と、いうわけで……おっ帰りなさい！ラミアちゃん！」

ラミア「エクセ姉様……」

エクセレン「というか……あなた、言葉遣い……治っちゃったの？」

ラミア「一度部隊に戻った時に……不完全ながら修理をしていたきました。だから……お聞き苦しい言葉は、あまり発することはなくなりましたりしちゃいますのです。」

ルシア「治ってないじゃん。」

ラミア「……不完全なので時々は出ますが……」

エクセレン「わお！やっぱそうこなくっちゃね！」

ラミア「……ですが、エクセ姉様……。本当に私は……。ここにいていいのですか……。？私は元々敵であり、この世界には……」

エクセレン「私達はいいつて言ってるのよん。後は、あなた次第。……自分でいるか、いなくなるか……。決めなきゃね。」

レモン『あなた自身が決めるの。Wシリーズとしても……。いいえ、ラミア・ラヴレスの意思でね。』

ラミア（自分で……。まるで……。レモン様に言われているようだ……。な。）

ヴィレッタ「ラミア……。これからの戦いで、あなたの存在はなくてはならないものとなる。」

ブリット「そうです、ラミアさん。俺達に力を貸して下さい！……戦いは……。これからなんです！」

タスク「それに、ボイン要員が多いに越したことはねえしさ！」

レオナ「ボイン……。要因？」

タスク「あ、じょ、「冗談でございませぬのでありますのことッスよ？レ、レオナ様……」

ラミア「……。ここで、この戦争の最後を見届ける。それが私の決

めた・・・私の戦いだ。（悪くない・・・そう、悪くない気分だ。はるか遠い時代・・・樂園から追放された者達も・・・同じ気持ちだったのかも・・・しれんな。）

カイ「ここで解散・・・と言いたいところだが・・・先ほど遭遇したPTについて説明したいと思っている。」

エクセレン「ああ、あのヴァイスちゃんのそっくりさん？」

キョウスケ「あのパイロット・・・随分お前のことを毛嫌いしていたようだが・・・」

ルシア「・・・ああ・・・」

カチーナ「一体どういう関係なんだ？オメエがあそこまでキレイなL5戦役以来だぜ？」

ルシア「あのPTに乗っていたパイロットは・・・セツナ・テスト・ロッサ、旧教導隊時代の・・・先輩にあたるのかな・・・？」

ラトウーニ「あの人も教導隊にいたの・・・？」

ルシア「ああ、俺が来てから一年半でいなくなってしまったが・・・」

キョウスケ「ワケがありそうだな・・・」

カイ「二人はよくシミュレーターで模擬戦を行っていてな・・・ルシアはことごとく負けていた。」

アイビス「ルシアが負けてたんですか……!？」

カイ「まあお互い突撃馬鹿だったからな。経験が多いセツナが一枚上手だった。」

アラド「し、信じられねえ……!」

ルシア「信じるかはお前次第だ。……まあ事実には違いないんだが……」

ラトウーニ「でも、今のルシアの戦法は……」

カイ「ああ、一撃を加え敵の攻撃を回避する……一撃離脱戦法だ。」

アラド「な、なるほど……」

キョウスケ「相手との距離を一定に保ち、確実に命中させ敵の攻撃を回避する……」

エクセレン「あらアルトちゃんの弱点の戦法をとったってことね？」

ルシア「ああ、セツナの格闘戦闘は群を抜いていた……だから、遠方からの一撃離脱が確実な戦法だと分かり、実行した……」

カイ「その功績が認められ、一撃離脱のモーションパターン構築を任命された……ということだ。」

アラド「一撃離脱って……あまりモーションくないッスか？」

ルシア「だからだよ・・・俺みたいな新米がやるにはちょうどいい任務だった・・・」

アラド「だからゼオラやオウカ姉さんは中尉のデータを使っていたってことか・・・」

ラトウーニ「射撃戦闘では、一撃離脱も有効な戦法だから・・・ね。」

エクセレン「でも離脱の見極めも結構難しいものよ？」

キョウスケ「並大抵の技量では構築はできない。」

リュウセイ「で、その戦法でさっきの奴を軽くのしたってことか？」

ルシア「軽くもなかったがな・・・その時は教導隊の正式隊員を決める重要な模擬戦だったんだ。」

リュウセイ「正式って・・・最初から違ってたのか？」

カイ「当時はまだヒョッコだったからな。見習いという面目で訓練をしていたんだ。」

マサキ「で、結果的にルシアが勝って、前のセツナって奴が正式隊員にはなれなかったってわけか・・・」

カイ「一応正式隊員にはなれたが・・・辞令が来る前に姿を眩ましたんだ。」

リユーネ「ねえ、その時のこと・・・話してくれない？」

ルシア「・・・・・・・・・・」

カイ「ルシア、話してやれ。」

ルシア「はい。当時の俺達は・・・正式隊員になれるチャンスが来て浮足立っていたが、もちろん全力を尽くして戦うことにした。そして・・・・・・・・・・」

3年前

教導隊模擬戦訓練場

訓練上にそれぞれのカスタマイズが施された

ゲシュペンストMk-?・タイプTが配置される。

スタッフ「各機、配置につきました。」

カイ「よし。お前達、この模擬戦で好成績を収めれば晴れて教導隊の正式隊員となる。」

ルシア「・・・・・・・・・・」

セツナ「・・・・・・・・・・」

カイ「カーウアイ大佐は不在だが、戦闘記録は大佐も拝見される。お互い全力を出し切れ。」

ルシア「了解。」

セツナ「ルシア、模擬戦での百連敗の汚名を返上できるかな？」

ルシア「馬鹿にするなよ……対応策は考えてきてるんだ……！」

ゼンガー「張り切っておるな、あの二人。」

エルザム「市街地を想定した戦場だ。いかに相手を捕捉できるかが鍵だな。」

シャルロット「セナ！頑張って！」

カイ「各機、戦闘開始！」

セツナのゲシュペンストはフルブリストでルシアのゲシュペンストへ接近するが

ルシアのゲシュペンストは距離を置きながらビームライフルを構える。

セツナ「それが策か？ただ怖気ついてるだけじゃないか！」

セツナのゲシュペンストはマシンガンを撃ちながら突っ込む

ルシア「想定内……これなら！」

ルシアのゲシュペンストは攻撃をかわす。

セツナ「避けられた！？ならこれで！」

すぐにショットガンを撃とうとしたが、ビームライフルの攻撃で破壊される。

セツナ「何！？」

ルシア「確実に攻撃をかわし、確実に攻撃を命中させる・・・」

カイ「なるほどな。接近戦を得意とするセツナに対して、攻撃と回避を確実にする一撃離脱の戦法をとったか。」

エルザム「今のセツナにとっては脅威だな。」

セツナ「上手く接近するしかないか・・・！」

セツナは市街地へと入り込んだ。

ルシア「市街地に入ったな・・・」

セツナ「さあ・・・何所からでも来い・・・振り返ちにしてやる・・・！」

突然、遠方射撃をされ足を止められる。

セツナ「何！？だが今ので位置は掴めた！」

射線を辿りマシンガンを撃つが、ルシアは軽くかわす。

セツナ「くそちよこまかと!」

エルザム「セツナは冷静さを失っているな。」

シャルロット「セナ……」

セツナ「こうなったら……」

エルザム「動きを止めた……?」

ゼンガー「やみくもに動かず、ルシアの居場所を探るつもりだな。」

その時、センサーに反応が当たる。

セツナ「そこか!」

セツナのゲシュペンストはゴールドメタルナイフで反応があった場所へ突撃したが

あったのは、ゲシュペンストのダミーバルーン

セツナ「な、何!」

バルーンが割れた先にあったのは……本物のゲシュペンスト

ルシア「……終わりだ。」

セツナ「!」

ルシアのゲシュペンストはビームライフルで

頭部とコックピットブロックを攻撃し、行動が終了する。

スタッフ「状況終了。」

エルザム「よくやった、ルシア。あの短期間で一撃離脱モーションを構築するとはな。」

カイ「エルザムの指導があったからこそだな。だがセツナも不利な戦法でよく戦った、これだけの実力があれば正式隊員としても十分やっていけるぞ！」

ゼンガー「だがまだ修行が足りん。俺からも修行の相手をしよう。」

ルシア「はい！ありがとうございます！」

セツナ「……ウソだろ……！？俺が負けた……あんな奴に……」

シャルロット「セナ……」

カイ「だが新しく構築したデータを実践するとは……さすがピアン博士の子供なだけあるな！」

エルザム「これからコロニー統合軍としても十分戦っていけるだろう。」

ゼンガー「期待しているぞ。」

ルシア「はい……！」

セツナ「……………！！！」

ハガネ　ブリーフィングルーム

ルシア「……………この事が発端となつて、セツナは……教導隊を抜けた……」

カイ「いや、勝手に出て行った……と言つた方が正しいな。」

レーツェル「何が原因かは……未だにわからん。」

ゼンガー「……………」

リュウセイ「そんなことがあつたなんてな……」

シロ「でも、エアロゲイターの攻撃もあつたのによく生き残れた二ヤ。」

ギリアム「情報部で調べた結果だが、教導隊を抜けた後、PTXチームと類似するチームが発足された……しかし、半年で解散しそのまま行方知れずとなつていた。」

ルシア「だけどころして生きている……エアロゲイターの攻撃にあつても、あのゲシュペンストがあつたから今まで生き残れこれなんだ……」

カイ「だが、今度はどうなるかわからん。L5戦役以上に厳しい今の戦況ではな……」

ルシア「みんな、できればセツナをハガネとヒリュウ改に引き込みたいと思う。」

マサキ「別に断らなくてもいいぜ。」

キョウスケ「そうだ、今の状況で単独行動は危険だ。」

エクセレン「戦力アップにもなるし、友達とまた行動できるし一石二鳥じゃなあい？」

ブリット「そうさ、俺達と戦う方がそいつにとってもいいはずだ。」

ルシア「みんな……ありがとう……!」

カチーナ「でもこっちはいいけどよ、あっちはどう取るかわからねえぜ?」

ルシア「きつとわかってくれるはずだ……今の状況ではどうにもならないということ……」

カイ（だと……いいんだがな……）

シャルロット「セナ・・・ホントによかったの？カイ少佐達のとこ
ろに戻らなくて・・・」

セツナ「ルシアがいる場所になど居たくはない。」

シャルロット「強情なものいいけど・・・今の状況で私達二人だけ
じゃ厳しいわよ？」

セツナ「それでも・・・やらなければいけないこともある・・・」

シャルロット「・・・そうね。テスラ研も異星人に占拠されて・・・
フィリオさんたちが・・・」

セツナ「あいつらが指をくわえて見ているだけなのなら・・・俺達
が助けに行くまでだ。」

シャルロット「レモンさんからもらったアシユセイヴァーもある・・・
けどたった二人で・・・」

セツナ「分の悪い賭けをしても助けなくてはならない・・・フィ
リオ達を助けられなかったら・・・最悪の結果になりかねない。」

シャルロット「・・・ええ、テスラ研に行きましょう。」

セツナ「ああ。(ルシア・・・お前に出来なかったテスラ研の防衛・・・
この俺が成し遂げる。その時こそ、お前から全てを取り返す・・・
)」

第16話 流星と閃光のソロバトル（後書き）

アイビス「ルシア、何やってるの？」

ルシア「これか？」「第2次スーパーロボット大戦Z」だ。」

ツグミ「なるほど・・・これのせいで作業がはかどらなかったってわけね。」

ルシア「スパロボも慣れてくれば1カ月近くで3周目まで行ける。今回もいい作品に仕上がっているな。次回作も楽しみだ。」

マサキ「ルシアはおっせーなあ・・・俺なんか1週間でクリアしちゃったぜ？」

ルシア「は！？たった1週間ですか！？」

ツグミ「ほとんどテキスト読んでないんじゃないのかしら？」

アイビス「それに何処にそんな時間が・・・」

マサキ「時間で作るもんだろ？」

ルシア「簡単に言うな！」

第17話 流星と彗星、疾風のこくとく

ハガネ ブリーフィングルーム

カチーナ「何！？ノイエDCと共同戦線を展開するだあ！？」

テツヤ「・・・そうだ。」

ラッセル「い、いつの間にそんな話が・・・！」

ショーン「詳しい事情はお教え出来ませんが・・・共通の敵と戦うため、連邦軍とノイエDCの間で一時休戦することになったのです。」

カチーナ「おいおい！そんなんで現場が納得するとも・・・」

ダイテツ「中尉の気持ちはわかる。だが、北米をインスペクターから確実に取り戻すには・・・ノイエDCとの共闘もやむを得ないことなのだ。」

ライ「手勢が増えた方がいいという話はわかりますが、彼らの中にはシャドウミラーがいます。彼らもオペレーション・プランタジネットに参加するのですか？」

ショーン「いえ。先方からの報告によれば、彼らは連絡を絶ち・・・現在は行方知れずとのことです。」

キョウスケ「それを信用しろと？」

シヨーン「するしかありませんな、今の段階では。」

ヴィレッタ「ラミア、それについてあなたの意見は？」

ラミア「ヴィンデル様がシロガネで動いておられることから考えても事実だと思います。ノイエDCに戻るとしても、その時は……」

ヴィレッタ「彼らの下につくことはない、と？」

ラミア「ないと思っちゃいましたので……ん……ないと思います。」

カチーナ「まあいい。あいつらが出てきた時にや、異星人と一緒にブツつぶすだけだ。」

ダイテツ「……では、テツヤ大尉。作戦の概要説明を。」

テツヤ「はっ。こちら側の軍勢は太平洋方面と大西洋方面の大きく二つに分かれる。そして、太平洋方面は連邦軍が、大西洋方面はノイエDCが中心となって作戦を遂行……つまり、北アメリカのインスペクター軍を海側から挟撃するのだ。」

リュウセイ「要するに挟み撃ちってわけか。」

テツヤ「また、作戦は5つのフェイズに分かれ……我々は第2と最終フェイズを担当する。第2フェイズは北アメリカ西部の軍事関連施設の奪還……そして、最終フェイズはインスペクターの最大拠点となっているラングレー基地の奪還だ。」

エクセレン「東海岸から西海岸・・・まるで、アメリカ横断何とやらって感じ？」

タスク「でも、大西洋方面の連中に比べたら、俺達の移動距離が多くないツスか？」

カイ「・・・我々の役目には敵の陽動も含まれているからだろう。」

レフィーナ「その通りです。太平洋方面の部隊が先に仕掛け、インスペクター軍を西海岸方面へ陽動・・・その隙を突き、大西洋方面の部隊が東海岸側へ一気に進行するのです。」

エクセレン「で、ラングレーで八手合わせ・・・あとは脳となれやマトなれ・・・ってわけね。」

キョウスケ「・・・野となれ山となれ、だ。」

テツヤ「では、第2フェイズの詳細について説明する。別働隊がハワイ地区の奪還任務を遂行している間、我々は太平洋を横断・・・アメリカ西海岸を突破し、コロラドまで進行。テスラ研をインスペクターから奪還する。」

アイビス（いよいよ、フィリオ少佐達を助ける時が来たんだ・・・）

テツヤ「それを成功させるには、西海岸の敵防衛線をいち早く突破することが必要となる。そこで・・・西海岸へ接近し次第、先行部隊を出撃させる。メンバーはルシア中尉、マサキ、リユーネ、そしてアイビスだ。お前達の役目は敵防衛線の突破・・・なお、指揮はルシア中尉に執ってもらう。」

ルシア「了解です。」

マサキ「じゃ、一足先にアメリカ西海岸を掃ませてもらおうとするか。」

ダイテツ「緒戦の結果は以後の戦いを大きく左右する・・・頼むぞ、お前達。」

マサキ「ああ。水先案内人は俺達に任せな、おっさん。」

ダイテツ「・・・・・・・・くれぐれも迷うなよ。」

マサキ「うっ・・・・・・・・。わ、わかってるって。」

レーツエル「・・・・・・・・ダイテツ艦長、一つお願いがあるのですが。」

ダイテツ「何だ？」

レーツエル「ルシア達の出撃と同じタイミングで・・・私とゼンガーをテスラ研へ先行させていただきたいのです。」

アイビス「え・・・・・・・・!？」

クスハ「お、お二人だけで・・・・・・・・!？」

レーツエル「ああ。我が友との約束もある。それに・・・。」

ゼンガー「我らはある物を受け取らねばならんだ。」

ダイテツ「それはいつたい？」

レーツエル「・・・ピアノ・ゾルダーク博士の遺産です。」

リユーネ「親父の遺産だつて!？」

レーツエル「そう、その名はダブルG・・・我らの新たなる力だ。」

リユーネ「ダブルG・・・？」

アイビス「テスラ研にそんな物があつたなんて・・・知らなかったよ・・・」

クスハ「わ、私も・・・」

レーツエル「無理もない。私もその存在を知ったのは、つい最近のことだからな。」

ルシア「俺も、名前だけは聞いたことがある。けどそれが何なのかは分からない。」

クスハ「じゃあ、レーツエルさんもルシアさんもどんな機体なのかご存じないんですか？」

レーツエル「ああ、ダブルGという名と特機タイプであること以外はな。」

ルシア「ヴァルシオンと同じく、1機いれば戦局を覆せる。」

ゼンガー「故に一刻も早く手に入りたい。それに、我らが先に出向

けば、ハガネとヒリユウ改の突破口も開ける。」

ダイテツ「・・・良かろう。テスラ研への先行を許可する。ただし、事は慎重にな。」

ゼンガー「了解。」

レーツエル「では、アイビス・・・我らは一足先に友の所へ向かわせていただく。」

アイビス「はい。あたし達も出来るだけ早くテスラ研へ行きます。」

ゼンガー「ルシア、彼らを護ってやれ。」

ルシア「無論です。今も、そしてこれからも・・・」

ダイテツ「よし・・・各員、直ちに持ち場へつけ。定刻となり次第、我らは伊豆を発つ。」

アメリカ西海岸　　海岸付近

マサキ「よっしゃ、突破成功！見えたぜ、アメリカ西海岸！」

シロ「マルとバツのパネルはニヤいのかニヤ？」

クロ「シロ、クイズじゃニヤいんだから。」

マサキ「敵機が見当たらねえ・・・陽動が上手くいつてるみてえだ

な。」

ルシア「今、連邦軍がハワイに攻め込んでいることもあるし・・・ノイエDCの部隊もメキシコ東海岸に到達しているから、こっちは手薄になっているかも知れん。」

リユーネ「ノイエDCの連中もなかなかやるもんだね。」

マサキ「昨日の敵は今日の友、か。どうもスッキリしねえが、今回ばかりはありがてえぜ。」

アイビス（スレイ・・・あんたもこの作戦に参加してるの・・・？）

ルシア（バン大佐・・・あなたは純粹に異星人と戦おうとしている・・・これなら、大丈夫か・・・）

リユーネ「この調子だったら、ゼンガー少佐達も無事にテスラ研へたどり着けるね。」

マサキ「だといいが・・・」

ルシア「油断は禁物だ。ここからは敵地・・・」

レドームは敵機の反応をとらえた。

ルシア「早速来たか！0時方向、距離6000！」

マサキ「何っ!？」

前方に敵AM、レストジェミラの部隊が展開する。

マサキ「やつぱり、そう上手く事は運ばねえか！」

リユーネ「ルシア、ハガネとヒリユウ改はあとどれくらいで来るの！？」

ルシア「およそ6分後・・・！それまでにここの突破口を開かなくてはならない！」

マサキ「なら、足の速いサイバスターとアステリオンで突っ込むぜ。いいな、アイビス？」

アイビス「りよ、了解！」

マサキ「どうした？怖気ついたか、流星さんよ？」

アイビス「そんなことはない！あたしだってやれる！」

マサキ「上等だ。遅れんなよ。」

アイビス（あたしに力があれば、テスラ研を敵に渡すこともなかった・・・あの時の悔しさを思い出すんだ・・・！）

マサキ「ルシア、どうだ？」

ルシア「わかった。最短距離の突破口の座標を転送する！今から6分以内にどちらかが目標まで行くんだ！」

マサキ「ああ、任せな！」

アイビス「やるんだ……！1分……いや、1秒でも早くフィリオ達を救い出す……！そのためにあたしの力でここを突破するんだ！」

マサキ「よし……！風と流星、そのスピードをあいつらに思い知らせてやるっぜ！」

アイビス「了解！あたしとアステリオンなら、必ずやれる……！」

ルシア「二人は後ろを気にせず突破だけを考えてくれ。エルシュナイデとヴァルシオーネは後方支援に当たる！」

マサキ「ああ、任せたぜ。」

アイビス「ルシア……。」

ルシア「後ろは任せろ。お前は前だけを見て飛ぶんだ。」

アイビス「……。」

ルシア「絶対、テスラ研を……フィリオ達を救い出そう……俺達の手で。」

アイビス「……了解！」

ルシア「よし……行け！」

アステリオン、サイバスターがフルブーストで敵陣を突破、後方の量産型ヒュッケバインMk-?が攻撃を仕掛ける

エルシュナイデ・カスタム、ヴァルシオーネは攻撃を仕掛けている
量産型ヒュツケバインMk-?を撃破していく。

リユーネ「マサキ達はやらせないよ!」

レストジェミラの攻撃でエルシュナイデ・カスタムの右翼に当たり
バランスを崩す。

ルシア「ちっ……!」

アイビス「ルシア!」

ルシア「振り向くな!」

アイビス「!」

ルシア「前だけ見ている!ここを突破しないとフィリオ達はおろか
プランタジネットにも支障が出る!気にせず進め!」

アイビス「りよ、了解!」

ルシア「……とは言ってみただけど、完全に囲まれた……こ
れはまずいな……」

リユーネ「あたしがいるってこと、忘れてない?」

ルシア「リユーネ……」

リユーネ「こんなのヴァルシオーネにとっちゃ朝飯前だよ。」

ルシア「お、おい待てまさか・・・」

リユーネ「そのまさかよ！サイコプラスター！！」

ヴァルシオーネはサイコプラスターを放ち、包囲していたAM群を全滅させた。

ルシア「こんなところでサイコプラスターを使うな！」

リユーネ「だったら包囲されないように動きなよ。」

ルシア「う・・・」

リユーネ「でも、その必要もないみだいだけどね。」

アイビス「・・・行ける！そのままなら何とか・・・！」

ルシア「時間の余裕はあまりない。早急に突破を・・・」

レドームは敵機反応を感知する。

ルシア「！ まだ来るぞ！」

リユーネ「ええっ!？」

シロ「そ、そんニヤ!!」

前方にリオン群が壁になり現れる。

マサキ「くそっ！面倒な所に来やがって!!」

シロ「こゝれじゃ、間に合わニヤいニヤ!」

アイビス「シロちゃん! あきらめちゃ駄目だよ! あきらめたらそこで全てが終わっちゃう!」

スレイ「……相変わらずの楽観論だな、アイビス。」

アイビス「え!？」

ルシア「その声は……!？」

戦闘区域にカリオンが進入する。

アイビス「スレイ……! こんなタイミングで来るなんて!？」

スレイ「ブースト・ドライブ! 駆ける、カリオン!」

ルシア「まずい、この位置ではブースト・ドライブでも……!？」

スレイ「ターゲット・マルチロック! ファイヤリングロック・オープン!」

カリオンのホーミングミサイルで壁になっているリオンを全機撃墜した。

ルシア「何……!？」

マサキ「あいつ、もしかして!？」

スレイ「……………」

アイビス「スレイ……まさか……あたしを助けてくれたの？」

スレイ「……勘違いするな、アイビス。私の最大の目的はテスラ研の奪還……そのためなら手段は選ばない。」

ルシア「だから、俺達の援護をしようか……？」

スレイ「そうだ。この場合、それが最も効果的な戦略だからな。」

ルシア「……………」

アイビス「……ありがとう、スレイ……」

スレイ「お前に礼を言われる筋はない。次に会う時は、また敵同士である事を忘れるなよ。」

ルシア「お前な……」

アイビス「それでもいい……あんたがフィリオのことをちゃんと想ってくれてるのが判っただけであたし……嬉しいよ……」

スレイ「……………」

ルシア（アイビス……………フツ、怒鳴る気が失せた。）

マサキ「……話がついたようだな。だったら手伝ってもらっぜ、
彗星さんよ。」

スレイ「彗星……？」

シロ「ニヤんで彗星ニヤ？」

マサキ「流星のライバルなら、そんな感じだろ？それに機体の色も赤だしさ。」

シロ「じゃ、赤い彗……」

クロ「それ以上は危ニヤいわよ。しかも、あの色……緋色でしょ？」

マサキ「ひいろ……。それもヤバいんじゃないか？」

クロ「そ……そうかもニヤ。」

ルシア「一体何の話をしてるんだお前らは……」

リユーネ「何にせよ、マサキにしちやまともなネーミングだね。」

スレイ「彗星か……悪くない呼び名だ。ならば、流星との違いを見せてやるっ！」

ルシア「目標にバレリオンが展開している。こいつらを排除しなければ後ろから狙い撃たれる。優先で撃墜するぞ。」

アイビス「了解！」

スレイ「先に落とさせてもらっ！」

カリオンはG・ドライバーでバレリオンを狙うがレストジェミラが盾になる。

スレイ「邪魔を……！」

ルシア「サポートに入る！最後はアイビス、お前がやるんだ。」

アイビス「了解！」

ルシア「露払いをさせてもらう！」

エルシュナイデ・カスタムはツインビームカノンで周囲の敵機を破壊する。

ルシア「今だ！」

アイビス「ターゲットロック！フルシュート！」

アステリオンのミサイル攻撃で目標にいたバレリオンを全機撃墜、突破口を開いた。

アイビス「やった……やったよ！あたし……出来たんだ！」

スレイ「私のアシストがあったんだ。当然の結果だ。」

アイビス「ありがとう、スレイ！あなたはやっぱりナンバー01だよ！」

スレイ「あ……ああ……」

ルシア「ハガネとヒリュウ改を確認！いいタイミングだ。」

ハガネとヒリュウ改が戦闘区域に到着する。

スレイ「ハガネとヒリュウ改が来たか・・・」

クスハ「あ、あのカリオンは・・・！」

レオナ「スレイ・・・！スレイ・プレステイではなくて？」

スレイ「・・・お前達が合流したなら私の助力も必要ないだろう。」

レオナ「あなたはまだそんなことを・・・！」

スレイ「・・・お前なら私の気持ちがわかったが・・・感傷だったか。」

ツグミ「スレイ、あなた・・・！」

スレイ「さすがだな、タカクラチーフ。ここまでアイビスを鍛え上げるとは。」

ツグミ「私のコーチングは些細な事・・・すべてはアイビス個人の努力の結果です。」

スレイ「ツグミ、おまえはいい調教師になれる。駄馬に駆け足を仕込んだのだからな。」

アイビス「スレイ・・・！」

スレイ「仲良しゴツコは終わりだ！次は思い知らせてやる！お前が
幾らトレーニングを積もうと私には勝てないことをな！」

ツグミ「待つて、スレイ！一緒にテスラ研を・・・」

スレイ「兄様にも伝えておけ！ナンバー04などに夢を託しても最
初から無駄だということを！」

カリオンはブースト・ドライブげ現域を撤退した。

アイビス「スレイ・・・あんた・・・馬鹿だよ・・・」

ツグミ（気づいて、スレイ・・・。あなたがナンバー01の地位に
固執している限り・・・何度、撃墜されようとアイビスの心はあな
たに負けることはないわ・・・）

ダイテツ「これより本艦とヒリュウ改は現空域を突破し、北アメリ
カ内陸部へ進行する！」

レフィーナ「最大船速でこの空域から離脱します!!」

ルシア（待つている、フィリオ・・・必ず助けに行く。それまで死
ぬなよ・・・）

北アメリカ 南方面

シャルロット「ねえ・・・」

セツナ「何だ？」

シャルロット「何だか敵の防衛ライン薄くない？」

セツナ「恐らく、ハガネとヒリュウ改がテスラ研に向かっていているせいでだろう。」

シャルロット「そつちに集中させてるから私達のところは手薄になったってこと？」

セツナ「ああ、こればかりはハガネとヒリュウ改の部隊に感謝だな。」

シャルロット「それなら、あの人達に合流して・・・」

セツナ「それは駄目だ。」

シャルロット「ルシアがいるから？」

セツナ「・・・」

シャルロット「わかったわかった。それ以上は聞かないわ。」

セツナ「・・・いくぞ、賽は投げられたからな。丁と出るか半と出るか・・・」

シャルロット「その言い回し分かりにくくない？」

セツナ「茶化すな、行くぞ。」

シャルロット」OK!

第17話 完

第17話 流星と彗星、疾風のごとく（後書き）

ルシア「祝！第2次スパロボOG発売決定！！」

セツナ「ついに来た・・・という感じだな。」

アイビス「やっとアルテリオンに乗れるんだね。」

ツグミ「でもそれって・・・。」

シャルロット「アレがあるわね・・・」

ルシア「大丈夫だ、前々からそつちの路線の動きも考えていたし、万事OK！」

ツグミ「でもすぐには書けないわよ。ネタバレ防止のためにもね。」

ルシア「だよなあ・・・けどストック位は貯めておいても大丈夫だよな？」

リュウセイ「大丈夫だ、問題ないぜ！」

エクセレン「一番いいものを頼むわよん。」

キョウスケ「一体何なんだそれは？」

??????

テスラ・ライヒ研究所 管制室

ヴィガジ「……………これが……………成果だと……………」

フィリオ「……………」

リシュウ「……………」

ジヨナサン「……………ああ……………」

ヴィガジ「ふざけるな！これだけの施設で記録媒体が紙だけというわけではなからう！」

ジヨナサン「だから……………MGストレージの復旧には時間が掛かると言っただろう……………」

ヴィガジ「……………実力行使で暴いてもいいのだぞ？お前達が巧妙にカムフラージュしている地下格納庫を含めてな。」

ジヨナサン（気付かれたか……………）

ヴィガジ「直ちに全てを明け渡せ。拒めば非研究員を処刑する。」

フィリオ「……………！」

警報が鳴りだした。

ヴィガジ「何だ？」

バイオロイド兵「敵機、接近中。数、2。」

ヴィガジ「たった2機でか・・・一体何処の馬鹿だ？」

フィリオ（もしかしたら・・・）

テスラ・ライヒ研究所 近辺

崖の上に、ゲシュペンストMk-?・タイプTV・アーバレスト
アシユセイヴアーが立っていた。

セツナ「ついに来たぞ・・・テスラ・ライヒ研究所。」

シャルロット「研究所周辺に敵機多数・・・あれじゃ侵入できない
よ・・・！」

セツナ「全部を相手にする必要はない。一点突破を図る！」

シャルロット「了解！」

ヴィガジ「その様な貧弱な機体でガルガウの相手が務まるかな？」

セツナ「やってみなければわからないぞ？」

ヴィガジ「ふん、最早この研究所は我らの物！貴様ら野蛮人に渡す
わけにはいかん！」

バイオロイド兵「サラニ敵機接近中、数八2。」

ヴィガジ「今度は何処の馬鹿だ？」

戦闘区域にグルンガスト参式、ヒュツケバインMk-?・トロンベが進入する。

ゼンガー「見えたぞ、テスラ研が・・・！」

フィリオ「ゼンガー少佐・・・！それに、セツナとシャルロット、エル・・・！」

レーツェル「友よ、ピアン総帥からの預かり物を受け取りに来た。そして・・・お前達を救いに」

フィリオ「ふふ・・・相変わらず律儀な男だね、君は。」

バイオロイド兵「・・・才前達ノ身柄ヲ拘束スル。抵抗シタ場合ハ射殺スル。」

ジヨナサン「おや、我々を殺してもいいのか？このデータをまとめられる者がいなくなるぞ。」

バイオロイド兵が威嚇射撃を撃った。

バイオロイド兵「抵抗シタ場合ハ射殺スル。」

ジヨナサン「わかった、わかった。降参だ、大人しく従うよ。」

リシュウ（ジヨナサン・・・）

ジヨナサン（わかっていきます。何とんでもダブルGを彼らに。・
・フィリオもいいな？）

フィリオ（ええ・・・）

ゼンガー「・・・レーツェル、雑魚は俺が引き受ける！お前は一刻も早く師匠達の所へ！」

レーツェル「了解した！」

セツナ「雑魚はこちらでも引き受けます！」

シャルロット「少佐はテスラ研へ！」

レーツェル「承知した。無理はするな。」

セツナ「了解！」

ゼンガー「眼前の敵は、全て撃ち砕くのみ！」

グルンガスト参式のオメガ・ブラスターでレストジエミラを蹴散らす。

シャルロット「ファイアダガーで！」

アシユセイヴァーのファイアダガーでAM群を数機撃破

セツナ「いいぞシャル、後は任せろ！」

ヴアル「AMの装甲程度なら火器は必要ないかと。」

セツナ「わかった、肉弾戦でいく！」

タイプTV・アーバレストの格闘戦で全滅する。

ヴィガジ「ふん、ただのバカ共ではなさそうだ・・・」

レーツェル「よし、たどり着いた。生命反応チェック・・・所長達は・・・連れ去られた後か・・・」

ゼンガー「急げ、レーツェル！」

ヴィガジ「闘志だけは見上げたものだが、状況が見えてないようだな。やはり所詮は下等な・・・」

ゼンガー「黙れ!!！」

ヴィガジ「!？」

ゼンガー「そして聞け！わが名はゼンガー！ゼンガー・ゾンボルト！我は・・・悪を断つ剣なり!!！」

ヴィガジ「下等な野蛮人が・・・！」

セツナ「いつ聞いてもいいものだな、ゼンガーさんの啖呵は。」

シャルロット「ホント、好きよねセナってこついつの・・・」

3機が敵機を撃破していく中、グルンガスト参式にレストジェミラ

がとりついた。

ゼンガー「どけい!!！」

レストジエミラを振り払い

ゼンガー「ブーストナックル!!！」

取り付いた敵機ごとブーストナックルで攻撃する。

ヴィガジ「阿呆が!!！」

ガルガウのビーム攻撃でブーストナックルが撃ち落とされた。

ゼンガー「てああああ!!！」

斬艦刀でガルガウに攻撃を仕掛けるも、ガルガウのアイアンクローで右腕が破壊され、斬艦刀が弾き飛ばされた。

ヴィガジ「何が悪を断つ剣だ、悪とは貴様らのことだ!この銀河においてはな!!！」

ゼンガー「我らの星に一方的に攻め込んでおいて、何を言うか!!！」

ヴィガジ「予防策なのだよ、貴様らのような病原菌を銀河に蔓延させぬためのな!!！」

セツナ「どういうことだ!?!」

ヴィガジ「いずれ貴様らは銀河の秩序を乱す存在となる、故に我ら

に監視し・・・いや、我らに管理されしかるべきなのだ！」

シャルロット「お断りよ、そんなことは！」

セツナ「要するに地球征服・・・分かりやすい異星人だ。だがな・・・」

タイプTV・アーバレストはショットガンを装備する。

ヴィガジ「そのような武器でどうすると？」

セツナ「その爪を破壊する。」

ヴィガジ「ただのショットガンでガルガウの爪は砕けぬぞ？」

セツナ「砕ける、このブリューナグならな！」

タイプTV・アーバレストはブリューナグからAPFSDS状の弾丸を発射した。

ヴィガジ「ふん、何だと思えばただの弾丸か。そんなもの、軽く受け止めて・・・」

ブリューナグの弾が左腕のアイアンクローに触れた瞬間

アイアンクローが粉々に砕け散った。

ヴィガジ「な！？ガルガウの爪が・・・！！」

セツナ「グルンガストの装甲も塵に変える武器だ。砕けぬものはな

い。」

シャルロット「あらゼンガー少佐みたいなこと言っちゃって……」

ヴィガジ「おのれ、許さんぞ地球人共!!」

ガルガウがメガスマツシャーを放ち、3機を吹き飛ばす。

ゼンガー「ぐっ!!」

シャルロット「きゃああっ!?!」

セツナ「くそ、なんてパワーだ……!」

フィリオ「2号機のTGCの設定に時間がかかります……」

リシュウ「なら1号機を先に出せ!」

ジヨナサン「しかしあのOSは……」

リシュウ「動けばいい、このままではゼンガーが死んでしまっぞ!」

ジヨナサン「わかりました。フィリオ、未調整のJINKI-1よりTC-OSの方が確実だ。それで立ち上げるぞ。」

フィリオ「はい……ABMDシステムの同調効率を上げるためにヴァルシオンVのものを 사용합니다。」

ジヨナサン「ああ。それでいこう。」

リシュウ「零式をバラしてさえないければ……！」

レーツェル「彼らだけではこれ以上は……！」

ヴィガジ「死ね、ゼンガー・ゾンボルト……！」

掴みかかるガルガウにドリル・ブーストナツクルが当たりガルガウが怯む。

ヴィガジ「ぬうつ……！」

レーツェル「あれは……！？」

ウォーダン「……！」

シャルロット「な、何あのグルンガストモドキ……！」

ゼンガー「ウォーダン……！ウォーダン・ユミル……！」

ウォーダン「我はウォーダン・ユミル！メイガスの剣なり……！」

ヴィガジ「……！」

ウォーダン「一刀両断……！」

スレードゲルミルの斬艦刀が右腕のアイアンクローを半壊させた。

ヴィガジ「う、うぐっ……は、話が違つぞ……！」

ウォーダン「……………」

ゼンガー「ウォーダン……何故、この俺を……!?」

ウォーダン「貴様を倒す者はこの俺以外であつてはならない……そして、貴様との決着はこのような形であつてはならぬ。」

ゼンガー「……………!」

セツナ「い、一体何なんだ……?」

ゼンガー「もしや、お前はラミアと同じく……!?」

ウォーダン「俺は俺のオリジナルであると言える貴様の存在を抹消し……W15ではなく、真のメイガスの剣……ウォーダン・ユミルとなる。それが俺の……俺自身の意思だ。」

ゼンガー「意思……!ウォーダン、やはりお前は……?」

ウォーダン「貴様が新たな剣を手にするまでの時間は、俺が稼いでやる。我らの勝負はその後だ。」

ゼンガー「……………承知!」

ヴィガジ「人形が戯言をおおお……!!」

ウォーダン「ヴィガジ、しばしの間、貴様の相手はこの俺がする!」

セツナ「状況が見えないが……今は奴に任せて俺達は露払いをした方がよさそうだな。」

シャルロット「ええ、さすがに私達の機体じゃ火力不足だし・・・」
フィリオ「間もなくTC・OSとABMDシステムのFTリンクが
終了します。それでも稼働率が60%超えるかどうか・・・」

ジヨナサン「構わん、2号機発進の時間が稼げればいい。少佐、少
佐聞こえるか？今からダブルGを出す。何とか乗り移ってくれ。」

ゼンガー「承知！」

グルンガスト参式がテスラ研へ向かうところにレストジェミラが後
方から攻撃を仕掛ける。

セツナ「やらせん！」

シャルロット「落ちて！」

タイプTVのM13ショットガン、アシユセイヴァーのハルバート
ランチャーでレストジェミラを撃墜していく。

セツナ「ここは任せてください！」

シャルロット「少佐は早くテスラ研へ！」

ゼンガー「すまん。」

ヴィガジ「ん？テスラ研から何かが・・・？」

グルンガスト参式は稼働限界を超え墜落する。

ジヨナサン「少佐！」

ゼンガー「すまん、参式。」

リシュウ「早く乗り込め！」

ヴィガジ「カザハラめ・・・あのようなものを・・・！」

ジヨナサン「地球の研究所には秘密兵器が隠してあるものなのさ。」

ゼンガー「これが・・・ダブルG・・・」

ジヨナサン「そう、ビアン博士が君のために造り上げた機体だ。」

ゼンガー「この姿・・・まさに武神。」

ジヨナサン「ああ、ダイナミック・ゼネラル・ガーディアン・・・」

ゼンガー「いや、あえてその名は呼ぶまい。」

フィリオ「え・・・？」

ゼンガー「ビアン総帥が俺に遣した機体だ。俺のために造られた剣・・・そう、名付けて・・・ダイ・ゼン・ガー！！」

セツナ「ダイゼンガー・・・！」

シャルロット「大きいゼンガー少佐・・・ってこと？」

フィリオ「少し違うけど・・・なるほど、そういう略し方もあるね。」

ヴィガジ「ええい、どけ!!」

ガルガウの尻尾攻撃でスレードゲルミルを怯ませテスラ研へと向かう。

セツナ「まずい、奴が!？」

ヴィガジ「何がダイゼンガーだ・・・!」

ゼンガー「黙れ! 貴様を・・・!!?」

ガルガウがメガスマツシャーを放ちダイゼンガー周囲を破壊する。

ゼンガー「機体が動かん・・・!!?」

ジヨナサン「DMLシステムの稼働率が・・・これでは内臓武器が全て使えない!」

リシュウ「何じゃと!？」

フィリオ（やはりJINKI-1でないとダイゼンガーは・・・!）

ヴァル「スキャン完了。ダイゼンガーなる特機の稼働率は100%を切っています。」

セツナ「それではゼンガーさんは戦えない!？」

ガルガウのアイアンクローでダイゼンガーが捕まり、崖に叩きつけられる。

ヴィガジ「フハハハハ！無様だなあ！！」

ゼンガー「く・・・！」

ヴィガジ「木偶の棒が・・・粉碎してくれる！」

フィリオ（間に合え・・・！）

ヴィガジ「消えろ！地球人！！」

シャルロット「少佐ああ！！」

ガルガウのアイアンクローが直撃する寸前

ダイゼンガーが白羽取りで受け止めた。

ヴィガジ「何！？」

フィリオ「JINKI-1の立ち上げ、何とか間に合いました。」

ジヨナサン「この短時間でやってのけるとはな・・・」

フィリオ「しかし・・・内臓武器は・・・！」

セツナ「ヴァル、どうだ？」

ヴァル「稼働率90%超えましたが、内臓武器が使用不可能です。」

セツナ「動けるだけマシってことか……！」

ヴィガジ「空手でどうする気だ？」

ゼンガー「く……！」

ウォーダン「ゼンガー！受け取れ！貴様の得物を……」

ゼンガー「！」

ウォーダン「受け取るのだ、ゼンガー！貴様の斬艦刀を……参式斬艦刀をつ……！」

シャルロット「斬艦刀！？」

セツナ「そうか、内臓武器が使えないなら……！」

スレードゲルミルは参式斬艦刀をダイゼンガーめがけて投げ、ダイゼンガーは斬艦刀を装備する。

ヴィガジ「フン、今だらそんな物を手にしたところで！」

ゼンガー「黙れっ！斬艦刀は我が魂の剣！これさえあれば、俺は戦える……！」

ヴィガジ「！？」

ゼンガー「我が魂を受け継げ、ダイゼンガー……！否……！」

武神装攻

ダイゼンガー

第18話

ヴィガジ「武神装攻だど……!? 今度は何の略だああ!!」

ゼンガー「最早問答無用!!」

ダイゼンガーが斬艦刀を振るうと

ゼンガー「てああああ!!」

レストジェミラ、量産型ヒュッケバインMk-?が全て切り刻まれた。

ヴィガジ「おのれ、調子に乗るな!!」

ガルガウがメガスマツシャーの発射態勢に入った。

ヴィガジ「この俺を怒らせるとどうなるか思い知らせて……!!」

発射直前に攻撃が加えられ照準が狂う。

シャルロット「な、何あの黒い特機!?!」

ヴァル『照合確認、ダイゼンガーと同系統の機体と思われます。』

セツナ「てことはあれもダブルGか……」

レーツェル「待たせたな、友よ。」

ゼンガー「レーツェルか……」

ヴィガジ「あれもダイゼンガーとやらか……！」

レーツェル「そう、ダイナミック・ゼネラル・ガーディアンの2号機。名付けて……アウセンザイター！」

フィリオ「穴馬か……言い得て名だね。」

レーツェル「ゼンガー、有象無象は引き受けた。」

ゼンガー「応！狙うは大将首！」

レーツェル「トロンベよ！今が駆け抜ける時！」

アウセンザイターは回転しながらランツェ・カノーネを乱射し敵機を撃墜していく。

ヴァル『命中率98%、異常な数値です。』

セツナ「俺達も負けてられない、ヴァル！イクス・ドライバ、発動！」

ヴァル『ラジャ。』

タイプTVのイクス・ドライバが発動し、前方めがけて突撃

セツナ「こちらのカードはこれだ・・・勝負！」

レストジェミラをジェット・マグナムで撃墜後

セツナ「甘い！」

後方から仕掛けてきた量産型ヒュッケバインMk-?を後ろ向きのままM13シヨットガンで撃墜する。

シャルロット「セナには負けられない！ソードブレイカー、行つて！」

アシユセイヴアのソードブレイカーでガンセクトとガロイガが全滅する。

ゼンガー「うおおおおお！！！」

ダイゼンガーは斬艦刀を振りガルガウの尻尾を切り落とした。

ヴィガジ「野蛮人の分際で監査官たる我らに逆らうか！！！」

ゼンガー「野蛮人と呼ばば呼べ！だが、力にものを言わせる貴様らもまた・・・野蛮の徒ぞ！！！」

ヴィガジ「貴様はここで死ねええええええええ！！！」

ゼンガー「たあああ！！！」

ヴィガジ「！？」

ゼンガー「届け！雲耀の速さまで！！」

ダイゼンガーが空高く跳びあがり

ゼンガー「うおおおおおお！！」

ヴィガジ「ぬう！？」

ゼンガー「チエストオオオオオ！！！！」

ガルガウに斬艦刀を叩き込み、一太刀で粉碎した。

ヴィガジ「ぬわあああああ！！」

爆発したガルガウの中から脱出艇が飛び出してきた。

ヴィガジ「地球人め・・・この屈辱忘れんぞ！」

セツナ「分かりやすい捨て台詞だな・・・」

シャルロット「だね・・・」

ゼンガー「我が斬艦刀に・・・断てぬものなし！」

そこにハガネ、ヒリユウ改の部隊が到着した。

クスハ「カザハラ所長！みなさん、ご無事ですか！？」

ジヨナサン「ああ、頼もしい助っ人達のおかげだね。」

イルム「ま、そう簡単にあんたがくたばるとは思ってなかったけどな。」

ジヨナサン「相変わらず口の減らん奴だ。」

イルム「あんたに似たのさ。」

ツグミ「フィリオ！聞こえる！？フィリオ！生きているなら返事をして！！！」

フィリオ「ツグミ……心配かけたみたいだね。」

ツグミ「馬鹿！馬鹿！宇宙馬鹿！当たり前じゃない！」

ルシア（宇宙馬鹿って……）

ツグミ「あなたがいなくなったら私……私……」

アイビス「ツグミ……」

フィリオ「すまない……ツグミ。」

シロ「マサキ、あの破片つてもしかして……」

マサキ「インスペクターの指揮官機か？」

エクセレン「あらら……まさかボスが倒しちゃったわけ？」

キョウスケ「それよりも……問題は奴だ。なぜ、ウォーダン・ユミルがここに？」

ウォーダン「……………」

ラミア「W15……………ここへはレモン様からの指令で？」

ウォーダン「いや……………俺の意思だ……………」

ラミア「意思だと……………！W15……………おまえは……………」

ウォーダン「俺の名はウォーダン・ユミル……………W15ではない。」

ラミア「……………了解。」

ウォーダン「ゼンガー、雲耀の太刀、しかと見届けた。それでこそ我が宿敵。」

ゼンガー「ウォーダン・ユミル……………」

ウォーダン「貴様との決着はいずれ！」

スレードゲルミルはテスラ研から飛び去っていく。

ゼンガー「ウォーダン……………お前は……………」

ラミア（W15……………お前も越えようというのか？Wシリーズの限界を……………）

ブリット「少佐、ウォーダンを追わなくていいんですか!？」

ゼンガー「ああ。それが奴に対するせめてもの恩義……」

エクセレン「そういえばさ……あの2機って……」

セツナ「……………」

シャルロット「……………」

キョウスケ「ああ、ルシアが言っていた元教導隊の……」

ルシア「セツナ、シャルロット、お前達がテスラ研の奪還を……？」

シャルロット「ええ。フィリオさん達にはL5戦役ではお世話になったし……」

セツナ「シャル、余計な事を言うな。」

ルシア「何だって！？どういうことだ？」

セツナ「お前に話す義理はない。」

ルシア「待ってくれ！四天王の一角が倒れたとはいえ単独行動は危険すぎる！ハガネに来てくれ！」

セツナ「行くぞ、シャル。」

シャルロット「う、うん……………ごめんね、ルシア。」

タイプTV、アシユセイヴァーはテスラ研から去って行った。

エクセレン「あらら・・・ネゴシエイト失敗？」

キョウスケ「違う、大体から向こうは交渉する気もなかっただろ。」

カイ「あの馬鹿者が・・・！」

ルシア（もう話して通じる相手ではなくなったか・・・なら、今度会った時は力づくでも・・・）

テスラ・ライヒ研究所 外観

ツグミ「フィリオ！」

フィリオ「心配かけたね、ツグミ。」

ツグミ「・・・あなたに会って色々言いたいことがあったけど・・・あなたが無事だった・・・。今はそれだけでいいわ・・・」

フィリオ「・・・ごめんよ・・・」

アイビス「・・・フィリオ少佐・・・」

フィリオ「アイビス、見せてもらったよ・・・。成長した君とアステリオンの姿も。」

アイビス「でも、スレイは・・・」

フィリオ「心配はいらない……。スレイは子供の頃から、すぐにムクれるクセがあったからね……。でも、もう彼女も子供じゃないんだ……。自分の進む道を思い出したら、きっと僕達の所に戻ってくるぞ。」

アイビス「うん……。！」

フィリオ「ルシアもありがとう、二人を護ってくれて。」

ルシア「彼女達の夢を実現させるためだ。それに、当たり前だろ？ 大事な仲間なんだからな。」

フィリオ「……。そうだね。」

ツグミ「フィリオ、アイビス、ルシア……。スレイが戻るのを待ちましょう……。私達の夢のために……。」

フィリオ「ああ……。きっと、それは遠い日じゃないと思うよ。……（そして、僕が力尽きるその日も……）」

?????? (後書き)

シロ「……………地味だニヤ。」

クロ「地味地味ニヤ……………」

マサキ「何だよお前ら……………何ぼやいてんだ？」

シロ「今回のダイゼンガー登場シーン……………再現が地味過ぎだったニヤ。」

ツグミ「仕方ないわよ、仕様でどうしても普通の文字に戻っちゃうんだから。」

シロ「それはわかってるけど……………」

クロ「しつくり来ニヤいわね。」

ルシア「正直、ゲームとアニメでお腹一杯だからこれでいい。」

セツナ「そんなものなのか？」

シャルロット「さ、さあ……………」

第19話 オンリー・ワン・クラッシュ

テスラ・ライヒ研究所 格納庫

ルシア「聞かせてもらおうか？フィリオ。」

フィリオ「……………」

ルシア「L5戦役の時にセツナとシャルロットに会っていたらしいな。何故言わなかった？」

フィリオ「本人たつての希望だよ。君に（ここにいたことを教えな
いでくれ。）って。」

ルシア「……………ひどい嫌われようだな。で、あの時、無駄に長
く期間を取ったのは……………」

フィリオ「ああ、彼らのゲシュペンスト用のテスラ・ドライブを受
け渡しと調整のためにね。」

ルシア「それ位2、3日でどうにでもなるだろ？」

フィリオ「ホントはまだあるんだけど……………本人から口止めされて
てね。これ以上は言えないよ。」

ルシア「……………分かった。」

フィリオ「すまないね。」

ルシア「いいさ。ところで、ヴァルシオンVの方はどうなっている？」

フィリオ「最終調整が終われば問題なく動くよ。けど……」

ルシア「何だ？」

フィリオ「装甲に正体不明の物質が混ざっているんだ。」

ルシア「正体不明の物質？」

フィリオ「ああ、強いて言うなら、エアロゲイターの無人機から検出されたものに似ているんだ。」

ルシア（まさか……あの時セプタギンに取り込まれた影響でズフィールド・クリスタルが……？）

フィリオ「おかげで機体強度が上がってるけど……」

ルシア「問題ないならそのままがいい。」

フィリオ「わかった、しばらく時間がかかるから休んできなよ。」

ルシア「ああ、そうさせてもらっ。」

???

レビ「……目を覚ませ、マイ……。マイ・コバヤシ……」

マイ「うう……う……」

レビ「お前はいつまで敵の中にいる……?」

マイ「ど、どついつことだ!?!」

レビ「……お前の周りの者は全て『敵』……我らを打ち滅ぼした憎むべき『敵』……」

マイ「て、敵……!?!」

レビ「……そうだ……アヤ・コバヤシ……リュウセイ・ダテ……ハガネとヒリュウの者達は……全て我らの敵だ。」

マイ「そ、そんな……嘘だ……!」

レビ「嘘ではない……。あの者達は我らを……ジユデツカを打ち倒した……そして監察官であったファースト・コンタクターは離反し我らを滅ぼした……」

マイ「う、うう……う……!」

レビ「私と一つになるのだ、マイ・コバヤシ……我らの敵を倒すために……再びジユデツカを蘇らせるために……」

マイ「わ、私は……敵になりたくない……!アヤ達の敵には……!」

レビ「敵だ……!あの者達は我らの敵……!」

マイ「うつつ！あああっ！！」

レビ「敵を倒せ．．．！我らの敵を．．．！アヤ・コバヤシ達を倒せ．．．！」

ハガネ 個室

マイ「嫌だ！ 私は．．．！」

シャイン「マイ、しっかりなさいませ！」

マイ「！！」

ラトウーニ「マイ．．．」

マイ「ど、どうして．．．お前達が．．．？」

ラトウーニ「あなたがうなされているのが聞こえたから．．．」

マイ「．．．」

シャイン「大丈夫でございますか．．．？」

マイ「．．．」

マイ（ラトウーニや．．．シャイン王女が私の敵．．．？アヤ達が．．．私の．．．）

ラトウーニ「マイ．．．？」

マイ「ち、違う……！」

ラトウーニ「!?!」

マイ「違う! そんなことはない! そんなことは……！」

シャイン「ど、どこへ行かれますの!?!」

ラトウーニ「マイ……！」

別室では……

ラーダ「アヤ……みんながあの子とレビの関係に気付くのは、
もう時間の問題よ。」

アヤ「……」

ヴィレッタ「……」

ルシア「……」

ラーダ「何よりも本人が事実を知らないのは尚更……隠し通すこ
とは出来ないわ。」

アヤ「……」

ヴィレッタ「そうだな……。マイの私達も……事実を受け入

れなければならない。」

アヤ「隊長……」

ヴィレッタ「私達から話すしかない。今、マイが抱えている問題を……」

ラーダ「問題？」

アヤ「ええ……。それが……。マイにまだ事実を教えられない理由……。あの子には……。レビの記憶が残っているんです。」

ラーダ「え……。!?？」

アヤ「マイの中にはレビ・トラーの残留思念が……」

リュウセイ「な、何だって……。!?？」

アヤ「!」

ルシア「リュウセイ……!勝手に入ってくるな!」

ライ「その話は本当なのですか!??」

アヤ「リュウ、リュウ……。ライ……!」

リュウセイ「あいつにレビの記憶が……。俺達の敵だった頃の記憶が残ってるなんて!」

ルシア「……。……」

ライ「お前は……知っていたのか？」

ルシア「……ああ、ケンゾウ博士から……」

リュウセイ「何で黙ってたんだよ！」

ルシア「言ったところでマイの問題は解決しない。以前の俺みたいになりかねない。」

マイ「……そんな……」

リュウセイ「!!」

アヤ「ま、マイ!!」

ルシア（タイミングが悪すぎる……!!）

マイ「わ、私が……レビ……!!?」

アヤ「あ……!!」

マイ「私は敵……!お前達の……敵……!う、うあああっ!!」

リュウセイ「マイ!!」

アヤ「ま、待って!!どこへ行くの!!?」

???

レビ「……ようやく真実に気づいたか……」

マイ「や、やめる……!」

レビ「恐れることはない……すべてを……私を受け入れる……」

マイ「わ、私は……お前じゃない……!」

レビ「おまえはこの私……、ジユデツカの巫女、レビ・トローラー……」

マイ「くっ! ああっ!」

レビ「さあ……我に身を委ねよ……」

マイ「あ……ああ……!」

レビ「我と共に敵を倒すのだ……」

マイ「敵を……倒す……」

レビ「そうだ……我らの敵を打ち倒せ……。そのための力を手に入れる……」

マイ「ち……か……ら……」

レビ「そして……我が玉座に戻るのだ……」

ハガネ ブリーフィングルーム

シャイン「マイがいなくなった……!?!」

リュウセイ「あ、ああ。あいつを見かけてねえか？」

シャイン「い、いえ……私達もあの子の様子がおかしかったの
で、探していたのですが……」

アラド「マイに何かあったんすか!?!」

リュウセイ「俺のせいだ……!俺が余計なことを言っちゃったせ
いで、あいつは……!」

ラトウーニ「も、もしかして……自分のことを……?」

リュウセイ「! お、お前……」

ラトウーニ「うん……何となく気づいてた……それに……
あの子は昔の私達と同じような感じだったから……」

リュウセイ「ラトウーニ……」

ラトウーニ「でも、今は違う……違うと思うの……」

リュウセイ「……」

ラトウーニ「マイを守ってあげなきゃ……私達で……あの子は

私達の仲間だもの……」

リュウセイ「……!」

ラトウニ「そつでしょ？ リュウセイ……。例えどんな過去があっても、今のあの子は……」

リュウセイ「ああ……!」

シャイン「とにかく、手分けしてマイを探しましょう!」

アラド「わ、わかりました!」

ハガネ 格納庫

ルシア（レビの残留思念がここから感じる……）

マイ「……」

ルシア「マイ!何故R-GUNに乗っている!」

マイ「……おまえは……」

ルシア「? 様子が……」

マイ「……ジュデツカへ……」

ルシア「! お前……レビ・トラーか!」

マイ「バルマーを裏切ったお前を・・・始末するために・・・」

ルシア「待て！マイ！！」

R・GUNパワードのコクピットハッチが閉まり、R・GUNが発進した。

ルシア「くっ！R・GUNが！」

テツヤ「ルシア中尉！」

ルシア「テツヤ大尉！？」

テツヤ「すぐにR・GUNを追跡してくれ！追ってアヤ大尉達も向かわせる！」

ルシア「了解！・・・と言ったものの出られる機体があれば・・・マイを刺激しかねないが仕方がない・・・！」

離島群 周辺海域

マイ「！こゝここは・・・！私は一体・・・！？（そうか・・・私はレビの意識に操られて・・・私はもう・・・アヤ達の所にはいられない・・・レビが言った通り、かつての私が敵であったならば・・・これから・・・アヤ達の敵になってしまふのだとしたら・・・）」

「

ZX-10「識別終了。敵機はR-GUNです。」

アギラ「ならT-LINKシステムを搭載しているかもしれんのか……」

ZX-11「いかがしますか？」

アギラ「あ奴はサンプルを誘き寄せる餌になる。それに……パイロットが念動力者なら、ワシの研究に役立つやもしれん。アウルム1、R-GUNを捕らえよ。」

オウカ「はい、母様。」

マイ「敵機が向かってくる……ここで逃げたら……」

レビ（彼らを利用するんだ。そして……）

マイ「嫌だ！私は……」

ラピエサージユはO・O・ライフルBモードでR-GUNを攻撃

無意識にマイは回避運動を行い攻撃を回避する。

オウカ「抵抗をやめなさい。そして私達のところへ来るのです。」

マイ「わ、私をどうする気だ……？」

アギラ「あ奴は……！？間違いない、ワシが特殊脳研究所にいた時の被験体……生きておったとは……」

レビ（彼らを利用し……）

マイ「い、嫌だ！私は敵になりたくない……！」

オウカ「敵？」

マイ「アヤ達の敵になるくらいなら……ここで戦って死んだ方がマシだ！」

オウカ「強情な子ですね。では、これならどうです？」

ラピエサージユはO・O・ライフルEモードの発射態勢にはいる。

オウカ「安心なさい……母様の命令です。殺しはしません……」

R・GUNに掠めさせ、行動不能にさせた。

オウカ「ふふ、もう動けないでしょう？」

マイ「あ……う、う……！」

オウカ「さあ、行きましょう。」

マイ「い、嫌……！敵には……なりたく……」

オウカ「母様、あの機体を破壊し、パイロットのみを回収してもよろしいですか？」

アギラ「ふむ……貴重なT・LINKシステム搭載機じゃがやむ

をえまい。あの被験体にはここで恐怖心を植え付けておいた方が良さそうじゃからの。」

オウカ「わかりました、母様。」

マイ「う、うつつ……！」

オウカ「さあ、覚悟なさい！」

マイ「……………!!！」

その時、マイに三つの念が走る。

マイ「え!?!」

リュウセイ「うおおっ!!！」

ルシア「やらせるか!!！」

R・ウィング、R-3 パワード、エゼキエル・アーガンタムの射撃攻撃でラピエサージユを怯ませ後退させた。

オウカ「くっ! よくも邪魔を!!！」

マイ「リュ、リュウセイ……!!！」

リュウセイ「……………!!！」

マイ「ど、どうして私を……? 私はお前達の敵だったのに……!!！」

リュウセイ「今はそうじゃねえだろ。」

マイ「！」

リュウセイ「今は・・・そうじゃねえ。俺達の仲間だ。」

マイ「でも、私は・・・もうみんなと一緒にいられない・・・。お前やアヤとも・・・私は存在してはいけない人間・・・死んで当然の・・・」

アヤ「馬鹿なことを言わないで！」

マイ「！」

アヤ「お父様や私達は、あなたを死なせるつもりで目覚めさせたんじゃない・・・！」

マイ「だけど、私は・・・！」

ルシア「なら、俺はどうなる？」

マイ「え・・・？」

ルシア「お前にこんな思いをさせた異星人の一人だ。お前が死ななければいけないのなら、俺も同罪だ。」

マイ「・・・・・・・・・・」

アヤ「・・・あなたに真実を教えなかったことは謝るわ・・・そして、あなたをパーソナルトルーパーに乗せたことも・・・」

マイ「……………」

アヤ「でも、私達にはあなたの力が必要な。多くの人達を守るために……私達がこれから生きていくために……」

マイ「……………!」

後方からフェアリオン2機、ビルトビルガーが進入する。

ラトウーニ「リュウセイ、マイは……!?!」

リュウセイ「ああ、無事だ。ギリギリ間に合ったぜ。」

アラド「そうツスか、良かった……!」

オウカ「……………」

ラトウーニ「オウカ姉様……」

アラド「姉さんだけ……ファルケンは?ゼオラはいないのか?」

アギラ「フェツフェツフェツフェ、懐かしい顔が揃ったのう……」

アラド「そ、その声は……!」

ラトウーニ「セトメ博士……!」

ルシア「特脳研の科学者が何故、前線に……?」

シャイン「あれはリクセント奪還作戦のグラビリオン・・・!?」

アギラ「久しぶりじゃのう・・・ラトウーニ111。」

リュウセイ「ラトウーニ・・・イレヴン・・・!?」

ルシア（ラトウーニがスクールにいた時の被験体ナンバーか・・・）

アギラ「それが奴の本当の名じゃ。ラトウーニクラスの11号・・・すなわち、ラトウーニ111。」

リュウセイ「な・・・に!?」

ラトウーニ「・・・」

リュウセイ「どういうことだ!? 何で番号なんかを!?」

ルシア「こいつらに人間性を追求しても無駄だ、リュウセイ。」

アギラ「そうじゃ、サンプルに名前などいらぬ。クエルボ・セロやケンゾウ・コバヤシが与えたような名はな。」

リュウセイ「!! ケンゾウ・コバヤシだと!?」

アヤ「お、お父様が!?」

アギラ「・・・名などと与えるから、下らぬ情が移り、研究に支障が出ることになる・・・じゃから、サンプルに名前など要らぬ。番号で充分じゃ。」

アヤ「……!」

リュウセイ「まさか、アヤはスクールの……!?!」

アギラ「それは違う。その女はワシが特脳研におった頃の被験体じゃ。」

アヤ「特脳研……!じゃあ、あなたは!?!」

アギラ「フェフェフェ、ワシのことを忘れて……いや、記憶をいじられておるようじゃの、被験体……ナンバー7。」

アヤ「!?!」

アギラ「そして、ナンバー5。」

マイ「ナンバー……5!?!?わ、私のことか!?!」

アギラ「そうじゃ。まさか、特脳研の爆発事故を引き起こしたお前が生きておったとはのう。」

マイ「え……!?!?」

アヤ「そ、それは!?!」

アギラ「ほう?その記憶は残されておったか、ナンバー7。フェフェフェ、ケンゾウはワシがプログラムしたトラウマを消しておらんかったようじゃの。」

アヤ「プ、プログラム……!?!?トラウマ!?!」

アギラ「そうじゃ。お前とナンバー5の記憶はワシとケンゾウが与えたもの・・・お前達が心からワシらへ従うようにするために・・・T-LINKシステムの研究のために・・・トラウマを原動力として、より強い念動力を発揮させるためにこしらえたものなのじゃ。」

アヤ「!!！」

マイ「!!！」

リュウセイ「な、何だと!?!」

ルシア（マイとアヤ大尉も・・・俺と同じように記憶操作を・・・!?!）

アギラ「フェフェフェ・・・よいか、ナンバー5、ナンバー7。お前達は本当の姉妹ではない。それどころか、ケンゾウの娘ですらないのじゃ。」

アヤ「そ、そんな・・・!?!じゃあ、私の記憶は・・・!?!?お母様やマイとの記憶は・・・!?!?私の子供の頃の記憶は!?!?」

アギラ「全て作り物・・・偽物じゃ。」

アヤ「う、嘘よ・・・そんな・・・!?!」

アラド「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ラトウーニ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アギラ「子供の頃、自分のせいで妹に怪我をさせ、親や家族に本当のことを言えなかったことがあるじゃろ。その後ろめたさがケンゾウに従順となるキツカケの一つとなっておる。」

ルシア「……………」

リュウセイ「……………」

アギラ「ワシは封印されたお前の過去を知っている。それはお前の記憶が作り物である証なのじゃ。」

アヤ「う、嘘！嘘よ！！」

アギラ「フェフェフェ、いい表情じゃのう、ナンバー7。どうじゃ、ワシが作った記憶は？よく出来ておったじゃろ？何せお前が十数年の間、本物だと思っておったぐらいじゃからのう。」

アヤ「やめてえええええ！！！」

アギラ「……………ついでじゃ、もう一つ教えてやろう。ナンバー7、おまえは定期的にその機体のT-LINKシステムと接続せねばならなかったはず……………それが何故だかわかるか？」

アヤ「う、うううう……………！」

アギラ「お前のT-LINKシステムはワシとケンゾウが作った枷……………お前に刷り込まれた偽装記憶のバックアップデータがそこに入っている。そして、定期的にシステムとリンク……………記憶の補完や修正をしなければ、お前の人格は崩壊する。そう、今のようになっている！フェハハハハハ！」

アヤ「ううっ！ ああああっ！！！」

リュウセイ「ア、アヤッ！！！」

マイ「……わ、私が失った記憶……それさえも……作り物……！？私は……レビでもなければ……マイでもない……！？い、いつたい……私は……何なの……！？私は……私……！！！」

リュウセイ「マイ！！！」

アギラ「フェハハハハハ！ どうじゃ、真実を知った気分は！？ ケンゾウめ、被験体に情が移って秘密にしておったじゃろが、無駄なことじゃ！ フェハハハハ！！！」

リュウセイ「まさか、てめえ……俺のおふくろも……！？」

アギラ「ほう、お前の母親は特脳研におったのかえ？ そうか、それでその機体に乗っておるわけか。ならば、ナンバー2……いや、ナンバー3がお前の母親じゃな。」

リュウセイ「……！！！」

ルシア「リュウセイの母親が特脳研に……！？」

アギラ「凶星か。しかし、惜しかったのう……ナンバー3は、ワシが特脳研へ入る前に登録を抹消されておった。残っておれば、ナンバー5や7同様、ワシが記憶を作っちゃったののう……」

リュウセイ「て、てめえ……！アヤやマイを……ラトウーニを……アラドを……！人間を何だと思ってるんだ！！」

アギラ「……決まっておる。ただのサンプルじゃ。そして、記憶やトラウマ、精神の操作は、サンプル達に力を発揮させるための手段に過ぎん。」

リュウセイ「ゆ、許せねえ……！てめえみたいな人間は……！人の記憶や感情を弄ぶてめえみたいな奴だけは！！」

ルシア「こんなことはエアロゲイターだけで十分だ。お前のエゴはここで終わらせる！！」

アギラ「フン、尻の青い若造が……聞いた風な台詞を吐くでないわ。何なら、母親の代わりにお前らの脳ミソをいじってやるうか？ん？」

リュウセイ「ふざけんな！誰が！！」

アギラ「ん？そういえばもういじられとる奴もおったのう……たしか……」

ルシア「それ以上口を開いてみる。」

アラド「……！？」

ルシア「……」

アギラ「……まあいいわ。ラトウーニ11と共にナンバー5とナンバー7もここで回収しておくか。ケンゾウが中途半端に調整

したとは言え、今まで生き残っておるのなら・・・今後の研究に少しは役立つかも知れんからの。・・・アウルム1、任せるぞ。」

オウカ「はい、母様。アラド・バランガとR-1、ナイトのパイロットを始末し・・・ラトと二人のサンプルを確保します。」

リュウセイ「来るか!?アヤ、マイ!お前達は離脱しろ!」

アヤ「う、うう・・・!!」

マイ「・・・・・・・・・・」

リュウセイ「おい、しっかりしろ!!」

ルシア「やめておけリュウセイ、あの時の俺と同じだ・・・ここはR-3、R-GUNの盾になりながら戦うしかない。」

リュウセイ「ああ、何としても二人を守ってみせる!」

アラド「リュウセイ少尉、ルシア中尉、俺も手伝います!」

ラトウーニ「私も・・・!」

シャイン「私も戦いますわ!」

リュウセイ「お、お前ら・・・!」

ラトウーニ「アヤ大尉を見捨てるわけにはいかない・・・!それに・・・あの子は・・・マイは昔の私達と同じだもの。」

リュウセイ「……………」

ラトウニ「だから……………」

リュウセイ「わかった！行くぜ、みんな！！」

アギラ「者共、かかれい！！」

アラド「オウカ姉さんの相手は俺がする！」

ラトウニ「アラド！」

ビルトビルガーのコールドメタルソード、ラピエサージユのマグナム・ビークがぶつかりあう。

オウカ「この私を倒せると思っているのですか？」

アラド「倒す気なんてねえ！」

オウカ「！」

アラド「俺はアギラから姉さんとゼオラを助け出すんだ！」

R-1、フェアリオン2機はフィールドを張りR-3パワード、R-GUNを庇う。

リュウセイ「くっ……………」

ルシア「先にアヤ大尉とマイの安全を確保しなければ……………」

エゼキエル・アーガンタムが空中に上がりオルガ・キャノンを展開する。

ルシア「オルガ・キャノン、発射!!」

オルガ・キャノンでAM部隊を薙ぎ払う。

ラトウーニ「リュウセイ、敵機が!」

リュウセイ「何!?!」

ルシア「まだいたのか!?!」

上空から急襲してくるAM部隊が、後方からの射撃で陣形が崩れた。

オウカ「何者です!?!」

ヴィレッタ「……私の部下を……いえ、仲間達をやらせはしない。」

マイ「……!!」

リュウセイ「た、隊長!」

ヴィレッタ「……何とか間に合ったようだな。」

ライ「ええ。」

ルシア「ライディース……助かった。」

ヴィレッタ「雑魚の相手は任せなさい。」

ライ「お前達は大尉とマイを守れ！」

ルシア「ヴィレッタ大尉・・・そのヒュッケバインは？」

ヴィレッタ「レーツェルの機体のカラーリングを戻したただけだ。」

マイ「わ、私を助けてくれるのか・・・？」

ライ「ああ、どんな過去があろうと今の俺達は一つのチームだからな。」

アギラ「フン、どんな過去でもだと？愚か者めがああああ！！！」

赤いグラビリオンの胸部ビーム砲が展開し、前方一帯を焼き払う。

ライ「くっ・・・！！！」

ルシア「アーチボルドが乗っていたグラビリオンより火力が高い・・・！！！」

アギラ「偽りの記憶で結ばれた絆など、紛い物に過ぎんわ、フェハハハハハ！」

アヤ「・・・それが・・・それがどうしたっていうの！！！」

アギラ「ハハハハ・・・ハ？」

アヤ「昔の記憶があなたに作られた偽物だとしても、今の私には関

係ない！」

マイ「！」

アヤ「少なくとも、みんなと出会ってからの記憶は私自信のもの！
あなたに作られた偽物じゃないわ！」

リュウセイ「アヤ……」

アヤ「リュウ！私は過去には囚われない！あなた達と共に進むわ！
私自身の意志で……新しい道を進む！」

マイ「……！」

アヤ「今の私達に必要なものは過去ではなく、未来。だから、マイ・
……あなたの意志で決めなさい。これからどうするのかを！」

マイ「……私は……私は……アヤと一緒に行く！」

レビ（何を言う……お前は）

マイ「黙れ！マイ・コバヤシだ！消えろ！！私はアヤ達と一緒に戦
う！！！」

アキラ「ほざくでないわ！！このソルグラビリオンには敵わぬぞえ
！！！」

アラド「ソルグラビリオンって……」

ルシア「完全に何処かで聞いたような名前だな。」

リュウセイ「アヤ、あのデカブツとやりあうには……!」

アヤ「わかってるわ。隊長!」

ヴィレッタ「ああ、SRX合体を許可する!」

アヤ「了解!」

アラド「な、何が始まるんだ!?!」

ルシア「アラドもよく見ておけ。これがSRX誕生の姿だ。」

アヤ「念動フィールド、ON!」

ライ「トロニウム・エンジン、フルドライブ!」

リュウセイ「行くぜ!ヴァリアブル・フォーメーション!」

R-1、R-2、R-3が合体し、SRXが完成する。

リュウセイ「天下無敵のスーパーロボットオ!ここに見参!」

アラド「ほ、ホントにR-2が開きになった……!」

ルシア「何だそれは?」

アギラ「何が天下無敵だ!笑わせるな!」

ソルグラビリオンはサイズミック・ボールをSRXに向けて飛ばす。

リュウセイ「ザイン・ナツコォ!!」

SRXのザイン・ナツクルでサイズミック・ボールを破壊する。

リュウセイ「ブレードキィィィック!!」

ブレードキックでソルグラビリオンの左肩を切り裂く。

リュウセイ「どうだ!!」

ルシア「いや待て、見る!!」

ソルグラビリオンの左肩の損傷が再生された。

ライ「修復している・・・あの時と同じか!!」

アギラ「敵わぬと言っただろ。撃て。」

ZX-10「はっ!!」

ルシア「まずい離れる!!」

ラトウニ「え・・・!!」

ZX-10「ソルグラビリオン・アーク!!」

リュウセイ「ガウンジェノサイダー!!」

ソルグラビリオン・アーク、ガウンジェノサイダーがぶつかり一帯

が吹き飛ばされる。

アラド「す、すげえ……」

ラトウーニ「でもソルグラビリオンは修復されてる……」

ルシア「持久戦に持ち込まれたら終わりだぞ……」

アギラ「自己修復能力を持ったマシンセルがあれば天下無敵よのう。

」

リュウセイ「くそ……」

ライ「奴を倒すには修復が不可能なほどの大ダメージを一気に与えるしかない！」

リュウセイ「じゃあ……」

ライ「ああ、トロニウム・バスターキャノンだ！ よろしいですね、大尉！」

アヤ「ええ。マイ、ツインコンタクトをやるわよ！」

マイ「わかった！」

アヤ「T-LINKツインコンタクト！」

マイ「メタルジェノサイダーモード、起動！」

アラド「こ、今度はR-GUNが銃になった!？」

アギラ「何をしても無駄よ！叩き潰せ！」

Z X - 1 1 「はっ！行くぞ！」

Z X - 1 0 「おお！」

Z X - 1 1 「ソルグラビリオンソオオオド！！！」

Z X - 1 0 「ソルグラビリオンソオオオド！！！」

ソルグラビリオン・ソードを展開しSRXへと突っ込むソルグラビ
リオン

ライ「トロニウム・エンジン、フルドライブ！！！」

アヤ「リュウ！トリガーを預けるわ！」

リュウセイ「おお！」

SRXはソルグラビリオンに照準を合わせる。

Z X - 1 0 「うおおおおお！！！」

Z X - 1 1 「うおおおおお！！！」

リュウセイ「一撃必殺！バスターキャノン！！！」

SRXはトロニウム・バスターキャノンを発射し、ソルグラビリオ
ンを消滅させた。

オウカ「母様！！！」

アギラ「で、撤退じゃ。撤退するぞえ！」

オウカ「はい、母様！」

脱出したガーリオン、ラピエサージユはASRSを展開し、現域を撤退した。

ラトウーニ「……………」

アラド「オウカ姉さん……………」

そこにハガネ、ヒリユウ改が到着した。

エイタ「敵機反応なし。味方側はR・GUNをはじめ全機健在です。」

ダイテツ「そうか……………」

テツヤ「艦長、マイのことは……………」

ダイテツ「雨降って地固まる。ワシらの部下は彼女を受け入れてくれると信じる。ルシア・ゾルダークとラミア・ラヴレスの時のようにな。」

テツヤ「はい！」

テツヤ「無断出撃の処罰はお前に一任する。大事の前故、適切な処置をな。」

テツヤ「了解です。」

ライ「強制冷却終了。」

アヤ「マイ……大丈夫？」

マイ「うん。」

リュウセイ「さあ、戻るぞ。マイ」

マイ「うん……ありがとう、リュウセイ。」

リュウセイ「アヤと同じで、俺のことはリュウセイでいいぜ。」

マイ「わかった……リュウ。」

ヴィレッタ（これでいいのだな……イングラム……）

ルシア（レビの残留思念が消えた……。か。いつかは俺も打ち明けねばならないかもな……。フィリオヤツグミ……。アイビスに……）

第19話 オンリー・ワン・クラッシュ（後書き）

アラド「いやぁカッコよかったッス！SRXの合体！」

リュウセイ「そうか、わかってくれて嬉しいぜ！」

ルシア「アラドは違うところを見てたような気もするがな……」

マイ「合体って……そんなにいいものなのか？」

リュウセイ「もちろんだぜ！合体・変形は漢のロマンだ！」

マイ「そうか……他にも見てみたいな。」

ルシア「今のところ、合体できるのはSRXとヒュッケバインMK
-？ガンナーとボクサーくらいだな。」

リュウセイ「それならいいのあるぜ。」

アヤ「ちょっと待って、リュウ、もしかして……」

リュウセイ「おう！俺が一番のお気に入りロボットアニメ「バー
ンブレイド3」だ！こいつの合体は最高に燃えるぜ！」

マイ「燃える……？」

リュウセイ「おう！マイも見ようぜ、バーンブレイド3！」

マイ「う、うん・・・」

アヤ「リュウ、ほどほどにね・・・」

ルシア（リュウセイに加減を求めたらダメだと思っただけど・・・
どうなる、マイ・コバヤシ？）

第20話 オペレーション・プランタジネット

ハガネ ブリーフィングルーム

ダイテツ「・・・以上が、マイ・コバヤシにかんするこれまでの経緯だ。」

カチーナ「・・・・・・・・・・」

リオ「・・・・・・・・・・」

マイ「・・・・・・・・・・」

クスハ（マイちゃん・・・）

ブリット「彼女も・・・エアロゲイターの犠牲者だったのか。」

リュウセイ「・・・・・・・・ああ。」

エクセレン「でもアヤ大尉・・・今はあなたの妹ちゃんなんですよ？」

アヤ「ええ・・・例え、血がつながっていなくても」

エクセレン「なら、それでいいじゃない？過去は過去、今は今・・・ってね。」

マイ「・・・・・・・・・・」

アラド「おれだって……ここに来る前はノイエDCにいたんだ。でも、」

今は……」

リヨウト「そう……僕も今はみんなと一緒に戦っている。自分の意思で。」

マイ「……」

レオナ「マイ、あなたはそれを証明したわ。だから……」

エクセレン「そ。まぎれもなく私達の仲間ってわけ。あらためてこれからもよろしくね、マイマイ?」

マイ「……」

ルシア（マイマイって……）

アヤ「エクセレン……」

エクセレン「いいわよね、カチーナ中尉?」

カチーナ「しかし、あいつはエアロゲイターの大將の……」

リユース「それを言うなら、あたしはどうなるの?あたしだって、敵の大將の娘なんだよ。」

ルシア「俺もな。」

カチーナ「……ぬ……」

クスハ「カチーナ中尉・・・」

リユーネ「中尉はあたし達のことを今も敵だと思ってる？」

カチーナ「わかったわかった、あたしの負けだよ。二度あることは三度ある・・・ま、しょうがねえ。エアロゲイターの正体はあたしも知ってるし・・・結果が出ちまったことだ、もうゴチャゴチャ言わねえよ。」

マイ「・・・・・・・・・・」

エクセレン「一番うるさい人が納得したところで・・・アヤ大尉、マイちゃんを大事にしてあげるのよ？」

アヤ「ええ・・・ありがとう、エクセレン。」

エクセレン「どう致しまくりやがりました。ごさいますの。・・・って、これじゃラミアちゃんみたいね。」

キヨウスケ「・・・・・・・・お前の癖が流行り始めたみたいだな。」

ラミア（癖も何も好きで言っているわけではないのだが・・・）

ダイテツ「・・・・・・・・他に異論のある者は？」

キヨウスケ「・・・・・・・・」

カイ「・・・・・・・・」

イルム「……………」

マサキ「……ねえみただぜ。」

ヴィレッタ「……………」

ダイテツ「ヴィレッタ大尉、ワシが言った通りだっただろう？」

ヴィレッタ「……はい。」

ダイテツ「では、以上だ。本艦はオペレーション・プランタジネットに参加するためマンハッタン隕石孔からラングレー基地へ向かう。各員は持ち場に戻れ。」

北アメリカ　マンハッタン隕石孔

エイタ「敵機が本艦の進路上に集結！こちらの行く手を阻むつもりです！」

ダイテツ「今さら迂回は出来ん……正面突破あるのみ！各機、出撃せよ！」

P T部隊がハガネ、ヒリユウ改から出撃した。

アイビス「ルシア、それがヴァルシオンVなの？」

ルシア「ああ、ピアン総帥から授かった特機だ。こいつならインスペクターの機動兵器にも対抗できる。」

リユウセイ「!? あいつら、アルブレードの量産型を使ってやがるぞー!」

アラド「そ、それにランドグリーズも・・・!」

リョウト「シャドウミラーの機体までもう量産しているのか・・・!?」

ラミア（本隊との戦闘中に・・・鹵獲したのか?あるいは・・・）

アギーハ「利用できる物は何だって利用する。それがあたい達のモットーさ。」

マサキ「アギーハ・・・!てめえもいやがったのか!」

アギーハ「そりゃもう。あんた達にやられっぱなしじゃ、格好がつかないからね。ここらで抵抗勢力を一網打尽にしようって算段なわけ。」

リユーネ「まさか手加減してたとか、わざとここへ誘き寄せたとか言い出すんじゃないだろうね!？」

タスク「あゝ・・・あるある、よくある。そういつの」

エクセレン「そんでもって、手加減具合を間違っって負けちゃう、とお約束よねえ。」

アギーハ「確かにいい暇つぶしにはなったけど・・・あたい達だって、割と真面目にやってこの結果さ。」

タスク「割りとかよ！」

マサキ「あの女、ふざけやがって……！」

アギーハ「……下等種族とは言え、さすがはレベルAの連中だよ。枢密院がこの星系を隔離しようつてのもわからない話じゃないね。」

マサキ「枢密院……!？」

イルム「あいつらの上にいる連中のことか……?」

ギリラム「それに……隔離だと?」

レーツェル「彼らの目的は地球圏の制圧さけではないと言うのか?」

ゼンガー「ヴィガジという男は地球人類が銀河の秩序を乱す病原菌だと言った……どうやら、それと関係があるようだな。」

アギーハ「ま、あんた達は知らなくてもいい話さ。」

マサキ「言ってる! てめえらの目的が何だろうと、それ以上好きにやらせるか!」

アギーハ「ふふふ……あんたには色々と貸しがあるからね。後でゆっくり可愛がってあげ・る?」

リユーネ「いい歳して猫なで声出してんじゃないよ、おばさん!」

アギーハ「お、お、おばさんだつて! ? あたいはまだ20代よっ!

「！」

リユーネ「あつそ。じゃ、四捨五入したら？」

ルシア「それ反則だろ。」

アギーハ「う……うるさいねっ！お前はどつなんだい！？」

リユーネ「四捨五入しても20だよ。」

エクセレン「んぐ、ウチの部隊の女の子は大体そうかもしれないけど……」

カチーナ「あ……ああ……」

ラーダ「そ、そうね……」

エクセレン（この手の話はモメやすいのよねえ）

リユーネ「とりあえず、若さじゃあたし達の方が勝ってるね。」

アギーハ「こ、この小娘が！あんたもマサキ・アンドーと一緒にたつぷり可愛がつてやるよ！！」

リユーネ「悪いけど、そつちの趣味はないよ！」

ルシア「あの時の借りをここで返してやるぞ、アギーハ！」

アギーハ「あんたは呼びじゃないんだよ、相手はまた別に用意してあるからね！」

ダイテツ「ステイル2から各機へ！最終フェイズまでもう時間がない！我々は一刻も早くラングレーへ向かわねばならん！よって、本艦とヒリュウ改は現空域の突破を優先する！各機は本艦とヒリュウ改の突破口を開け！攻撃開始！」

ルシア「先に指揮官機を叩く方がいいな。マサキ、リユーネ、アイビス。」

マサキ「ああ。」

アイビス「ここを突破しないとラングレーには辿りつけない……！」

リユーネ「行くよ！」

キョウスケ「気をつけろ、何があるか分らん。」

アギーハ「都合良くあいつが釣れたね……そろそろだね。」

シロ「マサキ！下から何か来るニヤ！」

マサキ「何！？」

リユーネ「何もないじゃないか！？」

クロ「反応は地中からだニヤ！」

ルシア「……！」

地中からドルーキンが地面を割り飛び出してくる。

シカログ「……………」

リユーネ「あ、あいつは!?!」

クロ「ルシア避けるニヤ!そっちを狙ってる!!!」

ルシア「歪曲フィールド最大!!!」

シカログ「……………!」

ドルーキンはハンマーを振りヴァルシオンV目掛けて叩きつける。

ルシア「ぐっ!!フィールドが抜けられた!?!」

アイビス「ルシア、大丈夫!?!」

リユーネ「あいつ、最初からルシアを狙った!?!」

シカログ「……………」

アギーハ「そうよね、ダーリンを怒らせちゃったからね。」

マサキ「どういう意味だよそりゃ!?!」

アギーハ「あの時、逃げようとしたあたいとどめを刺そうとしたね?あれでダーリンはカンカンなのさ。」

シカログ「……………」

ルシア「あの機動兵器を転移させたのはこいつだったのか・・・」

アギーハ「そうさね、愛の結晶のなせる業・・・ってやつだよ。」

シカログ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アイビス「あ、愛の結晶って・・・・・・・・」

ルシア「で・・・恋人の命を奪おうとした俺を倒そうってわけか。」

アギーハ「ねえダーリン？今度こそあいつを粉々にしてやってちょうだい？」

リユーネ「いい歳してハートマークなんてつけてんじゃないよ！」

マサキ「2対1じゃ不利だ、援護するぜ！」

アギーハ「心配しなくても、あんたとはあたいがゆっくり遊んであげるって言ったろ？」

マサキ「向こうからおいでなすったか！」

アギーハ「あんたにやられっぱなしじゃ、あたいのプライドが許さないのさ！覚悟しな！」

ダイテツ「ステイル2より各機へ！今から10分以内に敵指揮官機を叩き、現空域を突破せよ！」

テツヤ「じゅ、10分以内・・・・・・・・ですか!？」

ダイテツ「そうだ！ここまで来て、今さら後へは退けん！ここでオペレーション・プランタジネットを完遂せねば、今後の戦いに勝利はない！」

テツヤ「りよ、了解です！」

マサキ「ダイテツのおっさん、何のつもりだよ！？」

ルシア「艦長は挟撃されないためにあの指揮官機を落とすように命令した。今のうちに叩いておけば後ろから狙われる心配はなくなる。」

リユーネ「そうと決まったら、やるっきゃないね！」

アイビス「ここで負けるわけにはいかない・・・！夢のためにも！」

シカログ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ルシア「愛する者のために戦う・・・か。だが、俺にも同じ思いがある！その重さを掛けて戦うまでだ！！」

ヴァルシオンVは右腕を相手に向け

ルシア「新武装を食らえ！パラディン・ナツクル！！」

右腕を飛ばしドルーキンに攻撃を仕掛けるが、ドルーキンの鉄拳で跳ね返される。

リユーセイ「すげえ・・・ロケットパンチを追加したのか！」

ライ「何でお前が喜んでいるんだ・・・」

レーツェル（あれは・・・本来ダイゼンガーに装備されるはずだった武装か・・・いや、元々ヴァルシオンVのプランにあったものだな。そのノウハウをダイゼンガーが引き継いだただけだな。）

ルシア「この手の小細工は通用しないか・・・なら！」

ヴァルシオンVは左腕にマウントされた剣を握る。

ルシア「聖なる剣を受けてみる！ダイバイン・ソード！！」

ドルーキンが飛ばしてきたハンマーをダイバイン・ソードで切り裂き接近する。

シカログ「・・・！！」

ルシア「もらった！！」

ヴァルシオンVが殴りにかかり、ドルーキンが腕で受け止め取っ組み合いになる。

アラド「す、すげえ・・・！！」

ツグミ「あれがヴァルシオンの戦い・・・！！」

アギーハ「ダーリン、負けないで！」

マサキ「いいぞそのままやっちまえー！」

シカログ「……………！」

ドルーキンの胸部が開き砲台が飛び出す。

ルシア「この至近距離で!?!」

ヴァルシオンVはドルーキンを蹴り飛ばし距離を置く。

シカログ「……………！」

ルシア「こうなったら……………」

ヴァルシオンVは背部ユニットにエネルギーを集中させる。

ルシア「クロスマッシャー!!!」

シカログ「……………!!!!」

クロスマッシャー、フォトンビームがぶつかり合い、周囲の機動兵器を巻き込み吹き飛ばす。

アギーハ「シカログ!!!」

マサキ「余所見してんじゃねえ!!!」

アイビス「フィールド収束!いつけえええ!!!」

リユーネ「食らいな!クロスマッシャー!!!」

アステリオンのソニック・ブレイカーでシルベルヴィントが怯み、
ヴァルシオーネのクロスマッシャーで動きを止められる。

マサキ「こいつで止めだ！アカシック・バスター！！」

アカシック・バスターで突っ込みシルベルヴィントを大破させた。

アギーハ「チツ！調子に乗るんじゃないよ、野蛮人！」

シカログ「……………」

アギーハ「シカログ！？…………撤退するっていうの！？」

シカログ「……………」

アギーハ「そ、そうね…………！今後のためにも、ここは退くしかないわね…………！」

マサキ「！ 逃げる気か！？」

アギーハ「チツ…………直接手を下せなかったのが残念だよ、マサキ・
アンドー…………！」

マサキ「何！？」

アギーハ「だけど、あんた達はラングレーで死ぬことになる！それ
までせいぜいあがくんだね！」

シルベルヴィント、ドルーキンは戦域から撤退した。

マサキ「待ちやがれ、アギーハ!!」

ギリアム「追うな、マサキ。今、優先すべきはラングレーへの到達だ。」

マサキ「……………! わ、わかつたぜ、ギリアム。」

ルシア（俺達がラングレーで死ぬ……………? どういうことなんだ……………!?)

ラミア「……………!」

ユン「敵機の反応、消えました!」

レフィーナ「全艦、各機へ! 直ちに現空域から離脱してください!」

カイ「みんな、聞いての通りだ! 急いでラングレーへ向かうぞ!」

マサキ「ああ、了解だぜ!」

ダイテツ「このままラングレーへ突入する!」

第20話 オペレーション・プランタジネット（後書き）

ルシア「はあ・・・やっぱりと言うのかなんと言うか・・・」

リユーネ「延期になっちゃったね、第2次OG。」

マサキ「おいおい、また問題が起こったんじゃないかねえだろうな？」

ルシア「いや、大丈夫だろう。今回の延期は理由が通ってるし・・・」

リユーネ「それに・・・あんまりがっかりしてないのよね。」

マサキ「あ？何でだよ？」

ルシア「なんと云うか・・・ものすごい物が出来そうだな・・・」

マサキ「それよりもアレを参戦させてくれよ。デム」

クロ「マサキ、それ以上言ったらダメニヤ！」

ヴァルシオンV

L5戦役時に使っていた最終地球防衛兵器。

ダブルGのプロトタイプに当たる機体のため、ダイゼンガーの内臓武装の試作の一部を使用できるはずだったが、L5戦役時は時間がなかったため使用はできなかった。終戦後テスラ・ライヒ研究所に預けられた際に改修され、ダブルGに近い仕様となった。牽制用のクルセイド・ミサイルにはチャフが搭載され、レーザー攪乱もでき

るようになった。

前大戦よりトロニウム・エンジンの出力制御が安定し、火力は向上している。

セプタギンに取り込まれた影響でズフィールド・クリスタルらしき物質が機体全体に散りばめられている。機体強度が上がっているが、時々一部分が光り胎動している。

武装

クルセイド・ミサイル

パラデイン・ナックル

デイバイン・ソード

クロスマツシャー

メガ・グラビトンウエーブ

特殊能力

歪曲フィールド

第21話 鋼の咆哮

地球連邦軍 ラングレー基地

NDC艦長「大佐、僚艦を前に出し本艦は一時後退します！」

バン「ならん！私が前線に立ち、インスペクターを討つ事に意味がある。連邦や民に、我らノイエDCが地球の守人である事を知らしめるのだ！」

NDC兵「大佐、後方のアーチボルド隊からの援軍が来ました！」

ラーズアングリフ、ランドグリーズがラングレーに到着する。

ユウキ「・・・こちらはユウキ・ジエグナン少尉です。これより援護に入ります。」

バン「うむ。この戦いには今後の戦局がかかっておる。奮闘を期待するぞ。」

ユウキ「はっ！」

カーラ「ねえ、連邦軍部隊は何やってんの！？あたし達だけじゃ保たないよ！」

ユウキ「この間まで敵だった連中だ。そう上手く連携が取れるとは思えん。」

カーラ「当てる事になって・・・？」

ユウキ「そうだ。異星人を倒すのはノイエDCの役目・・・そのために俺達は死線をくぐり抜け、ここまで来た。当てになるのは・・・今日まで生き抜いた自分自身の力だ。」

カーラ「ユウ・・・！」

ユウキ「生き残るぞ、カーラ。奴らを地球かた叩き出してな。」

カーラ「わかったよ・・・！あたしみたいな子を増やさないためにも・・・必ずあいつらを倒す・・・！」

メキボス「・・・ありやりや、怯ませるところか、その気にさせちまったんじゃねえか？」

ヴィガジ「・・・。」

メキボス「シカログやアギーハも返り討ちにあつたみてえだし・・・後方からも援軍が来てる。下手すりゃ、アウトかもな。」

ヴィガジ「ならば、残存戦力をすべて投入するまで！」

メキボス「おいおい、あんまり熱くなるな、ヴィガジ。それじゃ作戦が台無しだろう？それに、そのメガガルガウはまだ調整中・・・。」

ヴィガジ「うるさいっ！リーダーはこの俺だぞ！戦局がこれ以上悪化するようなら、俺が前線へ出る・・・！」

メキボス「へいへい。」

ユウキ「行くぞ、カーラ！」

カーラ「うん！」

メキボス「レストジエミラの部隊を前に出す。これだけの数で押しや……」

カーラ「いつけええええええ！」

ランドグリースのリアカノンで空中のレストジエミラを狙い撃つ。

ユウキ「消え失せろ！！！」

ラーズアングリフはFソリッドカノンを展開、地上のレストジエミラ部隊を吹き飛ばした。

ヴィガジ「チツ、しぶとい奴らめ、やはり、俺が出るしか……」

メキボス「おっと、もっとしぶといのが来たようだぜ？」

ヴィガジ「何！？」

一般兵「バン大佐！連邦軍の援軍が到着しました！」

バン「来たか……！」

ハガネ、ヒリユウ改がラングレーに到着、PT部隊が出撃した。

ダイテツ「こちらはハガネ艦長、ダイテツ・ミナセ中佐だ。これより、貴隊との共同戦線を展開する。」

バン「バン・バ・チュン大佐だ。了解した。」

ダイテツ（あの男がノイエDCの総帥……）

バン（ハガネ……ピアン総帥を屠った艦。その艦長か。）

リユーネ「バン大佐……」

ルシア「大佐も前線に出ているのか……」

バン「ヴァルシオンVにヴァルシオーネ……ルシア坊にリユーネ嬢か……総帥の遺子である君達が彼らと行動を共にしているとは……因果だな。」

リユーネ「それは……!!」

ルシア「それは違います、バン大佐。」

バン「……!!」

ルシア「俺達はピアン総帥や、マイヤー総司令の遺志を受け継ぐ者……DCとは違った形……手段で……」

バン「……強くなったな。」

ルシア「いえ、ゼンガー少佐達がいてくれたおかげでもありません。」

ゼンガー「……」

レーツェル「……………」

バン「エルザム少佐、ゼンガー少佐……。いつか私の前に現れる
と思っていたが、このような形になるとはな。だが……今はこれ
以上語るまい。」

リユーネ「わかってるよ。親父が警告した異星人の脅威……！」

ルシア「それを今一度、振り払うために！」

バン「うむ。」

ダイテツ「各機へ！ノイエDC軍と連携を取り、インスペクター機
を撃墜せよ！」

ブリット「了解！」

ユウキ「奴は……！？」

ブリット「ユウキ……！ユウキ・ジエグナンか！」

ユウキ「ふっ……お互い、生きていたようだな。」

ブリット「ああ。まさかお前と一緒に戦うことになるとはな。だが、
考え方を違っても、今やらなきゃならないことは同じはずだ。」

ユウキ「言われるまでもない。ただし、こちらはこちらの好きにや
らせてもらっぞ。」

ブリット「ああ、わかった。」

メキボス「とりあえず、向こうの役者は揃ったみてえだな。」

ヴィガジ「メキボス、俺は出るぞ。我らの力を奴らに思い知らせてやる。」

メキボス「もうちょっと我慢できねえか？リーダーさんよ。」

ヴィガジ「黙れ！これ以上、奴らの好きにやらせるわけに行くか！

メキボス「ま、面子が立たねえよな。テスラ研の時みてえな負け方をしちゃ。」

ヴィガジ「何だと!？」

メキボス「おおっと。やり合う相手は俺じゃなく、あっちの方だぜ？」

ヴィガジ「チツ・・・！もういい、攻撃を開始するぞ！」

メキボス「だから、待ってっただよ。俺達が動いたら意味ねえだろうが。」

ヴィガジ「奴らなど当てに出来るか！ここでこの基地を失うわけにはいかんだぞ！」

メキボス「わかってる、わかってる。地球人を侮るのはよくねえよな、お互いに。」

ヴィガジ「……………」

メキボス「だから、これからの戦いはあいつら同士でやらせときゃいい。ウエンドロ様だって、そう言うだろっつな。」

ヴィガジ「何……！？どこにそんな保障がある！」

メキボス「……俺が誰だか忘れたか？」

ヴィガジ「フン……わかった。作戦通りに行く。」

メキボス（やれやれ、手間のかかるリーダーだぜ。じゃ、こっちもチャージを始めるか。）

キョウスケ「エクセレン、ブリット。俺達の基地を奴らから取り戻す。ぬかるかよ……！」

ブリット「はい！」

エクセレン「はいはい！そんじゃま異星人ちゃん達にはさっさとお帰り願いましょうかね！」

ルシア「先の戦闘でハガネは推進部を損傷している、一機たりとも付け入る隙を与えるな！」

マサキ「食らいやがれ！」

リユーネ「デイバイン・アーム！」

サイバスター、ヴァルシオーネはレストジェミラを斬り散らしていく。

アイビス「逃がすものか！」

リョウト「いつけええええ!!！」

アステリオン、ヒュッケバインMk-?ガンナーの射撃でバンの乗るライノセラスの道を開く。

ルシア「そこをどいてもらおう！」

ヴァルシオンVのデイバイン・ソードから衝撃波が放たれ、敵ライノセラスが轟沈する。

ヴィガジ「おのれ、地球人め・・・調子に乗りおつて・・・！」

メキボス「・・・・・・・・・・・・・・・・（引き寄せは充分、 그레이のチャージも完了。・・・・頃合いだな）」

一般兵「バン大佐！戦況は我が方が優勢です！」

バン「気を緩めるな。まだ指揮官機が2機残っている。奴らを倒さぬ以上は・・・」

そこにライノセラスがラングレーに到着する。

ユウキ「・・・アーチボルド少佐のライノセラスか。」

カーラ「あつちの戦線はカタがついたの・・・!？」

アーチボルド「・・・遅くなりました、バン大佐。」

バン「後方支援、ご苦労。直ちに本艦と共に・・・」

アーチボルド「それが・・・そういうわけにはいかないですよ。」

バン「何・・・!? どういうことだ?」

アーチボルド「流れが変わったんですよ、大佐。」

アーチボルドのライノセラスが、バンのライノセラスに砲撃を加えた。

バン「ぬおおっ!?」

ユウキ「バン大佐!」

ダイテツ「何が起きた!」

エイタ「ノ、ノイエDCの戦艦が同士討ちを!」

ダイテツ「!」

カーラ「あいつ、何を血迷ったの!」

アーチボルド「いえいえ、僕は正気ですよ、カーラ君。」

バン「ア、アーチボルド・・・! 貴様・・・!」

ライ「!」

レーツェル「アーチボルドだと？」

ライ「やはり、生きていたか！」

アーチボルド「これはこれは・・・ブランシュタイン兄弟がお揃いとは。奇遇ですねえ。」

レーツェル「・・・！」

アーチボルド「おつと、失礼。今のあなたはレーツェル・ファインシュメツカーでしたか。なら、エルピス事件のことで恨まれる筋合いはありませんね。何しろあの時に引き金を引いたのは、他でもないエルザム君ご本人なのですからねえ。」

レーツェル「・・・。」

レオナ（エルザム様・・・）

ユウキ「アーチボルド少佐！これは何の真似だ！？」

アーチボルド「ふふふ、それは・・・。」

エイタ「か、艦前方に転移反応！！」

テツヤ「インスペクターの援軍か！？」

エイタ「ち、違います！！！」

ラミア「こ、この転移反応は・・・！！！」

ハガネ前方に、シロガネが転移出現した。

ツグミ「あ、ああっ!!」

テツヤ「シ、シロガネだと!？」

ギリアム「シャドウミラーか!」

ダイテツ「緊急回避!急げ!!」

リー「……逃げられまい。推進部を損傷したハガネではな。」

シロガネが主砲発射態勢に入る。

リー「艦首は狙うな!上部艦橋、推進部に照準合わせ!主砲1番から4番!撃てえ!!」

シロガネの主砲がハガネ第一艦橋に直撃した。

テツヤ「うあああっ!!」

ダイテツ「ぐうっ!ぐああっ……!!」

レフィーナ「ハ、ハガネが!!」

ショーン「ダイテツ中佐!!」

アイビス「ツ、ツグミ!!」

リー「ク、ククク……これで終わりだ、テツヤ・オノデラ。貴様

らなど必要ないのだ、我らの軍隊には……！貴様のような軟弱は必要ないのだ、新しい世界ではな！」

ショーン「ハガネの損傷状況は！？」

ユン「上部艦橋、推進部に……ちょ、直撃したもようですっ！！」

ショーン「な……！ダイテツ中佐、返答を！！ダイテツ中佐！！」

メキボス「……盛り上がってきたな。じゃ、こっちも花火を上げるか。」

ヴィガジ「！？ 貴様、サンダークラツシュを使う気か！？」

メキボス「おいおい、何のために俺がじっと我慢の子でチャージしてたと思ってるんだ？」

ヴィガジ「冗談ではない！俺達まで巻き添えにする気か！？」

メキボス「……上手くよけるんだな。」

ヴィガジ「ま、待て！メキボス！！」

リー「！奴め、MAPWを使う気か！フィールド、緊急展開！」

アーチボルド「か、回避運動を！」

タスク「あいつ、何をするつもりだ！？」

イルム「止めるぞ、タスク！」

メキボス「もう遅いぜ！サンダークラッシュユ！！」

グレイターキングがサンダークラッシュユをラングラー全域に放ち、敵味方もろとも吹き飛ばす。

クスハ「きゃああっ！！！」

リュウセイ「うおおあっ！！！」

ラミア「くうう・・・うっ！！」

リユーネ「か、かわしきれなかった・・・！！！」

タスク「けど何とかハガネは守れた・・・」

アーチボルド「や、やってくれますね。僕達への警告だとしても・・・！？」

メキボス「ま、そういつこった。」

アーチボルド「やむを得ません、一時後退を！」

ユウキ「待て、アーチボルド！！！」

アーチボルド「僕はこれにてお役御免です。役者は他にもいますからね。」

ユウキ「！！」

アーチボルド「ユウキ君、カーラ君・・・君達はいいい部下でしたよ。つまらない情に流されさえしなければ、ね。」

カーラ「あんた・・・！まさか、あいつらとも！？」

アーチボルド「そうですね。その方がこれから面白くなるじゃないですか。」

カーラ「あ、あんただけは・・・！あんただけは許せない！！！」

アーチボルド「ふふふ・・・残念ながら、君達とはここでお別れです。ブランシュティン兄弟とあの世で仲良くして下さいね。それじゃ。」

カーラ「逃がすか！！！」

レーツェル「追うな！！！」

ライ「兄さん！？！」

レーツェル「シロガネから敵が出てくる！今はそちらを！！！」

シロガネからシャドウミラーの機動兵器が出撃する。

アヤ「あ、あれは！？！」

ウォーダン「・・・」

ゼンガー「ウォーダン・ユミルか！！！」

量産型W「……………」

ラミア「もしや、W16も？」

エキドナ「そうだ、W17」

ラミア「それは……アンジュルグだと!？」

クロ「く、黒いニヤ!」

ルシア「いかにもってカラーリングだな。」

メキボス「ハツ、ホントに役者が揃ってやがるぜ。」

アクセル「……メキボスと言ったな。貴様、どういつつもりだ？」

メキボス「ああ、お前達の力を借りるだけじゃ悪いと思ってな。お膳立てをしてやったまでだ。」

アクセル「ありがたい話だな、こいつは。他意がないなら、なお良かったが。」

メキボス「フツ、そういうことだ。あの時の手前、お前らが完全に信用できねえってものあるんでな。」

アクセル「それくらい割り切れている方が互いに利用しやすい……問題ないさ。」

リユーネ「あ、あいつら……!手を組んでたの!？」

マサキ「そうやらそういうことらしいな！」

バン「お、おのれ・・・！シャドウミラー・・・！！！」

ヴィンデル「己の理想を成し遂げるためには、敵とも手を組む・・・お前と同じだ、バン大佐。」

バン「ヴィンデル！貴様、異星人に地球を明け渡すつもりか！？」

ヴィンデル「都合がいいのだよ、闘争を日常とする世界を創り上げるにはな。」

バン「な・・・に！？」

ヴィンデル「そして、ヘリオス・・・貴様がアギユイエウスの扉を開けば、我らの力はより強固な物となる。」

ギリアム「！システムXNの修復が終わったのか！？」

レモン「そういうこと。あとはテストを残すのみ。だから、あなたを迎えに来たのよ、ヘリオス。・・・そして、あの子もね。」

エクセレン「あの子・・・？もしかして、ラミアちゃんのこと！？ウチの大事なメンバーよ！あなた達には・・・。」

レモン「いいえ。あの子っていいのか・・・あなたよ、エクセレン・ブラウニング。」

エクセレン「へ！？」

アクセル「レモン……！貴様、本気が……！？」

レモン「あなたがベールオウルフのことを気にしているのと同じよ、
アクセル。こういう出会いになっちゃったのは残念だけど……ね。」

アクセル「……わかっているはずだ。キョウスケ・ナンブは俺達
という存在を知らず……俺達の知っているベールオウルフではない。
……！」

キョウスケ「……」

アクセル「だが、そうであっても……奴は俺達の障害……敵で
あることに変わりはない……。そういう世界だ、これがな。」

レモン「……」

アクセル「……その覚悟もなく、この作戦に参加したとは言わせ
んぞ、レモン。」

レモン「……」

エクセレン「ちょ、ちょっと！そういうこと？あなたは誰……？
私とどういう関係なの！？」

レモン「さあて、ね。私達の所へ来れば教えてあげるわ。」

エクセレン「残念ね。知らない人にはついていけない……っとい
うのが私の主義なの。」

レモン「主義も何も、普通はそうだけどね。・・・で、どう？秘密を知りたくはない？」

エクセレン「ヒミツ・・・って響きは好きだけど、それはそれ、これはこれって感じ？ラミアちゃんと同じで行くつもりなんてないのよね。」

ヴィンデル「・・・何でも構わん。だが、貴様らの存在は我らの世界もバランスを著しく乱す・・・故に排除せねばならん。」

メキボス「そう、俺達の目的が一致したのはそこなんでね。」

アクセル「ベーオウルフ・・・こちらの手札はそろった。その上で最大の脅威になり得る貴様を倒せば『こちら側』での勝負・・・勝てる。」

キョウスケ「・・・（奴はあの特機に乗っていない・・・叩くなら今か・・・）」

ウォーダン「決着をつけるぞ、ゼンガー・ゾンボルト！」

ゼンガー「望むところだ！ウォーダン・ユミル！！」

エキドナ「・・・レモン様の命令だ。W17、お前を破壊する。」

ラミア「W16、お前・・・自爆する気か!？」

エキドナ「命令とあらばな。」

メキボス「・・・チエックメイトだな。」

ヴィガジ「ああ、もう奴らに逃げ場はない。後は高みの見物だ。」

ヴィンデル「全機、攻撃開始！ヘリオス以外の者は全て抹殺せよ！」

イルム「よく踏ん張ったな、タスク。後は任せる。俺もこいつも・
・やられっぱなしってのは・・・性に合わないんでな！！」

メキボス「同感だぜ」

戦闘中、西方面からゲシュペンストMk-?・タイプTV・アーバ
レスト、オレンジのアシュセイヴァーが進入してきた。

カイ「あれは！？」

ルシア「セツナとシャルロット……！」

セツナ「アクセル・アルマーは……！」

シャルロット「アルトアイゼンと交戦中よ。」

セツナ「チツ、決着を後回しにされたか。」

アクセル「心配するな、個々の憂いをこの場で全て断つ！」

キョウスケ「異星人とつるむサマ師が、笑わせるな！」

アクセル「世界のバランスを乱す貴様を倒した後で……奴らも排
除するさー！」

シャルロット「何……！？状況が読めないんだけど！？」

セツナ「シャドウミラーはインスペクターと同盟を結んだ……そういうことだろ。」

シャルロット「何で？敵同士なのに！？」

セツナ（確かに、利害関係が一致しているのはわかるが、なぜ異星人と手を組んだんだ？）

カイ「お前達、一体なぜここへ来た！？」

セツナ「アクセルと決着をつけたかったのですが……あいつに取られましてね。」

ルシア「のんきな事を言ってる場合か！八ガネは戦闘不能……部隊もMAPWによって疲弊状態だ！」

セツナ「わかつている。」

ルシア「何……？」

セツナ「今だけはお前と共に戦つてやる。今だけな。」

シロ「強調するところがニヤ……」

レモン「あのアシユセイヴァー……彼女が乗っているのね。」

シャルロット「な、何あのアシユセイヴァー……！改造機？」

レモン「シャルロット、聞こえてるかしら？」

シャルロット「な、何でレモンさんが前線に!？」

レモン「あの時渡したデータなんだけど……一度、返してくれないかしら？」

シャルロット「ふえ……!？」

セツナ「一度譲ったデータを返せとは……虫のいい話だな。」

シャルロット「……」

セツナ「シャル、絶対に返すな。今返しては後々ツケが倍になって返ってくるぞ。」

レモン（私としたことが……『ナハト』と『アーベント』のデータの中に……『ファントム』の一部データが紛れ込んでいたなんて……あれだけは他人には渡らせない……!）

エクセレン「シャルちゃん!ここは下がって！」

シャルロット「は、はい！」

テツヤ「……う、うう……!」

テツヤ「か、艦長……!みんな……無事か……!？」

ツグミ「テ、テツヤ大尉……!」

テツヤ「タカクラチーフ！無事か！？」

ツグミ「わ、私は何とか・・・！それより、エイタ伍長が！」

テツヤ「！エイタ、しっかりしろ！エイタっ！！」

ツグミ「止血すれば助かります！大尉は艦長を！！」

テツヤ「あ、ああ！」

ダイテツ「・・・テツヤ・・・」

テツヤ「か、艦長！ご無事ですか！？」

ダイテツ「ワシは・・・大丈夫だ・・・。じょ・・・状況は・・・？」

テツヤ「き、機関は停止・・・かろうじて浮いている状態です。また、使用可能な火器は30%以下・・・」

ダイテツ「トリニウム・・・バスターキャノンは・・・？」

テツヤ「艦首部分の損傷度は中破・・・出力は低下しますが、1発だけならば・・・」

ダイテツ「・・・充分・・・だ。全軍に・・・撤退命令を出せ。」

テツヤ「し、しかし！」

ダイテツ「撤退するのだ……！生き残るために……！」

テツヤ「す、すでに本艦や各機は敵に包囲されており……！」

ダイテツ「諦めてはならん……！チャンスは必ずある……！」

テツヤ「は……！？」

ダイテツ「それを待って突破口を開け……お前があの時に使った……方法でな。」

テツヤ「あの時……！？ま、まさか！」

ダイテツ「そうだ……ワシの命令に逆らってまで……お前が使った……あの方法だ」

テツヤ「か、艦長……！」

ダイテツ「ワシは死なん……。ワシは死なんよ、テツヤ。あの時と同じように……生き延びる……。いかなることがあっても……諦めはせん。それはワシがお前達に教えたことであり……お前達から……教えられたことでもあるのだ……。」

テツヤ「……！わかりました、艦長。バスターキャノンのチャージを開始します！」

ダイテツ「うむ……。チャンスを見誤るなよ、テツヤ……。」

テツヤ「はっ！タカクラチーフ、発射のオペレーターを頼む！」

ツグミ「は、はい！」

イルム「ファイナルビーム!!」

タスク「ギガ・ワイドブラスター!!」

グルンガスト、シガンスクード・ドウロはグレイターキンに攻撃するがすべて回避される。

タスク「くそつ、当たらねえ！」

ツグミ「ステイル2より各機へ！」

アイビス「ツグミ!？」

ルシア「無事だったか！」

ツグミ「直ちに帰還し、この場を撤退します！」

ルシア「撤退!？」

タスク「この状況でどこへ逃げるってんだ!？」

ツグミ「突破口を本艦で開きます!直ちに帰還を！」

ルシア「まさか……ホワイトスターにやったあの方法をやるつもりなのか!？」

レフィーナ「テ、テツヤ大尉!無事だったのですか!？」

テツヤ「レフィーナ艦長、チャージが完了するまで、本艦の援護を
お願いします！」

レフィーナ「チャージ・・・!?」

シヨーン「あの手を使う気ですな。艦長、こちらもオーバーブー
スの準備を。」

レフィーナ「わ、わかりました！」

シヨーン「Eフィールド、出力最大！前方へ展開！」

ダイテツ「・・・頼むぞ、シヨーン・・・。ワシの艦を・・・。」

シヨーン「・・・！」

ダイテツ「ワシの部下達を・・・。」

シヨーン「・・・了解です・・・ダイテツ中佐。」

「
ギリアム「俺が敵機を引きつければ・・・各機の撤退が容易くなる。
」

ヴィンデル「まだヘリオスを捕らえられんのか!?」

アシュセイヴァー、アルトアイゼンは交戦状態にあった。

キョウスケ「間合いが詰められん・・・やはり、奴はアルトの戦い
方を知っている・・・！」

アクセル「出し惜しみはせん！ソードブレイカー！！」

射出されるソードブレイカーを3連マシンキャノンで撃ち落とす。

アクセル「もう迂闊にクレイモアを使わんか、だがそれが命取りだ！！」

ソードブレイカーは刃を形成し、アルトアイゼンの左腕と右脚を破壊する。

キョウスケ「何！？」

アクセル「ソードブレイカーには、こういう使い方もある！」

キョウスケ「くっ・・・！」

アクセル「観念するんだな。」

キョウスケ「まだだ！いけ！」

ブーストでリボルビング・ステーキをぶつけにいくが・・・ハルバート・ランチャーで防がれた。

キョウスケ「！？」

アクセル「その手は食わん！」

アシユセイヴァーのレーザーブレードで右腕を切断した。

エクセレン「キョウスケ！」

ラミア「キョウスケ中尉！」

シャルロット「あいつ・・・何であんなに用心深いの・・・!?!」

セツナ（まるで・・・何かを恐れているような感じだな・・・）

アクセル（・・・あの時と違い、再生はしないか・・・）

アシュセイヴァーはレーザーブレードをとどめを刺そうとする。

キョウスケ「そこだ！」

アクセル「!?!」

キョウスケはギリギリまで間合いを詰め、ブーストとヒートホーンでアシュセイヴァーに食らいつくが、わずかに掠めただけ

キョウスケ「!?!」

アクセル「うおおおお!!」

アシュセイヴァーの膝蹴りがコクピットに直撃する。

キョウスケ「ぐあ・・・!!」

アクセル「奴め・・・あのタイミングでよくも・・・!」

ラミア「キョウスケ中尉!!」

ルシア「コクピットに直撃……！キヨウスケ！聞こえていたら脱出しろ！キヨウスケ！！」

アクセル「……ここまで来て動きがないということは……死んだか？だが、念を入れさせてもらう。次は完全にコクピットを潰すさらばだ、ベーオウルフ……キヨウスケ・ナンブ。ここに来て、手札のそろわなかった自分の運の無さを恨むがいい、これが……な。」

エクセレン「あ、ああ……あ……！キヨウ……ス……！

！！く、来る！！」

リユーネ「え！？」

アクセルのアシュセイヴァーの周りにインストアイゼンが転移出現した。

アクセル「何！？」

インストアイゼンはアシュセイヴァーに攻撃を仕掛ける。

アクセル「うぐっ……！？ゲシュ……ペンスト……Mk-？
だどっ！？違う……、何だ、こいつは！？」

カチーナ「あ、あいつらは！？」

クスハ「ま、まさか！！」

ヴィンデル「何事か！？」

リー「ほ、本館周辺……いや、基地全域に転移反応が!!」

ヴィンデル「!!」

基地周辺にインスタが大量に出現した。

アクセル「何だ、こいつらは!?ここまで……あと一撃のところまで来ているんだぞ!それを……!」

レモン「ア、インスタシリーズ……!そうしてここに!?!?!?!
こんなタイミングで!?!」

エキドナ「隊長、その損傷では危険です。撤退を。」

アクセル「くっ……奴らめ、ベーオウルフを守っているとしてもい
うのか……!?!」

エクセレン「!?!」

シャルロット「あ、あいつらアルトアイゼンを……!」

エクセレン「まさか、あのお嬢ちゃんが!?!」

ヴァイスリッターはアルトアイゼンの周りにはいるインスタを撃ち
落としていく。

エクセレン「キョウスケ!返事をして!答えて、キョウスケ!!」

ブリット「うおおおおお!!」

グルンガスト参式はアルトアイゼンに取りついているアインストを殴り飛ばす。

ブリット「エクセレン少尉！」

クスハ「中尉は任せてください！」

エクセレン「お願い！援護は引き受ける！」

カイ「撤退急げ！！」

ルシア「お前達も来い！」

セツナ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ルシア「早く！ここで死ぬ気か！！」

シャルロット「セナ・・・・・・・・」

セツナ「・・・・・・・・わかった、ただの負け戦で終わるのは性に合わない。」

エクセレン「キョウスケ・・・・・・・・」

ヴァイスリッターにアインストが次々と取り付く。

エクセレン「く・・・・・・・・！ブリット君・・・・・・・・クスハちゃん・・・・・・・・キョウスケを・・・・・・・・よろしく・・・・・・・・！」

ヴィンデル「う、うぬ！！化け物どもめが！！」

リー「ヴィンデル大佐！この区域だけではありません、周辺にも無数のアインストが！」

ヴィンデル「何だと！？」

メキボス「……やれやれ、こんな展開は聞いてねえぜ。」

ヴィガジ「ま、まずい！これではこちらも……！！」

メキボス「落ち着け、ヴィガジ。まだチャンスはある。宇宙で態勢を立て直せばいいんだ。」

ヴィガジ「そ、そうだな……。だが、何と言ってウェンドロ様に報告すべきか……」

メキボス「俺がやっといてやる。ま、あんな連中が出てきたんじやしょうがねえさ。」

ヴィガジ「す、すまん。」

メキボス「この基地ももう役に立たん……。撤退するか。だが、その前に奴らの母艦の一隻や二隻、沈めておかんと気が済まん。それに、手ぶらじゃ帰れねえ。」

バン「……ならば、私の艦を沈めるがいい……！」

メキボス「！？まだ生きてやがったのか！？」

ヴィガジ「死に損ないが！こいつをくらえ！」

メガガルガウのビーム攻撃がライノセラスに浴びせられる。

バン「ぬうううっ！！まだだ！まだ沈んではならん！！」

ユウキ「た、大佐！！」

バン「ユウキ少尉、リルカーラ少尉・・・！お前達はハガネと共に
行け！行って、インスペクターを打ち倒すのだ！！」

カーラ「！！」

リユーネ「バ、バン大佐！！」

ルシア「くっ・・・！！」

バン「リユーネ嬢・・・ルシア坊・・・息災でな。」

リユーネ「ま、待って！！」

ルシア「止めるな！！」

リユーネ「！？」

ルシア「大佐の覚悟を・・・邪魔するな・・・！！」

バン「若者達よ、生き延びよ！生き延びて、我らの母星を守れ！！
ノイエDCに・・・いや、若き戦士達に！栄光あれえええええ
ええ！！！！」

ライノセラスがグレイターキンに突っ込み、自爆した。

リユーネ「バ、バン大佐ああああっ!!！」

ルシア（大佐……あなたの遺志……確かに受け取りました・
……必ず奴らを討ちます……!）

メキボス「ぐっ……! ヴィガジ、大丈夫か？」

ヴィガジ「あ、ああ……! 野蛮人め、味な真似を……!！」

メキボス「今時流行らねえんだよな、ああいうのは。」

テツヤ「あ、あの爆発でまだ平気なのか!？」

ダイテツ「テツヤ、何をしている! バンの死を無駄にする気か!」

テツヤ「!!！」

ダイテツ「生き延びるために撃て! バスターキャノンを!!！」

テツヤ「りよ、了解!!！」

ツグミ「は、発射10秒前!」

テツヤ「最終安全装置、解除!!！」

ツグミ「最終安全装置、解除しますっ!!！」

テツヤ「総員、対衝撃・閃光防御!!！」

ダイテツ「撃て・・・生き延びるために・・・撃って活路を切り開けえええ!!」

テツヤ「トリニウム・バスターキャノン・・・発射ああああ!!」

ハガネのトリニウム・バスターキャノンがインスペクター指揮官機
2機に向けて発射される。

メキボス「当たらなかったな。万策尽きたな!終わりにしてやるぜ!!」

テツヤ「今だ!重力ブレーキ解除!!」

メキボス「!?!」

テツヤ「Eフィールド、展開!!」

ツグミ「は、はい!!」

レフィーナ「オーバーブースト!!直ちに撤退をつ!!」

ユン「了解!!」

ハガネ　ブリッジ

テツヤ「……タカクラチーフ、本艦の現在位置は……？」

ツグミ「ラングレーの北東……約12000です。」

テツヤ「敵の追撃は？」

ツグミ「ありません。現在もラングレー基地周辺でアインストと戦闘中だと思われます。」

テツヤ「味方機は……どうだ？」

ツグミ「回収は……完了しています。」

テツヤ「……アルトアイゼンは？」

ツグミ「ブルックリン少尉が回収しました。現在、格納庫内でキョウスケ中尉の救出作業を行っています……。」

テツヤ「そうか……。何とか生き延びられたか……。」

ツグミ「ええ……。被害は甚大ですが……。」

テツヤ「……艦長、かろうじて脱出に成功しました。以後の命令を……。」

ダイテツ「……。」

テツヤ「艦長……？」

ダイテツ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ツグミ「ま、まさか・・・・・・・・!!」

テツヤ「そ、そんな・・・・・・・・!」

ダイテツ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

テツヤ「か、艦長・・・・・・・・!」

ツグミ「あ、ああ・・・・・・・・!!」

テツヤ「ダイテツ艦長!!ダイテツ艦長おおおおお・・・・・・・・つ!!」

第21話 完

第21話 鋼の咆哮（後書き）

ルシア「アラドとゼオラを助けなければ！」

セツナ「引っこんでろ、俺だけで十分だ。」

ルシア「何だと!?!」

シャルロット「あゝあゝまた喧嘩するもう!」

次回 会者定離の理

シャルロット「ホントは仲いいんだけどなあ、この二人」

ルシア「仲良くない!!!」

セツナ「仲良くない!!!」

シャルロット「ほら、こっぴつとこっぴつとか。」

第22話 会者定離の理

ハガネ プリーフィングルーム

アイビス「嘘……！何かの間違いでしょ、ツグミ……！」

ツグミ「私だって……信じたく……なかった……」

リュウセイ「じゃ、じゃあ……ダイテツ艦長は……！？」

マサキ「馬鹿な……！あ、あのおっさんが……？」

クスハ「そ、そんな……そんな……！」

レオナ「艦長は……あの時の……シロガネの攻撃で……？」

ツグミ「ええ……」

ブリット「く、くそっ……！りめ……シャドウミラーめ……
「！！」

ツグミ「そして……艦長は最後まで……指示を……」

アイビス「う……うつつ……う……ダイテツ艦長……」

マサキ「お、おっさん……あんた……俺達を……俺達
を……逃がすために……」

ルシア「……」

八ガネ 甲板上

ギリアム「……………」

シャルロット「ねえ、ホントにいいの？」

セツナ「ああ、危機を脱した今、俺達がここにいる理由はない。」

ギリアム「今、お前達の力が必要だ。」

セツナ「いくらギリアムさんの頼みでも俺達は……………」

ギリアム「キョウスケ・ナンブを…………この部隊を助けることができるのはお前達しかない。」

セツナ「……………！」

シャルロット「わ、私達の力が…………？」

ギリアム「ああ……………」

セツナ「……………何処まで知っているんですか…………？」

ギリアム「全て…………ではないが、ある程度はな。」

セツナ「……………」

ギリアム「タダでは言わん。お前達が追っている組織についての情報を提供する。」

セツナ「！」

シャルロット「セナ・・・ギリアム少佐の頼みを聞こうよ。」

セツナ「シャル・・・」

シャルロット「嫌なの・・・少しの間だけだったけど・・・知っている人が死んでいくのは・・・嫌なの・・・」

セツナ「・・・・・・・・・・」

ギリアム「・・・・・・・・・・」

セツナ「・・・・・・・・分かりました、その依頼・・・受けましょう。」

ギリアム「助かる。ではすぐ手術室へ。」

セツナ「ギリアムさん・・・」

ギリアム「分かっている。彼女の処置中は一切の人員を立ち会わせない。」

シャルロット「すぐに行きましょう・・・！」

クスハ「ドクターの話では・・・今夜が山だと・・・」

ブリット「大丈夫さ、中尉なら。」

クスハ「でも・・・エクセレン少尉がいなくなって・・・ダイテツ艦長まで・・・！」

ラミア（この痛み・・・この感情が悲しいということなのか・・・闘争を日常とする世界に・・・こんな痛みが日常となるのが・・・あなたが望む世界なのですか・・・レモン様。）

ブリット「けど・・・何であのアシユセイヴァーに乗っていた娘しか手術室に入っていないんだ？」

ルシア「確かに彼女は旧教導隊では看護兵だったが・・・ここまで大掛かりな手術はしたことがないはず・・・」

手術室の扉が開き、シャルロットが出てきた。

シャルロット「・・・・・・・・・・」

クスハ「シャルロットさん・・・」

ブリット「中尉は・・・？」

シャルロット「・・・・・・・・大丈夫です、キョウスケ中尉は一命を取り留めました。」

ルシア「本当か・・・!?」

シャルロット「ええ・・・」

クスハ「よかった・・・!」

ラミア「・・・不可解だな。」

ブリット「ラミア少尉・・・?」

ラミア「キョウスケ中尉を助けてくれたことには感謝している。しかし、お前は旧教導隊にいた頃は訓練をかじる程度のことしかしていない看護兵だ。そんなお前が何故、重体である中尉の生命を繋げることができた?」

シャルロット「そ、それは・・・」

セツナ「答える必要はない。」

ルシア「セツナ・・・!」

セツナ「結果的にキョウスケ・ナンブは助かった・・・何を不満がる必要がある?」

ラミア「それは・・・!」

ルシア「やめる二人共、言い争いをしてる状況じゃない。」

セツナ「・・・」

ラミア「……………」

ルシア「後3時間後にはダイテツ艦長達の追悼式が始まる。セツナ、お前も参加しろ。」

セツナ「……………ああ、ダイテツ艦長がいなかったら俺達も危なかったからな。」

ハガネ 甲板上

カイ「全員、整列!!」

リュウセイ「……………」

リオ「……………」

レフィーナ「ダイテツ・ミナセ艦長以下、オペレーション・プランタジネットの戦死者に哀悼の意を表し……敬礼!」

リーダー「……………」

ラトウニ「……………」

マサキ「くっ……おっさん……!」

アイビス「うっう………」

カチーナ「……………泣くんじゃねえ、マサキ、アイビス………」

マサキ「……………」

カチーナ「この戦いが終わるまでは……な、泣くんじゃねえ……
うつ、うつうつ……………」

アイビス「カチーナ中尉……………」

リユーネ（ダイテツ艦長……………バン大佐……………）

エルザム「……………」

ライ「兄さん……………」

エルザム「L5戦役の時……………ダイテツ中佐の尽力がなければ、私はここにいなかったらう。だから、今はレーツェルとしてではなく、エルザムとして彼を送りたい……………」

ライ「……………」

ゼンガー（これより我らはさらなる修羅の路へ往く。散っていった者達の無念を晴らすため……………己も未来を切り開くために。だが、戦い終えた同胞達よ……………今は安からに眠り給え……………）

レフィーナ「……………」

テツヤ（ダイテツ艦長……………自分はあなたの遺志を継ぎ、これからも戦い抜いてみせます。ですから、どうかハガネを……………自分達を見守ってください……………）

シヨーン「ダイテツ中佐、約束のスコッチです・・・もうあなたとは杯を交わすことができなくなりました・・・」

甲板のシャッターが開き、キヨウスケが出てきた。

キヨウスケ「・・・・・・・・・・」

ブリット「キヨウスケ中尉!？」

クスハ「駄目です!まだ安静にしてないと・・・!」

キヨウスケ「どいてくれ・・・!」

クスハ「・・・!」

ルシア「シャルロット、これはどういうことだ?」

シャルロット「キヨウスケ中尉は・・・ダイテツ中佐の戦死を聞いて、追悼式に出るって聞かなくて・・・」

ルシア「・・・・・・・・・・そうか・・・・・・・・・・」

キヨウスケ「・・・・・・・・・・」

ヒリュウ改 食堂

ルシア「・・・・・・・・・・という事で、この二人もこの艦に乗ることになった。」

セツナ「・・・セツナ・テストロッサだ。」

シャルロット「シャルロット・フローリアンよ、よろしくね。」

ユウキ「この二人がああの機体に乗っていた二人か。」

カーラ「私はカーラ。」

ユウキ「ユウキ・ジエグナンだ。俺達もノイエDCからこちらの部隊に入るようになった。」

セツナ「よろしく頼む。」

リオ「ルシアも言っていたけど、教導隊にいたのよね。その後、何をしていたの？」

セツナ「教導隊が解散になった後、俺達はそれを受け継ぐ形でチームを組むことになった。」

ルシア「確か、PTXチームに類似するチームだと聞いたが・・・」

セツナ「・・・ライトニング・スターズ、それが俺達が所属していたチームだ。」

シャルロット「本当はあと二人いるんだけど・・・一人は技術者に転身、もう一人は引退して静かに暮らしてる・・・って聞いているわ。」

リョウト「あのゲシュペンストを作ったのも、もしかしてチームメイトが？」

セツナ「鋭いな。」

リョウト「僕もメカニックとしても働いてるから。あの機体にも少し興味があるんだ。」

セツナ「・・・教える義理はない。」

リオ「ちょっと！少しくらい教えてくれたっていいじゃない！」

セツナ「詮索するな。」

ルシア「おい、今からそんな拒否的でどうするんだ！少しは言い方つてものを・・・」

セツナ「黙っている。」

ルシア「何・・・！」

シャルロット「あーあーもう、何で二人が喧嘩するのよ！」

タスク「・・・ホントに仲悪いんだなお前ら。」

レオナ「ある程度は聞いてるけど、それほど関係が悪いのは何か他に理由があるのではなくて？」

セツナ「・・・」

ルシア「・・・」

カーラ「・・・なんかもう絡みづらいね・・・」

シャルロット「ごめんなさい、本当はこんなに仲が悪くなかったんですけど・・・」

セツナ「余計なことを言うな。」

ユウキ「この先これでは先が思いやられるな。」

ヒリユウ改 格納庫

アラド「哨戒任務ツスか？」

カイ「ああ、ハガネは航行不能、ヒリユウ改もしばらくは動けない。そこでお前達に周囲を偵察してきてほしい。」

シャルロット「それはいいんですけど・・・」

セツナ「・・・」

ルシア「・・・」

アラド「人選が悪すぎるような気もするツス。」

カイ「仕方ないだろう、各機の損害も激しい。まともに動けるフェアリオンとビルトビルガー、エルシュナイデとゲシュペンストMK-?・タイプTV、アシュセイヴァーで哨戒をして欲しい。」

アラド「ヴァルシオンは使えないんスか？」

ルシア「損害が激しすぎてな、今は使えない。」

カイ「それに、あまり目立つのも逆効果だ。頼んだぞ。」

セツナ「・・・了解・・・」

カイ「セツナ、今は私情は捨てる。そんなことでは足元をすくわれるぞ。」

セツナ「・・・行きます・・・」

ルシア「お、おいセツナ！」

カイ「放っておけ。今のあいっには時間が必要だ。」

シャルロット（セナ・・・）

周辺海域

ルシア「・・・・・・・・・・・・・・・・」

セツナ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アラド（重い・・・空気が重すぎる・・・！）

シャイン「あ、あの・・・」

セツナ「何だ？」

シャイン「あなたはルシアとお友達なのでしょう？」

セツナ「違う。勘違いするな。」

ルシア「おい、王女に向かってなんて口のきき方をしてるんだ！」

セツナ「お前は黙っている。」

ルシア「何だと!?!？」

ラトウーニ「・・・本当に大丈夫なの・・・」

シャルロット「ごめんなさい、シャイン王女。セナも悪気があって言ったわけではありませんから・・・」

シャイン「い、いえ、私もそちらの事情を知らずに・・・」

シャインの脳裏に敵のビジョンが浮かびだす。

シャイン「!!! 来ますわ!」

アラド「まさかアインストか!？」

ラトウーニ「違う・・・!これは!」

前方からビルトファルケンを中心としたエルアインス部隊が展開する。

アラド「あいつら、シャドウミラーか！くそっ、こんな時に！！」

ゼオラ「ハガネの機体を見つけたわよ！すぐにオウカ姉様へ連絡を！！」

Sミラー兵「了解！」

アラド「ビルトファルケン……！ゼオラか！！」

シャイン「ど、どつするのでございますの！？」

ルシア「ここで逃げればハガネ、ヒリュウ改の位置を知られる。ここで迎撃するぞ。」

アラド「それに、これ以上ゼオラをアギラの所にいさせちゃならねえ……！今日こそあいつを取り返す！俺と……ビルトビルガーで！！」

ゼオラ「アラド・バランガ……！」

アラド「ゼオラ……！」

ゼオラ「つつ……くっ……！」

Sミラー兵「大丈夫か？」

ゼオラ「な、何でもない……！全機、攻撃を！」

Sミラー兵「了解した。」

ゼオラ（こ、この頭痛・・・！アラドを・・・アラド・バランガを倒しさえすれば・・・！）

アラド「行くぞ、ゼオラっ！！！」

ルシア「各機はビルトビルガーをサポート、ファルケンに取り付けろ！」

ラトウーニ「了解・・・！」

タイプTV・アーバレストが敵陣に突貫する。

ルシア「セツナ！前に出過ぎだ！」

セツナ「俺に指図するな。」

タイプTV・アーバレストがジェット・マグナムでエルシュナイデを殴り破壊する。

ルシア「まったく勝手な真似を！」

タイプTV・アーバレストの後方についたゲシュペンストMK-？をハンドレールガンで撃ち落としていく。

シャルロット「アラド、今のうちに！」

アラド「了解ッス！」

ゼオラ「照準がブレる・・・何で・・・！」

アラド「どんどん撃ってこい！そう簡単にやられは・・・」

ビルトファルケンの射撃に一発当たってしまうビルトビルガー

アラド「うわ！？」

ゼオラ「あなた、どうして撃ってこないの！？何のつもりなの！」

アラド「前にも言ったろうが、お前をアギラから取り戻すんだよ！」

ゼオラ「冗談言わないで！あなたは私の敵なのよ！」

アラド「今はな！だがな、昔とこれからは違う！」

ゼオラ「昔・・・これから・・・？くっ・・・ああ・・・！」

シャルロット「ビルトファルケンの動きが止まった・・・！」

セツナ「今だ、アラド！」

アラド「ゼオラ、思い出せ！昔のことを、俺のことを！」

ゼオラ「何なの・・・あいつは何なのよ・・・！」

アラド「思い出せ！本当のお前を！」

ゼオラ「本当の・・・私・・・」

アラド「そうだ、お前は短気でガサツで、胸はあっても色気はなくて！おまけで頑固で！」

ゼオラ「……………!!」

アラド「その上、俺のことを子供扱いするくせに、自分は子供っぽいパンツはきやがって!!」

ゼオラ「いつ見たのよ!!」

アラド「そ、それは……………」

シャルロット「……………あれ、説得としてどうなの?」

ルシア「何故かは知らんが、あの説得は有効らしい。」

ビルトファルケンに遠方射撃の攻撃が命中する。

アラド「ぐああっ!?!」

ゼオラ「アラドっ!!」

オウカ「そこまです、アラド・バランガ。私の妹に手出しはなりません。」

アラド「オ、オウカ姉さん!!」

スリザス「ハハハ!隙だらけだな、アラド・バランガ!」

ルシア「あいつらはあの時の……………」

スリザス「やはり、君は欠陥品だ!そんな奴のデータが僕達に使わ

れているなんて、不名誉な話だよ！」

アラド「デ、データ!?!」

アンザス「……そうさ。僕達には君達の遺伝子が組み込まれている。」

アラド「!?!」

ラトウーニ「!?!」

アンザス「……アードラー・コツホとアギラ・セトメが調整した子供達、ブーステッド・チルドレン……」

オウカ「……」

アンザス「天性の素質をアードラーに見出され、かつてのDCに集められたアドバンスト・チルドレン……」

シャイン「……!」

ルシア「……」

アンザス「そして、Wシリーズのデータを基にし、パパが大幅な改良を加えて創り上げたのが……この僕達、マシンナリー・チルドレンなんだよ。」

アラド「マ、マシンナリー……!」

ラトウーニ「チルドレン……!?!」

アンザス「・・・僕達は君達のような試験体や実験体の屍を重ね、誕生した完成体・・・愚かな旧人類に代わり、この世界の主となる新人類なのさ。」

アラド「新人類！？お前らが！？」

スリザス「そうさ！だから、お前という汚点は今ここで消しておかなきゃならないんだよ！」

アラド「ど、どういうことだ！？」

アンザス「パパは肉体を強化したサンプルである君に着目し・・・僕達の肉体のベースとした。ある意味、君は僕達にとって最も近い兄弟というわけなのさ。」

アラド「・・・！！！」

セツナ「ある意味、アラドのクローンってことか。」

ルシア（イーグレット・フェフ・・・エアロゲイターと同じようなことを・・・！）

スリザス「だから、僕はそれが我慢ならない！お前のような欠陥品が、僕達のベースになっているなんて許せないんだよ！！」

アラド「べ、ベース・・・！？おれが！？」

スリザス「アンザス、アラド・ balanガは僕が始末する！僕のこの手でな！」

アンザス「いいよ、スリザス。僕は出来の悪い兄弟達のお目付け役だからね。」

オウカ「お前達・・・！」

アンザス「わかってるよ、アウルム1。不良品の回収はお前に任せる。」

シャイン「ラ、ラトウーニを・・・！ラトウーニを連れて行かせはしませんわ！」

ラトウーニ「王女！ダメツ！！！」

接近するフェアリオン・タイプGをラピエサージュは撃ち落とす。

シャイン「きゃあああっ！！！」

ルシア「シャイン王女！」

オウカ「お前のような者が私とラトの間に割って入れると思っているのですか？」

ラトウーニ「ね、姉様！！！」

オウカ「ラト・・・私やゼオラ以外の者に心を許しては駄目。ましてや連邦の者など・・・。彼らはあなたを利用しているだけよ。」

ラトウーニ「違う！それに、シャイン王女は大切なお友達だもの！」

オウカ「・・・いいわ、あなたと争うのは今日で終わりにしまし
う。」

ラトウーニ「!?!」

ラピエサージユはフェアリオン・タイプSの駆動系を破壊し行動不
能にさせる。

ラトウーニ「う、うあっ・・・!」

オウカ「機体を動けなくしただけよ。あなたを殺しはしないわ。」

ラトウーニ「う、うう・・・!」

ゼオラ「ラ、ラト!!」

オウカ「さあ、ゼオラ・・・あの子を迎えに行きましょう。」

ゼオラ「あ、うあ・・・あ・・・! う!くうっ!!」

オウカ「どうしたの、ゼオラ?」

ゼオラ「あ、頭が・・・痛い・・・!」

オウカ「・・・わかったわ。ラトのことは私の任せて、あなたは下
がりなさい。」

ゼオラ「は・・・はい・・・」

アンザス「・・・スリザス、万が一と言うこともある。ケ

リは早めにつけるんだ。」

スリザス「万が一？この状況で万が一だって！？ハハハハ、馬鹿なことを言うな！不良品のあいつらが、あの状態で僕達とまともに戦えるわけがないだろう？」

アンザス「……………」

スリザス「だから、僕の好きにやらせてもらうぞ、アンザス！」

ルシア「まずいな、まともに動けるのは俺達だけか！」

セツナ「足止めをする。」

エルシュナイデ・カスタム、タイプTV・アーバレストは後方からの攻撃を受ける。

シャルロット「な、何なの！？」

ルシア「あれはまさか…………！」

スリザス「ウルズ…………何でお前が！？」

ウルズ「敵の中に旧教導隊の人間がいる、そうなるといくらお前達でも苦戦するだろ。」

スリザス「旧教導隊の人間？あいつらのことか。」

ルシア「……………」

セツナ「……………」

シャルロット「……………」

スリザス「その内二人は脱落者……しかも非戦闘員が一人、何を恐れる必要があるんだ？」

ウルズ「ゲシユペンストには、あの装置が組み込まれている。ゲイム・システムより危険なものが……」

スリザス「！まさか、あれを使える人間がいるわけがない！」

アンザス「いや、昔と比べて実用化には成功しているはずだ。」

ウルズ「始末は僕がつける。」

スリザス「だったらアラド・バランガの始末は僕がつけてやる！」

アラド「く、くそっ！」

スリザス「ハハハ！無駄だよ！！」

ベルゲルミルのシックス・スレイヴがビルトビルガーに襲い掛かり、行動不能になる。

シャイン「ア、アラド！！」

ゼオラ「あ……ああ……！！」

スリザス「ハハハ！そう簡単に楽にさせるものか！」

ベルゲルミルはビルトビルガーに攻撃を繰り返す。

アラド「うぐっ！うああっ！！」

スリザス「お前の機体を！お前の身体を！」

ゼオラ「あ、あ……あ……！」

アラド「ぐああっ！！」

スリザス「ゆっくりと！ゆっくりと壊し！！」

ゼオラ「やめて……！」

スリザス「この世界から跡形もなくしてやるよ！！」

アラド「ぐ、あっ……ああ……！」

ゼオラ「ア……ラド……！アラド……！」

スリザス「ハハハ、もう息絶えたのかい！？」

ゼオラ「や……だ……！死んじゃ……やだ……！」

スリザス「なら、君という汚点を消し去らせてもらっつよ！！」

ゼオラ「死んじゃ……やだ……！」

ルシア「セツナ、シャルロット！」

セツナ「わかってる！」

シャルロット「ええ！」

ウルズ「念を押させてもらっよ。」

エルアインスが3機を取り囲み足を止める。

セツナ「邪魔をするな！」

シャルロット「アラド！早く逃げて、アラド！！！」

スリザス「これでお別れだ！アラド・バランガ！」

ゼオラ「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！」

???

アギラ（ブロンゾ28は死んだ。裏切り者のラトウーニ11が殺したのじゃ。）

ゼオラ（違う・・・アラドは殺されてなかった・・・！）

アギラ（アラド・バランガはワシらの敵。スクールにいたお前達仲間を次々殺した。）

ゼオラ（アラドが・・・・・・・・アラドが・・・・・・・・！！）

アラド「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゼオラ（やめて・・・・・・・・!!）

スリザス「ハハハハ！消えてなくなれ！！」

ゼオラ「やめてええええええええ！！」

ビルトファルケンはスリザスのベルゲルミルに攻撃し、怯ませた。

スリザス「何っ!?!」

オウカ「ゼ、ゼオラ!?!」

アンザス「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ウルズ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シャイン「ア、アラドを助けた・・・・・・・・!?!」

ラトウーニ「ゼ、ゼオラ・・・・・・・・!!」

ゼオラ「アラド！アラドッ！！しっかりして！！」

アラド「ゼ、ゼオラ……。お、お前・・・・・・・・!?!」

ゼオラ「アラド・・・・・・・・!?!ごめんなさい・・・・・・・・!?!ごめんなさい!?!」

アラド「!?!ごめんって・・・・・・・・!?!」

ラトウーニ「もしかして、記憶が!？」

アラド「も、戻ったのか!？」

ゼオラ「そ、そう・・・思い出したの・・・思い出したのよ、アラド・・・私・・・あなたのことを・・・。あなたと一緒にいた時のことを・・・」

アラド「ゼオラ・・・!」

オウカ（思い・・・出した・・・!？ゼオラ、あなたは・・・!？）

ゼオラ「アラド・・・生きてたのね、アラド・・・!」

アラド「バ、バカ・・・!こんな大ピンチに何言ってるんだ・・・!」

スリザス「どういうことだ!？」

アンザス「・・・君がやりすぎたのさ、スリザス。」

スリザス「何だと!？」

アンザス「一種のショック療法だよ。多分、アギラが記憶操作に使ったイメージとダブったんだろう。」

ウルズ「つまり、君は27号が記憶を取り戻す手伝いをしてしまったのさ。」

スリザス「・・・!」

アンザス「だから、言つたらう？早めにケリをつけるとね。」

スリザス「うるさい！欠陥品がさらに壊れただけのことだ！ここでまとめて始末してやる！」

ゼオラ「始末！？私達を！？」

スリザス「そうさ！どのみち、お前達人間は全て死ぬことになるんだからな！」

ゼオラ「……！！！」

アラド「だ……黙って聞いてりや、人のことを出来損ないだの、欠陥品だの！何様のつもりだ！？」

アンザス「さつきも言った通り……旧人類を粛清し、新たな世界の主となるマシンナリー・チルドレンさ。」

ルシア「粛清……！！！」

アンザス「もつとも、僕達の準備が整うまでは……シャドウミラーがコントロールする戦争で互いに殺し合ってもらうけどね。」

シャルロット「それじゃあ地球がメチャクチャになるじゃない！」

アンザス「心配はいらないさ。地球は僕達が修理し、作り変えるから。」

セツナ「地球を修理、作り変えるなんて……できるわけがない。」

アンザス「出来るさ。自己再生、自己進化機能を持った一種のナノマシン……マシンセルでね。」

アラド「……!!」

アンザス「それに、僕達の本拠地アースクレイドルは……旧人類を抹殺した後、地球の環境を再生・改良するために造られた物なんだよ。」

ゼオラ「そ、そんな……!あれは人類が未来へ生き延びるための施設じゃなかったの!?!」

アンザス「僕達のパパ……イーグレット・フェフにとっては違うね。」

ゼオラ「え……!?!」

アンザス「パパは利用したんだよ、ビアン・ゾルダークを……ソフィア・ネットを。」

ルシア「!」

アンザス「マシンセルやアースクレイドルを造るために……僕達という存在を創り出すためにね。」

ゼオラ「……」

アンザス「パパは自分の目的が果たせれば、今の世界がどうなろうと構いやしない。そして、それはアギラ・セトメも同じはずさ。」

ゼオラ「そ、そんな・・・！じゃあ、私達が今まで教えられてきたことのほとんどは・・・！？」

アンザス「おやおや、操り人形が疑問を持つのは禁物だよ？君はただ踊っていいばいいのさ。そこにいるアウルム1のようにね、クックク。」

オウカ「・・・」

ゼオラ「オ、オウカ姉様・・・私は・・・私はどうすれば・・・！？」

オウカ「・・・ゼオラ・・・あなたは私と一緒にいれればいいのよ。あの子達の言葉に惑わされては駄目。あなたは私が守ってあげる。昔のように・・・スクールにいた頃のように・・・」

ゼオラ「姉様・・・」

アラド「駄目だ！！」

オウカ「！」

アラド「行くな、ゼオラ！行ったら、また同じことになる！アギラに記憶を操作されちまうぞ！」

ゼオラ「アラド・・・！」

アラド「俺の所へ来い、ゼオラ！おれにはお前が必要なんだ！」

ゼオラ「……………」

アラド「おまえは俺のパートナーだろうが！だから、俺の所へ来い！」

ゼオラ「……………！！！」

アラド「来い、ゼオラッ！！！」

ゼオラ「わ、わかったわ……………！私……………私、あなたと一緒に行く！！！」

オウカ「！！ぜ、ゼオラ……………！な、何故？どうして……………！？」

ルシア「わからないか？これが彼女の本当の姿だ。」

オウカ「そ、そんなことはありません！」

セツナ「認めるべきだな。そして、お前も同じように、自分を取り戻せ。」

シャルロット「って本人の意思じゃ戻れないんだけど……………」

スリザス「さあ、下らない人形劇はもう終わりだ！お前達はここで死ぬ！」

アラド「行くぞ、ゼオラ！」

ゼオラ「ええ！」

スリザス「操り糸が切れた人形に何ができる！」

再び放たれるシックス・スレイヴはエルシュナイデ・カスタムに切り払われる。

ルシア「操り糸が切れた人形には……人間になる可能性が与えられる……

（そうさ……この俺も……バルマーの枷が解かれて可能性を見出せた……）」

セツナ「ルシアに賛同するわけじゃないが……人間を物として見ている奴に可能性などない。」

アンザス「そうかい、でも僕達がいればその人間も不要なのさ。人形同士、潰し合え！」

量産型W「……」

エルアインスが一齐に攻撃を仕掛ける。

シャルロット「私達は……人形じゃない、ちゃんとした生きている人間よ！ハルバートランチャー！！！」

ルシア「ただの人形で俺達を止められると思うな！グラビトン・ランチャー発射！！！」

ハルバートランチャー、グラビトン・ランチャーでエルアインスの数を削る。

セツナ「ただの人形で俺に勝てるか賭けてみるか？」

ヴァル「イクス・ドライバ発動を推奨します。」

セツナ「よし・・・イクス・ドライバ、発動！」

イクス・ドライバで機動性が上がり、格闘戦でエルアインスを撃墜していく。

スリザス「たかが人間、しかも欠陥品が！」

アラド「俺のデータを使ってんならお前だってそうだろうが！」

スリザス「！！それを言うなあああ！！！」

ゼオラ「アラド！援護するわ！」

ビルトファルケンはベルゲルミルの左腕を攻撃し武装を使用不可能にする。

スリザス「け、欠陥品ごときに！！！」

ルシア「その侮りが身を滅ぼす！」

エルシュナイデ・カスタムは再生しかける左腕を根元から斬りおとす。

ルシア「今だ、アラド！」

アラド「うおおおおお！！！」

ビルトビルガーのスタックビートルクラッシャーを開きベルゲルミルを挟み込む。

アラド「スタックビートル！クラッシャーアアアア！！」

スタックビートルクラッシャーでベルゲルミルを真つ二つに斬る。

スリザス「しゅ、修復が間に合わない・・・！何かの間違いだ！この僕が、マシナリー・チルドレンが人間ごときに負けるなんて！あんな出来損ない共に僕が敗れるなんて！！」

ルシア「その出来損ないの中からお前が生まれた・・・」

スリザス「！」

アラド「だから、お前も俺と同類なんだよ！！」

スリザス「そ、そんなことがあつてたまるものか！！これは何かの間違いだ！間違いだああああ・・・！！」

スリザスのベルゲルミルが爆発し、スリザスは死亡する。

アンザス「・・・アラド・バランガの言う通りだったね、スリザス。だが、僕は違う・・・！君の轍を踏みはしない！ゲーム・システム、フルコンタクト！」

シャルロット「い、いきなり速くなった！？」

アンザス「僕はシステムに完全適応している。限界時間などない！」

アンザスのベルゲルミルの突進でビルトビルガーが吹き飛ばす。

アラド「うわ!?!」

ビルトビルガーに追撃するエルアインスを、タイプTV・アーバレストのジェット・マグナムで破壊、後方のエルアインスを回し蹴りで破壊する。

セツナ「アラド、ビルガーの真の力を見せる時だ。」

アラド「わ、わかりました!」

ゼオラ「振り切れない!」

ルシア「ゲーム・システムの恩恵か……」

シャイン「このままじゃゼオラが!」

アラド「ゼオラーツ!」

アンザス「そんな機体で追いつけるものか。」

アラド「やってやらああ!」

ビルトビルガーの装甲が剥がれていく。

アラド「ジャケットトーマー、パージ!ウイング展開!ドライブ全開!」

アンザス「な、何!?!追いついてきた!?!」

アラド「ゼオラ！パターンTBSだ！」

ゼオラ「これは・・・？」

アラド「連携攻撃だ！行くぞ！！」

ゼオラ「わ、わかったわ！テスラ・ドライブ、出力最大！ブースト
！！」

TBSモードのビルガー、ファルケンはアンザスのベルゲルミルを
追い詰めていく。

アラド「アインス！」

ビルガーのスタックビートル・クラッシャーでベルゲルミルを下方
に叩きつけ

アンザス「ぐっ！」

ゼオラ「ツヴァイ！」

ベルゲルミルに取りつき零距离でオクスタン・ライフルBモードを
連射

アンザス「くっ、よくも！」

ベルゲルミルはシックス・スレイブで攻撃するが、ビルガー、ファ
ルケンはすべて回避する。

シャルロット「す、すごい・・・息ぴつたりよ！」

ルシア「あれがビルガーとファルケンの連携攻撃・・・」

ゼオラ（この感覚・・・ファルケンがビルガーを知っている・・・
私が見たのを知ってるように・・・！）

アラド「ドライ！」

コールドメタルソードで弾き飛ばし、ビルガー、ファルケンの翼に
光が発せられる。

ゼオラ「ツインバード！」

アラド「ストラアアアイク！！」

アンザス「マ、マシンナリー・チルドレンの僕があああ！」

アンザスのベルゲルミルがツインバード・ストライクで四断された。

アンザス「う、うぐっ！ゲーム・システムとリンクした僕が、ただ
の人間に負けるなんて！ス、スペックはマシンのパイロットもこち
らの方が完全に凌駕しているはず！それが、それが何故！？」

シャルロット「悪いけど、全て結果なのよね。」

セツナ「運がなかった、諦めるんだな。」

アンザス「馬鹿な！僕達マシンナリー・チルドレンは新しき人類！
地球の後継者だ！！そ、それが何故、愚かな旧人類などにいいい！

！」

アンザスのベルゲルミルが爆発し、アンザスは死亡する。

ウルズ「スリザスとアンザスがやられたか……」

ゼオラ「オウカ姉様！」

オウカ「！」

ゼオラ「私達の記憶は書き換えられていたんです！」

オウカ「あなたは……母様が私達に嘘をついていたと!？」

ゼオラ「ええ。」

ラトウーニ「ゼオラが取り戻した記憶がその証拠！」

アラド「だから、姉さんも昔の記憶を思い出してくれ！」

オウカ「黙りなさい！私の記憶にお前など存在していない！」

アラド「だけど、俺は覚えてる。優しかった姉さんのことを……」

オウカ「わ、私は知らない……お前のような弟など……!」

アラド「オウカ姉さん!!」

オウカ「くあつ！」

アラド「姉さん！思い出すんだ、昔のことを！！」

オウカ「く、うう……うっ！」

アラド「思い出してくれ！俺達と一緒に過ごしたあの頃を！」

オウカ「う、うう……！しゃ、喋るな……！」

アラド「あの頃の記憶は、アギラに作られたものなんかじゃねえ！俺やゼオラ、ラトも持つてる本物の記憶なんだ！スクールの仲間達の心に一番強く残ってる思い出なんだ！」

オウカ「あ……うう……！しゃ、喋るのを……やめなさい……！」

アラド「それが何故だかわかるか、姉さん！」

オウカ「くうっ……ああ……！や、やめて……！」

アラド「オウカ姉さん……！姉さんが俺達の傍にいてくれたからなんだよ！」

オウカ「！！」

アラド「だから、アギラがいくら俺達の頭の中をいじっても……姉さんとの記憶は完全に消せなかったんだっ！！」

オウカ「ア、アラド……！！うっ　くうっ！！」

アラド「！！」

オウカ「うっう！ あああっ！！」

ラトウーニ「オウカ姉様っ！」

オウカ「く、来るな・・・！私に近づくな！」

ラトウーニ「姉様！！」

ゼオラ「オウカ姉様！！」

ラピエサージユはASRSを展開し、現域を撤退した。

ウルズ（所詮・・・壊れた人形か・・・）

アラド「追うぞ！ラト、ゼオラ！！」

ウルズ「人形劇は終わりだ、僕の前を素通りできると思っていたのかい？」

アラド「ち、ちつきしょう・・・！！」

ウルズ「前もって言うておく、僕はやられた二人みたいに甘くはないよ。」

ルシア「ビルガーとファルケンは消耗している。ここは・・・」

セツナ「俺一人で叩かせてもらう。」

シャルロット「ちよ、ちよっとセナー！」

ルシア「いい加減単独行動をやめろ！相手はマシンナリー・チルドレンの頭なんだぞ！」

セツナ「怖気ついているならそこでじつとしてるんだな。」

ルシア「誰もそうは言ってないだろ！もう少し慎重に動け！！」

セツナ「何だ、手柄を独り占めされたくないのか？」

ルシア「誰がそんな女々しいこと考えるかよ！！」

シャルロット「ま、またこの二人は・・・」

ウルズ「つくづく人間は愚かだね、ちっぽけな理由で簡単に争えるんだからね。」

ルシア「ああっ！？」

セツナ「ああっ！？」

ウルズ「！？」

セツナ「ちっぽけだと・・・！」

ルシア「愚かだと・・・！」

セツナ「こんな奴と一緒にすんじゃねええええ！！」

ルシア「こんな奴と一緒にすんじゃねええええ！！」

エルシュナイデ・カスタム、タイプTV・アーバレストはフルブー

ストでウルズのベルゲルミルに接近する。

セツナ「上等だ、ルシアより先に・・・」

ルシア「セツナより先に・・・」

セツナ「お前を仕留めてやる！」

ルシア「お前を仕留めてやる！」

エルシュナイデ・カスタムはハンドレールガンでエルアインスを薙ぎ払うように撃墜

タイプTV・アーバレストがエルシュナイデ・カスタムの横を通り過ぎ撃ちこぼしを格闘で撃墜

ウルズ「何だこのめちゃくちゃな連携は・・・！」

タイプTV・アーバレスト、エルシュナイデ・カスタムは向かい合い通り過ぎ様に互いの後方にいたエルアインスをコールドメタルナイフ、ツイン・プラズマカッターで撃墜

ゼオラ「な、何あれ・・・!?!」

アラド「すっげえ連携攻撃だ・・・！」

ラトウーニ「違う・・・あれ、単に獲物を取り合ってるようにしか・・・」

ウルズ「こんな連携になっっていない攻撃で僕は倒せないよ！」

ルシア「誰が連携なんてするものか・・・!」

セツナ「俺はあいつより先に貴様を仕留めたいだけだ！」

タイプTV・アーバレストはウルズのベルゲルミルをジェット・マグナムで下方に殴り飛ばし、エルシュナイデ・カスタムは回し蹴りで蹴り飛ばす。

ウルズ「くっ！」

セツナ「邪魔をするな、ルシア！」

ルシア「知るか！」

タイプTV・アーバレスト、エルシュナイデ・カスタムがベルゲルミルを狭撃し

ルシア「これでもらったあああああ！！！」

セツナ「これでもらったあああああ！！！」

ルシアはベルゲルミルの右腕と背部ユミット、セツナは左脚と左腕を破壊し、ベルゲルミルを大破させた。

ウルズ「馬鹿な、この僕がこんな愚かな攻撃に！」

シャイン「……………すごすぎて何がなんだか……………」

ウルズ「スリザスとアンザスもやられた……………ここは撤退するしかないか……………」

ウルズのベルゲルミルはASSRSを展開し撤退した。

シャイン「アラド、ラトウーニ！ヒリュウが来ましたわ！」

リュウセイ「大丈夫か、みんな！」

アラド「は、はい！何とか・・・！」

ゼオラ「・・・・・・・・・・」

カーラ「・・・ねえ、ユウ。あれって、ゼオラじゃない？」

ユウキ「ああ、そのようだな。」

ゼオラ「ユウキ少尉、リルカーラ少尉・・・どうして、ヒリュウに・・・！？」

カーラ「ゼオラ・・・あなた、もしかして・・・？」

ラーダ「アラド、彼女の記憶が戻ったの・・・！？」

アラド「ええ・・・！」

カイ「そうか・・・ならば、彼女もつれてこちらへ戻って来い。」

ゼオラ「で、でも、私は・・・今までノイエDCに・・・」

カイ「事情はアラドから聞いている。我々と共に戦う気があるのなら、それでいい。」

ゼオラ「え・・・・・・・・・・」

リュウセイ「この際、細かいことは言いつこなしていった。」

ブリット「ああ。ようやく会えた二人を引き裂くような真似はしないさ。」

タスク「・・・お前、よくそういうことをサラッとと言えるねえ。」

ブリット「わ、悪いかよ?」

リョウト「あ、あの・・・茶化してる場合じゃないと思うけど・・・」

タスク「そりゃそうだ。・・・とにかく、今までのことは気にしなくてもいいぜ?」

リオ「だから、私達の所へいらっしやい。」

カーラ「そうそう。あたしやユウもいるから。」

ゼオラ「あ、ありがとうございます、皆さん・・・」

レフィーナ「しかし、敵がここまで来ているということとは・・・」

ショーン「ええ、ハガネgが発見されるのは時間の問題ですな。とにかく、各機を回収してハガネの所へ戻りましょう。」

レフィーナ「・・・ええ」

ユン「9時方向の海面へ急速浮上してくる物体あり!」

レフィーナ「シャドウミラーの潜水艦ですか!？」

ユン「いえ! 識別はアイアン3です!」

レフィーナ「クロガネ・・・!ど、どうしてここへ!？」

レーツェル「私は出撃指示を出していない・・・。いったい、誰があの艦を？」

シュウ「・・・私ですよ、エルザム少佐。」

レーツェル「!」

ルシア「シ、シラカワ博士!？」

マサキ「てめえ、何でそんなもんに乗ってやがるんだ!？」

シュウ「フツ・・・随分なご挨拶ですね、マサキ。」

マサキ「るせえ!ここへ何をしに来やがった!？」

シュウ「前回と同じく、あなた方を助けに来たんですよ。」

マサキ「ふざけんな!二度もてめえを信じられるか!そこを動くんじゃねえぞ!！」

ルシア「お、おいマサキ落ち着け!」

カイ「・・・落ち着いていなかったお前が言えたセリフ

か？」

ルシア「う……！」

シャルロット（あの戦闘……筒抜けだったみたいね……）

シュウ「おやおや……あなたには周りの状況が見えてないようですね。」

マサキ「何！？」

シュウ「前にも言ったはずですよ。あなたには私にかまっている暇などないとね。」

マサキ「もったいつけやがって！何を知ってるってんだ！？」

シュウ「……今、この世界は混乱に包まれつつあります。」

マサキ「混乱だと！？」

シュウ「そう……。彼らがついに動き出したのですよ。」

第22話 完

第22話 会者定離の理（後書き）

アラド「いやぁ・・・いつ見ても・・・」

ゼオラ「完璧なコンビネーションだったわね。」

シャルロット「やっぱり勘違いしてる・・・違うのよ、あれ、コンビネーションでも何でもないので。ただあのベルゲルミルをいち早く撃墜したかっただけなのよ。」

アラド「え！？じゃアルシア中尉が撃ち落とし損ねた敵機を片づけたのは・・・！？」

シャルロット「セナが獲物を横取りしただけ。」

ゼオラ「互いの後方の敵機を撃墜したのは・・・！？」

シャルロット「助けようとしたんじゃないかと、そこに敵機がいたから片づけただけ。」

アラド「てことは最後にベルゲルミルを大破させたのは・・・」

シャルロット「うん・・・さっきも言ったけどいち早く撃墜したかっただけ。倒し損ねちゃったけど。」

セツナ「あそこでお前の邪魔がなければ撃墜できた・・・！」

ルシア「あそこでゲシュペンスティックもどきなんて普通やるかよ

「！」

「シャルロット」………ほら、この通り………」

第23話 時のストレイシープ

ヒリュウ改 ブリッジ

シュウ「・・・以上が、現在の状況です。」

ショーン「やれやれ、とんだ横槍ですな。」

レーツェル「ここに来て、アインストが一斉に動き出すとは・・・」

レフィーナ「エクセレン少尉が連れ去られたことと何か関係が・・・？」

シュウ「アインストの目的が何であれ、彼らの出現によって、この世界が混乱していることに違いはありません。そして、この状況はあなた達にとって好機だと言えます。」

マサキ「冗談じゃねえ！アインストがあちこちに出てきてる状況のどこが好機だつてんだ!？」

レフィーナ「それに・・・私達は統合参謀本部や伊豆基地との連絡もままならぬ状態なのに・・・」

シュウ「では、お聞きしましょう。あなた達がアインスト以外に倒さねばならない相手は何です?」

マサキ「そいつは・・・!」

シュウ「この私・・・と言う答えは不正解ですよ。」

マサキ「何い!?!」

ルシア「凶星か。」

シュウ「さあ、何です。」

リユーネ「そんなの、あんたに言われるまでもないよ! シャドウミラーとインスペクターに決まってるだろ!」

シュウ「その通り。では、アインストが攻撃対象にしているものは?」

マサキ「いい加減にしろ! てめえとクイズをやってる場合じゃねえんだ!」

ルシア「そうか、そういうことか・・・」

シヨーン「ふむ。アイドネウス島戦やオペレーションSRWの時のように・・・」

マサキ「!?!」

シュウ「お気づきになられた方もいらっしやるようですね。」

シヨーン「・・・あなたもなかなか無茶な提案をなさいますな。」

シュウ「それを成し遂げるためのクロガネであり、ダブルGなのです。」

レーツェル「あれをテスラ研へ託したのは・・・やはり、ビアン総帥からの依頼で？」

シュウ「ええ。ビアン博士はインスペクターの襲来も予見しておられましたので。」

リユーネ（むしろ、そっちが本命・・・？それとも・・・）

ルシア「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シュウ「では、私はここで失礼させていただきます。」

マサキ「待ちやがれ、どこへ行く気だ!？」

シュウ「答える必要はありませんね。」

マサキ「うるせえ! てめえはいつたい何を企んでやがるんだ!？」

シュウ「言ったところで、あなたに理解できるとは思えませんが・・・そちらの邪魔をする気はありません。ですから、心おきなくインスペクターやシャドウミラーと戦ってください。」

マサキ「それで、てめえは高みの見物かよ!？」

シュウ「私にも色々と都合があるのです。・・・・・・では、ごきげんよう。」

マサキ「逃がすかよ、シュウ!！」

レフィーナ「いけません、マサキ！」

マサキ「！」

レフィーナ「今、あなたやサイバスターという存在は私達にとって必要なんです。」

リユウネ「マサキ、今戦わなくちゃならない相手はあいつじゃない、あんだだって、そのことはよくわかってるだろ？」

マサキ「……………ああ……………」

ルシア（アインストでの混乱を利用する……あいつの好きな賭けに出るしかないとはな……けど、今はそうするしかない。）

ヒリュウ改 格納庫

リユウセイ「ロ、ロブ！お前、どうしてここに！？」

ロバート「シラカワ博士の招集を受けてな。カーク達と一緒に来たんだ。」

リユウセイ「もしかして、こっちの状況を何とかするために……？」

リン「……………そうだ。」

リユウセイ「しゃ、社長！」

イルム「リン……お前も来ていたのか。」

リン「以前、お前に言った通りだ。私には、この手で取り戻さなければならぬ物がある。」

イルム「ああ、わかってるぞ。」

ロバート「……リョウト、各機の状態を把握したい。すぐにデータをまとめてくれ。」

リョウト「いえ、もうやってあります。」

ロバート「え？」

リョウト「実は……今後の勉強のために、いつも整備班の人から機体のデータを回してもらってたんです。」

ロバート「ふふ、やるな。それなら、すぐ修理作業に取り掛かれるぞ。」

リョウト「僕もお手伝いします。」

リュウセイ「ちょっと待て、あのセツナって奴が乗ってるやつはど
うすんだ？あいつ勝手にいじるなって言ってたし。」

ティオ「心配には及びません。」

リュウセイ「だ、誰だよ？」

マリオン「彼女はティオ・ランスター、私の助手です。」

リョウト「じよ、助手!？」

セツナ「おお、久しぶりだな。」

シャルロット「ティオ、元気にしてた？」

ティオ「はい!」

リュウセイ「何だよ、知り合いか？」

セツナ「ああ、ライトニング・スターズの技術開発担当で……」

ティオ「そして、あのゲシュペンスト……アーバレストの生みの親です。」

リョウト「そうだったんだ。」

ティオ「ところで、ヴァルの調子を見たいんだけどいい？」

セツナ「ああ。」

リュウセイ「ヴァルって何だ？」

ティオ「アーバレストに搭載されているPTサポートAIです。」

ロバート「サポートAI? 初耳だな。」

ティオ「ヴァル、元気にしてた?」

ヴァル『異常ありません、マイスターティオ。』

ティオ「よかった、セツナは無茶ばかりするから心配してたのよ。」

ヴァル『心配は無用です。』

セツナ「おいおい。」

シャルロット「ハハハ・・・」

リュウセイ「お、おい！今、機械が喋ったぞ！？」

リョウト「しかも自らの意思があるみたいだ。」

ティオ「話には聞いてるけど、そっちでも人間みたいなサイボーグがいるはずだけど・・・その人も自分の意思があるでしょ？」

タスク「た、確かにそうだけどよ・・・」

レオナ「・・・シャドウミラーの技術・・・っていうわけではなさそうね。」

ティオ「はい、イクス・ドライバもヴァルも私のお手製です。」

リュウセイ「イクス・ドライバ？」

ティオ「アーバレストに搭載されているパイロットの感情を感知し、機体性能に影響を与える装置です。」

ロバート（まるでT-LINKシステムだな・・・）

テリオ「T・LINKシステムがありますが、あれと違って念動力なしでも使用可能で、機体の装甲や運動性能、出力が上がれば攻撃力にも影響されます。」

セツナ「おい、そんなに教えてもいいのか？」

テリオ「別に隠す必要はありません。」

シャルロット「リョウトが知りたがってたけど、詮索するなっつて断つてたもんね。」

リョウト「そ、そんなご都合主義みたいな装置が存在してるなんて・・・」

ロバート（T・LINKシステムもご都合主義みたいなシステムだが・・・イクス・ドライバ、それほどまでとは・・・）

テリオ「懐かしい・・・これでクーンさんがいればライトニング・スターズが揃いますね。」

リョウセイ「クーン？誰だそれ？」

シャルロット「クーン・バニングス、ライトニング・スターズのメンバーだった人よ。」

セツナ「今は日本にいるって話だが・・・ここ最近連絡が取れなくてな。」

シャルロット「ていうか、私達が連絡手段を断っちゃったからわか

んなくなっただけ……」

タスク「そういえば、あんたが作ったこの機体の頭部、ヴァイスリッターに似てるって話だけどそれはどうなんだ？」

マリオン「あのアーバレストという機体、あれは元々ATX計画が発足される前に私とティオが携わった機体なので、似てるのも無理はありませんわ。」

レオナ「ということは……アーバレストはアルトアイゼンやヴァイスリッターのデザイン面の試作機ということになりますわね。」

ティオ「90%はマリオン博士が手をいれまして、残り10%、つまりデザイン部分は私がやりました。」

マリオン「なかなかコンセプトに合ったデザインでしたので採用するのに時間は要りませんでしたわね。」

キョウスケ「……それで、博士。アルトの方は？」

シャルロット「もう動いても大丈夫なんですか？」

キョウスケ「痛み止めでいくらかでも誤魔化せる。」

リュウセイ（エクセレン少尉がいなくなってから……無理してるよな、キョウスケ中尉。）

マリオン「本体装甲は全交換。両腕と両脚は、新造の物を取りつけます。」

タスク「もしかして、あそこにあるデカイステーキが、その・・・」
マリオン「ええ。リボルビング・バンカー・・・リボルビング・ステーキの試作品にして、ステーキを上回る威力を持った武装ですわ。ただ・・・その大きさ故に、機体のバランスを著しく損ねてしまったため、お蔵入りしていた物。」

タスク「うわ、デカキや強いだろ！・・・っていう、子供みたいな考えで作られた武器ツスね。」

タスクはマリオンに足を思いつきり踏まれた。

タスク「いてっ！」

マリオン「・・・次はバンカーの弾倉に詰めますわよ。」

タスク「ゆ、ゆるちて。」

キョウスケ「ラドム博士、俺が提出したプランと、かなり違う所があるようですが・・・？」

マリオン「やるならば徹底的に、でしてよ。大型化するならば、ギリギリ限界まで大きくしなければ意味がありませんわ。ステーキの他に、両肩のクレイモアもベアリング弾の搭載量を増やすために大型化・・・そして、推進力アップを図るため、背部にはヴァイスの予備パーツを基にして作った大型スタピライザーを追加・・・最後にテスラ・ドライブも搭載。特別大サービスですわね。」

レオナ「では、今度のアルトは単体飛行が可能なのですか？」

ティオ「いえ……特斯拉・ドライブはバランサー代わりで使っているだけで……」

タスク「へ？」

レオナ「つまり、そういう処置を施さなければならない程、機体バランスが悪いということですか？」

マリオン「そうとも言いますわね。」

ティオ「でも、プロジェクトTDのツイン・特斯拉・ドライブを積みれば飛行は可能になります………30分位。」

リョウト「それでもたったの30分!？」

ティオ「あんまりにも重たすぎるからすぐに特斯拉・ドライブのエネルギーが切れるんです。」

タスク（こ、こっちも紛う事なきマ改造やわあ〜）

キョウスケ「………」

マリオン「その代わり、突進力、攻撃力、防御力……すべてにおいて、今までのアルトを上回るものになっておりますわ。」

キョウスケ「………」

マリオン「これならば、シャドウミラーの特機相手でも当たり前負けはしない。私なりの結論です。」

キョウスケ「・・・俺が考えていたものと、まるで違う。」

タスク「うわ、そりゃそうでしょ。ちょっと言ってやった方がいいッスよ。乗るのは中尉なんだから・・・」

キョウスケ「・・・素晴らしい。」

タスク「褒めちゃったよ！けど、こんなビルガーとは別の意味で出たトコ勝負の機体で、大丈夫なんスか？」

キョウスケ「・・・それくらいでなければ勝てん・・・。シャドウミラーにも、アインストにも。しかし、この短期間でよくもここまで・・・」

ティオ「私も手伝いましたから。」

マリオン「それに、もう負けるわけにはいかない。そうではなくて？キョウスケ中尉。」

キョウスケ「・・・その通りです。」

マリオン「私もそうですわ。負けさせるわけにはいきません。・・・私の作ったアルトアイゼンに乗る人間を。」

キョウスケ「感謝します、博士。」

タスク（最強かつ最凶のコラボやわ）「」

キョウスケ「ところで・・・新しいアルトの名前は？」

マリオン「アルトアイゼン・リーゼでしてよ。」

タスク「リーゼ・・・？」

レオナ「ドイツ語で『巨人』という意味よ。」

キョウスケ「なるほど、それらしい名前だな。(・・・これで俺の手元にも勝負手が来た。アクセル・・・前回の借りは返させてもらうぞ。そして、アインストを・・・アルフィミイを倒し、あいつを・・・取り返す・・・!)」

ティオ「ところで、ルシアさんはいないんですか？」

リョウト「ルシアを知ってるのかい？」

ティオ「はい、教導隊でお世話になった時に何度も会ってましたから。」

セツナ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ティオ「このセツナの険悪ムード・・・もしかして。」

シャルロット「うん・・・・・・・・」

ティオ(まだ仲直りしてないんだ・・・・・・・・)

リユウセイ「あいつなら、ギリアム少佐のどこに行っちゃったぞ？」

リョウト「ギリアム少佐のどこ？」

リュウセイ「ああ、ラミア少尉も呼ばれてみたいだし・・・何かあったのか？」

ヒリュウ改 艦内

ラミア「ラミア・ラヴレス、入ります。・・・呼びですか、ギリアム少佐。」

ルシア「・・・・・・・・・・」

ギリアム「ああ。早速だが、これを見てくれ。」

ラミア（少佐が私に、ということは・・・だが、何故そのことでルシア中尉も呼ばれるのだ？）

ギリアム「つい先程、感知されたものだ。」

ラミア「これは・・・通常転移反応？いや・・・通常の転移ではない・・・もしか、次元転移反応・・・！？」

ギリアム「その通り。しかも、除々に強まってきている。」

ラミア「距離は・・・ここからそう遠くはない。しかし、この反応はアギユイエウスやリュケイオスのもではないようですね。」

ギリアム「そう。反応の継続時間も鑑みて、シャドウミラー以外の者による転移の可能性が高い。」

ラミア「少佐には・・・心当たりがあるのですか？」

ギリアム「……………かつて俺や君がいた世界から転移してくるのなら……………一つだけある。だが、あのシステムは未完成だった。あれでは……………まだ無理だ。」

ルシア（アギユイエウスとリユケイオスの他にもまだ次元転移装置があるのか……………）

ラミア「どんなシステムであれ、転移時に時間のズレが生じてしまうことは、少佐やシャドウミラーが証明しています。少佐の仰るシステムを完成させてから、転移を行ったという可能性は？」

ギリアム「……………」

ラミア「キヨウスケ中尉は動けず、エクセ姉様……………エクセレン少尉も以前消息不明のままです。これ以上状況が悪化する前に、早急に正体を確かめるべきでしょう。」

ギリアム「そのつもりで君達を呼んだ。同行してくれるか？」

ルシア「了解です、まだ異星人の可能性を捨てたわけではありませんせんから。」

ラミア「がってん承知……………！　ゴホン……………いえ、わかりました。」

ギリアム「フツ、最後の最後で惜しかったな。俺は個性があっついと思うぞ、ラミア。」

ラミア「……………フォローありがとうございますのです。」

ルシア「……行きましょう。ヴァルシオンの修理は終わっているのです。」

湖 周辺

アクセセル（む……？ レーダーが？急がねばならんか。）

ゲシュペンスト・タイプRV、ヴァイサーガ、ヴァルシオンVが戦闘区域に進入する。

アクセセル「レーダーに反応したのは、やはりハガネの機体だったか。あの後、上手く逃げおおせたらしい。」

ラミア「あのアシュセイヴァー……アクセセル隊長か？」

アクセセル「これでエクサランスが敵の手に落ちる可能性も出てきた。流れが悪いな、こいつは。」

ルシア「あの青い機動兵器が、ギリラム少佐が言っていたものなのか……？」

ラウル「あいつらもアクセセルの仲間か!？」

ラージ「いえ、あの銀色の機体はデータで見ただけがあります。あれは……DC総帥機のヴァルシオンです。」

ミズホ「ということはノイエDC!？」

ギリアム「……あれが転移者か。」

ラミア「やはり、シャドウミラー側の者ではなかったようですね。……状況は良くないようですが。」

ギリアム「ああ。（はたして、あの機体にグレーデン博士とモントーヤ博士のエンジンが搭載されているかどうか……だが、今は彼らをシャドウミラーから救わねばならない。）

ギリアムはエクサランス・フライヤーに通信をいれた

ギリアム「その機体、聞こえるか？ 私は地球連邦軍のギリアム・イエーガー少佐だ。」

ラウル「連邦軍！？ なら、アクセルの仲間じゃない……！？」

ギリアム「そうだ。これよりそちらを援護する。」

ラウル「りよ、了解！ 助かります！」

ラージ「待ってください、それなら何故DCのヴァルシオンを使っているんですか。あれはそう簡単に鹵獲できるものではありません。」

ルシア「こちらが言うのは何だが……今は四の五の言っている状況ではないはずだが？」

ラージ「……」

ギリアム（彼はアクセル・アルマーのことを知っている……）

アクセル「聞かせてもらった。ヘリオス、ここで貴様に会うとは、俺にも運が向いてきたようだ。エクサランスとまとめて、捕えさせてもらう。……動くなよ？」

ラミア「アクセル隊長……その命令は聞けません。」

アクセル「フツ……相変わらず聞き分けのない人形だ。ならば隊長などと呼ぶな。」

ラミア「……」

アクセル「……W17……あの後、ベーオウルフはどうなった？死んだ……か？」

ラミア「……残念ながら、生きちゃって……いえ、生存は確認されました。……ですが、重傷です。戦列への復帰は絶望的でしょう。再起不能……と言えます。」

ギリアム（ラミア、何を……？）

ラミア「アルトアイゼンは大破……修復するよりも、新造した方が早いという状態です。」

アクセル「……そうか。これで俺の憂いが一つ消えた。それが本当ならな。W17……やはり貴様は人形だ、これがな。」

ラミア「……どういふことですか？アクセル隊長、私は……」

アクセル「自分で考えることだ。理解できるわけもないが、な。・
・いくぞ。」

ギリアム「ルシア、あの機動兵器の護衛に当たってくれ。かなり疲弊している。」

ルシア「了解です。」

ラミア「アクセル隊長、何故、私が偽りの情報を流したと？」

アクセル「それがわからないから、貴様は人形なのさ、W17。」

ルシア「アクセル、何故、この機動兵器を狙っている？」

アクセル「本懐を遂げるために必要なものなのさ、こいつがな。それに、『向こう側』での貴様はアレを破壊しようとしていたぞ。」

ルシア（向こう側の俺がああの機動兵器を・・・一体、何なんだあれは？）

ギリアム「ルシア、敵機を攻撃し隙を作ってくれ。」

ルシア「了解、クルセイド・ミサイル発射！」

ヴァルシオンVの両脇腹部からミサイルが発射され、アクセル周辺のランドグリーズ、量産型アシセイヴァーの手前で爆発する。

アクセル「ただの牽制か、その程度でWシリーズは止まらんど。」

ルシア「そうか？少なくとも動きは封じれたはずだ。」

アクセル「何？」

量産型W「・・・・・・・・・・」

アクセル「どうした、何故反撃しない？」

量産型W「敵機、捕捉不能。」

アクセル「何だと・・・！？」

ルシア「周辺にチャフを撒いた。人間以外ではこちらを捉えられなくなっただぞ。」

ラウル「よし、この隙に！」

ギリアム「一気に叩く！」

ラウル「デイストラクション・ライフル、MAXモード・・・・・・・・」

ギリアム「出力調整完了・・・照準固定！」

ラウル「発射！」

ギリアム「受けよ、メガ・バスターキャノン！」

エクサランス・フライヤーのDライフル・MAXモード、ゲシユペ
ンスト・タイプRVのメガ・バスターキャノンでアシュセイヴァー
と取り巻きの量産型アシュセイヴァーへ攻撃
量産型アシュセイヴァーが撃墜された。

ラミア「アクセル隊長……どうかお覚悟を……！」

ヴァイサーガは烈火刃をアシユセイヴァー目がけて投げる。

アシユセイヴァーはハルバートランチャーで防ぎ、ハルバートランチャーが爆発する。

アクセル「……ちっ、たった4機にてこずるとは。ベーオウルフの一件以来、流れが悪いままだ、こいつは。無理をして失った流れを引き寄せるか、それとも……」

ラミア「……アクセル隊長、ソウルゲインが修復中である今、我々にとつては好機。お覚悟を……お決めやがりください。」

アクセル「ソウルゲイン……そうか、そうだったな……W17、ベーオウルフに入ったカードは……俺と戦える手か？」

ラミア「……はい。ワイルドカード足り得るか。」

アクセル「なるほど、俺に流れが来るはずもない……ツキは未だに奴のものか。撤退し、ホワイトスターへ上がる。全機、後退せよ。」

ラミア「アクセル隊長、一つだけ教えてください。なぜ、私の言ったことが真実でない？」

アクセル「……本当に近い者が戦場で倒れたならば、そんな涼しい顔をしていられるはずもない。貴様の言葉を聞いたヘリオスとルシア・ゾルダークの態度を見ていれば、それは明らかだ、これがない。」

ギリアム「……………」

ルシア「……………」

アクセル「そこにいるラウルの身内を俺は間接的にとは言え……
手にかけて。」

ラウル「間接的に……だと！？お前のせいだろう！お前が……
！」

アクセル「……そうだ。こうして憎しみが生まれ、戦いが続く。
それが戦争というものだ、これがな。」

ラミア「……………隊長……………」

アクセル「わからんだろう？W17、貴様はそれを理解せず、口先
だけで俺を欺こうとした。……………なめるんじゃねえぞ、人形風
情が……………！」

ラミア「あ……………わ、私は……………」

ギリアム（アクセル・アルマー……………闘争の世界で生きる者の信念
か。）

アクセル「フツ……………まあいい。エクサランスはくれてやるさ。……
……どの道、また会うことになる。ベーオウルフに伝える。貴様がど
んな手を組もうが……………俺とソウルゲインが再び打ち砕く。シヨ
ウ・ダウンは……………ホワイトスターだ。」

ラミア「……了解……したり……しました……」

ラウル「待て、アクセル！俺はお前を……！！！」

アクセル「あくまで俺を妹の仇と呼ぶのならば、それで構わん。それが貴様にとつての戦争なのだろう。俺は逃げも隠れもしない。」

ラウル「……！！！」

アクセル「聞いていたな？俺達シャドウミラーは、ホワイトスター……白き魔星にいる。選択しろ、ラウル。貴様の戦いが……どこへ向かうのか。」

ラウル「……」

アクセル「さらばだ。」

アクセルのアシュセイヴァーは戦闘区域から撤退した。

ラミア「……少佐……私は……やはり、ただの作り物でしか……」

ギリアム「気にするな、ラミア……彼の言葉を深く受け止めることができたのなら、それでいい。それが人間らしさだ。そのことを忘れないでくれたまえ。さあ、彼らと接触するぞ。いつまでもそんなことでもする。」

ラミア「……了解です。」

ギリアム「ルシア、悪いが通信を切ってくれないか。」

ルシア「了解。（ということ、やはり転移してきたのは向こう側の人間、か……）」

ギリアム「こちらギリアムだ。そちらの事情を聞きたい。機体から降りてもらえるか。」

ラウル「は、はい。」

ラージ「ギリアム・イエーガー少佐……でしたね。僕はラージ・モントーヤです。」

ギリアム（モントーヤ……。ならば、やはり……）」

ラージ「ぶしつげだと思えますが、一つ質問させてください。」

ギリアム「何だ？」

ラージ「あなた方は本当に地球連邦軍なのですか？」

ギリアム「ああ、そうだ。」

ラージ「……」

ギリアム「こちらからも一つ質問させてくれ。あの機体には、グレンデン博士やモントーヤ博士が作り上げた時流エンジンが搭載されているのか？」

ラージ「！」

ラウル「ど、どうして、それを・・・!?」

ラージ「・・・あなたは何者なんです？」

ギリアム「先程も言った通り、連邦軍のギリアム・イエーガー・・・しかし、向こう側ではこう名乗っていた。ヘリオス・オリンパスとな。」

ラージ「・・・!」

湖 周辺

ルシア「彼らを引き入れると？」

ギリアム「ああ、俺の方からも言い含めておくが・・・」

ルシア「口外無用・・・ってことでいいんですね。」

ギリアム「ああ、すまないが頼むぞ。」

ルシア「少佐、あの機体に何か秘密でもあるんですか？」

ギリアム「・・・」

ルシア「アクセルはあのエクサランスと呼ばれる機体に執着していました。あれには、少佐が言っていた次元転移装置が積まれている

のですか？」

ギリアム「・・・・・・・・・・そんなところだ。」

ルシア（少佐らしくもなく間が長かったな・・・・一体あの機体には何が？）

ラウル（あの人・・・・何処かで見覚えが・・・・）

ミズホ「あなたは・・・・？」

ルシア「君達がギリアム少佐が言っていた・・・・」

ラウル「ラウル・グレーデンです。」

ミズホ「私はミズホ・サイキです。」

ラージ「ラージ・モントーヤです。」

ルシア「俺はルシア・ゾルダーク、よろしく頼む。」

ラウル「！！！」

ミズホ「え・・・・！？」

ラージ（まさかとは思いましたが・・・・やはりそうでしたか・・・・）

ラウル「お前が・・・・！！！」

ルシア「！！！」

ラウルがルシアに向かい殴りかかるが、ルシアは片手でラウルの拳を受け止めた。

ルシア「これは何の真似だ？」

ラウル「お前のせいで・・・お前のせいでどれだけの人間が死んだと思ってるんだ!!」

ギリアム（やはり・・・そう簡単に受け止められはしなかったか・・・）

ルシア「それは『向こう側』での話だ。」

ラウル「けど、お前はDCの総帥なんだから！」

ルシア「違う。俺はDCから離れ、プロジェクトTDのパイロットをしている。」

ラウル「!？」

ラージ「ラウル、先程もギリアム少佐も言っていたでしょう。『こちら側』と『向こう側』では似て異なる世界だと・・・」

ラウル「・・・・・・・・・・」

ラージ「それなら、同一人物でも行動が全く違う事もあり得るはずです。」

ルシア「・・・そうだ、向こう側の俺は人類を抹殺しようとしてい

た。だが、こちら側の俺は違う。俺はこの地球に住む人々をあらゆる脅威から護る。それだけだ。」

ラウル「……………」

ルシア「それでも、向こう側の俺が許せないのなら、殴っても構わん。」

ラウル「……いえ、俺も行動が軽率でした。すみません。」

ルシア「いや、いい。それと敬語はよせ、これから共に戦う仲間なんだから。」

ラウル「それじゃあ……そうさせてもらおうよ。」

ミズホ「よろしくお願いします!」

ラージ「……………」

ヒリュウ改 格納庫

ティオ「お帰りなさい、ルシア。」

ルシア「ティオか、久しぶりだな。」

マサキ「おいルシア、そいつを止めてくれ!」

ルシア「何かあったのか?」

マサキ「こいつ、やたら魔装機神とかRシリーズの機体とかをいじくり倒そうとしてんだよ！」

ルシア「別にいいんじゃないのか？」

リュウセイ「そういうわけにやいかねえんだよ・・・RシリーズはSRX計画クルー以外には機密扱いだし・・・」

クロ「魔装機神は正直、触ってもらいたくニヤいニヤ。」

シャルロット「職業病みたいなものだから、許してあげて。」

セツナ「テリオ、ほどほどにしとけよ。」

テリオ「え〜・・・がっかり。」

ラウル「ここがヒリュウ改か・・・」

テリオ「あら、あなたは？」

ラウル「ラ、ラウル・グレーデンです。」

テリオ「ふ〜ん・・・」

ミズホ「あ・・・エクサランスが何か？」

テリオ「なかなか面白い機体ですね。動力源は何を使ってるんですか？」

ラウル「それは・・・！」

ラージ「申し訳ありませんが、エクサランスには絶対に触れないで下さい。あの機体は僕達で整備しますのです。」

ティオ「でも興味はあります。頭部だけを分離して戦局に合わせての換装なんて兵器として理想的ですよね。」

ラージ（！？　エージェント・ヘッドへの分離を見てないはず・・・
それを見抜いた！？）

ミズホ「あの・・・」

ティオ「はい？」

ミズホ「エクサランスは・・・本当はレスキューマシンとして開発されたものです・・・」

ティオ「レスキューマシン？」

ミズホ「だから・・・あまり兵器として扱わないで欲しいんです・・・」

ティオ「・・・そういう事情があったんですね。ごめんなさい、そうとも知らずにズケズケと・・・」

セツナ「ティオ、少しは反省しろ。」

ティオ「反省してますよ！」

セツナ「とか言いながらヴァルシオンVを興味深々に見るな。」

ティオ「ちょっと気になるんですよ……装甲材が普通と違うんです。」

ルシア「!？」

ティオ「うん……すっごく気になる。」

ルシア「気にするな、普通のヴァルシオンと違うだけだ。」

ティオ「そうですか……。」

セツナ「いい加減にしろティオ。」

ティオ「痛っ！何もぶたなくてもいいでしょ！」

ルシア（確かに……普通と違う……あれには……）

第23話 完

第23話 時のストレイシープ（後書き）

ルシア「またまた来たぞ、魔装機神の続編！」

マサキ「ていうか何なんだありゃあ、あの黒いサイバスター。」

リユーネ「ていうか、あの後からまだ続いてたんだね。」

ルシア「今まで出せそうで出せなかったらしいからな。今後はどうなるか楽しみだ。」

シロ「てことは……」

クロ「アレが出てくる可能性がめちゃくちゃ高くなっただってことだニヤ。」

マサキ「アレって何だよ？」

アサキム「今度は僕と似た存在と出会えるとは……これも放浪者の運命というものか……」

ルシア「ってまだ出る予定もないのに迷い込んでくんない！」

第24話 竜虎王顕現

ヒリュウ改 ブリッジ

ユン「艦長！ウイニペグ基地からの救援要請を傍受しました！現在、アインストに襲撃されているようです！」

シヨーン「ウイニペグ・・・近いですな。確か都市部に隣接していません・・・」

レフィーナ「直ちにヒリュウ改で救援に向かいます！ハガネとクロガネはここで待機を！」

テツヤ『了解です。』

レーツエル『護衛として我ら旧教導隊が残ろう。キョウスケの代理としてルシアに現場指揮をしよう。』

レフィーナ「了解しました。」

ヒリュウ改 格納庫

ルシア「サイバスターとヴァルシオーネ、ヴァルシオンVで先行する。行くぞ！」

マサキ「ああ！」

リユーネ「早くしないと都市部の人達が危ない！」

ブリット「！この感じは・・・」

クスハ「ブリット君？」

ブリット「近くにいる・・・あいつらが・・・！」

ルシア（何だ・・・今、僅かに寒気が・・・）

セツナ「・・・・・・・・・・」

シャルロット「セナ・・・どうしたの？」

セツナ「シャル、この先は気を付けた方がいい・・・（この身の凍るプレッシャー・・・いつたい何なんだ？）」

ウィニペグ基地周辺 都市部

市民「な、何なんだこいつらは！？」

市民「う、うわあああ！！！」

市民に襲いかかるアインストはPT部隊によって破壊された。

マサキ「今のうちに早く逃げな！」

ルシア「00より各機へ！市民の避難が完了するまでアインストを迎撃しろ！」

アイビス「了解！」

ラミア「私達はヒリュウ改の護衛を行う。」

アラド「了解ッス！」

ユウキ「俺達も行くぞ、カーラ！」

カーラ「う、うん……」

ユウキ「どうした？」

カーラ「あの時の……蚩尤塚の時みたいな寒気が……」

ユウキ「……言われてみれば……」

クスハ「この感じ……誰かに……ううん、何かに見られているような……」

ブリット「同じだ……あの時と……」

ルシア（俺もそうだが……念動力者しか感じ取れない何か……この場所にいる。一体……？）

リョウト「僕達で敵機を牽制する！」

リユーネ「行くよ！」

リョウト「リオ、Gインパクトキャノン発射後にミサイルで同時攻撃を！」

リオ「わかったわ、任せて！」

リユーネ「くらいな！クロスマツシャー！！！」

リヨウト「いつけええええええ！！！」

ヴァルシオーネのクロスマツシャー、ヒュツケバインMk-?ガンナーのGインパクトキャノンとミサイル攻撃でアインスト群を撃墜

ユウキ「落ちろ！」

カーラ「こつちも行くよ！」

ランドグリーズ、ラーズアングリフの射撃

ブリット「オメガ・ブラスター！！！」

グルンガスト参式のオメガ・ブラスターでアインストをなぎ払う。

リュウセイ「T-LINKナツコオ！！！」

ルシア「デイバイン・ソード！！！」

アイビス「ソニック・ブレイカー！！！」

レオナ「ソニック・アクセラレーション！！！」

ヴァルシオンV、R-1、アステリオン、ズイーガーリオンはアインストゲミュートを各個撃破をしていく。

クロ「アインストの増援、来たニヤ！」

リュウセイ「くそっ、キリがねえぞ！」

ルシア「これだけの数・・・頭がいるはずなんだが・・・」

ライ「リュウセイ、あれを！」

リュウセイ「な、何だあの黒い霧は!？」

ブリット「一体何が・・・」

クスハ「ブリット君！あれを！」

ブリット「何だ・・・人が!？」

カーラ「もしかして・・・アインストに取り込まれてる・・・!？」

ユン「本艦上空に異常重力震反応！」

セツナ「新手か!？」

出現した物体は、ジガンスクード・ドウロめがけてビーム攻撃を放つ。

タスク「な、なんだいきなり!？」

シャルロット「敵、来ます！」

ゼオラ「な、なんて機動性なの・・・あり得ない・・・!?」

ヴァル『該当データ照合・・・』

セツナ「あんなものデータにあるわけないだろ！」

ヴァル『・・・該当データに一致。ヴァイスリッターです。』

シャルロット「ヴァイスリッター!?!」

ラミア「ああ、あの機体形状はヴァイスリッターだ。」

カチーナ「おいおいマ改造どころの話じゃねえだろ！」

ティオ「みなさん気を付けてください!あのヴァイスリッターは・・・
・機械じゃありません!」

セツナ「どつという意味だ?」

ティオ「機体の関節部や装甲が有機物でできています!」

シャルロット「まさか、アインストに・・・!?」

ユン「アンノウン、本艦に急速接近!」

レフィーナ「弾幕を張り応戦!」

ユン「駄目です、間に合いません!」

ライン・ヴァイスリッターはヒリュウ改のブリッジに砲塔を向けた。

ゼオラ「ヒリユウ改が!？」

シャルロット「待って、あの機体、別の方を見てない？」

キョウスケ「……………」

セツナ「キョウスケ!？」

キョウスケ「エクセレン……お前なのか……？」

エクセレン「抹消……始まりの地の者達を……」

キョウスケ「!？ お前、何を……」

アルフィミィ「エクセレンは戻りつつありますの。」

キョウスケ「!？」

ライン・ヴァイスリッターの隣にペルゼイン・リヒカイトが転移出
現する。

アルフィミィ「キョウスケ。」

キョウスケ「戻りつつあるとはどういう意味だ!？」

アルフィミィ「エクセレンは姿を変えることなく、より純粹なる存
在に……」

キョウスケ「純粹なる存在だと……お前は……あいつに何をし

た!!」

アルフィミー「失われつつあるは古の記憶、そこへ通じる門、扉を開く鍵、利用できるかどうか試させてもらいますの。」

キョウスケ「何!?!」

ユン「都市部上空に異常重力場発生!」

レフィーナ「あれは・・・!」

マサキ「何だありゃあ!?!」

リユーネ「落ちてくる・・・!?!」

都市部中央にストーンサークルが形成され、黒い渦が発生する。

アヤ「禍々しい念が集まって行く・・・!」

ルシア「ブリット、クスハ!そこにいたら巻き込まれるぞ!」

クスハ「私達に干渉してくる念が、あの霧が源なら・・・」

ブリット「俺達の念で止めてやる!!」

クスハ「念動フィールド!!」

ブリット「念動フィールド!!」

グルンガスト参式は念動フィールドを展開するが、渦の中から伸びる触手に捕縛され引きずり込まれる。

カーラ「ブリット！クスハ！」

ユウキ「取り込まれた……！？」

マイ「あ、ああ……！」

リュウセイ「どうした、マイ！？」

マイ「来る……！」

ストーンサークルの中央に、巨大なアインストが転移出現する。

リョウト「あ、あれは……！？」

リオ「クスハ、ブリット君！」

????「サア……鍵足リウルカア……」

アインストレジセイアから念が発せられる。

リョウト「う……！」

リオ「くう……！」

????「我八新タナ命足リウルカア……」

ルシア「何だ、この声は……！？」

セツナ「奴がアインストの親玉なのか……！？」

アルフィミィ「このまま上手くいけば、繋がるかもしれないの。」
キョウスケ「何がどうなるか知らんが、エクセレンを好きに扱ったこと・・・俺は許さん！」

アルフィミィ「でも、今のあなたには何もできませんの。」

キョウスケ「くっ・・・！」

ティオ（せめて、バンカーの調整が終わっていれば・・・）

アラド「舐めんじゃねえぞ！！！」

ビルトビルガーはコールドメタルソードを抜きペルゼインに斬りかかるが、鬼蓮華により防がれた。

アルフィミィ「無駄ですの。」

アラド「アルト譲りの突進力、見せてやるぜ！！！」

そのままビルトビルガーのフルブーストでペルゼインを押し出した。

アラド「ラミア少尉、エクセレン少尉を！」

ラミア「ああ！」

ゼオラ「牽制します！」

シャルロット「動きを止めさえすれば・・・！」

ビルトファルケンのオクスタン・ライフルEモード、アシユセイヴ
アーのガンレイピアでライン・ヴァイスリッターを翻弄

ヴァイサーガが寸手まで接近するが、ハウリング・ランチャーを突
き付けられ動きを止めた。

ラミア「エクセ姉様・・・」

セツナ「都市部にはアインストの親玉・・・これは分が悪すぎるか
・・・！」

ルシア「各機、巨大アインストを迎撃！クスハとブリットを救助す
るぞ！」

レオナ「そうは言っても、相手はグルンガスト参式を盾にしてくる
・・・」

アイビス「あれじゃ攻撃できないよ！」

アインストレジセイアは巨大な右腕から重力波を放ち、周囲一帯を
攻撃する。

リュウセイ「うわあああ!?!」

ライ「くっ・・・!!」

????「サア・・・鍵足リウルカア・・・」

アインストレジセイアは黒い球体を発生させ空間を閉じた。

????「門ヲ開ク・・・鍵・・・」

ブリット「!」

????「ソノカヲ示セエ・・・」

アインストレジセイアは触手でグルンガスト参式を碎き始めた。

ブリット「分離して、クスハ・・・君だけでも!」

しかし、グルンガスト参式の損傷が激しく、分離は不可能となっていた。

ブリット「くそ、駄目か!」

クスハ「いいの・・・私だけ逃げるつもりなんてない。最後まで付き合っわ、ブリット君・・・」

ブリット「・・・ああ、わかった。念動フィールド全開!ドリルに集中させる!」

クスハ「了解!」

ブリット「うおおお!」

クスハ「はあああ!」

ブリット「こんなところで・・・終わってたまるか!」

クスハ「もつと力を！参式！！」

リユーネ「中はどうなってるの！？」

ルシア「確かめようにも、この重力場ではヴァルシオンでも……
！（せめて、グランゾンさえいれば……！）」

その時、上空から稲妻が降り注ぎ、空間を裂きグルンガスト参式を
包み込む。

ブリット「！？」

クスハ「！？」

龍王機「……………」

虎王機「……………」

ブリット「お前達は……超機人……！？」

虎王機「汝ラ、人界ノ救済ヲ望ムヤ？」

ブリット「！」

虎王機「汝ラハ、破邪強念ヲ有ス。故ニ我ラハソレニ答エル。」

龍王機「我ラノ使命ハ、百邪ヲ退ケ人界ヲ護ル者ナリ。」

虎王機「汝ラ、数限りなく百邪トノ戦イヲ、遂ゲル意義アリカ？」

龍王機「吾ラノ神体ノ覚醒タル五行器ノ輪転ニ八二人ノ強念者ヲ有ス。」

ブリット「二人の・・・強念者・・・」

龍王機「汝ラ救済ヲ望マバ、魂ヲ刃ト成ス。」

クスハ「・・・あなたが、私達の世界を護る存在だと言うのなら・・・」

ブリット「共に戦う。」

カーラ「ブリットとクスハは・・・！無事だよね!？」

ユウキ「そうだと思いたいが・・・」

黒い球体が突然剥がれ、アインストレジセイアが姿を現す。

????「又ワアアアアアア!!」

ルシア「な、何だあの虎と龍は!？」

マサキ「参式を喰ってるぜ!？」

リユーネ「でも、敵ってわけじゃなさそうだよ・・・」

????「始マリノ地・・・ソノ守護者ノ僕エ・・・」

????「唱エヨ・・・」

ブリット「必神火帝！」

クスハ「天魔降伏！」

ブリット「龍虎！！」

クスハ「合体！！」

龍王機、虎王機が合体し

クスハ「無敵青龍 龍虎王顕現！！」

リョウト「！？」

リオ「な、何なの・・・！？」

カーラ「虎と龍が合体した・・・！？」

リュウセイ「すっげー！」

ルシア「何で喜んでるんだ・・・」

クスハ「雷神よ、来りて我の敵を討て！」

龍虎王の爆雷符により周囲のアインストが稲妻によりなぎ払われる。

シロ「すごいニヤー！」

クロ「敵だけを稲妻でなぎ払うニヤンて・・・！」

「???」「古ヨリノ因縁・・・ココデ断ツ」

ブリット「必神火帝！ 天魔降伏！ 虎龍！ 合体！！！」

龍虎王は瞬時に虎龍王へと姿を変えた。

ブリット「最強白虎、虎龍王見参！！！」

アヤ「今度は龍が虎になった・・・！？」

ブリット「ランダム・スパイク！！！」

虎龍王のヌンチャクでインストレジセイアを怯ませ後方に下がる。

ブリット「ヴァリアブル・ドリル！！！」

虎龍王の右腕がドリルに変わり、インストレジセイアを貫く。

クスハ「帰りなさい、あなたの世界に。」

龍虎王に変化し、尻尾の水晶が剣に変わる。

クスハ「龍王破山剣！！ええええええい！！！」

龍王破山剣でインストレジセイアを両断する。

「???」「ブウウルアアアアアア！！！」

インストレジセイアは消滅し、ストーンサークルも消えた。

アルフィミィ「!? 守護者の僕が・・・真の姿に顕現するとは・・・
試していたのは私達アインストだけではなかったようですよね。」

キョウスケ「エクセレン!!!」

エクセレン「・・・・・・・・キョウ・・・・スケ・・・・」

キョウスケ「!?」

アルフィミィ「今日は私達の負けです。でも、いずれエクセレンは純粋なる存在に・・・そして、私は完全なる存在になりますの。」

セツナ「純粋・・・完全・・・全く意味がわからんな。」

アルフィミィ「それまで、ごきげんよう・・・・キョウスケ。」

キョウスケ「待て!!!」

ライン・ヴァイスリッター、ペルゼイン・リヒカイトは転移で現域を撤退した。

ラミア「・・・・・・・・エクセ姉様・・・・」

シャルロット「そんな・・・・アインストに操られてるなんて・・・・!!」

キョウスケ（エクセレン、アルフィミィはまた俺の前に現れる。お前を連れてな。その時こそ、俺達は命を賭ける。）

ルシア（あの龍虎王という超機人とアインスト・・・・何か関係があ

りそうだな・・・」

ヒリュウ改 格納庫

ラッセル「こ、これが超機人・龍虎王・・・！」

マサキ「み、見たまんまの名前だな・・・。タイガードラゴンカイザークィンググレートとかの方がいいんじゃないか？」

シャルロット「舌噛みそうな名前ね・・・」

セツナ「無駄に長いしな。」

カチーナ「ところで、参事はどうなっちまったんだ？」

リユーネ「超機人が食べちゃったんだよね。」

カチーナ「はあ!?!？」

ルシア「信じられないだろうけど・・・そうとしか言いようがないんだよね・・・」

クスハ「でも、私とブリット君は龍虎王と虎龍王のおかげで助かりました。」

ブリット「そして、彼らはこの世界を守るため、俺達と一緒に戦うと言ったんです。」

キョウスケ「つまり・・・味方だということか。」

ブリット「はい。」

ティオ「解析結果、出ましたよ〜！」

セツナ「嬉しそうだな。」

ティオ「だって何百年も前のオーバーテクノロジーを解析出来る機会なんてないんですから！」

ルシア「それで、どうだったんだ？」

ティオ「あの龍と虎の超機人・・・参式を捕食してパーツを取り込んだんです。」

リオ「やっぱり・・・じゃあ、虎龍王の右手から出てきたドリルは・・・」

ティオ「参式のドリル・ブーストナックルですね。」

カーラ「虎の方はちゃっかりしてるわね・・・」

ティオ「後、参式と同じ2機構成になっていて、龍と虎が合体して龍虎王・虎龍王となります。」

ルシア「なるほど。龍が頭になれば龍虎王・・・」

マサキ「虎が頭なら虎龍王か。」

セツナ「名は体を表す・・・とはよく言ったものだな。」

マサキ「そういえば、コックピットはどうなってんだ？」

ブリット「それが・・・参式とあまり変わってないんだ。」

クスハ「私の方も・・・」

マサキ「どういうこと？」

クスハ「私達、参式のコックピットごと龍虎王に取り込まれたみたいなの。」

テイオ「コックピットだけじゃなくて、T-LINKシステムとかも龍虎王と融合しています。」

リオ「融合って・・・クスハ、ブリット君、あなた達は大丈夫なの？」

ブリット「ああ。さつき検査を受けたんだけど・・・疲労してるぐらいで特に問題はないって。」

カチーナ「じゃ、クスハ汁の出番だな。」

クスハ「汁って・・・」

テイオ「可能性なんですけど、龍虎王は過去の戦闘でコックピットに当たる部分が破損していたのかも知れません。」

ルシア「だから、参式のコックピットごと二人を取り込んだのか？」

テイオ「はい。T・LINKシステムを二人との意思疎通に応用している可能性もあります。」

カーラ「てことは超機人と話せたりもできるの?」

ユウキ「そんなことできるはずないだろ・・・」

クスハ「それなんだけど、今は何も・・・」

ルシア「今?てことは・・・あの時超機人と話したのか?」

クスハ「はい・・・龍虎王に助けられた時に・・・」

ルシア「何と?」

クスハ「百邪を退け人界を護る者・・・って。」

シャルロット「ひゃくじゃ?」

セツナ「百邪・・・アインストのことか?」

ブリット「アインストもそうだが、もっと他のものも指しているんだと思う・・・」

ルシア「レフィーナ艦長、超機人の処置はどうされますか?」

レフィーナ「そうですね・・・。彼らにクスハ少尉やブルックリン少尉とともに戦いう意思があるのなら・・・このまま運用していきましょう。」

ティオ「賛成です。データを集めれば超機人の真の目的もわかります。」

セツナ「お前の場合は研究対象が増えて嬉しいだけだろ？」

ティオ「あ……バレた？」

シャルロット「もう……職業病もいい加減にしないさいよ。」

ルシア「全く……」

龍虎王「……」

クスハ「あれ……？」

ブリット「どうした、クスハ？」

クスハ「龍虎王が……ルシアさんの方を見ている……？」

カーラ「え？」

ユウキ「一体どういうことだ？」

ティオ「まさか、ルシアさんも超機人に乗れるんじゃない？」

セツナ「そんなわけないだろ、後なんて嬉しそうなんだ。」

ティオ「いや……色んな人の乗った超機人のデータが取れるかなって……」

ルシア（超機人・・・俺も百邪として見ているのか・・・？だが、俺は地球人として地球を護る。お前が認めなくても・・・な。）

第24話 完

第24話 竜虎王顕現（後書き）

ルシア「超機人が喋れると言っていたが・・・俺達でも聞くことができるのか？」

クスハ「誰でも持ってわけではないと思いますけど・・・」

ブリット「多分、念動力者なら聞けるんじゃないのか？」

リュウセイ「うーん・・・俺は何も聞こえないけどな・・・」

ルシア「どうだろうか・・・」

虎王機（やっぱり女の子の操者がよかつたな・・・）

ルシア「は？」

龍王機（ジャンケンで負けたんだ、文句を言うな。）

ルシア「な、何て？」

虎王機（2人共って・・・やっぱりダメなのか？）

龍王機（それは大人の事情があるから無理だつて。）

ルシア「さっきから何言ってたこいつらは！？」

セツナ「さっきから何独り言を言ってるんだ？」

シャルロット「もしかして、超機人の声が聞こえたの？」

ルシア「あ……いや、聞こえてない。」

ティオ「え、さっきは何かと話してませんでした？」

ルシア「いや、疲れが溜まってるんだ。少し休んでくる。」

シャルロット「お、お大事に……」

ルシア（超機人……意外と適当に操者を選んでんだな……そんなんでいいのか地球の守護神……）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1008o/>

スーパーロボット大戦OG2 ~パラレル~

2011年11月22日05時14分発行